女性改造

七月號



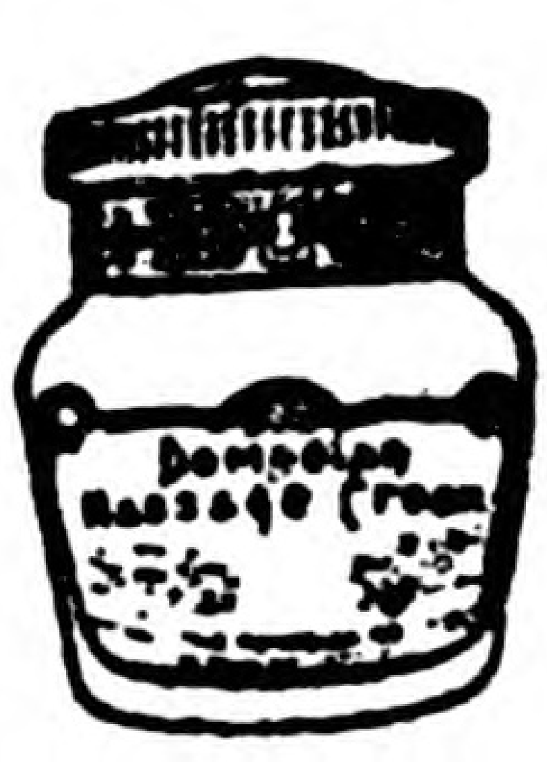
Pompeian

ポンピアン夏季化粧法

ポンピアン・マッサージ・クリーム（基礎化粧料）

基礎化粧料

クリームと白粉だけの舊式な上面化粧法では全然化粧の美くしさは望まれないと云ふことが一般的に理解されて參りました、眞の化粧美は生地の整理の完全に依つて遺憾なく發揮せられるもので、これが最も合理的な新らしい化粧法であります是非共お化粧の最初に當つてはマッサージ、クリームで完全な生地の整理が必要でございます。



ポンピアン・ロース（薔薇）クリーム

下化粧料

基礎化粧をおやりになつて、その上にクリームで下化粧をなさいますのが新式化粧法の順序でございます。ロース、クリームは極くさつぱりとした、季節向きの、清々しい高尚な薔薇の香りのするクリームで白色糊過酸化水素が入つて居りますので日焼け止としても亦理想的な夏季の下化粧料でございます。



ポンピアン・粉白粉（ビューテー・パウダー）

仕上げ

マッサージ、クリームで基礎化粧、ロースクリームで下化粧と以上二つの順序を踏んで始めて美と健康との調和のとれた自然の美くしい化粧映えのする立派な下地が出來上ります。其上に御若い方は粉白粉で御中年以後の方は水白粉で思ひ思ひに仕上げをなさいませ、化粧崩れの憂のない眞に生々とした美くしいお化粧が出來上ります。



ポンピアン化粧料東洋總代理店　東京銀座　佐々木商店

津田青楓畫伯著

す[illegible]隨筆

畫家の生活日記

著者が藝術家としてよりも人間としての息ぐるしいやうな歩み方は、第三者から見ると滑稽に見へたり深刻に見へたり憐愍に見へたりするかも知れない。敏子夫人が嘗て著者をなじつて『あなたは妙な方ですね。書をかいていらつしやるかと思へば轉寢をしていらつしやるし、寢ていらつしやるのかと思ふと醫者のものなんかを描いていらつしやるし、さうかと思ふと道德家か宗教家の樣な本を開いて香の烟の中に君子然としていらつしやる』と言つたら、著者は之に答へて『うむ……俺は人間だもの、神樣の樣な氣にもなるだらうし又時としては獸のやうになることもあるさ、人間だから仕方がない』とすましたといふ。隨筆と日記はかうした著者の生活記錄である。その中『戰爭日記』は嘗て有島武郎氏が激賞した事があり、最近の『遠妻への手紙』『妻の留守中日記』等は氏の心境の孤獨を語るものである。氏の隨筆は夙く夏目漱石氏に認められたもので、氏の藝術と同樣に何れも特殊の風格を具へてゐる。今の文壇に流行してゐる隨筆の爲めの隨筆とちがつて、氏の生活そのものから生れた自づからの隨筆である。挿入の油繪、日本畫、素描と相俟つて二書何れも興味深き無[illegible]の隨筆集である。

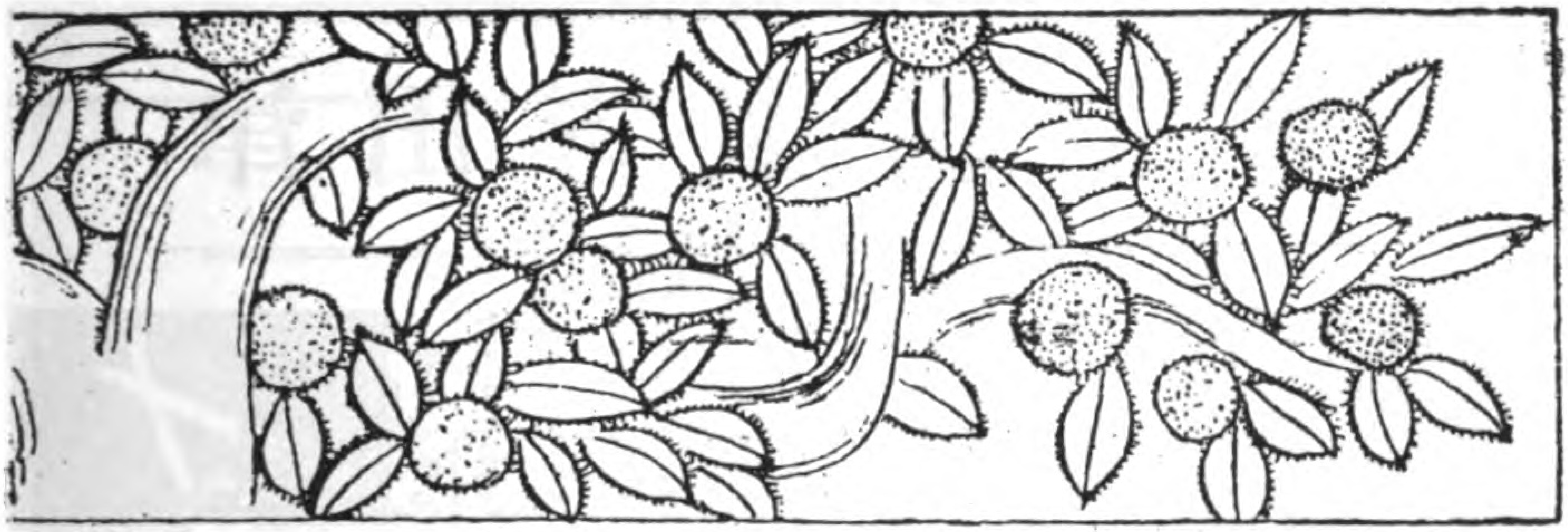
挿畫〇木版一葉〇三色版七葉其他三葉

四六判〔二四四頁／三〇四頁〕
著者裝幀
總布美裝函入
正價各貳圓八拾錢
送料各拾八錢

挿畫〇三色版二葉〇其他六葉

發兌 京都市丸太町寺町東 振替大阪一七〇五番 弘文堂

賣捌 東京神田一ツ橋通町 振替東京三七〇番 有斐閣



女性改造七月號目次

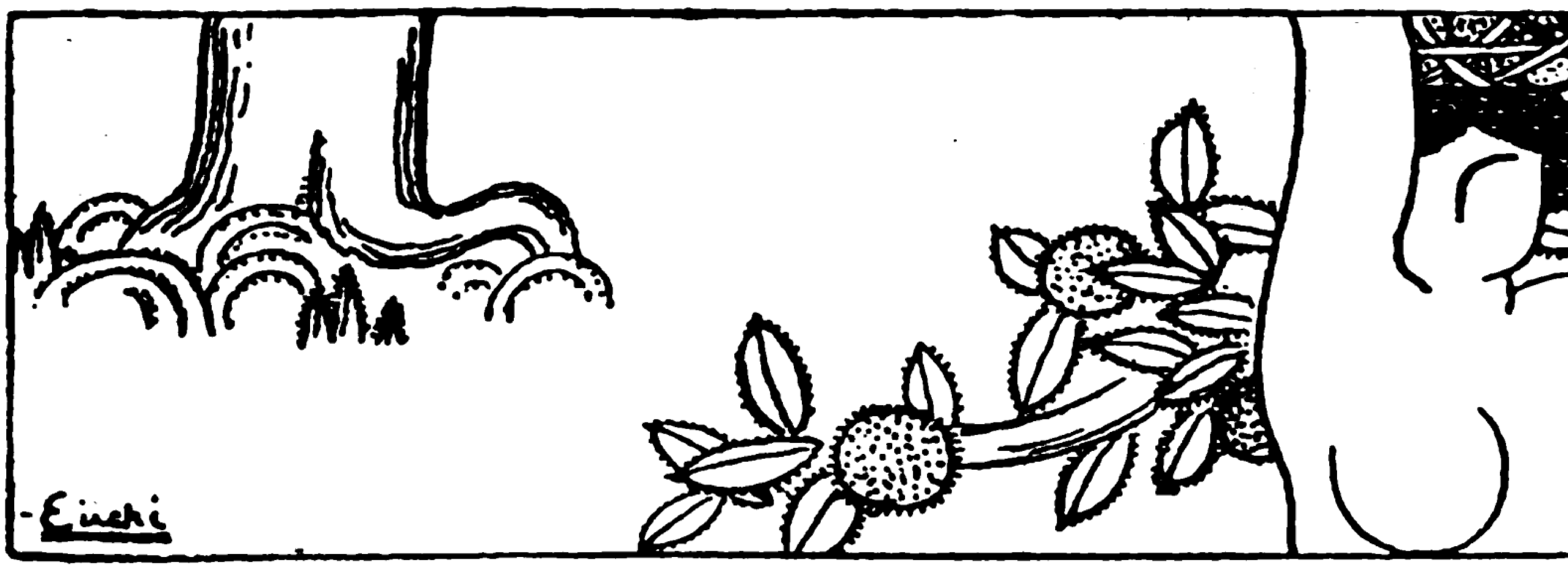
□表紙 ばら……木村荘八
□口繪 水郷……平福百穂
國際日本の廣さと國内日本の深さとの比較……杉森孝次郎…一
職業婦人と母性の問題……山川菊榮…七
文明批評 美感の凋落……野口米次郎…一七
單純性
庭の隅の小さな花……吉田絃二郎…二四
斷絃……川上漸…二九
平凡な場面……高濱虚子…三三

人間

蟹の穴を覗く……賀川豊彦…三六
人魚とペリカン……佐藤惣之助…三八
前世界の一節……横山又次郎…四二
晝間の月……木村荘八…四八
諏訪湖の主……田中阿歌麿…五一



涼しい設計……山本拙郎 一八三
青葉と籐椅子……伊藤貴麿 一八四



涼しい設計……山本拙郎 一八三
青葉と籐椅子……伊藤貴麿 一八四
かうありたいこと……手塚かね子 一八五
二つの空想……相内八千代 一八六
夏の家……與謝野晶子 一八八
ソーニャ・コヴァレフスカヤ……野上彌生子 一九〇

創作

一瞬間（小說）……正宗白鳥 二
春遠からじ（長篇小說）……ハッチンスン作 木村毅譯 九
室內花卉（短歌）……木下利玄 三四
鳳凰天に搏つ（長篇小說）……柳原白蓮 三六
雨上りの道（小說）……小川未明 六四
女（戯曲）……秋田雨雀 七〇

大正十三年六月二十九日(日曜日)午後六時半開演

於法政大學講堂(省線牛込驛市ヶ谷驛下車 / 市電新見附一口坂下車)

主催　法政大學學友會音樂部
後援　東京朝日新聞社

パルダス教授告別ピアノ獨奏會

ショパンの夕べ

曲目

1 (a) スケルツォ(諧謔曲)變ロ短調作品三十一
(b) バルカローレ(舟唄)　作品六十
(c) アンプロムチイユ(即興曲)變イ長調作品二十九
(d) スケルツォ(諧謔曲)　ロ長調　作品二十

(休憩　十五分)

2 エテイユーデン(練習曲)

(a) ハ長調……作品　十ノ一番
(b) ホ長調……作品　十ノ三番
(c) イ短調……作品　十ノ二番
(d) イ短調……作品　二十五ノ四番
(e) ヘ長調……作品　二十五ノ三番
(f) イ短調……作品　二十五ノ十一番

(休憩　二十分)

3 エテイユーデン(練習曲)

(a) ハ短調……作品　十ノ十二番
(b) ヘ短調……作品　二十五ノ二番
(c) 變イ長調……作品　二十五ノ一番
(d) 嬰ト短調……作品二十五ノ六番(三度練習曲)
(e) 變ニ長調……作品二十五ノ八番(六度練習曲)
(f) 變ト長調……作品十及五(黒鍵練習)

(休憩　十五分)

4 (a) バラーデ(譚詩曲)ヘ短調……作品五十二
(b) ボレーロ(西班牙舞踏曲)……作品十九
(c) バラーデ(譚詩曲)變イ長調……作品四十七

◇會員券　特別參圓　普通壹圓五拾錢
◇發賣所　各樂器店及ビ當日會場

◇演奏曲目ハ特別ニ家常田村寛氏ノ所謂「ショパンノ最優秀曲」ヲ撰ンデアリマス

◇申込多數ニ付キ賣リ切レノ虞ガアリマスカラオ望ミノ方ハ至急オ求メ下サイ



卞鳴盲標　　水鄉



國際日本の廣さと國內日本の深さとの比較

杉森孝次郎

單なる事務員質の頭腦が、現代日本の外政の樞要當局に安居したり、推輓されることを欲したり、推輓されたりする通則的事實は、亡國の一兆であると同時に一因だ。

その種の人物の頭腦には、規則、榮達以上のなにものもない。平素に於いて、最初からして、かれらは、單なる上長官の寵愛と信用とをいかにせば保護し、增進しうべきかといふ問題の解決に腐心し續けた人物だ。かれらの眼中には、曾つて一とたびもまじめなかたちに於いて奉公、愛眞、殉道の困難が前望されたこともない。かれらには、もとより、時勢の推移、人心の變轉を、それの進化的意義にしたがうて讀む意志もなければ能力もない。

この種の人が、たとへば遣外代表國使としていかなる藝を演ずるかといへば、先方の一二の大官との多少の形式的及び

内面的交際關係くらゐを持んで、國際難關を豫期しえなかつたり、それに衝きあたつてからは、容易にそれを切り拔けうべしと錯覺斷するあたりが關の山だ。

曾つて最近古の日本は、對鮮策に於いては、先方の一家族や數家族に至極形式的な、私的な特禮を示したり、特別情鎖關係をつけたりすることに、錯覺的、幻覺的價値を期待した。對支策に於いても、かれは、先方の權力者や爭覇者としての僅數個人にのみ目をつけて、かれらの意志と行動を當方の希望通りに決定すべくつとめさへすれば、萬事成るかの如くに錯覺し、且つ幻覺した。いまなほ頗るさうしつゝある。對露策に於いては一ヨツフエを錯覺的、幻覺的に全露國視し、對米行爲に於いては國務卿や大統領に途方もない迷想的な信と望とを捧げる。

內に於いて全國民の眞の幸福に奉仕する誠意なく、わづかに一身の淺い、低い榮達を目的として上長官に媚佞したり、機械從したりするだけの心術者が、他國との國使的交際や取り引きに於いて、類推的方法にしたがつて、專ら他國の上長官階級に注意したり、集中したりすることは、その現象內の論理關係に於いては至極統一的だが、そんな官界氣習を早く根本的に廢棄しようともしない、かへつて、いはゆる少壯氣鋭の分子までもが、引きつゞき、あとから〳〵、その氣習の新保存力たるべく志願し來たつてやまないわが國現在の實情は、問題を持たなすぎる單純淺薄の國民を意味する性質のものだと、國民の或る理想意識によつては確實に斷定される。

一體、日本のやうな國が、安全に、確實に、幸福な將來を持つためには、國家の外的關係に、現に日本が拂つてゐるよりも全然高度的格別の注意を拂ふ必要がある。いはゞそのための最低限必要を、現在の日本は遙かの上方に望む。僧日蓮は、思想家としての眞價實力に於いて、決して國際的位置を要請しうる人ではなかつた。しかし、かれは、或る意識に於いて、當時の日本を呼ぶに、ともすれば「わづかの小島」、「日本一州」といふ表現を用ゐた。かれは一個の純日本人としての

意識に於いてそれらの表現をなしたのではなかつたから、現代の日本人にむかつて、文字通りにかれの識力と想像力に耻ぢよとは勿論決していへないが、すなはち、かれには、それほど卓越した識力や想像力は、それらのことばの最も純眞な意味に於いては、なかつたのだが、それにしても、かれが、あの當時に於いて、あれだけの愛國心を持ちながら、容易にあの表現をなしえたことは、いささか今世の日本人をして慚省せしめるに値ふ雄魂、豪魄の持ちぬしでかれがあつたことを證するものといはねばならん。

歐洲を中心とした世界大戰後の日本が、國政代議者の選擧の方法を、新制度はすべて歐米をまねればよいとばかりに盲信して、單純に、專一に、顯微鏡的地方分區制によつて依然、晏然、條件づけてゐるなども、現代の日本人には、現代日本の內的組織の根柢的朽敗が意識されない如くに、現代日本の外的關係が皆目見えないことを證示する一現象だ。

日本の如き國際小國にとつては、それの外的關係を意識する必要は、それの內的生活を保護する目的と最直接の姉妹關係にある。幕末の內憂外患も、外患によつて觸發され、あるひは原因づけられさへした內憂にほかならなかつたではないか。明治二十七、八年の日本はなにを意味したか。それに續いた十年臥薪嘗膽の直接の原因と目的はなんであつたか。明治三十七、八年の日本は日本史上なにものを意味したか。回想すれば、新日本の出產と今日までの成長とは、外的關係の意識によつて第一に特徵づけられる性質のものゝみであつたとさへ無理なしにいひえられるほどに、それによつて代表されるではないか。

日露戰爭に勝つて、日本のアスピレーションは飽和狀態に到達した。一升の桝は一斗の米を容れる能力なく、斥鷃は鵬を羨望する氣にもなれない。日本としては、こゝまで來たことが奇蹟だ、外國人もさういつてるではないか、これ以上の成長は要するに法螺吹きの舌頭藝、筆端技か、誇大妄想患者の幻想、譫語かにきまつてゐるといふ本能的意識と、直覺的確信と、趣味的好尙とが、その後の日本人を統一した。日本に統一があるとすれば、それは模倣主義だ。そして、それの

二特徴が自己及び近隣の往昔模倣か、遠隣の今古模倣かであるのだ。現代日本のいはゆる右傾は前者の代表であり、いはゆる左傾は後者の代表だ。殘餘的大部分としての中間者は文字通りに兩者の中間者だ。單なる無過不及的、量的中間者だ。その證據の一はかれらもなんらの國際史的發明、創造、先導を示さないことにある。

國政代議者選擧方法の如きをも、すくなくとも一般的外政問題が關する限りに於いては、現代の日本としては、自己主張、自己愛護の本能に忠實であるためには、當然、全國一區としての絶大區制、單一區制をそれの一要素として加質的、進化的、發達的に自組織內に準備したものに改正すべきだ。一九一四年八月に於ける自重不足の參戰——ついでながらに注意するが、一九一七年四月に於けるアメリカの參戰は、日本の場合を自重不足の參戰だつたと判斷する標準意識に於いては、實に完全に自重足の參戰であつた——、一九一九年來のわが對露策のとめどもなき無能の連續新現、華府會議に關するわが事前的不用意、無思慮、最近の對米醜態、勿論一九一五年に於ける對支的弄小策を一凸隆部とする最近代のわが對支原則の一貫的無能をも相當に意識したかたちに於いて、事實に對する回顧、再認を經來たつて、なに人か一日本人としての愛國本能を智慧づけると同時に、現代日本の外政的低能に深く意識し及ばないことが出來やう。

國內的文化開發、國內的生活充實、國內的組織改善は、現代の日本にとつても、それらの種々形に於いて深必要であり、急時務であることはいふまでもない。しかしながら、現代の日本は、自己を、それの內包的關係にしたがつては、統一的全體の最も中心的な位置を占むる觀念や行動や存在を問題とするかたちに於いては決して意識せず、それは精確に、現代の日本が、自己を、それの外延的關係にしたがつては、統一的全體の最も決定的な位置を占むる環境との關係のかたちに於いて意識しないこと、釣合、均衡、一致、共根、同質を、意味するといふほどの疑はしさもなく、裸證する現象だ。內にむかつて深徹しえない程度の識力が、外にむかつて擴達したり、遠達したりしえやうがないのだ。かくの如くにして、國內的文化開發も、國內的生活充實も、國內的組織改善も、現代日本のそれらの努力と營爲とは、根幹批判の性質

を備へたものではない。それは、國內的日本を、それの表面的部分質及び部分量について、「商標」式「實用新案」式「意匠」式程度に於いて變へるだけの藝だ。

しかしながら、現代日本が最も必要とする、そして最も缺乏してゐるものは、そのことばの最も深い、廣い、全い意義にしたがうての發明にあることは、經驗と共に、思索と共に、いよ〳〵明確を加倍して然斷される。哲學に於いてさへ、信仰に於いてさへ、いな、哲學と信仰に於いて殊に、單なる、すなはち缺批判的模倣の向外形か向古形かに極度に特徴づけられてゐる現代日本の生活が、社會科學と、それの一延長としての廣義の立法、缺政に於いても、また自然科學と、それの一成遂としての技術、工藝に於いても、なんらの國際的發明、精善を、要するにえ示さないことは、きはめて自然だと考へられる。

そも〳〵、人として、なにが最も恥づべき事であるかと考へるに、そのうちの一は、自己の生活の原則的、支配價的位置にあるものをば自治的形式に於いて持たず、適用的、被支配價的位置にあるものだけを他治的形式に於いてでなしに持つにある。しかるに、哲學や信仰は、人にとつて、最も原則的、支配價的位置にある或るものだ。

いはゆる奴隷の眞の悲しさは、意志の根本自由をば主人の手に握られて、衣、食、住、土地、祿、位爵的のものをだけ比較的に豐富に、滿足的に享樂するにある。かくして、ヨーロツパの中世の農奴は上世の土地付きでない純奴隷との比較に於いて、また近代殊に最近代の賃錢勞働者はかれらとの比較に於いて、かならずしも貧乏さに於いて劣らない、かへつてしば〳〵前者を淩ぐ。しかしながら、單なる祿あたりが意味する自由よりも深い自由を、後世の奴隷者は、往古の奴隷者よりも餘計に持つ。ここにこそ奴隷史に於ける改善進歩の第一質がある。封建制や專制々よりも、自治的責任的制度の方が進化した生活樣式であり、社會組織である第一理由もまた勿論ここにある。妾として從滯するよりも、妻として貧乏する方が普通人にとつてさへも望ましい生活であるが如くに、たましひの自由を貧しく持つことを條件としたかたちの妻

としての生活よりも、貧しい、淋しい不婚生活の方が一層深滿足の生活だと或る人々によってはあやまりなしに考へられる。

原則に於いて消費者であり、適用や細規に於いてのみ生産者である生活は、それすら自己が消費する限りの適用や細規に於いてのみの生産者である生活は、威張れた生活でない。自己及び他人の理性にむかってそれは最も卑屈した生活の一形式であるのだ。

科學に於いて發明し、技術に於いて精作すれば、日本の國境は、現在だけの廣さに限られてゐてさへも、なほかつ日本は、消費者としての世界から見た必要價を持ちうる。交通や接觸が相互間に開設されてゐる複數人のうちの或るものは、わづかに自己の生活を維持するだけの働らきをするし、他の或るものは、多少とも他人の生活を維持する餘計の働らきをするといふ狀態は、後者を專制的支配者の位置へ推し上げるか、革命的反逆者の意志に再生させるかする一原因だ。國際的社會に於ける日本の歷史及び現實は、不幸にしてその後者でなく、前者だ。日本の國內的現實に於いては、いふところの革命的反逆者の意志に再生し來たらんとする部分がやゝ出來かけて來たらしいが、同じ日本の國際的現實に於いては多くの他國民や或る異民族を、專制的支配者の位置へ推し上げたり、革命的反逆者の意志に再生させたりする原因が國策のかたちに於いてなほ保存されつつある。

職業婦人と母性の問題

山川菊榮

一

わざ〳〵年寄の追懐談を聞くまでもなく、明治の中期に生れた私達の知つて居る限りですら、婦人の日常生活の上に起つた變化はかなり著しいものがある。二十年餘り前、私が女學校へ通ひ始めた頃の東京には、まだ何處の家にも、瓦斯も電燈も水道も引かれてなかつた。

今日では田舍でなければ見られぬ大きな煉瓦のへつゝいで薪を燒いたり、家から十二三間も離れた深い井戸から水を運んだり、殊にあの石油臭い幾つものランプの掃除をしたりした手數を考へると、スウィツチ一つひねれば灯がつき、マツチ一本で煮炊きが出來、栓一つ動かせば無盡藏の水が出る今の都會の家庭の臺所は實に隔世の感がある。又物置には、私達の祖母の遺品がある古い糸繰車や、行燈や、又維新前に出版された古い書物の版木などが埃にまみれて積まれてゐた。實に其埃くさい亂雜な一室は資本主義的生産技術の發達と共に葬りさられた過去の文明の小さな陳列場でもあれば其墓場でもあつたのである。梅干、澤庵等は勿論のこと、日常の多くの消耗品を主婦が手づから作つた時代と、それらを悉く買ひ入れる現在の時代とでは、婦人の生活も甚しい相違がある。

今日では、どんな片田舍へ行つても、自分で菜種の油をしぼり、燈心を作つて行燈を灯す家はあるまい。又、自分らの畑に作つた綿を、自分らで紡ぎ、自分らで織つて着る家も、恐らくあるまい。曾ては、ツイ私達の祖母の時代までは一嫁

入資格の一つであつた機織る技術を、多少なりとも心得てゐる娘が─特定の機業地方を除くの外─今日の世に幾人あることであらう。それどころか、今日の娘達の中には、機臺其物をすら見る機會のない者が多いのである。都會生活者は勿論のこと、農家でさへ今日では、自分の生産物を直接消費する代りに、それを賣つて、その金で生活需要品を買入れるものが少くないのである。

個々の家庭で、女達が其家族の消耗品を作ることは、維新前までは日本の上下を通ずる一般的な經濟組織の一部を構成してゐたのであるが、工業の發達と貨幣經濟の普及とによつて、此制度は漸次に破壞されて行つた。婦人の管理する家事の一部であつた多くの産業は、機械工業の勃興と共に、婦人と家庭とから引離されて、獨立の企業となつた。そこで婦人の生活には、在來に比して多少勞働力の餘裕を生じたのである。生活難のない上流階級の婦人は、此餘裕を、教育や、藝術や、社交に振向けて、新聞の婦人欄を賑はすような『文化的奥樣』となりすました。けれども中流以下の婦人は、家庭で餘つただけの勞働力の捌け口を、職業に求めることを餘儀なくされた。といふのは、資本主義的生産が發達するに連れ、大資本を擁する少數の資本家以外の者は成功の望みが少く、都會と農村とを通じて、家長一人の收入では子女を滿足に養ひ兼ねる者が激增したからである。勿論、封建時代にも女子に限つて生活難のないといふことはなかつたが、其時代には、社會關係が固定し、且つ産業は家庭に屬してゐたので、低い生活標準なりに、社會の諸生産階級は、一家族全體の勞働によつて、生活資料だけは大抵家庭の内部で獲得することが出來たのである。何等かの事情によつてそれが不可能になつた時は、當時の女子も家庭外に出て勞働を賣らねばならなかつた。そしてその勞働を賣る道は、家婢となるか、娼妓となるかの二つより外にはなかつたのである。

ところで、今や産業は家庭から獨立した。家庭に取り殘された唯一の職分である消費的活動は、婦人に何等の報酬を與へず、生活の保證をも與へない。そこで婦人も亦、男子と同じく、家庭から工場へ移された産業の後を追うて出るより外仕方がなくなつたのである。

一方、大仕掛の機械工業や、商業交通等の發達は、其尨大にして複雜な機械を運用するために、無數の頭腦勞働者及び

筋肉勞働者を必要とした。其等の仕事の中には、特殊の技術や、腕力や、熟練を要せず、田舍出の小娘でも充分に間に合ふものも多かつたので、勢ひ玆に女子の低廉な勞働を多分に吸收し利用する道が開かれたのである。

現代の婦人はもはや自家の畑の收穫物に加工して一家の食料品を作り、自ら糸車をまはし、機を織つて一家の被服を生產する必要はなくなつた。けれども其代りに、彼女は食物を買ひ、反物を買ふための貨幣を獲得せねばならなくなつたのである。此點では、男も女も、親も共も、妻も娘も、單なる一個の無產者であつて、何等實質的には違つてゐないのである。婦人が自己の勞働を賣つて生活するといふことは、男子がさうして生活することゝ同じく、資本主義の下に於ては遁れ難き必然であり、絕對的必要なのである。行燈はランプに變り、ランプは電燈に變つた。井戶のつるべはポンプに變り、ポンプは更に水道に變つた。此一見單純な變化の中には、實に測り難いほど重要な意味が含まれてゐたのである。

二

生產方法の進步から起つた此變化――卽ち產業革命の進行は、一方では、封建時代の婦人には全然與へられてゐなかつた自活の機會を與へることによつて、婦人を家族制度の束縛から救ひ、又或程度まで賣淫生活の汚辱から救つた點では恩惠であつた。が、他方、此變化に依て生じた新しい經濟組織は、人間としての婦人の價値を見ることなしに、單なる利潤生產の機械として、賃銀奴隷としてのみ其價値を評價する結果として、婦人の生活に痛ましい分裂を來したのである。

云ふ迄もなく、資本家にとつては、勞働者はたゞ廉くて從順で、よく働きさへすればよいので、それが男であるか、女であるか、年寄であるか、子供であるか、母親であるか、娘であるか、といふことは全然問題でない。資本家が女子事務員や女工を傭ふのは、勿論それが女だからではなくて、男より廉く働かすことが出來るからである。在來婦人を使用しなかつた職業に新しく婦人が傭はれるようになることは、一見婦人の權利の伸張のように見えるが、實は必ずしもさうでなく、殆んど全ての場合、女子の方が男子よりも廉く傭はれるからに過ぎない。先頃の新聞に、最近まで女人禁制だつた文部省では、經費節減のために女子事務員を傭入れることにしたといふ記事が見えたが、これなどもそのよい一例であ

る。詰り政府にせよ、資本家にせよ、傭主が女子を傭ふのは、日本人をおいて支那人や朝鮮人の勞働者を傭入れる場合と同じく、單にそれが成年男子勞働者の場合よりも廉く使へるから、利潤を搾取するのに好都合だからに過ぎないのである。

けれども、資本家から見た場合こそ、勞働者は、單なる金儲けの道具であつて、機械や齒車や調帶などと同じく、使ふだけ使つて、使用に堪へなくなれば取換へさへすればよい消耗品の一種に過ぎないのであるが、これを勞働者自身の側から見れば、非常な違ひがある。卽ち勞働者は—此處にいふ勞働者とは頭腦及び筋肉勞働によつて生活する男女をさすので、詰り女教員をも、女子事務員をも、女工をも包括していふのである——機械ではなくて立派な人間である。既に人間である以上は、教育も必要なら、娛樂や休養も必要であるし、働き過ぎたり、睡眠が不足したり、營養が不足したりすれば病氣にもなる。又人間であるからには結婚もすれば子供も生み、哺乳や養育に時間と精力とを割かれるのも當然のことである。ところが今日の經濟組織の下に於ては、勞働者のかういふ人間性は一切認められず、たゞ勞働者としての個々の男女が、資本家のためにどれだけの利潤を作り出すかといふことだけが、人間の價値を決める唯一の規準となつて居る。

かういふ制度によつて、發達すべき才能の芽を摘まれ、長壽すべき生命を若くして失はしめられるのは男女の勞働者に共通の運命であるが、婦人の場合には、其慘害が一層顯著でもあれば痛切でもあるのである。それは何故かといふに、婦人は、社會的に男子より地位が低い結果として不當に廉い賃銀しか仕拂はれぬ上に、母性といふ、男子には無いところの特殊の生理的並に社會的負擔を負はねばならぬからである。此二重の理由が重なつて、職業婦人にして母たる者は、特に過重な負擔と、特に悲慘な境遇とに苦しまねばならぬのである。

近代工業の發達は、家庭の職分を著しく減少した。それは家庭から産業を獨立させて、これを營利的企業とした。又それは教育を家庭から獨立させて、國家の手に引移した。そして今や育兒の任務だけが家庭に殘されて居る。然るに社會は、此育兒の任務を家庭に取殘したなりで、婦人を工場や事務所に引さらつて行つた。そこで無産階級の婦人は、パンのためには工場へ、育兒のためには家庭へと、一つの身體を二つに使ひ分けねばならなくなつた。卽ち一人の婦人の生活の

中に當然調和し、融合されねばならぬ筈の、生産者としての職分と、母としての職分とが、相衝ち、相矛盾することによつて、婦人の生活は分裂させられてしまつたのである。

然し此生産者としての勞働と、人間本來の要求との間に於ける矛盾は、決して婦人に限つたことではない。それは今日額に汗して生活する全ての勞働者に共通の運命であつて、男子と雖も、多かれ少かれ、此矛盾に惱まぬものはないのである。然し婦人の場合には、それが單に本人のみの幸不幸に留まらず、次代の國民全體の運命を左右する重要な意義をもつてゐるので、問題は一層目につき易く、悲慘も一層甚しいのである。

三

今日女子の協力を失へば日本の產業は忽ちにして破壞されてしまふ。日本の農民は全人口の六割を占めて居るが、其農家の勞働が半ば婦人に依て維持されて居ることは云ふまでもない。獨立した職業婦人を除いて、此農家の手扶家族だけでも其數八百萬人と算へられる。養蠶製茶を始め、一般に農業の諸部門を維持する婦人の力は極めて重大なものである。更に商工業、交通業、鑛業、醫務衞生、敎育其他あらゆる種類の職業に從事する獨立の職業婦人——賃銀勞働者の數は約四百萬と算へられて居る。工場勞働の方面では、女子は約九十萬で、工場勞働者總數の五割以上を占め、數量に於ては男子よりも重きをなし、紡織勞働は勿論のこと、食料品、化學工業、其他危險又は衞生上有害と認められるあらゆる工業にまで、女子勞働者の姿を見ないことはないまでに達して居る。鑛業には約十萬の婦人が從事し、其大半は地下の徹夜業に服して居る。工場——殊に紡績工場の徹夜業と共に鑛山に於ける女子の地下勞働と夜業とは、人道問題として多年の內外の注意を集めながら、殘念なことに、勞働階級の團結力がまだ十分に發揮されないために、今日まで依然として保持されて居るのである。約六萬の女敎員、五萬に達する女醫、看護婦、產婆、及びこれも亦、萬を以て算へられ、年々增加する一方の女子事務員、約三萬に達する交通、通信從事員等も亦職業婦人の中の重要な要素である。

日本には有業婦人全體に通ずる配偶關係及び育兒狀態の調査はまだ存在しないので、部分的な調査によつて極めて大體

の推測をすることが出來るだけである。大正八年末に於ける工場法適用工場の女工總數は八十三萬五千七百八十一人であるが、其中十五才以上二十才未滿は三十六萬五千六百六十九人、二十才以上が三十六萬五千三百九十五人で、合計十五才以上が七十三萬人餘に達する。女工の年齡や配偶關係は其屬する產業部門によつて多少相異があり、纎維工業は主として獨身の寄宿女工を傭ふて居るが、都會の工場地に設けられて居る化學工業、印刷業其他の工場に於ては必ずしもさうでなく、中には有夫者が多數を占めて居るのもある。

大正十年度神戶市社會課の調査に係る燐寸軸木工場に於ける二千六百六十六人の婦人勞働者の中、一人乃至三人の幼兒をもつ者八百二十人、子なき者千八百四十六人であつた。卽ち幼兒をもつ婦人勞働者は、總數の約三分の一を占めて居る。幼兒をもつ母親のうち、一日八時間以上の勞働に服する者三百四十九人、九時間以上の者百十人、十時間以上の者五十四人、合計五百十三人を算へ、母親總數の半數以上に達して居る。是等の母親は、工場でこれだけ長い勞働に服した後に、歸宅して育兒と家事とに從ふことを忘れてはならぬ。此幼兒をもつ母親の割合を、十五才以上の全國の女工に適用して見るならば、全國で約二十六萬人の母親たる女工が見出されることゝなる。同時に工場生活―長時間に亘る立業や、不自然な姿勢や、心身の過勞等一切の缺陷を含む―が屢々不姙症を來し、姙娠率を低め、早產、死產、流產等の原因となることの稀でないことを忘れてはならない。

大正九年度に於ける鑛山の女工總數は十萬八千三百であるが、其中十五才乃至二十才の者二萬六千七百餘、二十才以上の者約八萬であつて、大部分は共稼ぎの有夫者である。これは鑛夫の家庭の恐ろしく高い幼兒死亡率を說明する最も有力な材料でなければならぬ。

工場法は、工場主に對して產前二週間、產後二週間の間、女工を使用することを禁じて居るが、此休養期間に對して何等の手當をも女工に與へる譯でないから、事實上分娩の間際までも、一日十時間以上、機械と共に油と埃にまびれた工場で姙婦を働かせることが看過されて居るのである。

自由業に從事する婦人の代表的なものである女敎員に就いて見ても、著しく希望に滿ちた事實は認められない。大阪

市の調査によると、大正十年末現在の大阪市女教員總數は（小學校、幼稚園、裁縫學校）一千百四十六名であつて、其中有夫者數六百三十二名、大正十年中に分娩した者の數は百二十九人である。又長野縣の調査によれば、同縣下に於ける小學女教員の總數一千七百七十九名のうち、有夫者六百四十九名、一ケ年間の分娩百六十一名である。女教員總數の約一割内外に當つて居る此分娩率を、全國の女教員に適用すれば、日本全體を通じて、一ケ年間に女教員（總數六萬人）を母として生れる子が五千人乃至六千人はあると見てよい。

女教員の産前産後休養の實狀に關する廣島縣安藝郡の調査によれば、大正九年度分娩女教員數十八名のうち、分娩前無休養の者六名、一日缺勤一名、二日二名、六日一名、七日二名で、八日以上休養したる者は六名に過ぎず、即ち總數の三分の一は無休養、他の三分の一は七日以下の休息しか取らなかつた。又同じ年の分娩後の休養は、五日缺勤せる者一名、六日一名、十八日一名、十九日一名、二十日一名、最長四十七日である。大正十年度分娩女教員數十四名のうち、分娩前無休養の者七名、他の半數七名のうち缺勤日數は最短二日、最長二十三日に及んで居る。分娩後の休養は最短六日缺勤、最長四十五日で、三十二日以下が半數を占めて居る。

分娩前後の休養の如きは、文化の程度により、諸地方の慣例により、其人人の健康狀態によつて種々なる相異を來すに違ひないが、とにかく分娩前に於ける絶對的無休養、及び分娩後に於ける五日乃至六日、それ以上にもせよ、極めて短時日の休養しか取らぬ者の多いことは、女教員が强制的な、不自然な精勤の奬勵によつて、自己と未來の種族との利益を犧牲に供せしめられる經路を明示して居るものである。此弊害を覺つてか、一昨年九月、文部省は、女教員に對して、分娩後六週間の休養をなさしめ、醫師又は産婆の診斷書あれば、分娩前二週間の休養を與ふることを訓示した。然し此場合にも、女工の場合と同じく、缺勤せる女教員に對して收入と地位の安全とが保障されぬ限り、事實上何等の變化も起る筈がない。今日、多くの學校では缺勤せる教員のために、其時間を補充する臨時の教員の報酬は缺勤者の俸給から差引かれるのが常である。貧しい女教員が、缺勤によつて受ける此經濟的打擊を避ける爲め許りにも、缺勤日數を少しくしようと努めるのは無理でない。

産前産後の勞働に就て名目上多少の制限を加へられて居る工場勞働者及び敎員の場合でさへ、事務上其制限は有名無實に等しいのである。謂んや一般民間の會社商店等の事務員店員等が、分娩前後の勞働に對して何等の制限や保護を受けてゐないことは察するに難くない。隨つて現在の社會に於ては、婦人は母たる職分に服することによつて、寸毫も價値を認められることがないのみか、却つて其爲めに職業を奪はれ自活の道を塞がれて居るのである。現在では、人々は父たり母たる前に、先づ第一に賃銀勞働者たることを强いられる。人々にパンを與へるものは、其父性でもなく、母性でもなくてただ賃銀勞働あるのみである。母たる職分は、社會的にはいかに有用な、貴重な職分であるにせよ、資本家傭主に對して利潤を齎らすやうな性質の仕事ではない。資本家が婦人に求める所は其低廉な勞働のみであつて、彼等の金儲けの手段とならぬ限りに於て、其貴重な人間性も母性も、寧ろ有害無益視されて居るのである。であるから、彼等は、産前産後の休養、育兒の負擔等、母性に伴ふ條件を婦人の特長として見ずにその缺陷として算へ、これを以て一般的に婦人の賃銀を値切る有力な口實として居るのである。

四

今日の世の中では、男女を問はず、資産のない者は賃銀勞働の形によるの外、生活の道がない。無産階級の男女は、生活のためにする職業が、自分にとつて適當であるか、不適當であるか、自分の天稟をよく活かす道であるかないかを問ふ暇はない。溺るゝ者は藁をも摑むといふ諺の通り、たゞ餓死を免がれる唯一の手段として賃銀勞働に服して居るので、事實上、男女いづれに取つても、職業選擇の自由は與へられてゐないのである。が、殊に婦人の場合には、職業選擇の範圍は男子より遙かに狹く、其自由が遙かに局限されて居るのである。今日の法律や習慣や道德は、物質には最も割の惡い、精神的、肉體的には有害な影響を多く伴ひがちな不熟練な筋肉勞働に就く場合の外、婦人の職業生活に反對して居る。鑛山や工場や農村に於ける婦人の過激な、健康上危險又は有害な勞働にさへ、保護乃至制限を加へることをすら意に介せぬ人々が、多少の智識又は技術を要する頭腦勞働に婦人の侵入することを罪惡視することは、何よりもよくそれを證據立て

て居る。そこで婦人の職業生活が其天性を破壞する最も重大な原因としては、第一に、婦人には殊に職業選擇の自由が許されぬこと、第二に、其勞働條件が苛酷不自然なことを舉げねばならぬ。かような狀態は、畢竟今日の生產が、働く者自身のためでなく、單に資本家の利益のみを基礎として組織されて居るからである。自由な、健全な社會は、人各々その能力に應じて貢獻することを許す社會でなければならぬ。男女を問はず、何人も自己の特長を發揮することによつて生活を保障される世の中で、誰が好んで自己の天性と能力とに不適當な、心身の健康を破壞するような勞働を選ぶだらう？

家族制度の崩壞は生產組織の變化から生じた社會進化の一過程であつて、道德や感情の問題ではない。隨つて其結果として起つた婦人の賃銀勞働と其影響とは、いかに悼ましいものであるにせよ、今更それを地上から拂拭して——近代社會のあらゆる大發明や大發見や、其結果として發達した機械工業を一掃して——封建的生產組織の上にのみ成立し、維持せられ得る封建的家族制度へ復歸することは不可能である。よしやそれが出來たところで、幼稚な生產方法と、男性中心の上に置かれた封建的家族制度其物が、決して婦人と子供との樂園でないことは、今更云ふまでもない。今日最もよく家族制度の實質を留めて居る農村の家族生活は、よく其事實を語つて居る。要するに現在の難關は、現在に優るとも劣らぬ缺陷をもつ過去の社會へ逆轉することに依て解決されるものでなく、將來の、より完全な社會に於てのみ解決され得るのである。

產業と敎育とが家庭から獨立したのは確かに社會の一進步であつた。そして今や兒童の哺育に對しても、社會は、これを父母のみの責任として見ずに、社會全體の責任として考へ始めた。兒童問題の硏究や、兒童の養育に關する社會的設備が發達し始めたのは其故である。かように封建時代に家族制度をして重きをなさしめた、家庭の重要な社會職分は近代に至つて徐々に分化し、もはや家族は男女の私的結合の表現として以外、多くの意味を持たなくなつたのである。

屢々述べたやうに、婦人の職業的活動と母性との間に橫はる矛盾は、賃銀勞働と、人間本來の要求との間に於ける矛盾といふ。今日の經濟的構造全體に亘る根本的な矛盾の一斷面にすぎない。ひとり母性といはず、全ての男女の人間性そのものが、今日の組織によつて壓迫され蹂躪されて居るのである。男女が機械的奴隸としてゞなく、人間として生產的勞働

に從事するようになれば、其心身の特長は、重んぜられこそすれ、無視され、又は有害視される恐れはないのであるから、社會的勞働を個人的生活の矛盾といふことは、在り得ないのである。然しさういふ理想的な狀態を招來する第一歩として、職業婦人は、母としての當然の權利を要求せねばならぬ。即ち勞働狀態の改善や其制度、姙產婦の相當に長期に亘る給料つきの休養期、授乳婦に對しては特に勞働時間を短縮すること等を要求せねばならぬ。婦人の生活の狀態は、同時に無產階級の後繼者の運命に直接重大な影響を有する以上、是等の要求は、單に婦人自身のみならず、無產階級全體の利害休戚にかゝはる問題として、其團結の力によつて支持されねばならぬ所である。文明國中第一位を占める日本青年婦人の死亡率と幼兒死亡率とは、無產階級の上に强いられてゐる犧牲の一表徵である。

敎育上、法律上、政治上に男女の平等を實現した勞農ロシアが、徹底的な母性保護を行ひ、女性の特質を尊重して、過激な筋肉勞働よりも輕易な頭腦勞働に婦人を振向けようと努めて居る事實は、極端に賢母良妻主義の日本が、その貴重な『賢母良妻』の材料を、全世界の問題となるほど苛酷な條件で、過激勞働に服せしめ、其母性と人間性とを資本家の利潤の犧牲に供して省みない事實と、何といふ皮肉な對照をして居ることであらう？



現代文明批評

野口米次郎

（一）美感の凋落

私は小林清親の一枚物で『御茶水螢』と題する木版繪を持つて居る。小さい畫面を一面に蔽ふ眞暗のなかを、散らばる星でゝもあるかのやうに螢がかたまつて此處や其處に飛んで居る。私はこの繪を見る毎に、『御茶の水にも螢が飛んでゐたことがあつたかな』と獨語する。この眞暗な繪を暫時見詰めてゐると、下を流れる河がはつきり見えて來る。さうしてその水上に一つの遊船が浮んでゐて、船についてゐる提燈の火が波の上に影を投げてゐる。私はこの繪を見る毎に、『御茶の水も水がこんなに波々と溢れて遊船さへ浮かんで、一夕の歡樂を人に與へたことがあつたかな』と獨語する。この繪の出版された時から考へると、年月も四十年とは經つて居ない。實以て御茶の水は變化したものだ。所謂江戸名所古蹟は現代文明(?)に壓迫され呪咀されて亡びて行くが、この御茶の水も痛ましい廢墟の一だ。私自身も三十年前に一度御茶の水橋から氣味の惡い程生繁つた樹木をすかして煌く下の水を眺めたことがある。私はこの印象を今に忘れることが出來ない。私は何も名所舊蹟の破壞を殊更問題とするものでない。私が問題とするのは、『今の日本は昔の名所舊蹟に替へる何物を造つたか』である。

破壞すること丈け知つて建設の知識と努力を缺くこと程淺ましきは無い。又破壞を見て何とも感じない位美感の凋落を見ると、私は痛ましい現代人の心を歎かざるを得無い。今日の日本人は、物質主義に征服された敗北者であるといつても之れを否定することは出來まい。力強い西洋文明に威嚇され

で本然の美質を失つた腑拔けた弱者である。明治神宮が造營された時、私はどんなに喜んだであらう。私は獨語した、『やつとこれで今の日本人は子孫に殘す物一つを作つた。これで私共は子孫に對して言譯の言葉があるといふものだ。』過去五十年間に日本人は百の尊い名所古蹟を破壞して、たつた一つの明治神宮を作つたのだが、もとより何物も作ることが出來ないと比較すると成功といふことが出來ようが、半世紀の仕事としては決して賞讚に價する收穫でない。今日東京にしても、日本全國何處へ行つても、外國に誇ることが出來るものは德川時代の遺產ならざるは無い。私共東京に住んで自分自身を慰藉するもの﹅大部分は舊日本の創作に懸つて居る。近い一例を擧げると櫻樹にしても、郊外の櫻樹は語らぬとして、四谷見附から御茶の水に渡る電車線路の土手に植ゑてある櫻の木はだれが植ゑたか。春陽四月の初旬に中野方面から東京驛へ電車に乘ると、坐りながら花見物が出來るといふものだ。若しこの土手に櫻樹が無いと想像すると、どんなに私共は寂寞を感ずることであらう。舊時代の日本人は樹木に對する熱烈な尊敬を持つて居つた。彼等の花に對する歎美は非常なものであつた。西洋人から見ると、日本人は花の愛人であつて、錢を持つて居ると之の半分は花を買ふといつたさうなマホメツトに類似して居るらしく見ゑるかも知れないが、日本人として私の見る所では、今の日本人位花に冷淡な人間はないと思はざるを得無い。私はこ﹅で東京府廳に坐つてゐる有力者に對して、美感の涵養を說きたい。日本人は個人として庭を持ち其處に花を植ゑて樂しむかも知れないが、公園の花を平氣で泥棒する公德心の無い敎育上の不具者である。復興局の諸君は公園の擴張を計畫する以前に、此處や其處に散在するお濠の水を浚つてはどうだ。出來ることならお濠の水が變るやうな設備してはどうだ。若しそれ等のお濠に孑孑が湧かず臭氣を出さなくすることが出來たならば、復興局の仕事は大きな成績を上げたものといふことさへ出來ると私は信ずる。實際に、非常時に於ける逃げ場としての公園は別として、詰らない小公園をここそこに作るよりお濠の水を浚る方が遙に重大であり又有用である。私共の祖先は人間の勞働が價しない時代にお濠を掘つて置いて與れたのである。今日それを不體裁な狀態に打棄つて置くといふことは第一都會建築上藝術的に一隻眼を持つてゐた彼等に對して相濟まないと思ふ。若し彼等の靈が今日の狀態を知ることが出來たならば、定めし今日の日本人が徹底的に美感の凋落を暴露して居ることを悲しんでゐるであらう。

私は諸君に半藏門の前に立つて右手に横はるお濠の光景を見よと云はねばならない。かゝる壯大なる水と樹木との繪畫は、世界の都會いづれを尋ねてもその匹敵を見ないであらう。この光景に日比谷公園を比較して見ると、その價値に於ての相違は月と鼈以上といふことが出來る。それから九段の方面からお濠について丸の內へと歩き右手に見える恐ろしい石の壁を考へねばならない。それから受ける私共の印象は嚴肅極まる荒涼の感といつたふうなもので、エジンバラの古城以上に人を動かすものである。若しこのお濠の水を絕えず變らせることが出來たならば、それこそ世界の都會中で一番大きな壯景であるといつても決して過言ではあるまい。

私は電車で中野から東京驛へ向ふ時、四谷見附邊りからお茶の水へ達する間を左の窓から眺めていつも歎息する、『如何に震災の後始末に困つたからとて、亞鉛の板や燃えた煉瓦の山を土手の下へ投げるとはどうしたことだ。いづれは何處かへ持つて行く計畫はあるだらうが、半月でもその下敷になつた草はどうなると思ふ。亂暴もかうなると徹底的だ。又市民がこれを見て一言も批評せぬのを見ると、彼等の美感は枯死して申分が無い。』私は幾年も以前から、かういふ廣い土手には花でも植ゑて期節々々の風致を添へて然るべきであると思つて居つた。秋になつて目黑の停車場附近で萩の咲いてゐるのを見ると人はどんなに歡喜を感ずるであらう。又初夏の期節に四谷停車場で見る躑躅でも同樣の喜びを與へずに置かない。實際東京を美的に復活せしめるには、かうした手近かな所から始められねば駄目だと私は信じて居る。かうした空地の土手に花を植ゑることは決して難事業でも無ければ、極めて輕い經費で出來ることだ。實に私は復興局にも又東京市廳にも美的設計に眼の開いた人間の居ないことを驚いて居る。要は計畫だをれで實行に遠ざかるよりは、手近な實行し易いことから先づ第一に始めて帝都の美觀を添へることを考へねばならない。

あゝ、今の日本人の美感は凋落して殆ど濟度の道がない程度に至つて居るのではなからうか。西洋人は日本人の美に對する敏感性を賞讃して居る。その敏感性も過去のもので、今日では存在してゐないかと私は疑はさるを得無い。私はこの粗雜で俗惡な時代の空氣から逃れたい。私はこの美の無い東京を少しでも美の有る都會と復活させたい。私は最後に重ねていふ、『今日の日本人の美感は亡びて仕舞つた。』

（二）單純性

西洋人はざ大つぱに日本人の心と日本人の實際的生活を單純だといつて仕舞ふ。果して私共は西洋人のいふやうに單純であるであらうかに就いて私は幾多の疑惑を持つてゐる。無論私共のながい歴史の上で、私共が嚴肅な單純性を發揮して鋭氣を充溢させた時代もあつたが、今日はどうであるか。日本人の心理は、物質上でも精神的でも、西洋人が思つてゐるやうに單純でない。單純性の三字で日本を理解しようとする論者は實際を離れた理想家である、皮相な獨斷家である。若し私共が彼等のいふやうに單純であり又あり得るならば、私共はそれを日本文明の最大な勳功としてどんなに誇るであらう。實に單純といふ二字は人間的修養の根元であつて、眞實な基調はこれで無くてはならない。さうして又人間的修養の歸着點もこれでなくてはならない。即ち單純が始であり又終である。過去の思想史を見ても、過去の文學史を見ても、思想家や文學者はこの單純性の力で如何に思想の自由と廣さや藝術の眞理と人間味を永久に鮮新なものとしようと努力したであらうか。西洋でも、東洋でも、自分を腐敗墮落の境地から救助して、新しい轉換をしやうとするにはこの單純性の力を借りなくては到底駄目である。

私のいふ單といふことは英語のラスチック・クウオリチーの意味でない。外面的のものでなく内面的な心理狀態に懸つて居る。外面的な素樸が自然に精神的な單純性を培養するに至るといふことは事實であるけれども、多くの場合に表面的な存在は物質の範圍を出ない。力があるとしても之れは物質的の力以上でない。表面上から見ると如何に單純らしく見えても、其實單純ならざるものが多い。今極めて卑近な一例を出すと、田舍者は概して外面的に見ると單純だといふことが出來ようが、どうして〳〵都會人より遙に復雜な心を持つて居ることが發見される。物質的には田舍者は都會人より單純らしく見えたにしても、決して私のいふ單純性の所有者でない場合が多い。

人間生活もその他あらゆる存在と同樣に、いつも自分を惡感化から遠ざける用意が無くてはならない。柔弱な婦人化から自己を救助する方法は一つあるのみである。それは外でない、曰く單純性に歸ることだ。日本の歴史を見るに、驕る平家は田舍者の源氏に亡ぼされたが、田舍者の暴力に壓倒されたと見てはいけない。暴力化した田舍者の單純性に抵抗することが出來なかつたのである。眞實な單純性は冬夜の霜のや

うに嚴肅である。又天空を行く奔馬のやうに勇氣がある。婦人化した復雜性は單純性に對すると、ひとたまりも無く粉碎されて仕舞ふ、その存在を失つて仕舞ふ。德川文明にしてもその亡びたのは、その時代精神が本然の單純性を失つた、單純性の命脈が盡きたからである。如何なる國の文明でも、支那でも希臘でも印度でも、その最高潮に到達した場合には人間の單純性が燦然とした玲瓏な光彩を放つて居る。文學だけを見ても、單純性を發揮した文學だけが永久不死に輝いてゐる。日本の文學で萬葉時代が偉大であるのもその理由に外ならない。私共は如何に單純に歸るかを知らなければならない。水が澱むと惡虫が湧く。人間生活が混亂した復雜性に捕はれその犧牲となると、人間生活に生氣は亡びる。

東京を京都に比較して見ると、京都は東京よりその心理狀態に於て遙に復雜である。京都は矯飾的價値の高い都會である。從つて人爲的である不自然である假丁的である。今日の京都もさうであるが、舊の京都もさうであつたに相違ない。今日の京都を見ると平安朝時代の京都も容易に想像され得る。歷史の最初から都會として京都はソフヰスチケーションの路を歩いて來て居る。單純性の支持者で無かつた。それに反して東京は單純性の强みの上に立つて居る。若し都會として東京が京都より力があるとすると、これは人間の單純性を失つて居らない一點に歸せねばならない。くり返していふが、人間界如何なる現象でも單純性を持つものは生長し增殖する進歩する擴大する。それを失つたものは亡びる。今日所謂新人なる人にこの力があるだらうか。將來の都會を眞實な新都會たらしめるには、この力にその出發點を置かねばならない。

都會は商業工業有らゆる人間の努力が集合する場所であるが、單純の力でこれを整理することが出來るか出來ないかに、都會の衰微と繁榮は懸つて居る。物質的進步それ自身にはたいした價値が無いと云はねばならない。若し精神生活で物質的進步を支配し批判し整理することが出來ないと、私共の人間世界は悲觀に到着するのみである。精神的發動のリアクションを誘致すればこそ、物質的進步の價値がある。又物質的進步も更に一進步する路が開かれて來る。物質的進步も精神生活を破壞しない限り、私共は樂天的態度で物質を歡迎するものである。人間は空腹の時よく祈禱が出來るといふ言葉がある。然しこの言葉は必ずしも物質を否定する意味でなく、精神生活は單純性の力でなければ行はれるものでないと私は了解したい。

私共今日の生活は物質的組織に反對することが出來ない。

又複雜であるに相違ない。人間生活は眞實な人間味の上に建てられなくてはならない。私共の思想はキヤソリツクであらねばならないといふことを基調とするに於ては、私共は單純性の力で生活を整理することから始まらねばならない。この決心を持つといふことが、どの位重大なことであるか知れない。今日の人間生活は昔のそれとは異つて、廣められて居る深められて居る。高められて居る。然し若し私共が自分共の生活に高尚な活動をさせることが出來ないとすると、若し私共が人生の目的に向つて人間精神を解放することが出來ないとすると、私共の生活は無意味に終らざるを得ない。西洋諸國の生活狀態を考へて、紐育や市俄古などに散在する旅館やアパートメントなどを見ても、如何に人間努力が經濟的に使用されて、云ひ替へると生活が單純化されて居るかを驚かざるを得ない。單純といふことが眞實な都會生活を一貫する主義であらねばならない。日本に於ける都會生活はこの主義主張の上に立つて居るだらうか。私は日本の生活位人間の努力を浪費するものは無いと信ずる。實際に私共の生活は復雜を通りこして混亂を極めて居る。この整理から始めなくては、修養を論じても無駄である。文化を論じても無駄である。私共は單純性の力を再び取りかへして、その力で眞實の生活を再建しなければならない。

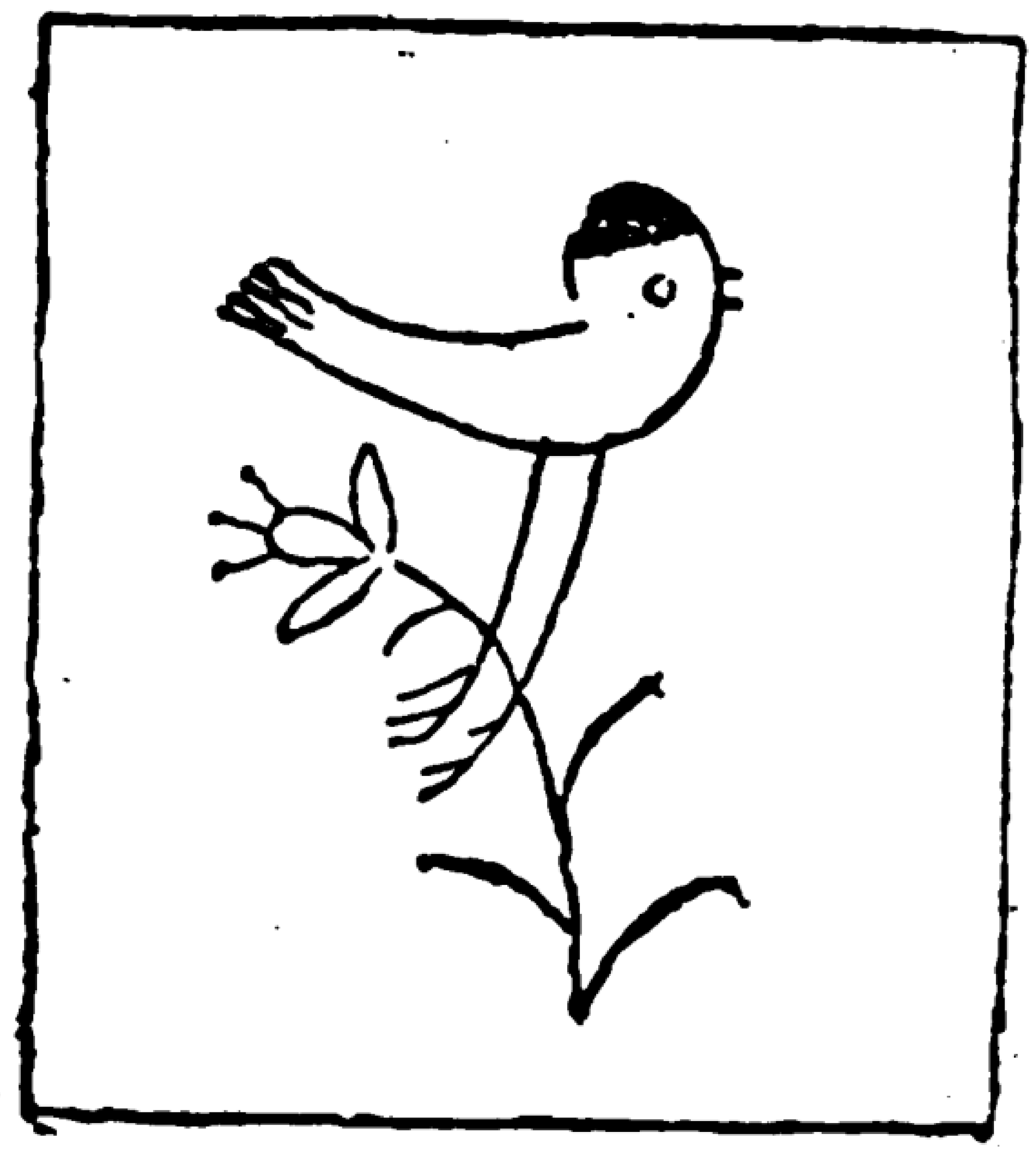
昨年の震災は日本建國以來の大慘事であつたに相違ない然し震災を體驗した結果幾多の暗示を與へる教訓を得て居ることも疑ふことが出來ない。私共の實際生活は單純化された。之れは偶然の拾ひ物に止るとしても、之れに對して私共は感謝せざるを得ないと信じて居る。震災前に比較すると震災後は市中の飲食店など、隨分と目立つて單純化された。震災前では一寸した飲食店へ上ると、女中が座布團を持つて來る煙草盆を持つて來るお茶を持つて來る、注文した食物は容易には顯はれて來ない。食ひ終るとその勘定をするにも時間が掛かる。下足札を出して自分の下駄なり靴を貰ふといつたやうな工合で、僅かの時間だけを持つ人間には食事するといふことが可なりの面倒な仕事であつた。然るに今日では所謂バラツク式で、極めて簡單に遣ることが出來る。食事ばかりでない、其他色々なことの上に單純化されて來た。私共はこのことを非常に愉快に思はざるを得無い。なるほど震災地に於ける諸物は皆バラツク式であるけれども、これを藝術化する、震災の結果得ることが出來た單純性を失はないでそれを改善するといふことが重要な今後の問題である。前云つたやうに都會生活の基調は單純そのもので無ければならない。東京と

いふ新都會も米國の都會と等しく單純ならしめて、そこに住む人間の活力を經濟的に使用せしめるやうに計畫せなければならない。新東京の復興はこの點から始まらねば駄目である。道路問題や地下鐵道などは追つての問題としてよい。偶然に握る事が出來た單純性を生活の上にどう使用し、維持しさうして改善するかゞ最大な根本問題でなくて何であらう。

　ラスキンでもカーライルでも都會を嫌つたが、之れは自分の生活を無茶に復雜にして大事な生氣を浪費させるからである。若し都會にして生きる愉快と眞實なカルチユアとを與へるものならば、彼等は決して呪咀するもので無かつたに相違はない。單純は實に生一本である、明瞭な心理狀態を持つて居る、極めて爽快なものである。都會生活がこの基調に立つてゐたならば、都會生活位愉快なものはないと私は信ずる。將來の東京もこの理想に近い人間の集合地たらしめたい。

　單純は必ずしも簡單と同意義でない。よく理智と感情を整理し得る者のみが到達することが出來る境地である。文化の最も進んだ人間の住む領土である。單純に歸れといふ言葉は汝の所有物を捨てよといふ意味でない。汝のものを整理して無駄に無益な努力から汝自身を救へといふ意味である。宇宙の現象で何物たるを問はず、單純性を力強く攫んで居るものは永久に榮え、之れを失つたが最後その生命は亡びると思はなければならない。文學でも美術でも、一個人の生活でも、都會の生命でも悉くこの原理から離れることが出來ない。

　今や帝都は復興の路に就かんとして居るに際し、殊にこの文を草して私は讀者の參考に供するものである。語る所決して目新しいことで無い、眞理は永久に古いやうにこの論も古い論ではあるが、今日の場合多少の新しい暗示を與へるであらうと信ずる。



庭の隅の小さな花

吉田絃二郎

ほとゝぎすが鳴いた
男は女を起した
静かな夜が雨戸の外に、暗い部屋の内に。
女のかすかな眠りの聲が。
今地上には二つの魂が相擁しつゝ眠つてゐる。
男はふたゝび眼さめた。
ほとゝぎすが鳴いた。
男は女の柔かな息づかひに聽きとれた。
かれは考へた。
『二十年の後、十年の後、或ひは明日、妻はその夫から、夫はその妻から永遠に別れなければならぬかも知れない。』
『二十年の後、或ひは十年の後、妻も、夫もこの地上から永遠に失はなければならぬかも知れぬ。』

女はなほ眠つてゐた。

『二十年の後三十年の後、たしかに二人とも永遠に別れなければならぬのだ。』

男はどうしても眠れなくなつてしまつた。

×

輜重輸卒に召集されたゝめに女と別るゝのがつらくて、女を殺して、自殺をした思慮を缺いた男がある。

こんな新聞の記事を讀んだら、教育ある男や、都會の賢い女たちは恐らく笑ふだらうが。

×

Aよ、君は僕があの時以來君を憎んでると思ふか。

時としては僕はどこかで君とたゞ二人だけで打ち解けて語つて見たいと思ふことがある。

しかし君が、僕をたづねて來ない以上、恐らく僕は君を一生たづねてゆくことはあるまいと思ふ。

僕は少しも君を憎んではをらぬ。

君ほど美しい心の人間がこの世間にさうざらにあらうとは思はぬ。

しかし僕はこのまゝ或ひは一生君と打ち解けて逢ふ機會はないかも知れない。

こなひだも實は君が川向ふを歩いてゐたのを見つけたんだよ。僕はよつぽど聲をかけやうと思つた。しかし僕は自分の弱い心を叱つて、そのまゝ傍を向いて行き過ぎてしまつた。

僕は一丁ばかりも歩いてから振りかへつて見たが、もうその時は君はゐなかつた。

僕は心のうちではまつたくすまないと思つた。そして頭を下げた。

君のやうな心の美しい人間と、憎み合つたまゝ死ぬのは寂しい氣もする。

けれど、それがまたばかにヒイロイツクなことであるやうな氣もする。
僕を憎んでくれ。僕も憎まう。

×

いゝ加減なおつきあひくらゐいやなものはない。」
ほんとうにお互が心から自分を投げ出すほどの接觸でないならば、人は孤獨を守つてゐた方がいゝ。
人と人との接觸のうちで、人を利用せんための接觸ほど不愉快なものはない。
人間の心の泉は一つである。
或る人はその心に萬人の影を映すであらう。
或る人はその心にわづかに一人か二人の影をのみ映すであらう。
孤獨を守る者の心は後者に屬する。
いゝ加減なおつきあひの萬人を得んよりは、たゞ一人の心友を見出し得んことを冀ふ。

×

所謂天才は多い。才氣ある人は多い
愚なるが如き君子の出現は今の世に望むべからずとしても、せめて愚なるが如き人間がもすこし多く世にあらはれてもいゝと思ふ。あらゆる社會の方面に。
天才教育といふことも結構であらう。しかし果して人間が人間を作り得るか、大きな疑問である。人間によつて作らる人間がどんなものであるかといふことは、都會の子供たちを見る時一番よく考へさせられる。

×

かつてあれほど信じ合つたものが、幾年かの後にはこれほどまで憎み合はなければならぬのかといふことを考へるたんびに、『いつたい私たちは誰を信じればいゝのだ』と喚きたくなつて來る。

一生懸命に人のためを思ふのが馬鹿だといふ人もある。けれどもいゝ加減ではどうしてもすまされない場合がある。もしいゝ加減ですまさなければならぬのが人生の常軌であるとするならば、人生くらゐくだらない世界はないであらう。自分のすべてを投げ出してかゝつた結果が、いゝ馬鹿を見たといふことになれば、まつたく人生に對して失望したくなることもある。

人間はだん／＼年をとるにつれてごまかされなくなるが、それは一面から見ればかれがそれだけ人生に對して最初から眞劍になることができなくなつたといふ證據である。かつてかれが抱いてゐた人生の光りが薄らいで來たといふ悲しむべき證據である。

一生、ごまかされても、裏切られても人生に對して何等かの光りを持つことのできる人は仕合せである　キリストだの、釋迦だのいふゑらい人々は恐らくそんな種類の人たちであつたのであらう。しかし私たちのやうな凡夫にはなか／＼それができない。一日一日と自分の心の殻が堅くなつてゆくのが意識せられる。外部から來る意識の一つ一つを素直に受け容れることがすけなくなつて、先づ疑ひ、先づ批判してかゝるやうになつてしまつた。

悲しいことであると思ふが、元々の素直さに立ち還りさうにもない。

×

敵を持つことのできない人間はお人善しではあるかも知れない。けれども味方として賴もしい人ではない。

不正直な人間、卑劣な人間、嘘をつく人間、殘忍な人間に對しては私たちはどこまでも敵でなければならぬ、そのやうな俗人に對してはどこまでも敵でありえなければならぬ。

生ぬるい愛といふことよりも、鐵のやうな憎み、火のやうな鬪ひといふことが、ずつとヒイロイツクな場合がある。

眞劍になつて人を憎み、人と鬪ふことの如何に苦しいかといふことが、そしてそこに生きてゆくことのうちにいたましい唯一つの眞實の道があるといふことが、このごろ、かすかながらも意識されて來たやうに思ふ。

×

ほとんど忘れてゐたにいつの間にか庭の隅から月見草が咲き出した。躑躅が咲き出した。

夏が來ても、夏が來てもかれらは同じ庭の隅から、何の不平もなく同じ花を開き、同じ柔かな色を見せてくれる。

朝早くまだ庭には露がしつとりと眠つてゐるころ、不平もなく、憎みもなく咲いてゐる花を見るとおのづと頭が下るやうな氣がする。

かれ等には不安はないのか。不平はないのか。人間のみが夜も晝も妄執の火に心を燒かなければならぬのか。

朝の微風が、朝の露が、憎みに燃えた私の心を大地そのものゝ、冷たさと靜寂さとにもどしてくれる時、私は憎み、憤りつゝ生きてゆかねばならぬ自分の生活をいたましく思ふ。

庭の隅の小さな花は今朝も不平なく憤りなく咲いてゐる。

斷絃

川上漸

この一篇は、『斷絃』と名づけてある私の落書き帳の内のものであります。孤琴在幽匣、時迸斷絃聲といふ詩の句が大へん氣に入つたので、こんな名前にしてみたのです。元稹の秘藏の琴は、其の斷絃の聲でさへ、鬼神を泣かしめる餘韻をもつて居つたのでせうが、武藏野の草むらに潛みて住む私といふ琴は、誰が彈いてもよい音をたてよう筈がありません。況んやその斷絃の聲をや。兎に角『斷絃』から一篇をうつし取つて、御目にかける事には致しました。

東京の名高い何とか女學校。その女學校の實習農園といふのが、私の家の近くにある。此の農園のことが、嘗て東京の新聞に出たことがある。何かの工場の建設の反對運動の趣意書の中にも、此の農園のことが書き込まれてあるのを見たことがある。餘程名高い農園と見える。私共武藏野の百姓連中の間にも、此の農園は矢つ張り名高い。

此の矢つ張り名高い農園は、近所へ來て見れば直ぐに判る。誠に失禮の申分ではあるが、雜草が一杯に生えて居るから直ぐ判る。

頑丈な脊の高い市ちやんが、せつせと仕事をして居る。『お早う！ お隣りは大分生やしたね』と言葉をかけると、日に

やけた鬚面へニツコリ微笑を見せて、『旦那、之れでも薩摩芋が作つてあるんですよう。芋よりは草の方が出來がいい樣ですあ』といふ。隣りの畑を作つて居る市ちやんは、毎年夏時になると、こんなことをいつて村の者にひやかされて居る。但し市ちやんが此の農園の耕作を擔當して居る譯ではない。誰が何時來て何をどんなに植付けて行くかは、責任のない私にわからう筈はない。夏の眞盛り草の繁る頃になると、私は毎日此の矢つ張り名高い農園にむかつて、『頭右』の敬意を表して通る。

『旦那。又た「いゝわよ」が來ましたぜ、草取りなんですとさ』――隣りのおかみさんが、小用達しに往つての還りに、態々報告に及んで呉れることがある。成程、市ちやんとこの角を曲つて、美しい蝙蝠傘がいさ〳〵やつて來る。來たなと思ひながら、兎に角仕事をして居る。時々立つてはむかうを見ると、出來のよい畑の彼方に、澤山の「いゝわよ」が一生懸命に働いて居る樣子。雜木林、杉林、櫧並木に圍まれた藁屋の外には、畑又畑の武藏野を飾るべく何物もない夏の午後を、華やかな着物の群がひら〳〵する有樣は、私をして矢つ張り名高い農園だなと思はせることがある。

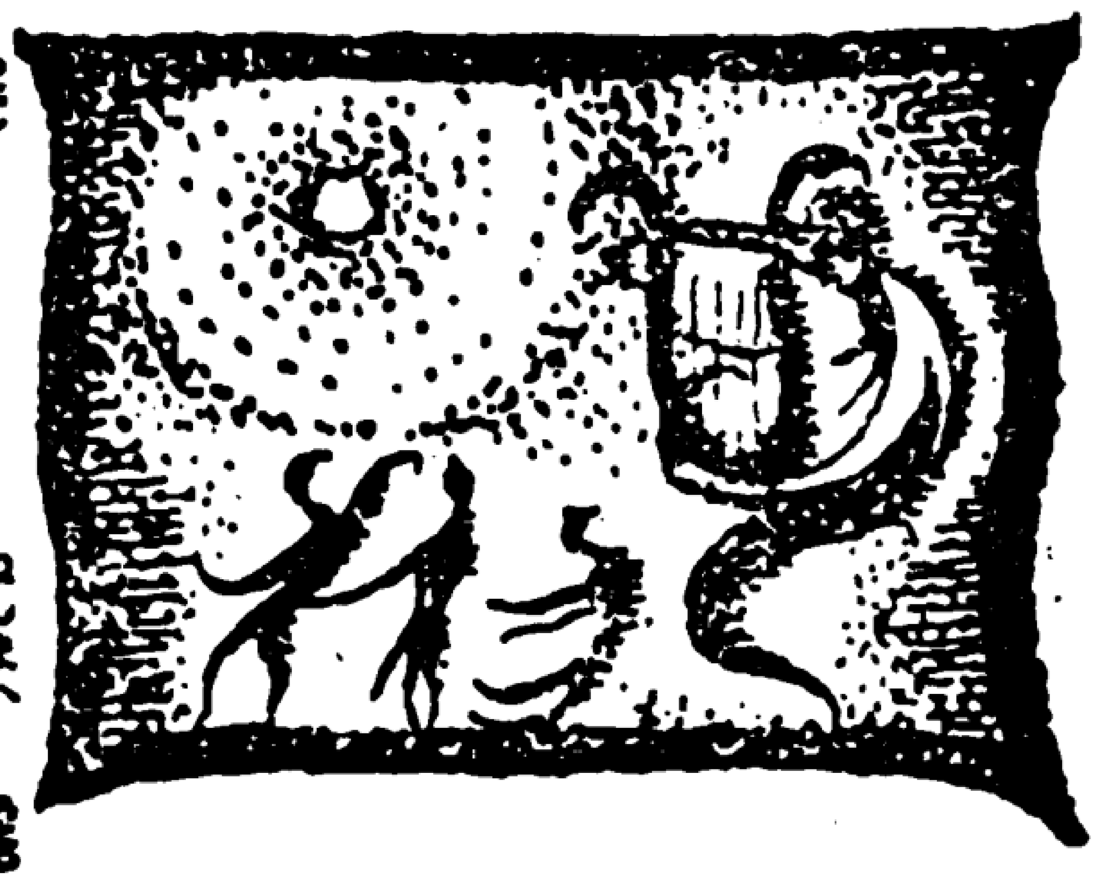
夏の午後の四時五時は、まだ明るい眞最中だ。然し御江戸のお孃さん達は、ちやんと御仕事を切りあげて、福さん方の井戸端で手足を洗つて、美しい蝙蝠傘をさして、綺麗なお顏をつんと澄まして、「いゝわよいやだわ」でさつさと御歸り遊ばす。やんごとなきものだなと思ふことがある。

日暮れに風呂へはいつて、洗濯したての浴衣を着せて貰つて、ふらりと往つて見ることがある。大分大勢の樣であつたに、と驚くのに何の不思議があらう。草は農園を靜に埋めて、綺麗になつたはほんの五六坪。成程薩摩芋が出て來て居る。根生えの藤の樣なのが、知らぬ人の前へ出た小娘の樣に、いかにも羞かし相に出て來て居る。矢つ張り薩摩芋が作つてあつたのだ。市ちやんは正直な男だなと私は思つた。

傳書鳩を訓練する兵隊さんが來た事があつた。適當の場所と選定したものと見えて、此の農園へ鳩を載せた車をひき入

れた。近所の子供が澤山見に往つた。豆を握つた手を高く擧げて、面白い笛を鳴らしながら、兵隊さんは農園の中を逍遙もなく歩きまはつた。大分もう仲善しになつたらしい子供が、『やあい兵隊さん。物が作つてあるんだぞう。踏むと叱られるぞ』といつた。兵隊さんは、飛んで來る鳩を見迎へながら、『なんだあい。馬鹿ぬかしやがれ』―といひながら、のさりのさり農園の中を歩きまはつた。『やあい兵隊さん』『なんだあい』『踏むと叱られるぞ』『馬鹿ぬかしやがれ』―笛が鳴る、傳書鳩が歸つて來る。鐘が鳴りはじめて、日が沈みかけた。

名高い實習農園は、このまゝであつて欲しい。元氣のよい夏草、羞しがりの薩摩芋、美しい蝙蝠傘に綺麗な着物の群、『いゝわよ』と『いやだわ』、『叱られるぞ』に『馬鹿ぬかしやがれ』、歸る鳩、鳴り渡る鐘―いかにも武藏野らしくてよい。武藏野を愛して武藏野に住む私は、武藏野情調の日に月に淡くなつてゆくのを、誠に惜しい事に思つて居る。武藏野らしくてよい名高い農園は、矢つ張り名高い農園であつて欲しい。番茶でお差支なくば、お孃さん達のお休み所は、私がお引き受け申してもよろしい。



平凡な場面

高濱虚子

私は二十五六年前、一寸の間萬朝報記者になつた事がある。それは田岡嶺雲君の紹介であつた。それより前山縣悌三郎氏のやつてゐた「青年文」とか「文庫」とかいふ雜誌に一緒に筆を取つてゐた關係もあつたらうが、兎に角嶺雲君の紹介で萬朝報社に入つた。その時分嶺雲君は萬朝報社の論説を書いてゐた。押しも押されもせぬ立派な記者であつたが、私が社に出る時分からあまり顔を見せなかつた。萬朝報社にも嫌氣がさして、私を紹介しておいてそれと同時にやめたものである事が、後になつてわかつた。その時分の萬朝報社は、京橋の三十間堀に在つて、外見は洋館造りで、その編輯局になつてゐる二階は疊が敷いて坐るやうになつてゐる古びた建物であつた。その疊敷の編輯局は、寺小屋のやうに粗末な机を並べて、向ひ側に一人づつ坐つて、十人位づつ並んで居たかと思ふ。黒岩涙香氏が眞中に陣取つて、その向ひ側は編輯長の小林天龍氏で、その左右に〇〇〇、齋藤緑雨、山縣五十雄、原抱一庵、其他くさ〴〵の人であつた。小林天龍氏が、「之が高濱虚子君で、今日から入社されました。」といふと、仕事の手を止めて私の顔を見て丁寧に挨拶する者もあれば、又仕事を仕乍ら、ろくに顔も見ずに辭儀をするものもあつた。その中で尤も慇懃に挨拶をして、名刺を取り出して、それを私の机の邊に押しやるやうにして、どうか宜しくと云つたのは、〇〇〇君であつた。その時〇〇君が机の上に在つた筆立てをひつくり返して、赤面し乍らそれを片づけた樣子が未だ眼に殘つてゐる。誠に慇懃な人だと思つた。之が後年刑

場の露と消えたといふ事を聞いた時には私は不思議な感じがした。〇〇君は嶺雲君などと代りあつて、論說を書いてゐた。其他政治種にも筆を取つてゐた事があるやうに思ふ。

さて、黑岩社長も天龍氏も何をしろといふ事は私に何も云はない。何をしていゝものか殆んど見當がつかなかつた。社員に何でも仕事を見つけさして其をやらすのが社の方針ださうであるが、別にそんな仕事も見つからなかつた。山縣五十雄君が擔當してゐる每週一回の十圓の懸賞小說を私に見てくれといふ事であつたので、私はそれを見たりしてゐた。それから天龍氏が時事漫評の漢詩を作つて、紙面にのせてゐたので一つ時事漫評の俳句を作つて見やうと思つて、二三句作つて天龍氏に見せた所が、

「これは面白い。」と云つて載せた。そんな事がまあ私の仕事であつた。

原抱一庵君は

「一度一緒に飲まう。」などと云つたが、飲む機會はなかつた。何でも抱一庵君は其後、牡丹の花に醬油をつけて、それをうまいなどと云つて食つたりして、少し氣が變だと云ふ評判であつた。が其後人に聞いて見ると、牡丹の花を食ふ事はよくある事で、別にそれを以て抱一庵の氣狂を證據立てる事にはならなかつたが、併し抱一庵君は、實際氣が觸れて、早く亡くなつたといふ事であつた。

私はあまり暇なので社を休む事もあつた。さうして私かに雜誌發行の計畫を立てゝゐた。あるとき私の留守中に、齋藤綠雨君が月給を持つて私の寓居を尋ねてくれた事があつたが、その翌日出社して見ると綠雨君は來ないで、又私の休んだ日に綠雨君が出社するといふわけで、生憎出逢はなかつた。そんな風に綠雨君や、抱一庵君や、私などは、閑殺され組であつたので、あまり熱心に出社する事もしなかつた。綠雨君は月給を持つて私の家を訪ねてくれて何か話すつもりであつたらうが、遂にそれきりになつてしまつて、私は母の大病で國へ歸る事になつた。その歸省中に「ホトトギス」發行の計

組は成立つた。それで遂に萬朝報社の方は止めたので、綠雨君にはそれつきり逢はずにしまつたが、綠雨君も間もなくやめてしまつた。萬朝報社にはその後堺枯川君などが入つて、盛に茶代廢止などを唱へ出してゐるのを見た。又私が母の病氣で國へ歸る前に內藤湖南君が新たに記者席に就いてゐるのを見た。其後內藤君の論說は永く萬朝報紙上に見えてゐた。

×　×　×　×　×　×

其後相當に年月がたつて後に、私は修善寺温泉の新井屋に滯在して居つた。夕方表を散歩して淺羽屋の前を通る時に一人の男が軒近く寢椅子を置いて、それに體を横たへてゐて、いつも書物を讀んでゐるのが表から見える。いつ通つて見ても、その人は寢椅子に寢たまゝで、又何時通つて見ても書物を讀んでゐるので、大方肺病患者でゝもあらうと思ひ乍ら打ち過ぎるのであつた。さうすると或日、

「お手紙が參りました。淺羽屋のお客からです。」と云つて手紙を持つて來たので、それを受取つて見ると、よく見馴れた字で、封筒の裏には田岡嶺雲としてあつた。開いて見ると

「自分は腰拔けになつて、數日前から淺羽屋に來てゐる。國民新聞を見ると君も新井屋に泊つてゐるさうだが、お暇ならば遊びに來てくれぬか。」といふ意味の事が書いてあつた。

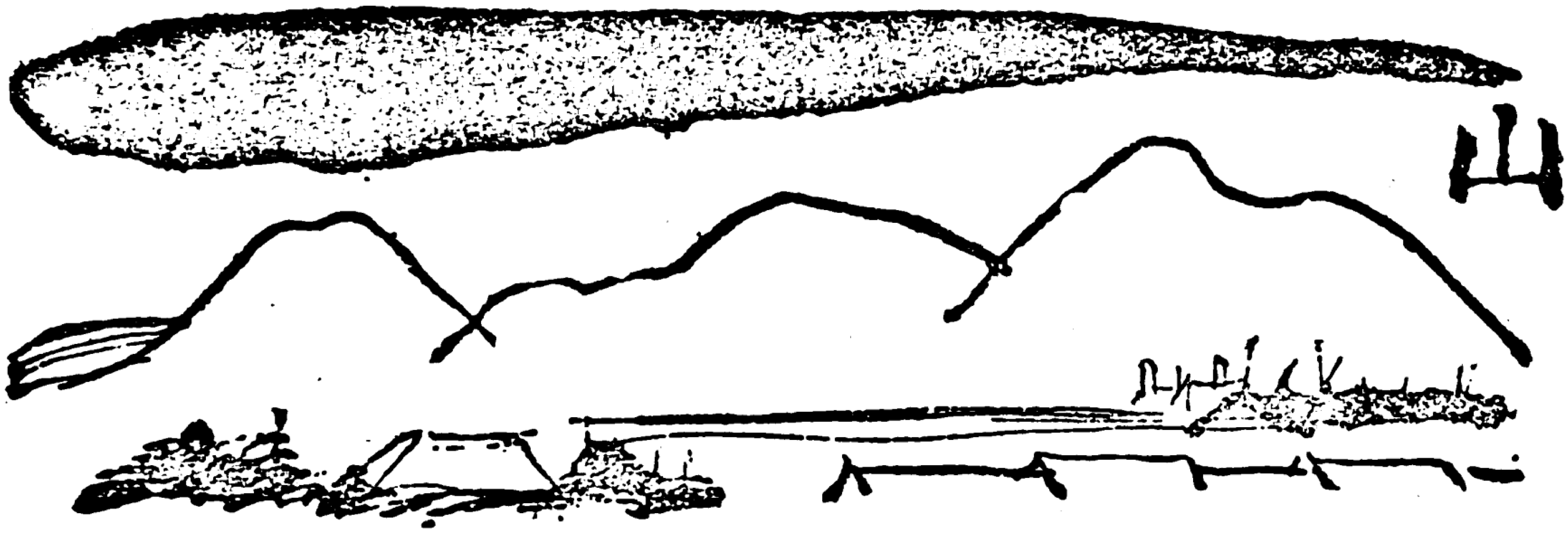
萬朝を退いた後の嶺雲君は、支那に行つて暫らく得意の境涯に在つたが、終に病を得て內地に歸つたといふ事は聞いてゐた。私は早速淺羽屋へ出掛けて見た。實際嶺雲君は腰ぬけ同樣になつてゐて、唯長椅子に寢たまゝで歩く事は出來ない樣子であつた。

「どうしたのだ。」と聞いても嶺雲君は微笑してゐるばかりで、何病とも云はなかつた。

「別に痛みはしないのか。」と聞くと

「痛みもどうもしない。唯足が起たないので斯う寢てゐるばかりだ。退屈で仕方がない。温泉がよからうといふので、此處へ來て見たんだが友達が居ないので、話相手がなく困つてゐた所だ。君が來てゐるといふ事を知つたものだから、早速手紙を出したのだ。」と云つた。俳談をしたり、文學談をしたり、又支那の話を聞いたり、新聞を材料にして政治談なんぞをしたりして歸つた。

其後二三度訪問したが、嶺雲君は此處に永く居るのも退屈だから、もう歸らうと思ふと云つて居た。そうしてその話をした翌日もう發つて東京へ歸つた。嶺雲君の體は足が不自由なといふばかりでなく、血色も惡かつたが、それから數年ならずして亡くなつたのであつた。



人間以外

蟹の穴を覗く

賀川豊彦

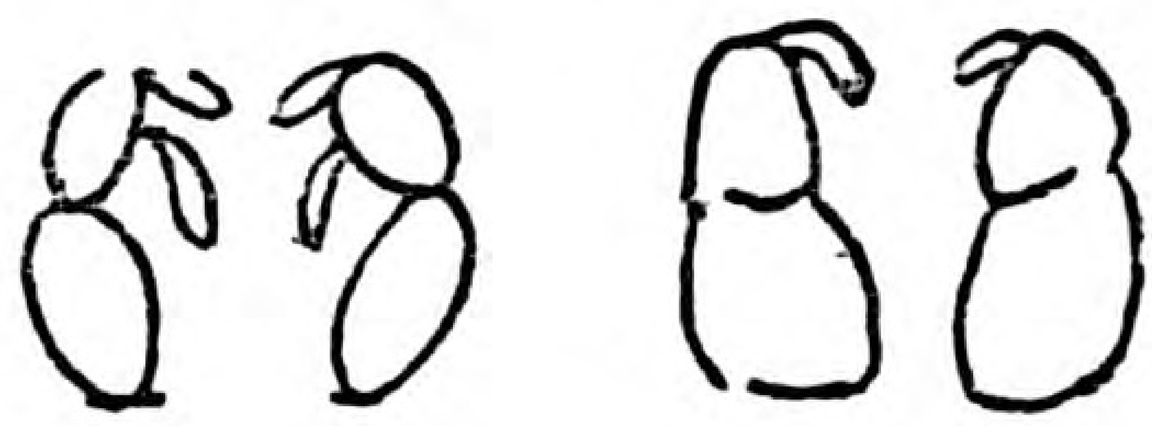
小さい時に、阿波の田舎で蟹つりをしてから、蟹に關する趣味が忘れられないで、中學校の四年生の頃から蟹の研究を始めました。田舎を歩く時、博物館を訪問するとき、生物學を漁るとき「蟹」と云ふ文字が出てくると私の頭が特種な働きかたをします。ヨハネス・ミユラーなどは南米の蟹の生存競爭を爪の大小で研究して居るが、私は、蟹の形態ほど多變化性のあるものを知りませぬ。なるほど、蟹を見ると生存競爭の熾烈なことをすぐ思はされます。

然し、凡ての蟹がそう軍國主義的なのではありませぬ。逃げる道を知つてゐるものとかよく游ぐ工夫を知つてゐるものは、相當に鋏みも小さくなり、輕快に出來て居ります。陸上に居るものと、海中に居るものとは甲冑の作りかたなどでも非常な相違です。陸上



に居るもので顎の作りかたが第一違つてゐるのが氣につきます。陸上に居るもの丶顎は瓢單形になつて居り、海中に居るものは多く扁平になつてゐます。然し海中のものでも中には陸上のものと全く同じ形をしたものがあります。

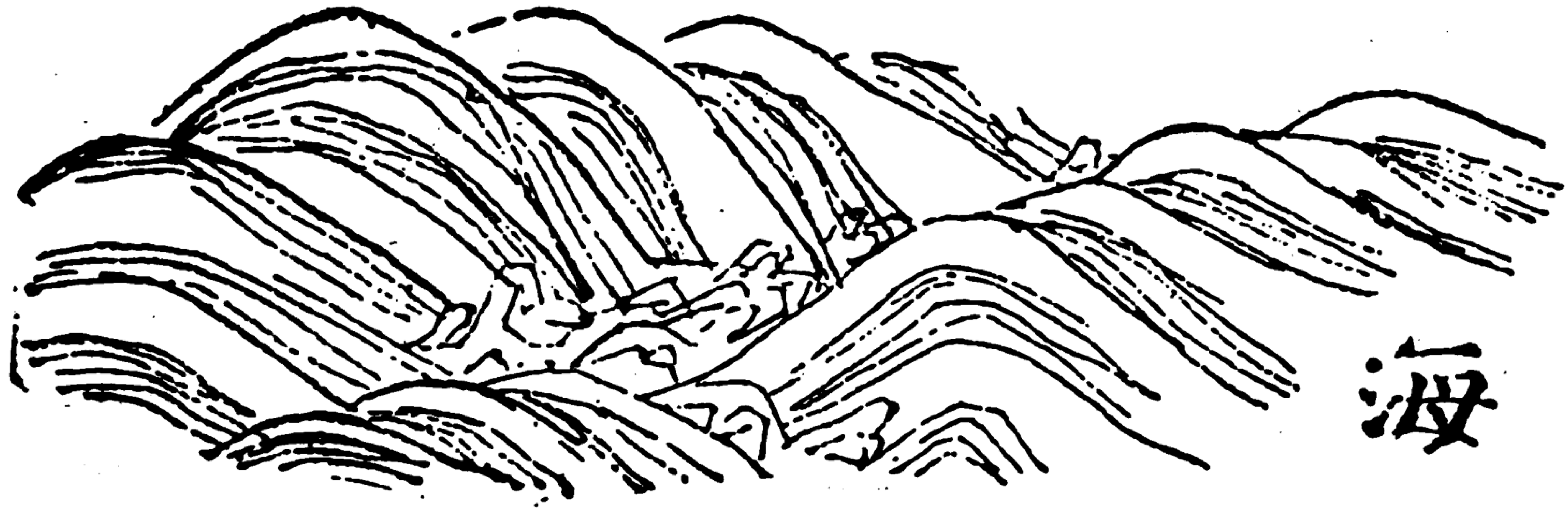
甲の形も深海のものほど、奇形になつて居ります。ベーリング海峡に住むものなどは、まるで具のやうな形をしたものがあり、或者は岩のやうなものもあります。然し平和なものもあります。日本はよく四國の海岸に發見せられる「モチツキガニ」は實に面白いものです。砂を口に入れてはそれを吐き出し、吐き出してはそれを丸め、私にはそれが一種の遊戯であるとしか考へられませぬ。


陸上のもの　　海上のもの

蟹の中には群居してゐるものと、孤立してゐるものとがあります。平和な蟹は多く群居して居るやうです。その反對に武裝してゐるものは多く孤立してゐます。然し蟹類は大體に於て群居してゐます。巢としての塹壕の作りかたなどはなかなか上手に作つてあります。必ず逃げ道をどこかに作つてあるのには全く驚かされます。

土佐などに取れる櫂のやうな足を持つて居る激浪の中を游ぎ廻るに都合の善い蟹は實に巧妙な形をしてゐます。大抵その形を見ると、どこに住んで居るかゞわかります

日本は北から南にひろがつてゐるので、實に蟹にも澤山な種類があります。平家蟹は具を背向いた四本の足で蔽つて歩くので有名ですが、平和な蟹です。日本で一番怖い蟹は臺灣東部海岸火燒島（？）の蟹です。私は友人の長谷川彌一郎氏から、火燒島の蟹を二匹送られたのでしたが、その大きさが足の先から足の先まで擴げると三尺位あるものでした。



海

大きな力ではありませんが、こいつが産卵期になると、陸上に上つて來て椰子の樹に上つたり、畑を荒らしたりするので住民は困るさうです。爪の力の強いこと、私は全く驚かされました。私はその蟹を三ケ月位神戸の貧民窟で飼ふて居ましたが、鐵棒や針金を爪で捻ぢ切つて逃げ出すのには驚いて了ひました。然し脱皮期になつて、エンチームが身體に廻り初めると共に甲などがぶよ〳〵になり、不幸にして、病氣にかゝつて死んで了ひましたが、私はこの臺灣火燒島の捕虜を死なせたことを悲しく思ひました。

私はもう少しこの原始的な甲殼類の生活に就て多く知りたいと思つてゐます。甲殼類の地上に發生した時季は、地球の表面で最も殘酷な生存競爭の甚しかつた時代だと私には思へます。その前世期の遺物を研究することは私に取つてはインスピレーションです。

夏がくると、蟹が畦道に這ひ出します。私にはまた蟹の穴をつゝく時が來ました。

人魚とペリカン

佐藤惣之助

萬物は海から昇つてきた――といふ。僕はこの古風な、朦朧とした解説が、ふしぎにうれしいのである。そこには、どこかから思想が蒼茫とした深い歴史を引いてゐるやうであるし、さういふ感情が既に潑剌とした波濤を卷き、感覺的にも眞白な水の羽をひろげて



ゐるやうに感じられる。

陸と港を離れて、孤島や荒磯に、又は海上の新らしい日をあびてゐる者には、そんな古いターレスの思想が、厭々、ぼう〳〵として、海藻や巖礁の間から、一つの凄凉たる虹のやうに昇華して來やう。海を平和な色彩のある龍宮視するのは、陸上の展望者の夢である。海はもつと不可解な、凄いまでに美しい、あらゆる兇暴なもの、原質的なものを含むでゐる世界の中心である。一歩海へ乘り出したら、娘たちの齒ならびか、睫毛のやうに鮮麗だつた海岸線の波濤も消え、怖るべき、苦しい、凄い以上の神秘極まつた怪物で、水と雲との間を航海してゐたら、海流と氣溫のめぐりまはり、颶風と激浪との襲來、淺層からだん〳〵、深い紫の潛水洋燈も透さぬ深みへくると、ふしぎな發光器をもつた太洋棲屬の魚類がゐるといふし、その又の深みは、永恆の闇と不可量な物の堆積であるといふ。その混沌の深みから、極光のやうに昇つてくるものが、僕たちの眼にふれるのは何億年の後であるか、そんな時間と歷史を考へてゐたら、月と潮の干滿も、寒流暖流の交涉も、貿易風や颶風の眼なぞが、殆ど家常茶飯事の現象だと思へるであらう。全くうつくしい海だと思つて、飛び込むで泳いで見ると、その凄さ、怖ろしさがわからう。それ以上はわかりやうがない。たゞその凄じさと、美しさと、怖ろしさが、萬物の斷片を海に照りうかべるのを、僕たちは畏怖して感受するだけである。僕は八重山群島をとびあるいてゐた時、殊にさう思つた。

浪と陸の突端にたつて
わたしは羽のついたやうな智慧を拾はうよ
晴れた三日月のやうな、ひるがへる千鳥のやうな

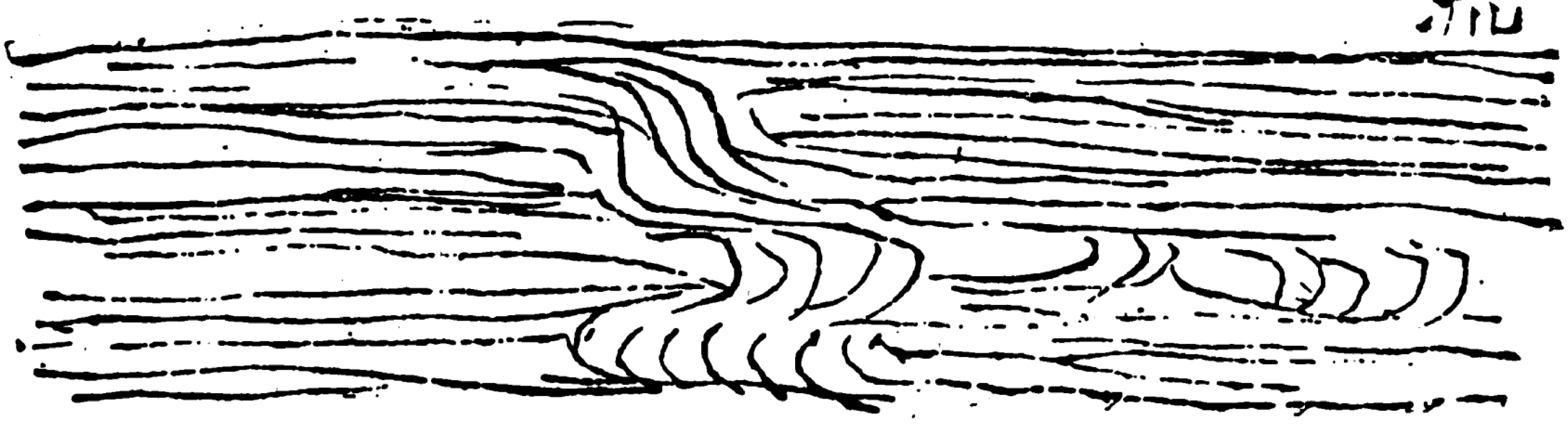
雲



飛躍するものほど、この世界では美しいといふ思想を
たとへばあの白雲とならび
あの波濤と青い陸を蹴つて
航海したり漂流したり
一切の精神をひつさげて
天色をもてる幽寂といつたやうなものにまで
翼と風との精靈たる
飛躍するものの幸福とはれやかさがなければ
とても生きてゐられないと思ひこむでしまつたからね。

ほんとうに、航海者は占星家で、又快適のシャツを着た牛瀾でなければならない。額に北斗を巻き、腕に風を抱えて、あたらしい帆になることである。日本の南太平洋は颱風の本場で、八重山群島は颱風の舞臺である。あの十四五の島嶼、殊に波照間島は、九月から四月まで浪に圍まれて船が寄りつけないといふし、風光のすばらしい西表島は殆ど毒蚊のために、東洋昔斷の骸骨島になつてゐる。そこでは美しい樹と灣とが日に輝いてゐるが、古い島民は皆餓死して白骨になつてゐる。白骨の傍に匂ひのよい茉莉花が咲き、山には猪がゐる。與那國島には世界一の蝶蛾がとび、石垣島には人魚が上り、ペリカンがとんでくる。人魚とは海馬のことで、島民はその刺身と生の萬壽果で泡盛を呷る。僕は昔斷の人魚が、大變色の黒い、滑稽な、愛らしい顔をしてゐる海獸なのに吃驚し、颱風に巻かれて來

流



たペリカンが、島の娘に抱かれてゐるのを見て、日本の南方島々の、海の秘密が妙にうれしく、あかるく、はつきり感じられた。

その犬齒のやうな、ふしぎな珊瑚礁に生へる紅樹の林、又は隕石の斷片のやうに尖つた島嶼に、海が黃色く泡立つたり、泥藍色に輝いたり、蒲葵と福樹に吹きつける季節風のはれやかさが、一切潮の生氣に彩られて、粲々と濡れてゐる面白さ。深い底から山のやうに盛上つて、その頂點が、わづかに島となつて海面にうかんでゐる。僕たちにわかるのは、その陸となつた少部分のみである。そこの海面を航行してゐる者は、帆の羽を持つた者、水層と氣層の動物で、陸といふものを靴の下に失つたら、僕たちは鳥か飛魚である。翼と鰭をもつて、一切の人間の情感から飛翔し、泳ぎ、飛び、帆走する者の世界へはいらう。

――萬物は海から昇つてきた――といふ。その世界の深み、低み、その無人境を、古代の漂流記の人物のやうに、故郷へ歸りたいと彷徨するものは、人魚のやうに、ペリカンのやうに、游泳し、飛翔して、ふしぎな海の量と質とに適應するものである。と、そんな事を考へながら、僕は南太平洋の一部をとびあるいた。感情の帆で、木靴のやうな船で、そしていつも。

――萬物は海から昇つて來た。苔類から羊齒植物へ、海草から松へ、飛魚から蝶類へ、動物性の海百合からあの眞白な植物性の百合の花へ、爬蟲類から或は四足獸へ、そして、そして人魚からペリカンへ――。

と、そんな事を空想し、うれしがつて自分を慰めてゐたのである。



前世界の一節

横山又次郎

（い）前世界の意義

今から二千四五百年前の孔子樣やお釋迦樣時代の事を思ひますと、隨分古いやうですが支那を創めて開かれた伏羲神農の時代となりますと、尚更古くて、前の凡そ二倍にもなります。又バビロニヤやエジプトといふやうな國に參りますと、今から一萬年も以前に、既に文明が開けてゐたと申しますから、國々の歴史も大層古いところまで遡るものです。所が、此の一萬年のいふ年數は甚だ長いやうでも、眞實吾が世界が開けてからの年數に比べますと、寔に短いものです。九牛の一毛とか滄海の一滴とかいふやうな比較の言葉は能く此の事を言ひ表はしてゐると思ひます。今日以後の未來が幾千萬年間續くか判らない通りに、今日以前の過去も亦幾千萬年といふ程の大昔に遡ります。此の幾千萬年といふ程永く續いた過去の時代を前世界と申します。

一體此の前世界と申す語は現世界の語に對して出來た語ですから、自然その現世界といふものは今から幾年前までをいふかといふ疑問が起ります。或は前の一萬年前ぐらゐまでの所をいふかと申される方もありませうが、是れには私もちよつとお答いたしかねます。といふのは、此の區別は年數で定めたものではなく、草木や鳥獸魚蟲の類が今のものと違

獸



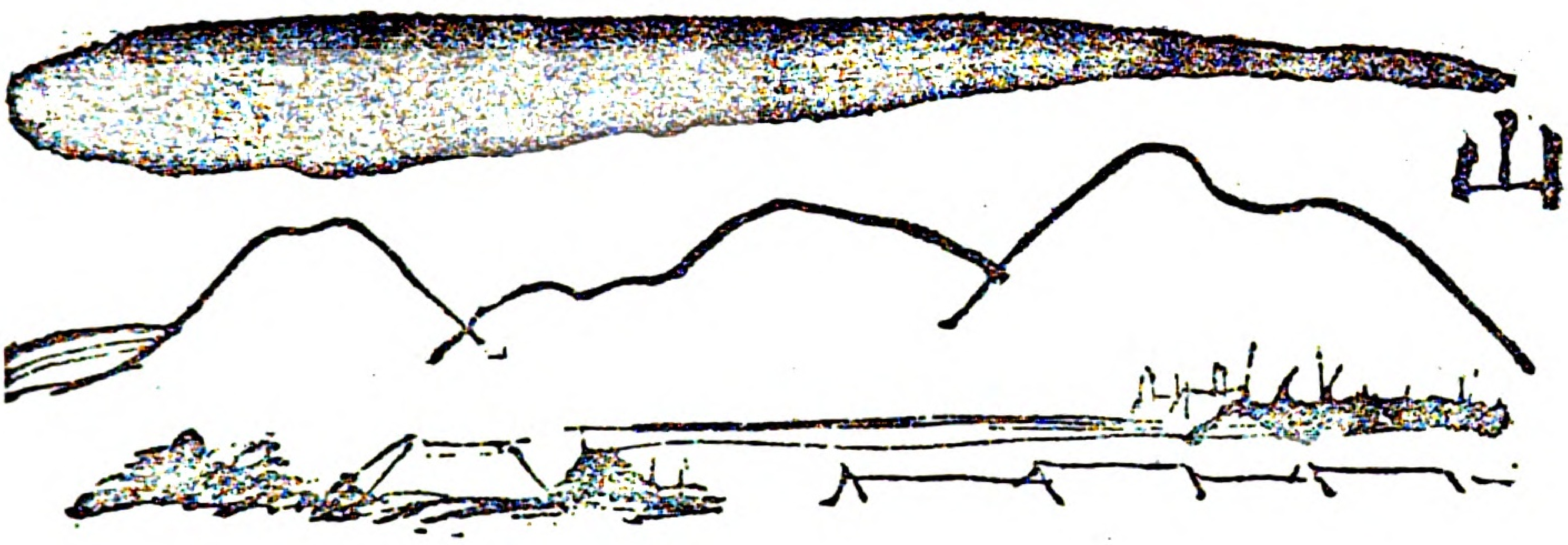
つてゐたかゐなかつたかで定めたものだからです。今吾々が目の前に見る草木鳥獸の類が現はれた以來が現世界でそれ以前が前世界だと申すのです。所が、草木でも、鳥獸でも、さては魚や蟲蟻でも、年月が經つに連れて次第々々に變つて決して一時に突然變るものはないのですから、實際の所、今から何年前までと明にその年數を擧げることは出來ませぬ。されば現世界といひ、又前世界といつても、その間の界はまことに漠然したものです。さは申せ、前の一萬年より、もつとずつと古いことだけは確です。なぜと申すに、人の歷史が始まる以前に、舊石器時代と申して、人がまだ野蠻で穴居をして、一切の武器や道具を多く石や角の類で造つてゐた時代もあつたからです。

斯やうなことからして、現世界でも尙今から數萬年の昔に遡ると見なければなりませぬ。

（ろ）前世界の別け方

前世界は、前申した通りに、非常に長い時代ですから、これを細に別つ必要があります。此の必要はその間に草木鳥獸の類が度々種々に變つたから起つて來たのです。此の度度いろ／＼に變つたといふことは取りも直さず前世界の極めて長いことを證明するものです。何故と申すに、草木鳥獸が一度變るにしても、前申した通り、數萬年かゝるのですもの、度々種々に變るには、それ／＼それに應じて長年月が掛るからです。

前世界の別け方には、大別もあれば、細別もあり、又細々別もあるといふ次第で、丁度吾が國の歷史にも、神代、王朝時代、幕政時代といふものがあつて、幕政時代には、足利時代もあれば、德川時代もあり、又德川時代の中には寛永時代もあれば、元祿時代もあり、又嘉永安政の時代もあるといふのと同じであります。

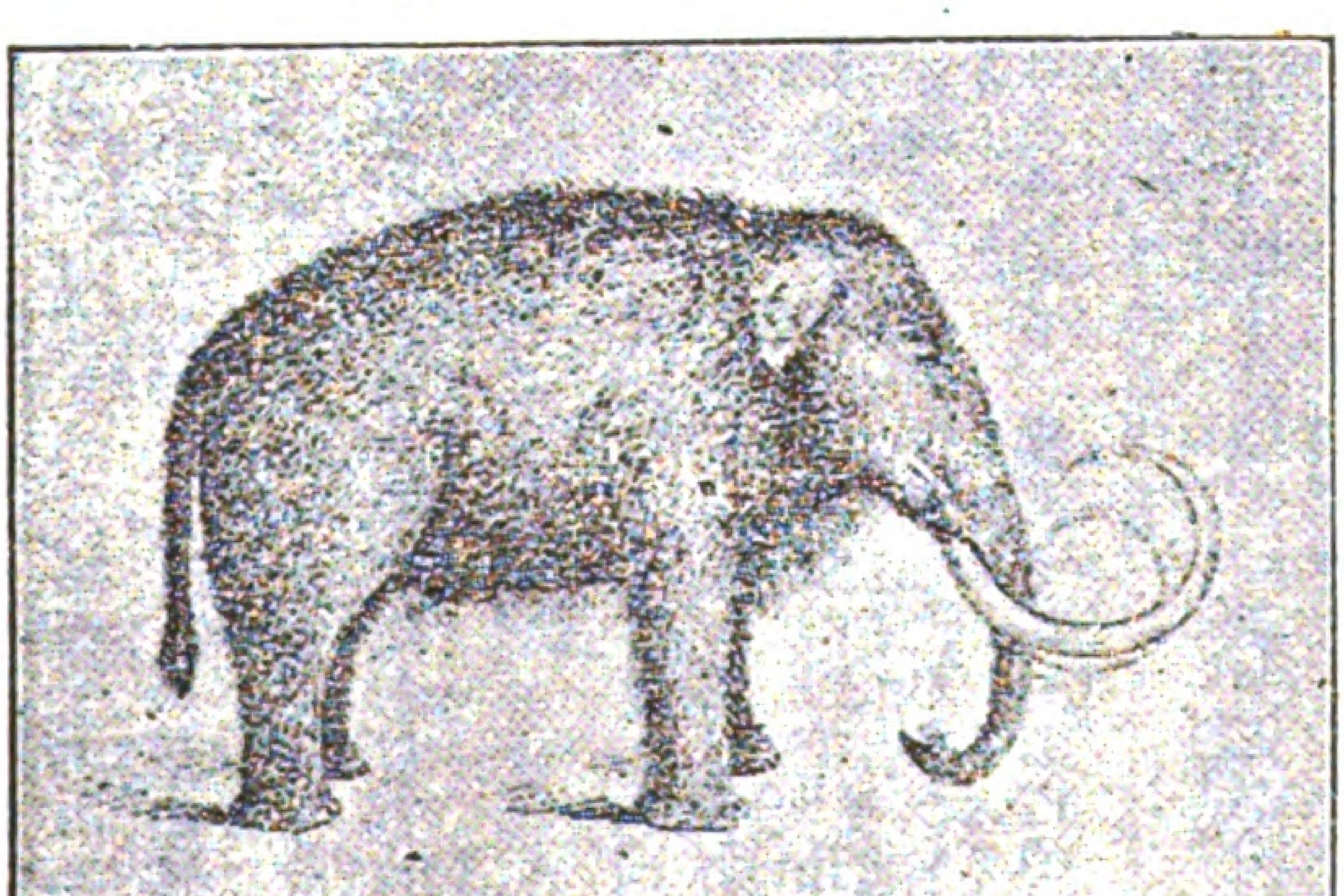


前世界には太古、始生、古生、中生、新生の五大別がありまして、その中の一等新しい新生時代を更に第三紀と第四紀とに別け、それからその第四紀をまた洪積と現代とに別けます。

此の現代と申すのは、取りも直さず現世界ですから、洪積と申す時代は謂はゞ最近の前世界で、第三紀と申すのはその又一つ前の前世界になります。さて何故私が面白くない前世界の別け方を述べるかと申しますと、それは前世界産の生き物が今とどう違ふかといふことを最近の洪積時代に例を取つて、申し述べようと思ふからです。

（は）前世界の象

洪積時代と申す前世界は、一説に約二十萬年間續いたと申しますが、此の間に産した草木も今と違つてゐたのがいくらもあります。しかしそれよりもつと著しく違つてゐたものは獸の類であります。當時日本を始め西はアジヤ・ヨーロッパの兩洲まで東は北アメリカまで、廣く蔓延してゐたものは象の類です。象は今日では印度・ビルマ・シャム地方と、アフリカ洲との二地方にしかゐませぬが、昔は、上記の通り・殆ど世界全體にゐました。そしてその種類も多く、又今の産とは多少違つた種類でありました。中で一等多かつたのはマンモス象と申して、全身に長い鳶色の毛が密生して、そして長い曲つた



マンモス象（第一圖）



牙を有つたものでした。此の象の毛の長かつたのは、その重なる產地が寒いシベリヤ地方であつたからです。シベリヤは昔此の象の巣窟であつたと見えまして、此の地にはその骸骨が諸處に地の中に埋れて產します。そしてさういふ骸骨は支那にもあれば、ヨーロツパにもあり又米國にも、吾が邦にもあります。吾が邦では、洪積時代からその前の第三紀にかけて、少なくとも五六種の象がゐました。世間の人は大抵知らずにゐますが、象の遺骨の出たのは、東京の地にもありますれば、地方にもあります。東京では、現に日本橋區の江戸橋の崖から出ました。又鐵道をこしらへるについて、田端停車場の後方の崖を崩すと、ここからも出ました。地方では、常陸、羽後、加賀、遠江、近江、讃岐の小豆、長門からも出ました。

（に）　前世界の犀と鰐

象の外、アジヤ・ヨーロツパ・アメリカ等に產した獸類はまだ多數ありましたが、中で珍らしいのは犀です。犀も象と同樣、種類が今よりも多く又シベリヤにゐたものは矢張全身に長毛が生へてゐました。犀は吾が邦でも美濃地方にゐたと見えまして、その骨が土岐地方から出ました。

吾が邦で隨分珍しいと思ふのは鰐であります。ずつと以前に上總から鰐の頭骨が出ましたが、最近に横濱本牧の原さんの宅地からその齒が出ました。そしてその齒は二本ありますが、なか〳〵大きいので、今の鰐よりよほど大きい種類であつたと見えます。鰐は今日では、南洋や印度地方へ行かなければ產しませぬ。

これだけ申しますれば、洪積時代の獸類が今日と大層違つてゐたことが判りませう。そしてこれは獸物のみには限りませぬ、人間もさうであましたから驚きます。



海

（ほ）前世界の人

洪積時代の人間は　一口に申せば、猿に似てゐたと申してよろしいのです。此の猿に似てゐたといふことは、學術の上から見れば、甚だ面白いことです。その故は、進化論と申す學説によることにしますと、必ずさうなくてはならぬからです。進化論とは、生き物は皆變化して種々の種類になるとの論です。例へば猪が豚になり、狼が犬になり、虎が獅子になり、山猫が家猫になるといふやうなものです。乃で此の論鋒を正しいとしますと、猿が人間になつたと見なければなりませぬ。なぜなれば、人間に最も似た獸は猿の外にはないからです。猿と申しても、種類が澤山ありますが、中で一等人間に近いのは猩々です。

しかし猩々でも、人間と比べますと、大分その間に差違があります。先づその頭骨について



大猩々（第二圖）



原人（第三圖）



見ますと、第一に額が低く、第二に眉脊が高く、第三に頤が引込んでゐます。人の額は猩々に比べるとよほどの高額です、高額のお手本は福助で、是れは腦が大きいといふと同じで、腦の大きいといふことは、智力が進んで居るといふのと同じであります。眉脊とは眉毛の下の骨で、こゝは人のでも少しは高くなつてゐますが、猿の類では、ずつと突出して、横に山でもあるやうに見えます。

頤は、人では、その角が、前の方に出つ張つてゐますが、猿では後方に引込んで、出つ張りは少しもありませぬ。

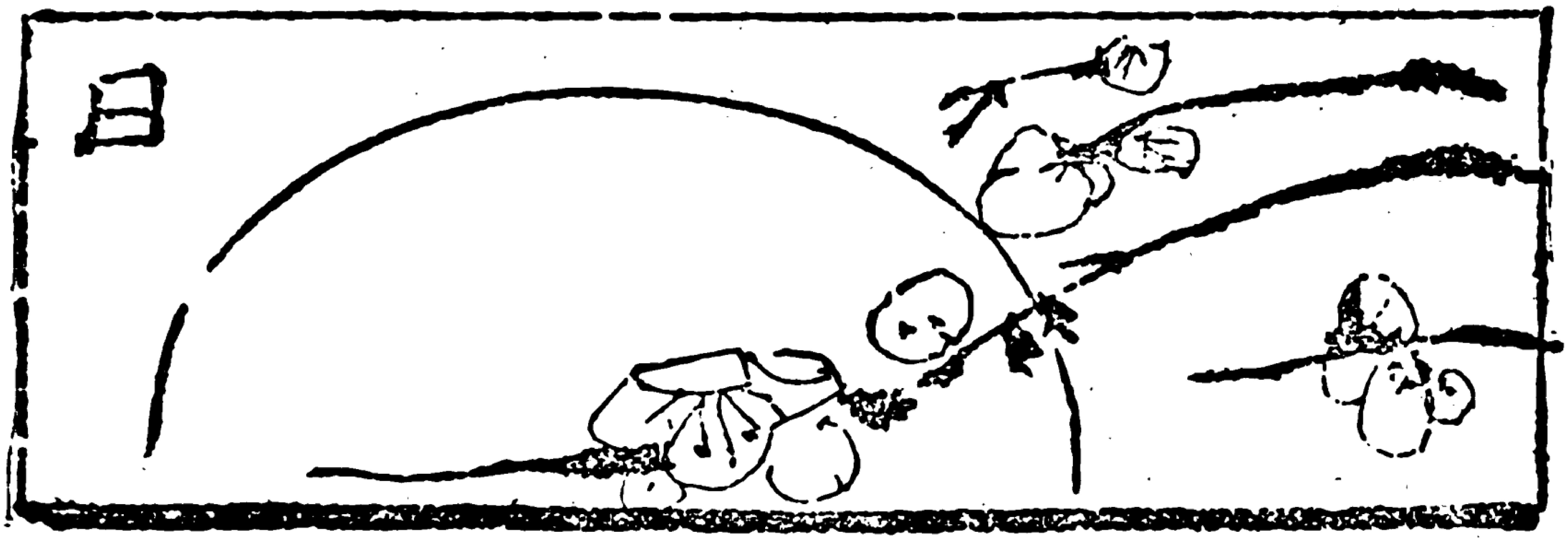
以上猿に似た形の頭を有つてゐた人間を原人と申して、今の人より一層下等の者であつたことは確實であります。

それから洪積時代のずつと初めに、原人よりもつと猿に似た者がゐました。これは猿ともつかず人ともつかずといふ代物ですから、猿人と稱へることになりました。そして學者によりましては、これを人の部類に入れずに、猿の部類に入れる人もあります。


猿人（第四圖）

斯やうに人と猿との間に双方に似たものがあることは、前に申した進化論の正しいことを證明しまして、結局人は猿の變化したもので、猿すなはちその最高等の猩々は吾々人間の遠い〳〵祖先になるわけです。これは猿に取つては大光榮でせうが、吾々人間に取つては迷惑至極と申す外ありませぬ。しかし事實さうであるとすれば、誠にいたしかたのない

次第であります。
前世界の研究も、こんなことが判つて見ますと、趣味の深いものであります。



晝間の月

木村莊八

大正十三年五月十六日、午後五時半。今變なものを見付けました。變なと云つて然しさう大して變なわけでもないが、晝間の月です。東の方のかなり高い空にかゝつてゐます。十五夜へ今如何近いか、何しろ圓い月です。――今日は一體よく晴れた殆んど雲もない空です。よく見ると非常に光りを含んでゐて、青い。眞つさをではないが空一帶に明るく淡く青い。その中にまん圓く白ぬきに月が浮んでゐます。今二階の椽がわに何氣なく寢椅子によつかゝつてゐて、フト空にそれを見付けました。

私の家は北と南が明いてゐるが二階の椽がわは北の方についてゐて、今氣が付いて見るとその一端においてある寢椅子は頭の方が西に向けてあるのです。その上へ仰向けに腰を下すと東方が足になつて、いつも眼には空が見える。然し完全に見えるわけではありません。

椅子のすぐそこのところには平行にずつと手すりがあるが、椅子に横たはつてゐれば此の手すりは見えない。只雨戸の走る上の方のみぞが一文字に眼のすぐ上に見えます。その



わきにすぐ又一文字に暗く外のひさしの線が視野を劃します。それから悠々と視界が延びて空一面に屆く。

猶空を見るには此所に條件がある、と云ふのは、私の居場所から二間ばかりおいて向ふに相向ひの二階屋が亢然と立つてゐます。その屋根は私の家のと殆んど同じ高さだから、私の家の二階の椽側から空を見上げても猶向ふの家の屋根のスカイラインを見ないと云ふわけには行かない。その一線が實は又すぐそこに私の切角の視野を遮つて了ふのです。――まあ早く云へばどつちみちしや合ひだ。そのしや合ひから空を覗くのです。こつちのひさしと向ふの屋根と、この平行する二線の間から辛うじて見上げる空である。

然し見る感情のせいか、事實さう見えるのか、そんな狹いはさまつた間から見上げても然し空は空（sky）で遠く廣々と見えるが、今日はそこにうまい工合に月がはさまつて見えてゐる。石持の紋の樣な工合に靑い中に見えてゐる。恰も天に大きな澤市の胸がある樣な氣がして來るのです。

月には例のもや〳〵としたものが中にあつて、――此の文の書き出しからは段々と「今」時が經つたものですから、追々に周圍の空は靑の色合が寒くなり、月は明るくなります。あのもや〳〵を氣を付けて見るに、兎がもちを付いてゐると云ふが、きねはよく見えません。耳はたしかにあつて、兎は橫つたほしになり、尻の方が大變ふくらんで大きい樣に思ふ。――この他何か他の形に見えないものかと圖どりを考へて見るが、うまく浮ばない。さすがに古人の「兎」は名案です。野兎だらうと思ふが、今夜一つもつと暗くなつてからよく見て見せう。

レオナルドなどは之れを見て何と思つたらうかと思ふ。恐らくはあゝいふ科學的の人だ



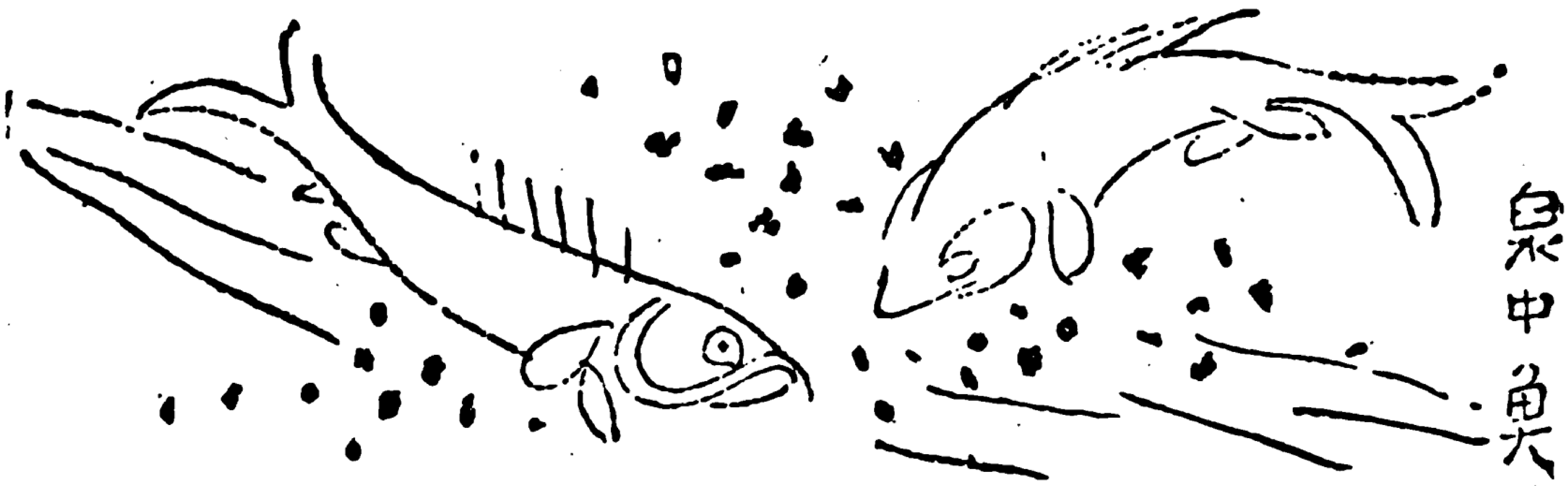
からぢかに科學で見て了つたことでせう。それと、いつか誰かに聞いた話に、禪の方で修業が積んで來ると月の圓が球に見えるとか云ふことです。それとは違ふが、私は一度かなり遠くの利く双眼鏡で夜分に月を見たところ、平つたくなく、宙に浮く丸い球に見えたので殆んど驚いたことがあります。――もし世の中が凡て、禪の修行か何かで積んで、こんな風に見えたら?と思ふ。さぞつまらなからうと思ひます。

閑話休題。尤も悉く閑話だが、兎に角、さつきの白つぽいぼんやりとした晝間の月のことです。――何所かで猶之れを矢張りかう云ふ風に見るともなく見て、それから意識して、何しろ「特別に」見たことがあつたやうに思ふのだが?思ひ出せません。見ることはたしかに方々で種々な時に見たと思ふが、何故なら「晝間の月」と云へばすぐにうむ、あれか、と思へる。然し何所かで一度同じく今日の樣に特にその事を意識に浮べて、見たことがあつたやうに思ふのだが?――或ひは輕々の間にもせよ餘りに度々此の現象はつい見馴れてゐるので、それで今日偶々之れを見て、文に記したりすると、然し猶ずつと以前に之れはちやんと見て、ちやんと意識にも上せた。と、さう思ふのかもしれない。

支那の大同で一度見たことがあります。之れはたしかに記憶にありますが、月が出てゐるなと思つた。

文章には一度も書いたことがありません。

之れが初めてゞす。――以上「人間以外」に。



諏訪湖の主

田中阿歌麿

湖沼は云ふまでもなく、水に掩はれた陸面であるが、地圖をのぞいてみてもそこには唯青い水をあらはしてゐるだけで、內部は全く不明な區域である。深さも數十年前までは誰一人知る者もなく、たゞ非常に深いものだと想像されてゐた。場所も多くは森林などに包まれた山中にあつて、中には樵夫や獵人などによつて僅に存在を知られてゐるやうなものもあつた。その湖沼が學術的に硏究され、經濟的方面に利用されるやうになつたのは極く最近のことである。それだけその昔、湖畔に住んでゐた人々の言傳による傳說も多く、今の文化の世の中にも謎のやうな話が幾つとなく殘つてゐる。

私の調べたところによると、それらの傳說の多くは、九州の南端から津輕海峽に至る迄に最も廣く傳へられてゐる。一つは大和民族が南から北へ移動したからでもあらう。私はここで、湖のローマンスの中で比較的世に知られてゐない諏訪湖の傳說を話してみる。

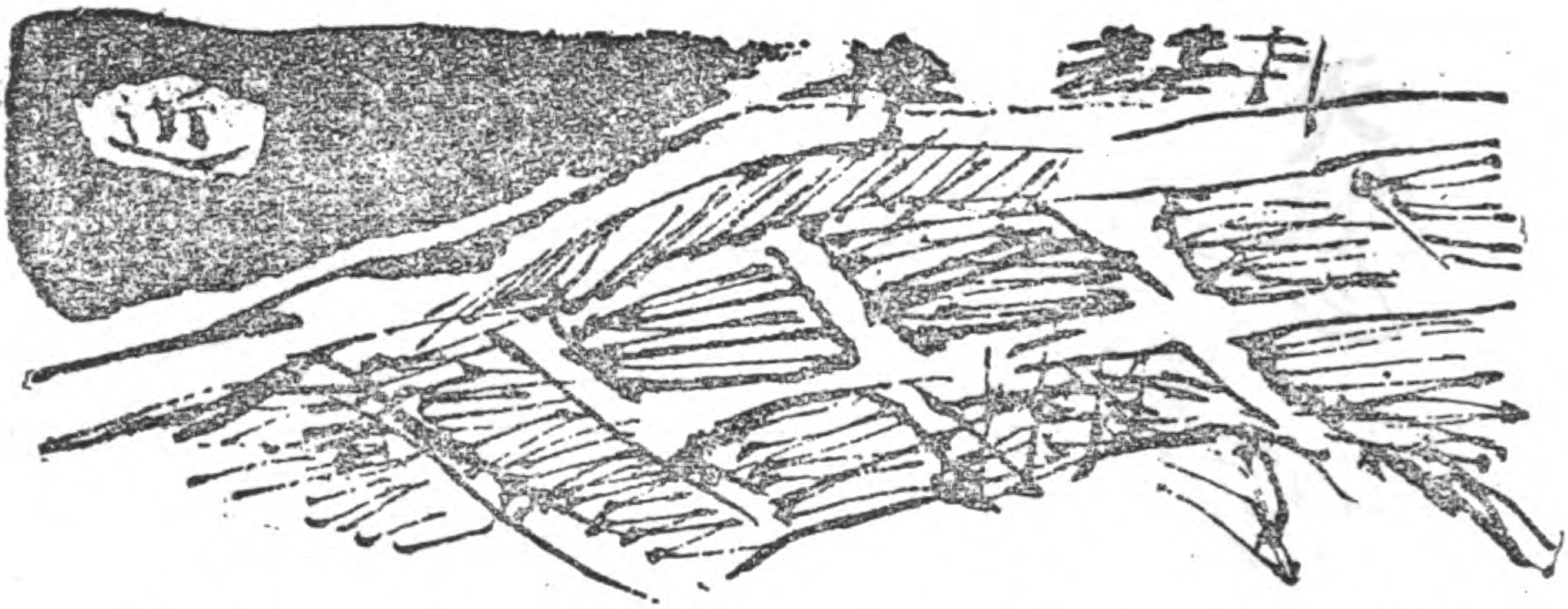
諏訪湖の主は大蛇であるといふ話である。もと淺間の山麓にある大沼池から松原湖を經て、此湖まで來たさうである。

それは孝明天皇の御宇のことであつた。近江國甲賀郡の神主の五代の孫に當る甲賀權頭に、太郎と次郎と三郎といふ何れも劣らぬ三子があつた。或年の春、權頭は風邪の心地で



床についたが、命が旦夕にせまつた時三子を枕頭に呼んで「太郎は東方に館を建てゝ東の殿と稱へ、次郎は西方に館を建てゝ西の殿と申すべし、三郎は此家に殘りて母上に孝行を盡し、中の殿と名乘るべし。」と云つて、總領職を三郎に讓つた。又所領も太郎と次郎には三ケ國、三郎には七ケ國を遺言して此世から旅立つたが、其後三十五日、母親も亦愁傷の餘り此世を去つてしまつた。

その後縁あつて、三郎は大和の國の春日權頭の娘、春日姫を請ひうけて北の方としたが、一日、祝宴の氣持で、卷狩などして遊ばんと、伊吹山に假の館を建てゝ、幕を巡らし、北の方をはじめ、太郎、次郎外一千餘騎を從へて、七日の間卷狩を行つた。ところが或日のことどこからともなく大きな鹿が一匹、館の前に來たので、それを捕へるために次第々々に山奥の方へ追ひつめてゆくうち、俄に大風が吹起つてきた。一同はたゞあわてふためいてゐる時、ふと北の方の御座の間へひら／＼と美しい双紙が三枚落ちてきた。それを拾ひあげると、不思議にも双紙は、三人の稚兒と變じた。とみる間に稚兒は北の方を引連れて辰巳の方へと遙かに消え失せてしまつた。三郎はこの由を聞いて悲歎にくれ春日社へ祈願をして、五百餘騎を從へ、山々谷々を尋ねてみたが一向北の方の行方が知れない。このあとは何れの國をたづねたものであらうかと途方にくれてゐる時、宮内判官の話すやうには「信濃國は立科の嶽に大きな人穴があるからその中を捜して見たら」と云ふので、再び山から谷を越えて立科の嶽に來てみると、成程大きな人穴があつたが、どうして中へはいつていいのか方法がない。併し命をかけて姫をたづねてゐる三郎のことであるから、家臣に藤蔓を取らせ、籠を組み、綱をつけ、右手には劍を、左手には春日明神から授かつた玉を持つてスルスルと穴を下つていつた。その寶玉といふのは、食はなくても飢えず、衣服

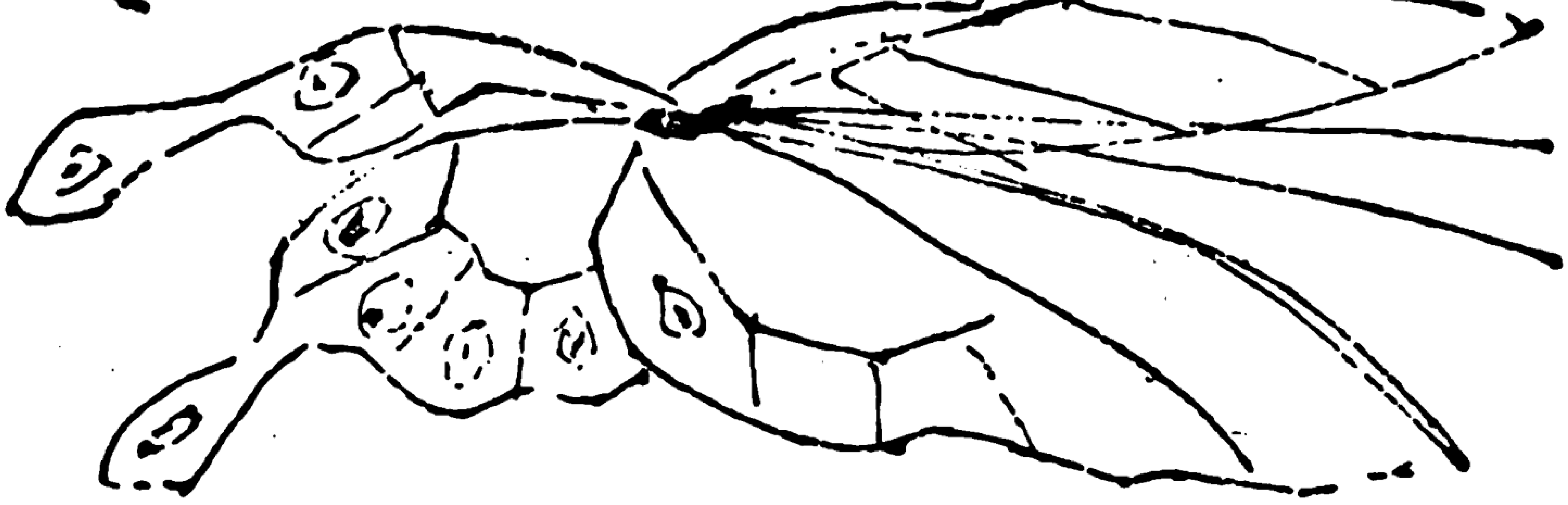


がなくとも寒さを知らず、火中に入つても暑くはない、水中に入つても溺れなければ、道中に迷ふ恐れもないといふ五徳を具へた玉であるから、三郎は何事もなく進むこと三十四五町、すると其處に石畳があつて、それから先へ進むにつれて、穴は次第に暗くなつてゐる。けれども玉と劍の光で自由に行手が見られるので奥へ／＼と進んでゆくうちに三郎は大きな池の畔に來た。池の奥には美しい御堂や三重塔が建つてゐて、更にその間からは竹林の細路がつゞいてゐる。その路の盡きたところに大きな綠色の御殿が一つ建つてゐた。三郎はぐん／＼その中へはいつて見たが、中には人影一つ映らない。不思議だ、と思ひながら西の障子をあけて見ると、その時ふと三郎の耳に、法華經提婆品を讀む女の聲が聞えてきた。その涼しさはまぎれもない春日姫の聲であつたので、二人は抱きあつて、さめ／＼と嬉し涙にくれた。

心を落着けて姫の話をきいてみると、此國の名は鬼國と言つて、主人は今豐後國郡司の娘の美しいことを聞いて召連れに行つた留守だといふので、三郎はその間にと急いで姫を連れ出し、藤籠に乘つて合圖をすると、從者連は心得て一勢に綱を引あげた。ところが姫はこの時、嬉しさの餘り諸種の貴重品を穴の中に忘れたことを思ひ出したので、三郎だけは二度引返して貴重品を籠に盛り、再び合圖をした、恰度、その時のことである。次男二郎は、父の死後、弟が總領職になつたことを根に持つてゐたので、三郎を亡き者にしようとして兄の太郎ど相語ひ、籠の綱を切落してしまつた。その後二郎は更に春日姫を自分の手にいれやうとしたが、貞淑な姫はそれに應ぜず、春日神社に詣で深く祈誓を捧げ神靈の加護を得て命をながらへてゐることになつた。

一方三郎は、綱を斷たれてしまつたので、詮方なしに人穴を東へ北へと歩いてゐるうち

天



に、いつか二十二の人穴を通りぬけて、四方の山々が紅葉をし、雄鹿の泣聲が淋しく聞えるあたりへまで來た。それから更に先へ〳〵と進んでゆくうちに一つの大國に着いたが、そこで三郎は淺井萬國といふ八十餘りの老翁が鹿を追うてくるのに行遇つた。萬國には三人の娘があつたが、その中の末娘を三郎にめあせて二人は老翁の家で仲睦じく暮すことになつた。

ところが或夜、彼は夢に故郷の春日姫と相あつて、懐しさの餘り涙を流してゐた。その譯を聞いた萬姫は「女の心は皆一つで、私が御身樣のことを思ひ慕つてゐるやうに、さぞ春日姫樣も御心を惱ましてをられるであらう。」と云つて、共に優しい涙を流して、父翁の許しを乞ふことにし、愈々三郎は故郷に歸ることになつた。萬國翁は別れにのぞんで、三郎と萬姫を珍らしい御所に通して、數多の酒肴に夜もすがら饗應して、夜の白む頃故郷への道順を敎へてくれた。それから餞別だと云つて、翁は最後に「鹿千頭」といふ餅を三貫に積んで出し、一日に一つ宛喰べてゆくやうにすゝめてくれた。三郎は三拜して押戴き、旅裝を整へたゞ、萬姫は諦めかねて後を追ひ、ちぎり川といふ川邊まで送つてきたが、そこで名殘の歌を取かはして別れた。

三郎はそれから老翁の敎へを守り、難所々々を越えて、信濃國は淺間山の麓にある大沼池へ出て、更に立科の嶽へ登つて見ると、ありし昔の面影はあとかたもない。山を下つて甲賀の郡へ出てみたが、そこにも亦昔の館はなく、草は繁り、御堂は朽ち、荒廢した叢の中に金屬ばかりか光つてゐた。それにしても春日姫の行方はといやまさる思ひをだいて、途方にくれ、御堂に入つて御經を讀誦してゐる時、草を分けて集つてきた小兒等が三郎を見ると、いきなり眼の色をかへて、悲鳴をあげながら逃げ去つてしまつた。「恐ろしや〳〵、



大きな蛇がゐる、早く〳〵」といふ子供等の叫び聲を聞いて三郎は「淺魔しや我姿はそれでは蛇になつてしまつたのか。」と佛壇の下へ隱れてしまつた。ところへ夕方になると何處からともなく、數多の僧侶が集つてきて、經文を讀誦し、夜の明け方、經を終り、徒然なる儘に古き頃の物語を始めた。その物語といふのは甲賀三郎のことなどで、「三郎は昨日この御堂へ來る筈であるのに、一向見えないのはどうも不思議なことである。」と一人の僧が云へば、他の僧は、「人々の話によると昨日の晝頃、大きな蛇が御堂の中へ來たさうだが若しやそれではあるまいか。」と云ふ。又或僧は「下界は蛇の住家だから三郎殿もその姿に變り果てたものであらう。何とかして皮裝束をぬぐ方法はあるまいか」と云へば、上座の老僧は徐ろに語つて云ふには、「それには石菖の生ひ繁る池水に浸つて、朝陽を拜めばいい。蛇頭の裝束は直ちに脫げるであらう」と。佛壇の下の三郎はこれを聞いて大い喜び夜明を待つて石菖のある池水を浴び、朝日を拜むと忽然としてもとの姿になつたのにで、喜び勇みながら御堂にやつて來た。僧侶達もそれを見ると欣喜して「これは甲賀三郎殿である」と四方から取卷いて、花のやうな裝束や梶の葉をおいた直垂、弓矢等を取揃へてくれたが、時刻が移つて晝頃になると、一人去り二人去りして、後にはたゞ三人ばかりの僧侶が殘つた。三郎は殘つた僧侶に向つて「唯今までお出でになつた墨染の方々は一體誰方であるか」と聞けば、「上座の御僧は伊勢天照皇太神宮で、左座の一番は熊野大權現、二番は加茂大明神、又右座の一番は梅田大明神、二番は平野大明神斯く申す某は近江國大原大明神である」などと四方の話を語りつゞけるのを聞いてゐるうち、春日姫は今尙春日明神の靈驗を受けて、讀經三昧の中に淋しく命を永らへてゐることを知ることが出來た。

早速訪ねて行くと、成程姫は昔の儘の美しい姿で經を誦してゐたが、三郎の聲に夢かと



ばかりに打喜んで、ひた泣きに泣きくづれるのであつた。
二人はやがて春日大明神から申請けた飛行の車に乘つて、信濃の國岡谷の里に宮居を建て、諏訪の大明神と號するやうになつたと、昔の人の話である。

貸家をゆめむ

室生犀星

「あなたさまがお國へ入らしつてから、ちやうど最う七八ケ月になりますね。わたくしどもは主人を二度ばかり代へた上、もう往來から垣根が透いてお座敷であつた八疊が見通されるやうになりました。あなたさまは垣根をよくお繕ひになりましたが、あれはあなたさまのお道樂でございましたのね。いまのお方はべつにそれを苦になさいません。きつとおしごとがお忙しいのでございませう。それからお離れはあまりおつかひにならないと見え、いつも閉めきつて漸つと西日の篠竹のかげが落ちて居ります。あそこに山雀の籠をおかけになりましたね。あの籠は神明町の道具屋へお賣りになつたのが、もうとつくに舖さきから姿を消しました。いまごろは何處かでやはり鳥を入れて吊されてゐるのでございませう。」
「しかし御主人はお掃除をよくなさいますので、お庭もきれいになつて居ります。あなたさまが東京をお發ちになるときに、わたくしどもの鴨居に表札をお匿しになりましたね。



あの表札は埃まみれになつてはゐますが、ちやんと誰方にも見つからずに殘つてあります。廁の壁にかいてあつた古い借手だつた家のおこどもさんが書いたらしい米國といふ文字もそのまゝでございます。それからお庭の石手洗ひも一さう蒼くなつて居ります。」

「わたくし考へますには、いつもあなたさまがわたくしどもの門のところや、又、お座敷においでになるやうな氣がしてなりません。あなたさまは間もなく東京へおかへりになるのでございませう。いゝえ、あなたさまは田舍がお好きだなんて言つてゐらつしやいますけれど、おなかの底ではやはり何かにつけて東京をお考へにならないことはございますまい！ どうぞ早くおかへりなさいまし。わたくしはそれを疑はないで居ります。」

「わたくしは最うだいぶ年をとつたやうな氣がいたします。わたくしがあそこに建つてから十六年くらゐ經ちました。まだあそこらの高臺が小松菜の畑であつたころにお隣のお家と一しよに建つたのでございます。ときをりの雨の漏ることや、筧の腐つてゐることもどうにもなりません。唯、あなたさまがた人間のおこゝろからお考へになるよりも、もつとわたくしどもは長く建つてゐるのでございます。わたくしあそこの地面にやつと馴染んだくらゐでございます。家といふものは十年經たないと地面の肌とぴつたりくつゝくやうになりません。あと十年はわたくしはまだ彼の高臺に立つてゐることでございませう。」

「それからあなたさまがお發ちになる前に埋めなさいました陶器は、まだあのまゝこはれも缺けもしないで土の中にございます。どなたにも見つかりません。あんなところに、あゝいふ陶磁器が埋められてゐるなんてそれを知つてゐるものは、あなたさまとわたくしとくらゐでございます。」

「わたくしがかうして郊外に建つてゐても田舍のお家が目にみえるやうでございます。田



舍は一切釘をつかはないで木口を交へるだけだといふぢやございませんか。風が吹くと動くといふぢやありませんか。わたくしは唯、すこしくらゐ歪んでゐるだけでございます。」

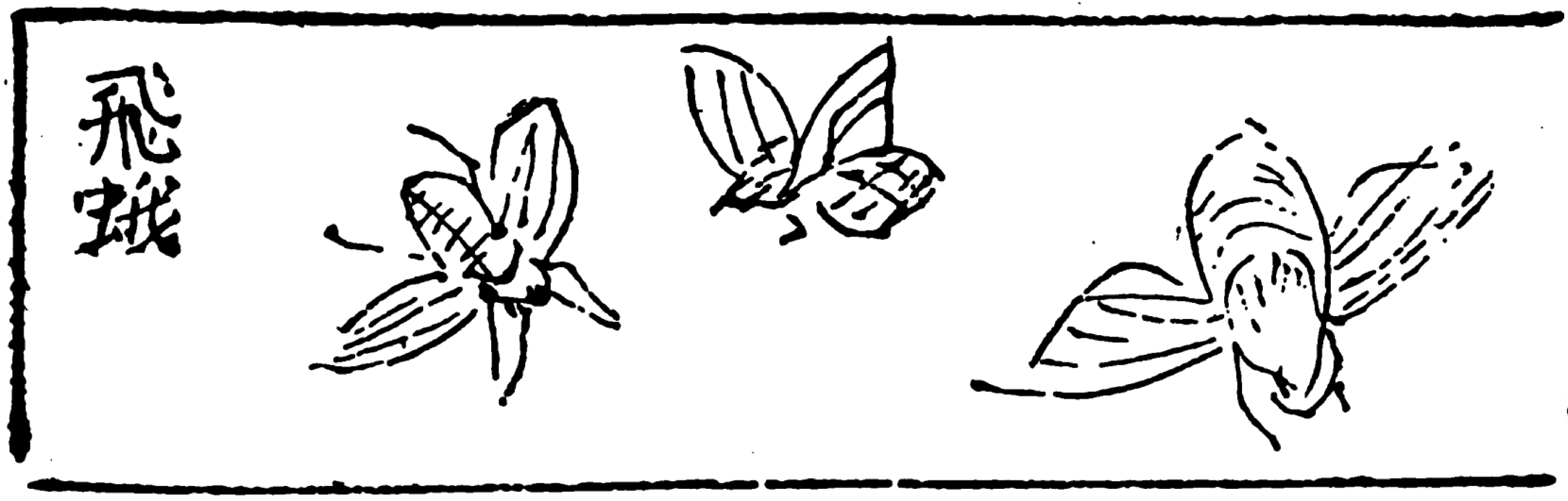
「世のうつりかはりはわたしどもの上にもあらはれて來ました。だんだんあちこちに同じい家が建ちはじめて居ります。どうぞお早くおかへりなさいまし。變化つたことだらけでございます。せんのお女中はカフエの女給になつてゐるさうでございます。そのことをお宅へ知らしてくれるなと、あなたさまのお知り合ひにあふとさう言ふて居るさうでございます。それもさうありさうなことでございますね。――けふは古いわたくしの家の屋根の上に、久し振りの雨が、今ちやうど秋口のやうにばらばらと降つて來ました。」

土

荻原井泉水

私はじつと見てゐた、面白い、然し面白いといふよりもふしぎな感じがして來た。土がむく／＼と、ひとりでに、盤の上から伸び上つて來る、而してくる／＼と廻りながら、細く圓いものになる、少しふくらみがつく、形は見てゐる間にいろ／＼に變る、これでよいと思ふ形になつた所で、ポクリと盤の上から離れて、そこに一つの筒形をした土の姿が出來る。

―私は陶工Hの仕事場で、彼がろくろ臺の前に坐つて陶を作るのを見てゐるのだ――同じ



様にいくつもいくつも——彼はマジックステッキのやうな棒の先で盤をちよい〳〵と突く、すると盤は恐ろしく輕快に、又とめどなく旋回しはじめる、その上に土が乘つてゐる、其土に彼が一寸指を觸れると、土は又しても、むく〳〵と、ひとりでに伸び上つて來る……

「土が産れて來るといふ感じでせう」

彼はさう云つて、其産れて來ながら、目まぐるしく動いてゐる所の土を掌で撫でたり、箆で削つたりして、自分が思ふやうな形に作らうとしてゐる。

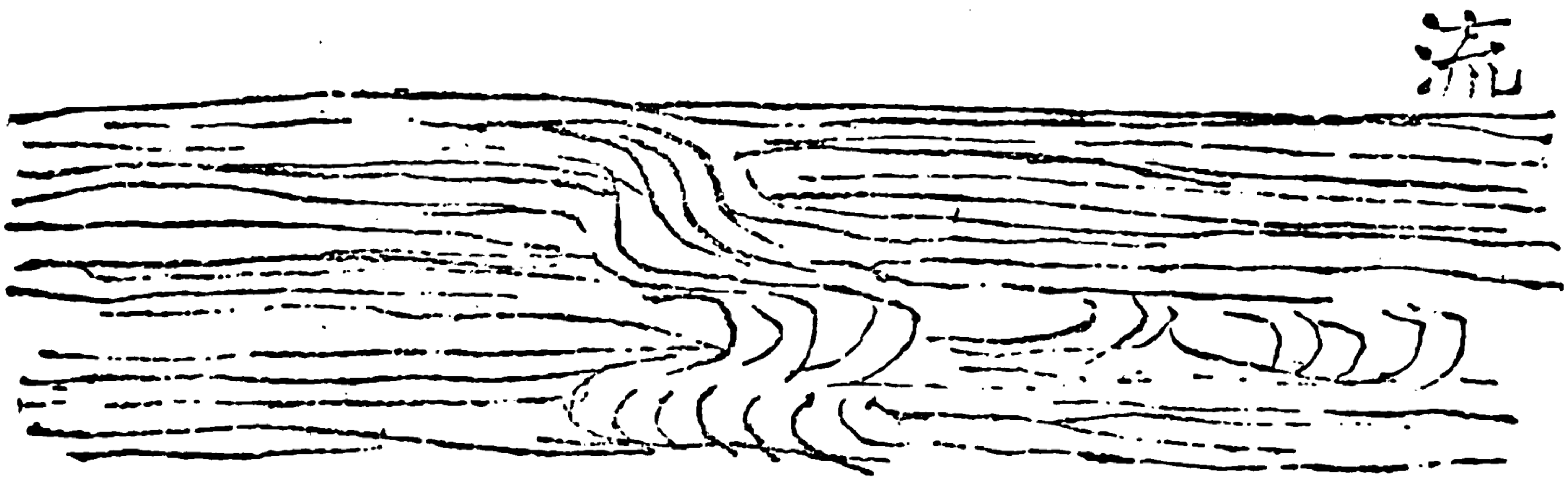
まつたく、其は創造の心持である。其を見てゐても、陶工の彼が如何に創造的の感激をもつて其仕事をやつてゐるかといふ事が解る。太古、神が萬物を創造した時の氣持——『霧地より上りて土の面を遍く潤したり、エホバ神、土の塵を以て人を造り生氣を其鼻に嘘入たまへり、人即ち生靈となりぬ』(創生記)——其を小さくして感じられるやうにも思つた。私達が普通に云ふ所の藝術といふのは、繪畫でも彫刻でも、神が造つた自然や人間といふものの形、色、美しさをカンバスの上に、又は土や木を以て表現しようとしたものだ、一口に云へば神の創造物を人間が模倣したものである。然るに、是は、神が萬物を創つた其心持を直接に、人間が表現するのである。神が人間を作る時に材料にしたといふ其の同じ「土」を以て、こゝでは壺や鉢を作るのであるが、その壺や鉢に作者自身の生命を與へようとする其心持は、神の作品の模倣ではなく、直接な、且つ根本的な喜びと味ひとがあるとも云へる。私はそんな事を考へながら彼の製作を眺めてゐた。そこに出來たものは、まだ藝術品といふ事は出來ない、土の形だけ、姿だけである。彼は追つて、其上に圖案を書くだらう、釉藥をかけるだらう、而して窯の中に入れて燒かなければなるまい。

雲



「窯に入れる前と、窯から出た時のものとは全く違つた感じです、自分の思ふ色を出さうとしても、がらりと外れる事もありますし、又自分の思つてゐたより以上に、すばらしい佳い調子が出る事もあります、自分の作品を窯に入れて火を掛けてゐる時は、もう人間の力を離れて、たゞ祈る――祈るより外はないといふ氣持です」

Hはさうも云つた。兎も角、陶土藝術といふものは非常に原始的なものだ。私達の祖先が太古時代に、いはひべといふやうな陶瓮を作つてゐる事を考へても、而して太古の人が彼等の藝術的表現の第一歩として、先づ「土」を選んだといふ事は非常に面白い事ぢやないか、」などと私は話した。Hは云つた。陶土藝術の味は、所謂文化的なる西洋人には到底解らない、東洋人には、それだけ原始的な精神が殘つてゐる爲めかもしれない……。」で、私は、二三日前の新聞に野口米次郎氏の談片として出てゐたもの、西洋人は常に腰かけて生活してゐるから、自然の中層から上を見る、日本人は常に坐つてゐるから自然を最も下部から、土の所から見てゐる、從つて、よりよく自然を見る、といふ話を取次いだ。するとHは「さう云ふならば、日本人よりも朝鮮人の方が一層、自然をよく見てゐるでせう。朝鮮人はどこに居ても、土の上にぢかに腰をおろします、だから自然を根元から見てゐます、いや、自分の生活其物を土の上にぴつたりと置いてゐるのですね、朝鮮の陶器の、あの偉大な素撲と、偉大な愚かさは全くそこから來てゐるのでせう。私達は釉藥を溶いておく時、外の物がまじらないやうに注意して、小さな塵が落ちても、丹念に拾ひ上げるのです、所が驚いた事に朝鮮人は、土へぢかに穴を掘つて、其中に釉藥を溶くのです、塵なんどはいり次第です、所が高麗陶器の、あの何ともいへない不思議な色や調子は全く、さう



した不用意な釉薬、土の中で醸造されたやうな釉薬から來る味なのです。とても眞似る事の出來ないものです」と云つて、仕事場の隅の飾り棚に据ゑてある高麗土器の一つを私に指し示した。

土の藝術、是は本當に面白いものだ。古代の壺や器が何萬圓で入札に落ちたなどといふ話を、私は今まで馬鹿らしい位に聞き流してゐたが（勿論、金持の道樂として名高いものとさへ云へば無批判に金を投出して其を自分の占有としようとする心理は馬鹿〳〵しいが、古代の名匠が心を籠めて造り出した土の創作、作者の美意識の尤も直接なる象徵的なる表現、さういふものにはどれほどの高價をもつて換へても決して過ぎるといふ事はあるまい。

Hは私が手廻りの用具とする爲めに、自分の作つた茶碗や皿などを持つて行つて欲しいと云つた。小さな花瓶のやうなものを、是は煙草の灰落しにして下さい、と云つた。是等は彼の言葉に依ると、彼の作品として出來損ひの物なのである。思ふやうに出來たものは藝術として眺められるものになる譯であらう、と思ふと、私は獨り微笑まれた。世間では、生活は實用を本位として、其の生活の餘剩が藝術を産むのだ、といふ風に考へてゐる、其の常識とは反對に、こゝでは藝術の餘剩が生活上の實用となる――。

窓の外には初夏の日が若葉の綠を反映してゐた。

陶工我によき土はあり太陽はあり

私はHの此句をふと思ひ浮べた。

――京都、東山にて――

牽牛



蟬

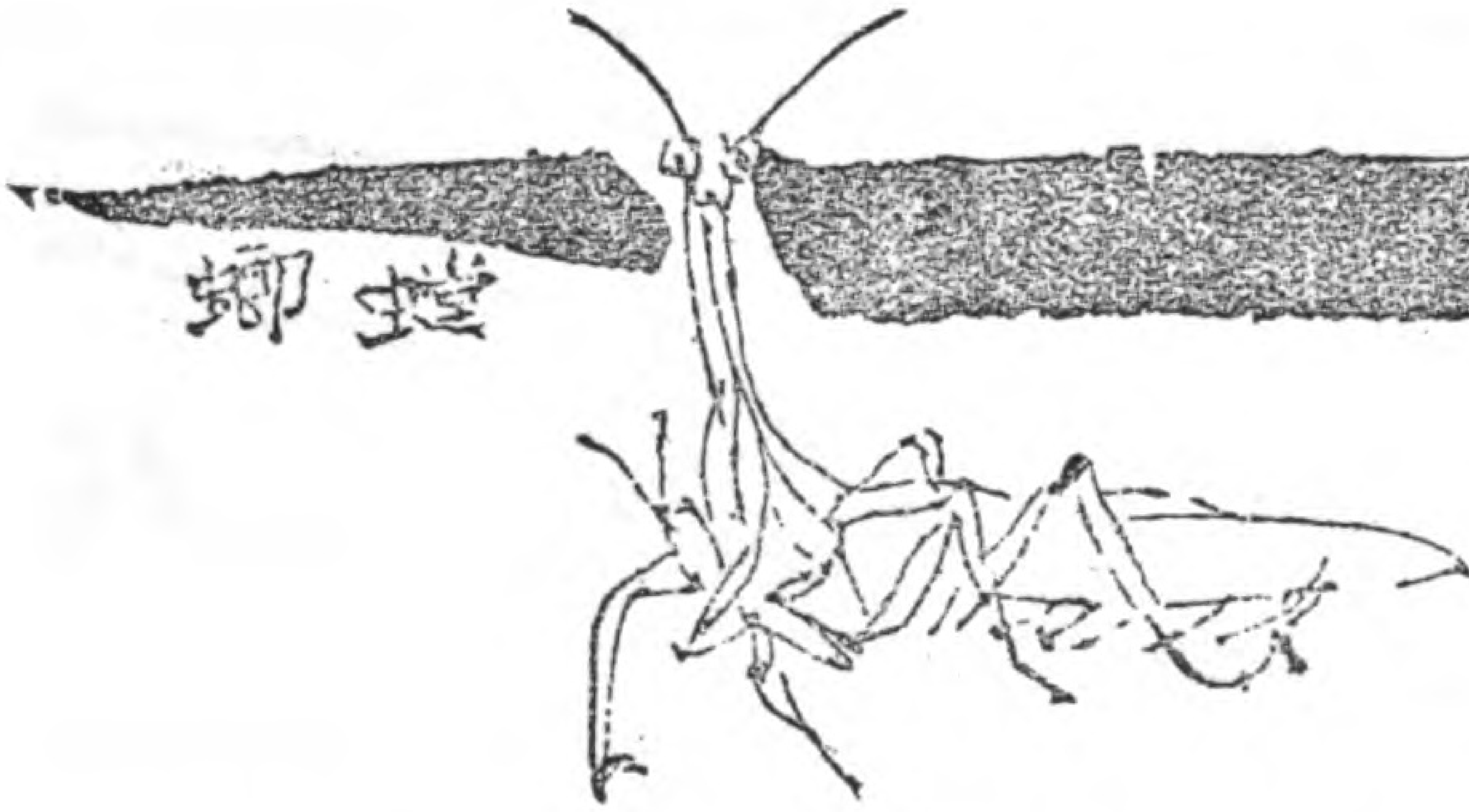
西村眞次

沙翁も『脆さよ、お前の名は女だ』といふ名句を殘した傍、『悍馬ならし』のやうなものを書いてゐる。女性の本來性は温順であるか、或は剛腹であるか分らない。少くとも日本では、古代に於ては男性を尻に布くやうな氣丈夫な婦人が多かつたやうだ。さうした時代には、しとやかな、おとなしい婦人はどれほど男性を持つてゐたかしれやしない。ギリシヤ人はいろんな點で日本人に似てゐるが、クセナルクスといふ詩人は、

『幸なるかな蟬の一生、
　彼等の妻は唖なれば。』

といふ婦人には如何はしい聯句をうたつてゐる。日本では鳴かぬ蟬を唖蟬といふ。唖蟬は實は雌で、鳴くのは雄蟬ばかりだ。

鳴く目的はいふまでも無く、雌を誘ふ爲めで、高殿の姫君が我が思ふ若人に聞いてもらはうと、一所懸命に掻き鳴らす琴の音のやうなものだ。濃やかな緑の林の中で、雄蟬が根張り力張り鳴くと、右から左から前から後から、雌蟬がそれを慕つて忍び寄る。一生の短い蟬に取つては、夏の一月二月が大切な青春の季節だ。『我ひとり暑いやうなり蟬のこゑ』と謳つて「私達はじい〳〵と煎りつけるやうな聲を呪ふけれども、蟬にあつては眞劍、白



熱的な戀の誘ひをかけてゐるのだ。それだから『あの聲で露が命か蟬の聲』といふ感じを起さしめる大聲が出るのだ。

蟬の聲は色々で、夏の日にこんもりと繁つた雜木林に入ると、頭の上から雨でも降るやうに蟬の聲が浴せかゝつて來る。それを我國の風雅な人々は『蟬時雨』といふ。不協和な雜音といつてしまへばそれまでだが、そこにはヴァイオリンのやうなニイニイゼミ、太鼓のやうなミンミンを始めとして、どんな樂器にくらべたらよいか分らないアブラゼミだの、クマゼミだのゝ聲を聞き分けることが出來るだらう。

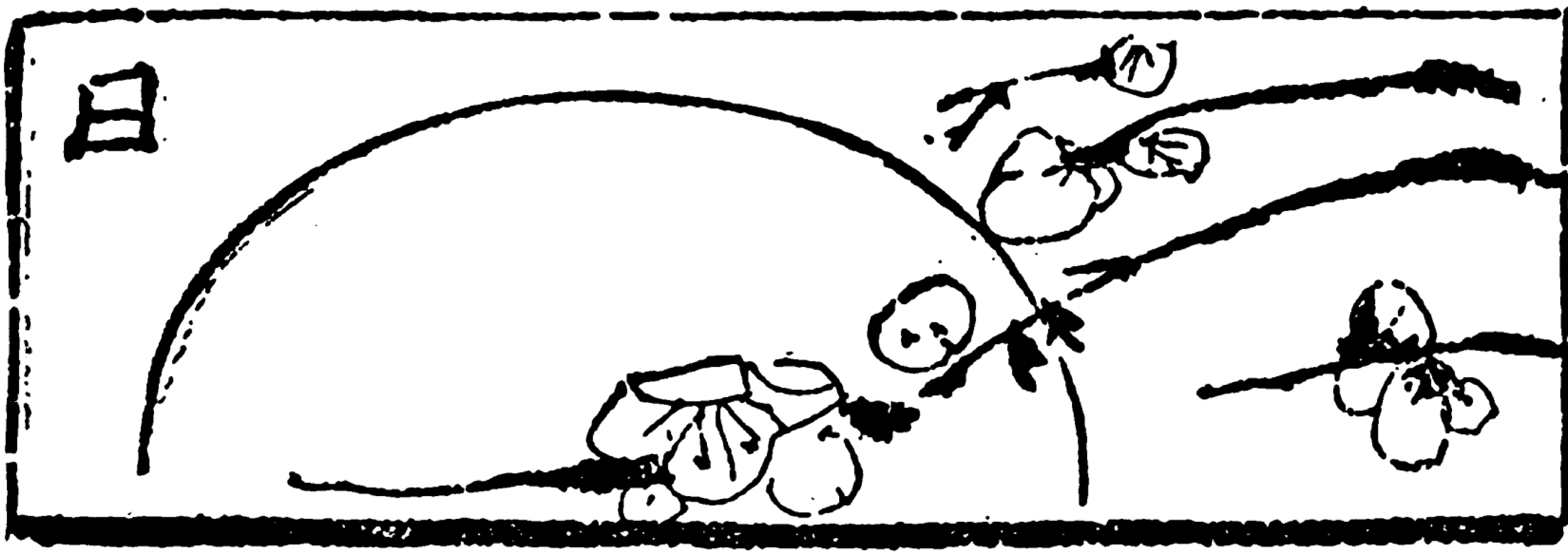
一體日本人は自然の音樂を愛し、松風や谷水の音を音樂的に聞き、秋の夜の虫の聲などには最も讃美の限りを盡してゐるが、蟬の聲はあまり喧しいので、一般にうるさいもの、而も憎いもの、いま〱しいものと考へられてゐるらしい。故ハーンさんは其理由を考へて『或種類の蟬は音樂的であるけれど、多くは驚くほど喧ましくて、其じい〱いふ鋭い聲が私達に壓迫を感じさせるからだ』といつてゐる。實際、アブラゼミの油をいたつけるやうな聲は、聞いてゐる人の心をいら立たせるほどだ。東京にはゐないやうだが、クマゼミといふ眞黑な體へ薄い羅の翅をつけた種類は、シャン〱と忙しげに鳴き立てゝ、聞いてゐると頭髪をかきむしりたいやうな氣になつて來る。

古いギリシヤの詩人は、ホメロース、ヘンオツドから、アナクレオン、テオクリツスに至るまで、皆蟬の聲を愛してゐた。中でも有名なのはアナクレオンの詩で、

『あはれ蟬、私達はお前を幸福だと思ふ。

……………』

お前は美しい夏の豫言者だ。



ミューズはお前を可愛がり、
フエブスはお前に鋭い歌を與へた。
年を老つてもお前は衰へない。
お前は悧巧で、音樂好きで、
血のない故に感傷もしない。
お前は本當に神さまに近い。』

といふ一節である。蟬が淸らかな露ばかり飲んで生活し、何物をも損ふことなしに生活してゐるのを、實にあくがれるギリシヤ人が好んだのである。彼等はあらゆる言葉で蟬を賞め、殆ど、それを神さまのやうに考へてゐた。だから彼等は蟬の形を黄金に彫んで頭髮につけ、自分達は此蟲と均しく立派な市民であることを示さうとした。

蟬の中で一番音樂的な鳴き聲をするのはツク〳〵ボウシである。もう夫が聞けて、ともすれば朝晩は涼しみを覺えるくらゐ、畑の唐黍の葉ががさ〳〵とやがて來る秋の豫言をするやうになると、此の小さい、翅の透き通つた、體が瘦せて、皮ばかりの細長い蟬が鳴き出す。ツクツクボウシ〳〵〳〵と熱心に同じ聲を繰返し、最後にカタチヨンと鳴捨てゝ何處かへ飛んでしまふ。それは精靈が飛ぶのであつて、實際一つの混蟲がそこを飛び離れたとは思はれぬほど、實體ではなくて、影としか思はれないほどに、微かであり、おぼろである。筑紫の姫君が都に來て、病に臥つて枕が上らず、婚約のある若者の顏も見ずに死んだので、悲しい一念が凝り固つて蟬となり『筑紫悲し〳〵』と臨終の思ひを鳴きつづけるの心と傳說は語つて私達の同情深い眼に涙ぐませる。

秋が近くなると、夕暮れの杉の木の間からヒグラシの哀れな聲が流れて來て、旅人に故



郷を思ふ溜息をつかせる。ヒグラシの聲はツクツクボウシに比べると單調であるけれど高い音色でカナ〳〵〳〵〳〵と悲しく鳴くので、物思はぬ人をさへともすれば哀愁の情調の中に誘つてゆく。

日本アルプス――槍が嶽へ登つた人は、島々あたりの梓川に沿うた密林の中で、チッチ〳〵と鳴くもののあるを聞いたことがあるだらう。あれはチッチゼミといつて、蟬の中で一番形の小さい種類の聲である。此蟬は東京附近には棲んでゐない。

昔から蟬をはかないものゝやうに云ふが、科學を知らなかつた古代人にも、蟬の壽命の短いことは知れてゐたと思はれる。實際、蟬の生命は長くとも二日ぐらゐのもので、最も長壽のものでも三日とは生きない。短命にふさはしいあの薄い羽衣、あの輕い身體、私には蟬は一つの固體といはうよりは、數を以て數へることの出來ない氣體質のものゝやうに思はれる。

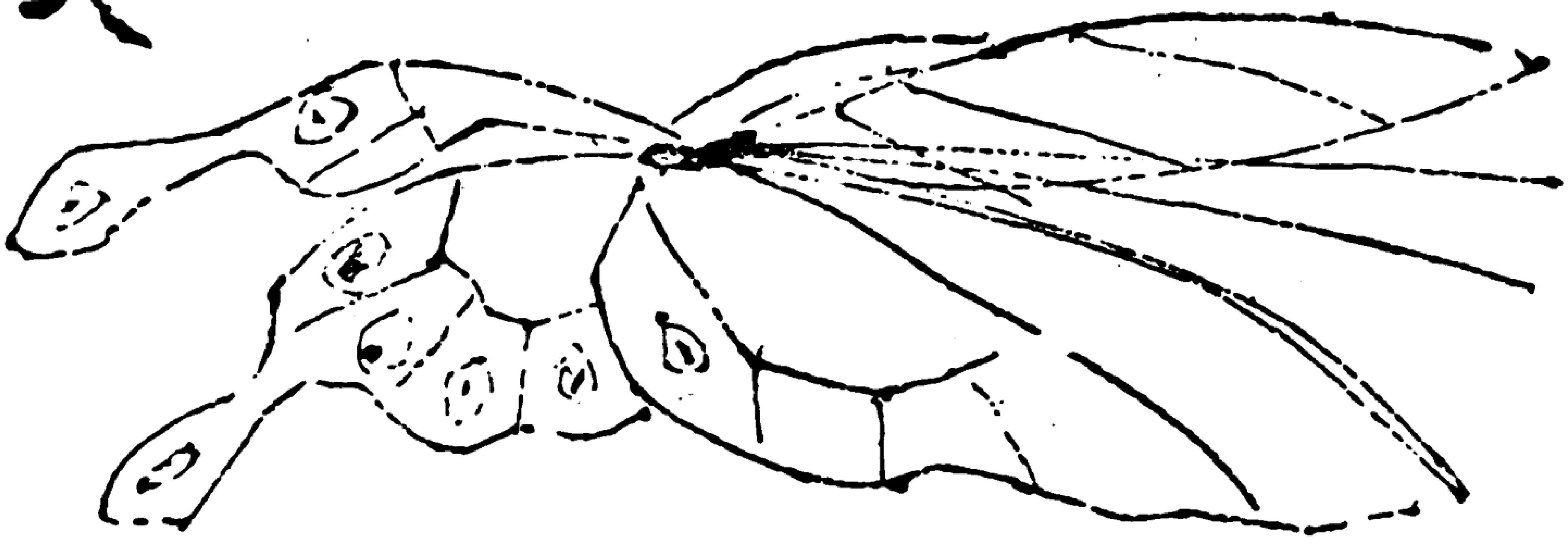
若き母親に與ふ

土屋格

一

唯今は午前二時であります。初夏晩春の生温い空氣の底に沈んで、京の夜は今静かに更

天



けて行きます。頁から頁へと進み行く私の前にひろげられた本の論旨の歩みと、それに引き入られて行く私の心とが少しく離れるその隙間毎に、先程から麥笛のやうな鳥の鳴聲が遠く近くに聞えてゐるのであります。それは今、この京の闇空を、南から北へ眞一文字に渡り行く數百又は數千の千鳥の群が御互に鳴き交はしてゐるのであります。あの小さい鳥が遠い南洋から千島カムサツカの方への旅行の途中、今人の夢路にさへ入らずに眞暗な空を渡つてゐるのであります。

私は椽側に出て空を見上げました。空はもとよりなやましく曇つて鳥の姿など見えるべきではありません。たゞその悲しげな鳴聲が空の彼方此方から闇を縫つて聞えて來る許りであります。

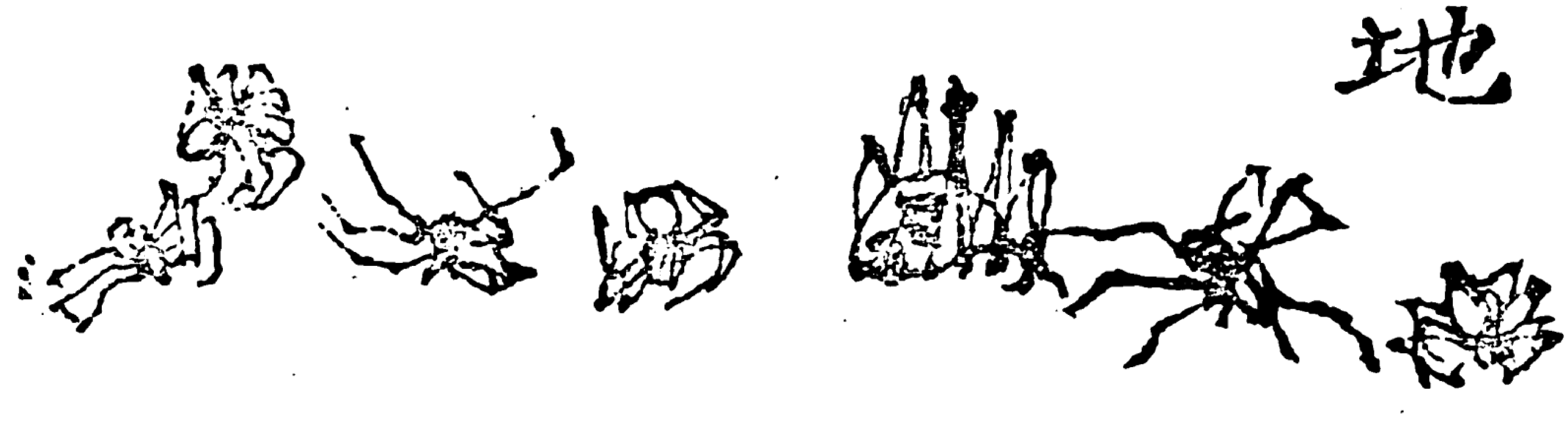
二

戸を閉ざして机に歸つた私は、今更乍ら一つの考へにとらはれてゐました。

一體現今の私達はあまりに人間的になりすぎてはゐないでせうか。しみじみと私達を廻る自然と云ふものに目をやつて、何の條件や豫想なしに、それを愛したり、考へたりするやうな豐な心持が、明治維新以來の日本人の頭の中から何時の間にか、すつかり逃げだして行つて了つたのではないのでせうか。

この四五年空をあふぐと云ふことが
一度もなかりきかうもなるものか。

明治のある歌人がかう歌つてゐるのを記憶致します。一體この詩人は四五年といふ永い間、あの美しい空をさへ眺めることなしに、一體何をして暮してゐたのでせうか。



明治維新以來の妙な世の中は、私共が自然を見る心持にさへ一つの型を與へて止つた樣であります。私達の祖先、特に徳川時代以前の人達が、あらゆる自然の諸相に對して持つてゐた、涙ぐましい樣な愛着と了解とは、私共の心持には再び蘇つて來さうにもありません。私達が散歩の度毎に杖の先で打ち散らす野の草の夫々に適當した詩味豐な名前を與へたのも昔の人達であります。今の人達には殆ど耳にも入りさうにもない小さな昆蟲の羽音にさへある悲調を感じ得たのも昔の人達であります。徳川時代から明治大正へかけての文學に現はれた植物の名、蟲の名が恐ろしく少くて、何れも俗つぽいもの許りであるのに反して、萬葉から八代集に至る歌集の中には、殆ど今の人達には判り樣もない生命の數々に對して、それ〳〵の感情が詠まれてゐるのに氣が付きます。あの枕草紙に現はれた草木の名前さへ、明治一代の文學全體のそれに匹敵するのであります。

私達が漱石の小說を讀んで非常に不愉快に感ずるのは、あまり人いきれ臭いからであります。あまり小利口に出來てゐて、伸び伸びとした純情を見出すことが出來ないからであります。私達、少くとも都會に住む私達は、皆どうも漱石の小說の主題になりさうであります。

私共は今確かに變な道を歩んでゐるとしか私には考へられないのであります。私共は、私達の手で作つた物以外に目をやる必要のない程、果して私達の世界は今そんなに豐富なものゝやうでせうか。それ共、現今の日本は誰も彼もが、殖産興業の聲につれられて、がつ〳〵と忙しくその日を送り、自然に對する愛情と云つた樣な呑氣なことが云つてゐられないのでせうか。



遠

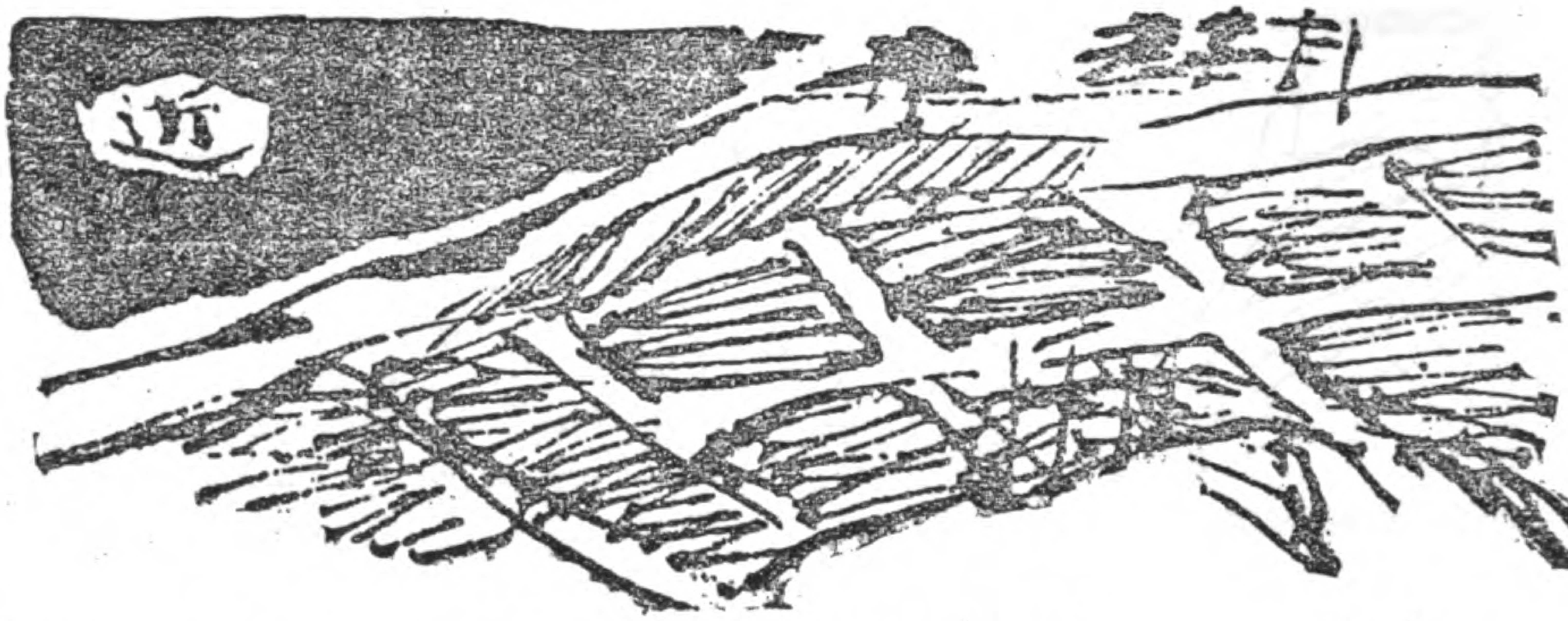
三

ある教授が曾つてから私に語りました。彼が戰後のドイツを出發しやうとする時であります。永らく世話になつた宿の夫婦と御別れに晩餐に招いた歸り道、北歐の空は美しく晴れて星の群が一杯に輝いてゐました。年老いた主婦は、戰爭後の苦しみをいろいろと、濕つぽい聲で語りつゞけてゐましたが、ふとその美しい空を見上げると、突然教授にかう尋ねたのであります。

「プロフエッサー　あなたは天文に興味を持つてゐますか。」

教授は理學者でした。それは一人の紳士としての體面上、自分は天文は嫌ひだとは、どうしても云へませんでした。そうして冷汗を流し乍ら、貧しい下宿の主婦の美しい天文上の知識から湧き出てくる會話の相手をしなければならなかつたのです。

私はこの話を聞いた時に、何となく悲しい心持にならずにはゐられなかつたのです。それはその時、私の頭の中には、まざまざと私のまだ子供だつた時分、凉み臺に寢轉び乍ら一生懸命にスベルの星の數を數へていろいろの空想をめぐらしてゐた事、田舍の藪の彼方へ尾を引いて落ちた流れ星に急に怖れ出したこと、土藏の中で太陽の寫眞を撮らうと思つてボール紙の暗箱を寢食を忘れて作つたことなどの記憶がまざまざと蘇つてゐたからであります。そうしてこの美しい空に對する懐しみと知識とは年齡と共に何時の間にか私の心の中から去つて止まつてゐる許りでなく、ともすれば、私が日常取扱つてゐる植物さへも、私の友達として見る事が出來なくなつて、一種の實驗机の上に置かれた機械と見えることが、多いと云ふことに氣が付いたからであります。



私の幼い心の中には、まだ私共の祖先の持つてゐた懐しい心の影が残つてゐたのであります。その影が年と共に、私の心から逃去つて後には、唯あくせくと働く心と、理屈づくめで物を見る習慣丈けが、殘つたのであります。

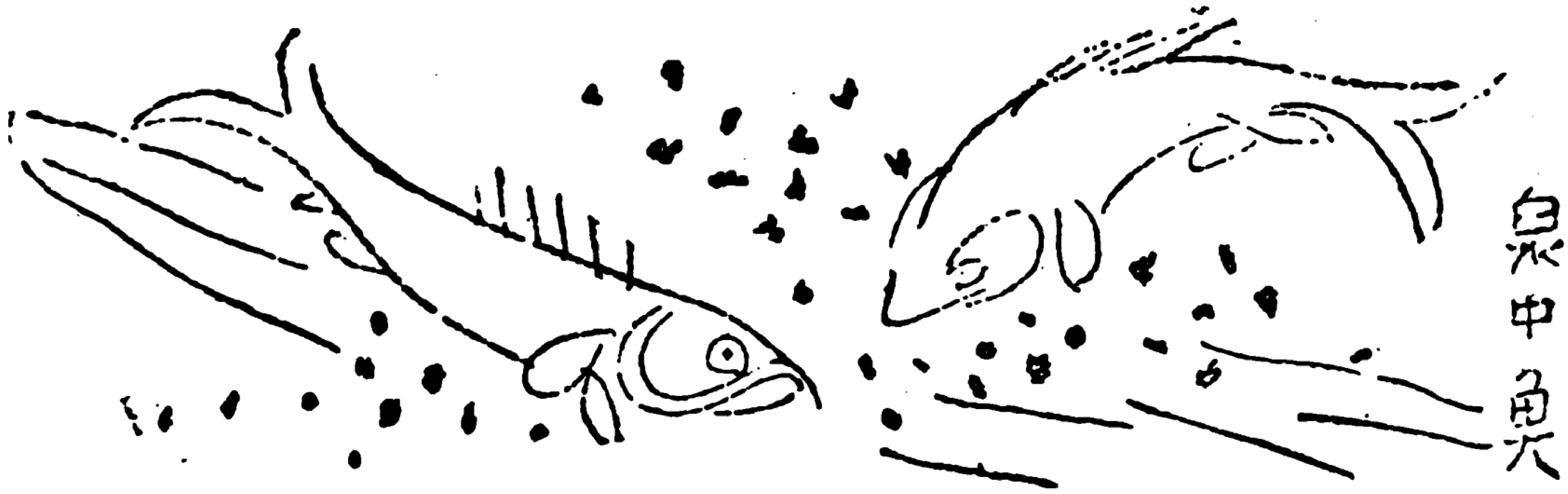
四

若き母親よ。現今の所謂政治家や教育家が如何に低劣な趣味の持主であつても、夫れは少しもあなた方の愛する幼兒の教育の方針には關係のないことであります。毎日毎日あくせくと働いて、月を見ればお盆の樣だとか、滿開の櫻を見れば霞の樣だとかしか考へられない樣な性質は、あなた方の父上なり祖父上なりが、あのめまぐるしい明治の世の中で、他人に打ち勝たれまい、だまされまいと目に角をたてゝ一生を送つた結果から生じた後天的のものであります。また自分で大して美しい感情にとらはれてゐもしない癖に、こう取りすました心持でひねくれた物を殊更に愛するかの樣に見せつけるいつはりの心は、漢學だとか俳諧だとから來た悪い方の結果であります。私達の血の中には、祖先の持つてゐた美しい純情が宿つてゐる筈であります。そうしてこの性質は、子供時代に一番力強く現れてゐる筈であります。

私達はもう好い加減にあくせくした生活を止めやうではありませんか。せめては、私達の子供には、將來もつと好い、おだやかな生活をさせてやらうではありませんか。私達の子供からはもう、

「坊やは陸軍大將になるんだぞ」

と云つた樣な血なまぐさい言葉を云はせ度くありません。また云はせて喜ぶ樣な下等な心



持は一刻も早く私共の心から追出さなければなりません。そうして三十年後には、醫學の大家を兼ねた首相や、昆虫學に造詣の深い銀行家や、ピアノの名手の理學博士をあなた方の子供として持つことの出來る樣に、今あなた方の若き兒の心の上に芽生えてゐる私達祖先の性質を折り取らない樣、靜かにそれを守り育てゝ如何に人間以外の物に愛情を持つて自分の生活を豐富にすべきかを敎へるのがあなた方若き母親の人類に對する務めであります。

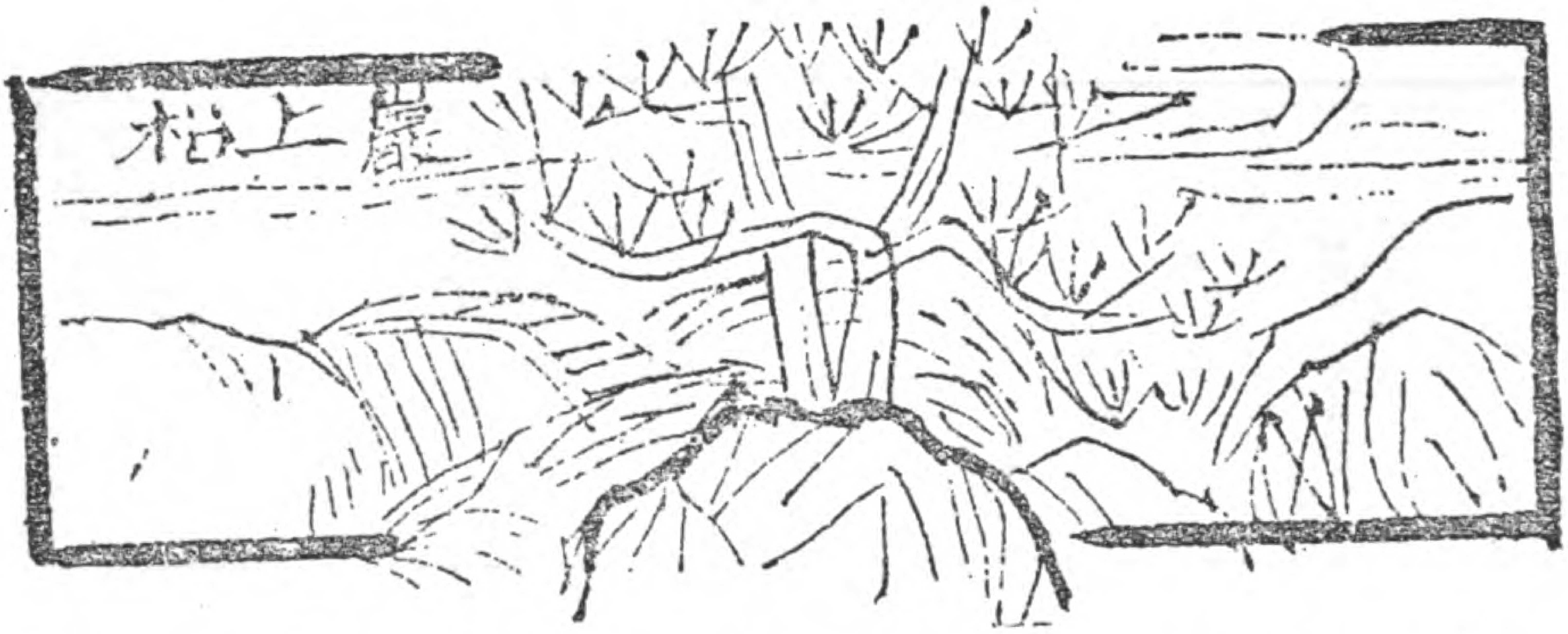
五

かう書きつゞけて來ても、空を渡る千鳥の聲はまだ斷えません。書き始めの頃に、私の家の上を通つた鳥はもう今頃は琵琶湖を渡り切つて止つたことでせう、この鳥の渡る空の下に横はる日本帝國の中の幾人の人がこの寂しげな鳥の旅行に氣付いてゐることでせう。あゝ私達は今僅かに優しかるべき日本人としては、夢うつゝに異つた道を歩いてゐるのであります。

月と魚

上司小劍

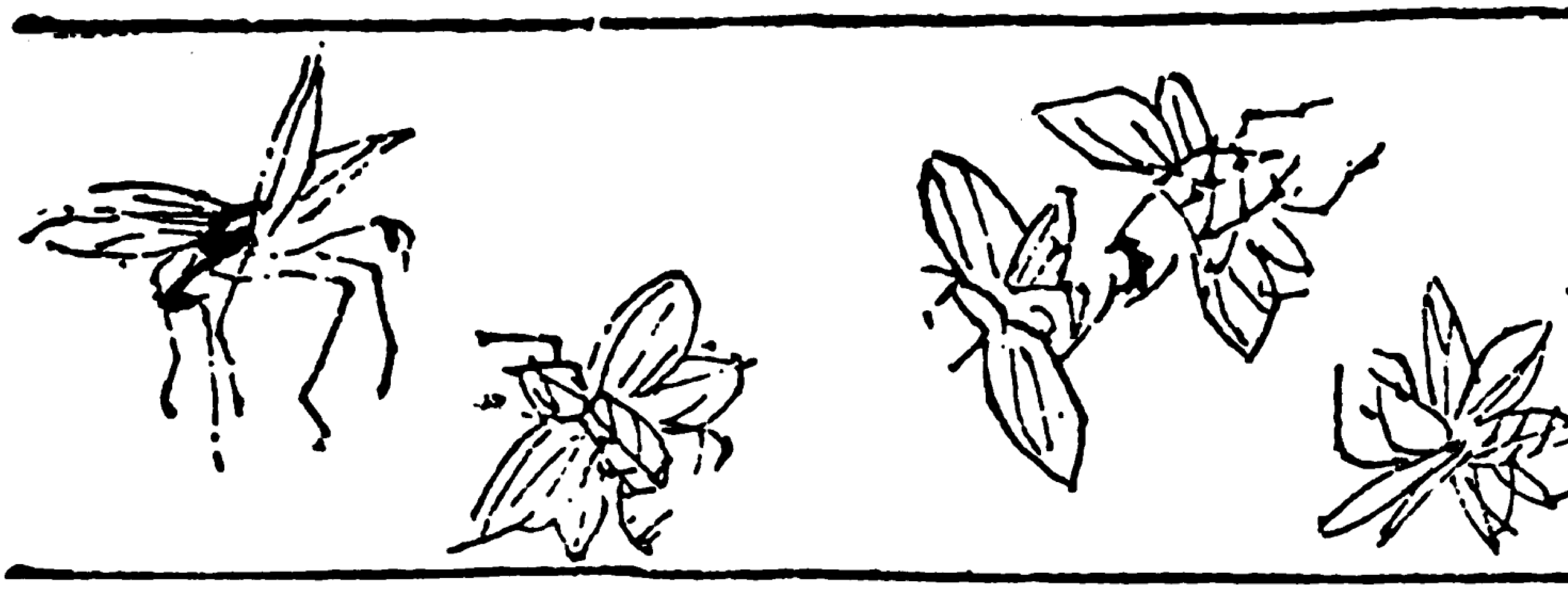
私は人間以外に好きなものが多い。人間といふ動物が、あまりに勝手で、殘忍で、あさ



ましく生れついてゐるのを憎むのだ。正直を讃美してゐながら、人間ほど正直を忌む動物は珍らしい。二たこと目には、平和を口にしながら、人間ほど平和を好まない動物も珍らしい。することなすこと、癪にさはるのが人間といふ動物だ。正義も人道も平和も、槍のやうに眞つすぐな說きかたをするのは、野暮といふことになつて、人間の生活ははじめてお茶をにごしながら生きて行かれるのだ。これを世渡りといふ。世間師といふ。『野暮』といふやうな不純な言葉をこしらへたところに、人間といふものが、何んといふいやな動物であるかを示してゐる。たとへば團子が腐つて蟲がわいたやうなものだ。地球に生物の發生したのはね。……大宇宙の生命から言へば、生物が地球に蠢動し得る期間は全く蜉蝣の如く短かいものだらうが、其の短かい間がうるさい。地球に穴を掘つて、水や礦物を求めたり、山をくづして道を開いたり、堤を築いて川や港をこしらへたり、生物のうちでも人間といふ奴は殊にうるさい。

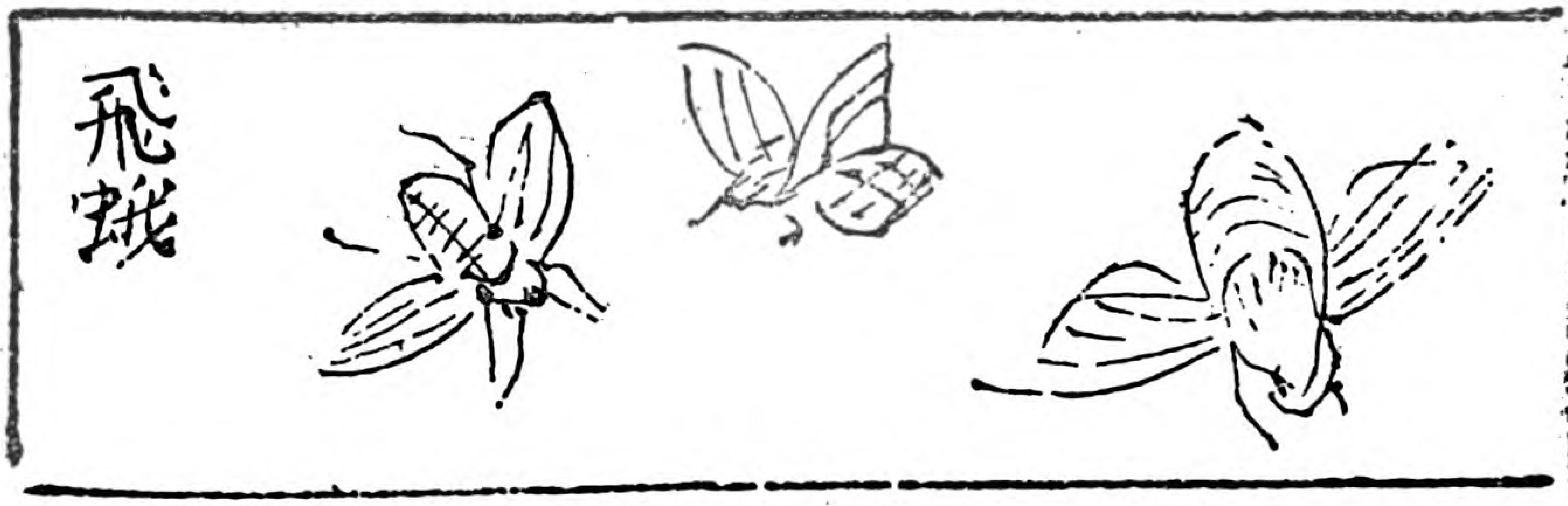
　人間以外で殊に好きなものは、月と魚とだ。月は地球の未來を語つてゐるからだ。嫦娥だとか何んだとか、美人にたとへられるから好きなのではない。輕石のやうな其の汚ない半面を地球の方にさらして、他の半面はいつも地球の方を向かない。お前も今にかうなるぞ、利慾や權勢のためにあさましい爭ひをしてゐても、かうなつては、一場の夢だよ、とでも言つてゐるやうな其の姿が好きなのだ。人間の小智惠が作つた望遠鏡を用うれば、月の世界をば東京から鎌倉ぐらゐの距離に引き寄せて見ることが出來る。近頃は月の世界にも微細な生物がゐると唱へ出した學者もあり、したがつて稀薄ながら大氣層の存在すること、チラ〳〵雪の降ることなぞを論ずる人もあるが、これに對して、また月の上には全然空氣がなく、生物の棲みやうもあるまいといふ說は、依然有力である。こんな議論なら、

群蜂



議論でも上品でよい。政黨といふ裸蟲の行列が合同するとか分離するとかいふやうな下司張つた議論は、聞いたゞけでも耳を洗ひたくなるけれど、月の上に生物の有無を論ずるなぞは、結構なことだ。およそ人間の社會を腐敗し墮落させたものは、政治で、ドオデエの言つたとほり、實にや政治は惡疫である。無爲にして化す、と老子の言つた如く、或はクロポトキンの說くやうな自由合意の社會を見出して、政治といふものを行ふ時代の來ない限り、人間社會は醜惡はどうすることも出來ないといふやうな、力みかへつた態度も、月を見てゐれば忘れてしまふ。政治上の或る示威運動に多くの人々が蟻のやうに集つてゐる前を、或る天文學者が通りかゝつて、何事が起りましたか、と群集の一人に問ふと、これ〳〵しか〴〵との答へを得て『何んだ地球上のことか。』と冷笑にも價ひしない風で、さつさと行きすぎたといふのは小氣味がよい。それほど地上のことを重んじない、むしろ輕視する學者だもの、地上のことは明日の地震を豫知することが出來ず、天氣さへ十時間後を滿足には豫知することも出來ないでゐて、天上のことゝなると、幾億里さきの星の目かたをちやんと量るし、明年は月蝕が何月何日の午後何時何十何分何十何秒に來るといふことを豫報して、分秒もまちがへないからえらい。

月に次いで、私の好きな魚は、不平を言はないところがえらいと思ふ。言はうにも聲をもたない。まことに無言無聲の聖者とは魚族のことだ。金魚を見たまへ、泉水の中でも、ガラス瓶の中でも、廣い狹いに不平なく、與へられたところを自分の世界として、悠々泳いでゐるではないか。禽獸蟲魚草木金石、萬物はすべて生命を有して、何事をか人間に敎へやうとしてゐるのに、人間の增上慢は、それを顧みないで、自ら萬物の靈長なぞと誇稱しつゝ、いつまでもいつまでも、醜劣野蠻な記錄をつゞけやうとしてゐる。



雷紋雲花之黑壺小傳

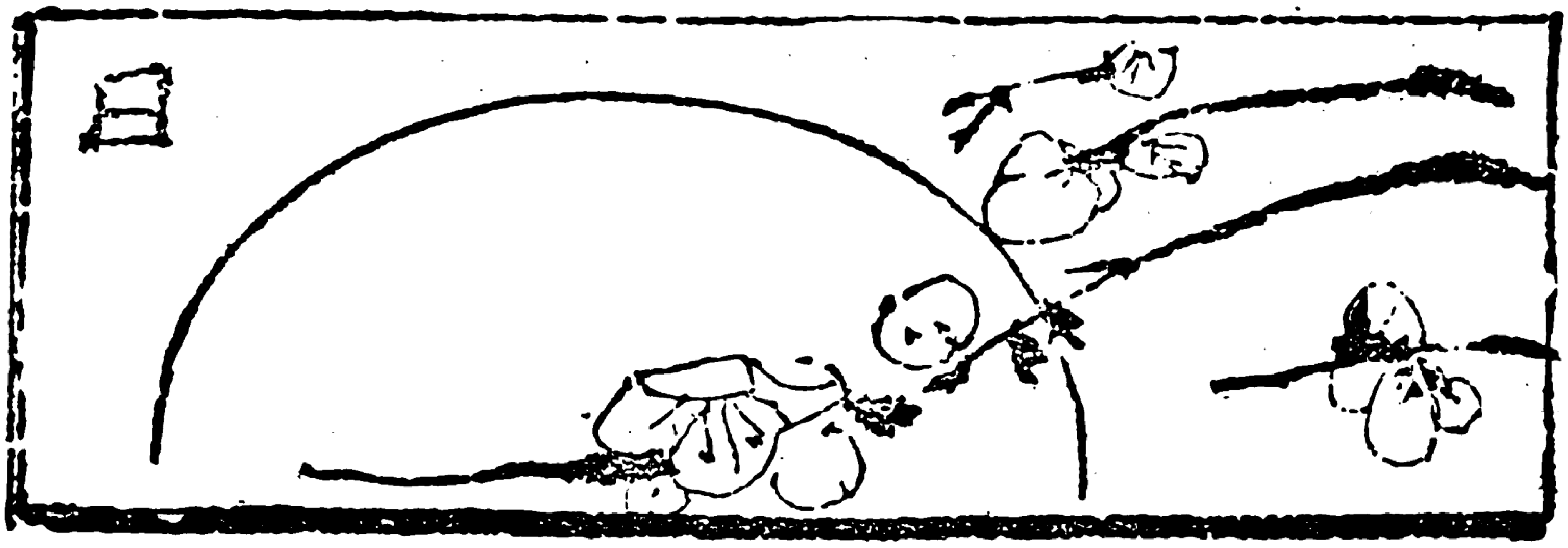
――この一篇を佐藤功一博士に捧ぐ――

山村耕花

俺は磁洲窯の黑壺だ。――ただ『黑壺だ』と言つただけでは、俺の價値は判らないかも知れない。が、俺が磁洲窯の雷紋と雲花の刻花の大壺だと知つたら、さういふもの丶價値を知つてゐる人なら、きつと俺を尊敬してくれるに違ひない。

しかし、俺にいくら雷紋や唐草の模樣があつても、俺だつて始めからそんなにねうちがあつたわけではない。『模範的東洋古藝術』だと言つて、俺がこんなに騷がれるやうになつたのは、ほんの最近のことだ。

殊に、今でこそ俺自身もそれを自慢にして『俺は雷紋雲花の黑壺だ』なぞと威張るけれども、その雷紋といひ、雲花といひ、決してそれを豫期して作られたものではないのだから可笑しい。ほんとうの『創作』といふものには、何の匠氣もないのがあたりまへであるけれども、俺達位また無造作に創作されたものも少ないだらう。……くるくると捏ねあげられた土が、多くの陶工の手で、思ひ思ひの『もの』の形に作られると、づぶりと倒さに釉藥の中に突つ込まれ、さて引き上げられた所で、その上に鐵片で、また思ひ思ひの『もの』の形を刻み、それを澤山同時に窯に抛り込んで燒き上げたものが、始めて世の中に出

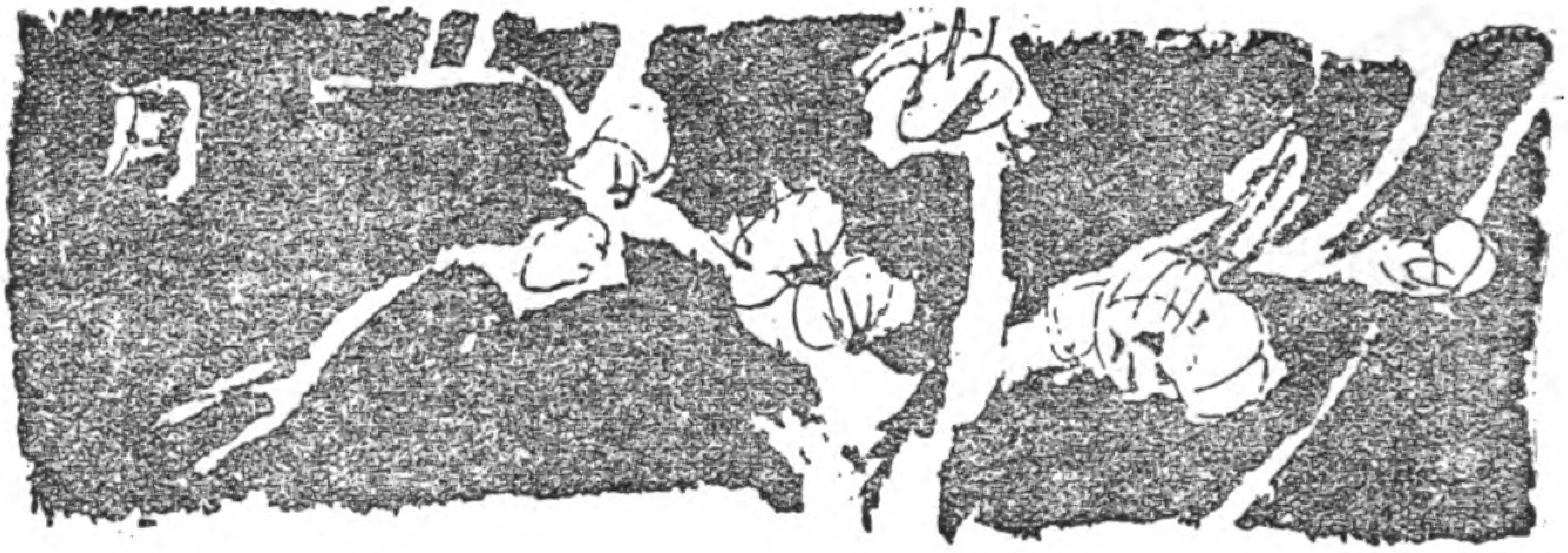


されたた俺達なのである。だから、俺達の作られるや、その作り出されるといふこと、そのことからしてひどく無造作だつたのだ。それで、その俺達を作つた宋の陶工の一人一人が、他愛なく鼻唄交りで思ひ思ひの『もの』の形を作り、刻んだ、それがみんな立派な創作だつたと言ふのだ。これは、何も俺が自慢で言ふのではない。今俺のゐる家の先生が、俺の前で盛んにさういふことを言ふので、俺も成程さうだつたのかと思つたわけだ。そこで、俺に芥川先生流の警句を吐かして貰ふと、『古代人の持つた一番のしあはせは、作り出すものが悉く創作であり得たことだ』と言ひたいのだが、これはどうも俺の創作ではないらしい。

さて、そんな理窟は『人間以外』の俺達の口にすべきことではない様だから、この位にして、これから一つ俺の生立ちを話さして貰はう。

俺は、今でこそかうして文明開化の日本の都、東京にゐて、こんなニスの香も新しい飾り棚の上で、氣取り家らしく澄まし返つてゐるけれど、そして、これも時世時節と諦めて、こんなブルジョアの眞似をさせられて甘んじてゐるけれど、俺はこんな生活は大嫌ひだ。何故と言つて、俺は前にも言つた通り、宋の磁洲の生れで、生れるとすぐ其の土地の茶館に賣られ、それから十年五十年、百年、二百年、全く俺は一プロレタリヤとして、完全に働いて來たからだ。だから俺は、人間の勞働者の様に、働くことを恩にきせたり、年をとつたからもう働きたくないなぞと言はず、今でもやつぱり遊んでゐるより働いてゐたいと希つてゐるのだ。

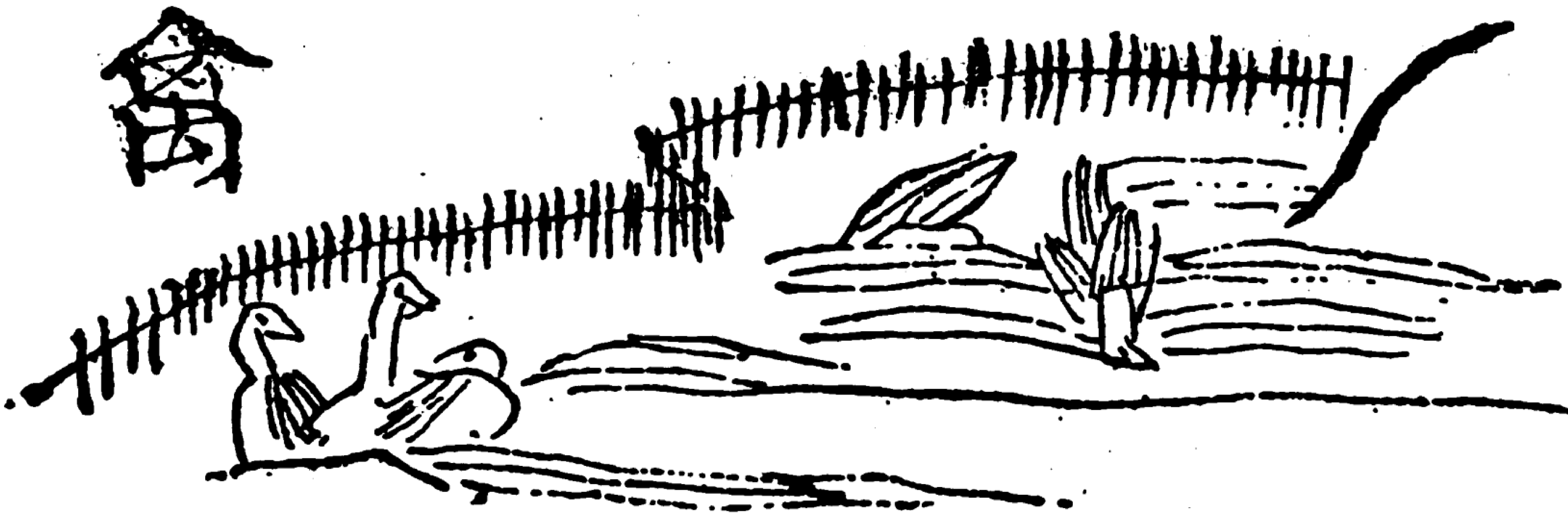
オット、また理窟になりかけた。どうも、俺は生れつき理窟つぽくていけない。



所で、俺達が生れる時は、前にも言つた通り、大勢兄弟が一緒だつたけれど、不幸にして他の奴等はみんな早世した。それは、生れる時から、俺の樣にいろいろ惠まれてゐなかつたせいもあるが、また一方その結果として自然過激な勞働を厭つたからでもある。また理窟かと言はれるから、もう理窟は言はないことにするが、俺が惠まれてゐたといふのは、俺を作つてくれた陶工が、第一どう感違ひしたか、馬鹿々々しく大きく、俺を作つてしまつてくれたことだ。そして、その次には、どういふか氣まぐれで、ぐいぐいと大削りに雷紋と唐草の模樣を描いてくれたことだ。これは、最初は實用的に、俺が何處へ行つても一番適切に『必要』だといふ所から、つい蹴つ飛ばされる所も蹴つ飛ばされずに濟み、次の時代には、形が大きいから何に使つても役に立つ、『間に合ふ』からまあ大事にしてやれ、といふ樣なことから、だんだん年數がたつに從つて、第二の雷紋と雲花が『珍らしい』のと『少ない』のとで珍重されて、たうとう今日まで生を完うして來ることが出來たわけなのである。

しかし、そんな運命的な惠みを俺に生みつけてくれた陶工の名を、俺は知らない。が、俺の兄弟達が殘らず生き殘つてゐたとしても、恐らく彼奴等だつて自分を作つてくれた親父の名を知つてはゐなかつたらう。大男の俺が、總身に智惠を廻しかねて、親父の名まで忘れたと思はれるのは殘念だから、兄弟まで引き合ひに出して證明して置くのだが、俺達の親父は所謂『藝術家』ではなかつたので、名をもつて俺達を作つたり、俺達を作つて名を擧げようとしたのではなかつた。ただ一個の實際的の陶工だつたに過ぎなかつたのだ。だから、俺達が親父の名を知らないからと言つて、俺達の出を疑つてはいけない。

それで、話は前に戻るが、茶館に買はれた俺は、その厨房の一隅に置きつぱなしにされ



たまま、豚の脂を入れられてゐたが、さうして其處に幾年ゐたらう。俺は自分の存在を忘れるほど永い間、從順にその茶館の厨房の一隅に働いてゐた。その間に、茶館の主人が代つたり、俺と一緒に來た兄弟が、お客同志の喧嘩の傍杖を食つて、二つも三つも土間に叩きつけて毀されたりした。が、そんな時でも、厨の隅に滿々と豚脂を貯へてゐる俺には、流石に誰も手をかけなかつた。

さうして、俺はたうとうその茶館が三代目の手で潰されるまで、其處にゐて　その時近所の村から出て來た百姓の青物屋に、その三代目の主人の手から譲られたのだが、その百姓は俺を驢馬に積んで、持つて歸る途中で、俺を驢馬の脊から落し、驢馬に蹴つ飛ばさして、今まで百年もの間、かすり傷一つ受けたことのないこの俺の、口邊を三分の一ばかり缺いてしまつた。

俺は口惜しかつたが、仕樣がない。無慘に粉碎されて、道路の盛土の足しにされたり何かした兄弟達のことを思ふと、俺がそのままその百姓から見捨てられなかつたことが、まだしものしあはせだと思はなければならなかつた。

けれど、何がしあはせになるか判らないもので、俺は口に怪我をしたために、今度は家の中の厨には入れられないで、豚小屋の中の隅に置かれて、豚にやるための殘飯や、腐つた食物の屑なぞを投げ込まれる入物にされたが、仕事の變つたことは、俺の氣分を清々さしてくれて、俺は大變有難いと思つた。それに、相手の豚君が肌ざはりよく俺つつきあつてくれるので、俺はなほ愉快に思つた。で、俺はまた其處で、一世紀ばかりの間、從順に働いた。その間、主人公の百姓君が、どんな風に錢を殘し、そして何代代つたか、そんなことは俺は知らない。俺は後から後から、生れては賣られ、生んでは賣られする豚君達

獣



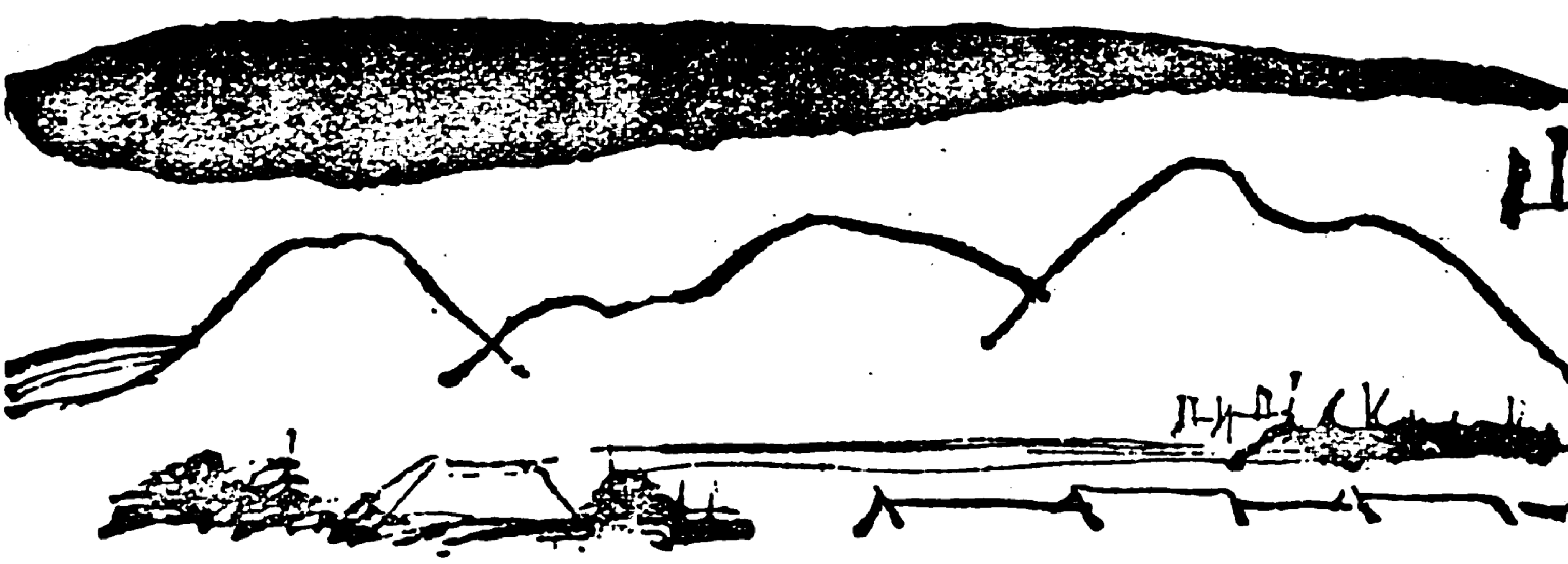
と、そんなことには何の哀愁も感じず、ただその日その日を、どろどろと、ぶよぶよと、暮してゐただけだ。

　が、どういふことが、どういふ風に起つたのか、俺は突然その豚小屋から持ち出された。まだ、朝早くで、豚達は眠つてゐたので、俺はたうとう仲よしの豚に挨拶もしないで來てしまつた。そして、それからの俺の生活は、ちつとも安定のないものになつてしまつた。何事が俺の身の上に起きたのだ。俺は西の方に行つて十年ゐたり、東の方に行つて二十年ゐたりした。或る朝は土藏の底に置かれたかと思ふと、或る晩は軒の下に大勢の仲間と上下に積まれてゐたりした。さうして、目まぐるしい程の流轉と、耐え得られない程の苦難との中に、樂しかつた生き甲斐のあつた前半生と同じ程の歳月、則ち二世紀ばかりを過してしまつた。

　その頃、外國の奴等が、俺の國の古代のことを研究すると言つて、いやに俺達を珍重することを、俺はよつぽど後になつて知つた。やつぱり大男だから、智恵のまはりが鈍いのかも知れない。

　同じ種類でも、細長い奴を『梅瓶』と言ひ、耳のある奴を『貫耳』と言ひ、俺達の樣なのを『丸壺』と言ふのださうだけれど、例の雷紋と雲花とで、俺なぞは特に珍重されるのだと言ふ。それで、俺が北京に出た理由も讀めた。

　俺は、その頃、北京近傍の田舍にゐたのだが、その頃しきりに田舍を廻り歩いてゐた安道具の、日本でいふ『はたしや』の樣な奴に見出されて、俺と一緒にゐた仲間二つと一緒にされ、三つで一弗で、その田舍爺から買ひ取られたのだ。そして、北京の城外で開かれ



山

る泥棒市にかつぎ出されて、そこで北京の東琉璃廠の玩藝齋に、多くの仲間と一緒に、ひつくるめて、一つ一弗づつで引き取られた。

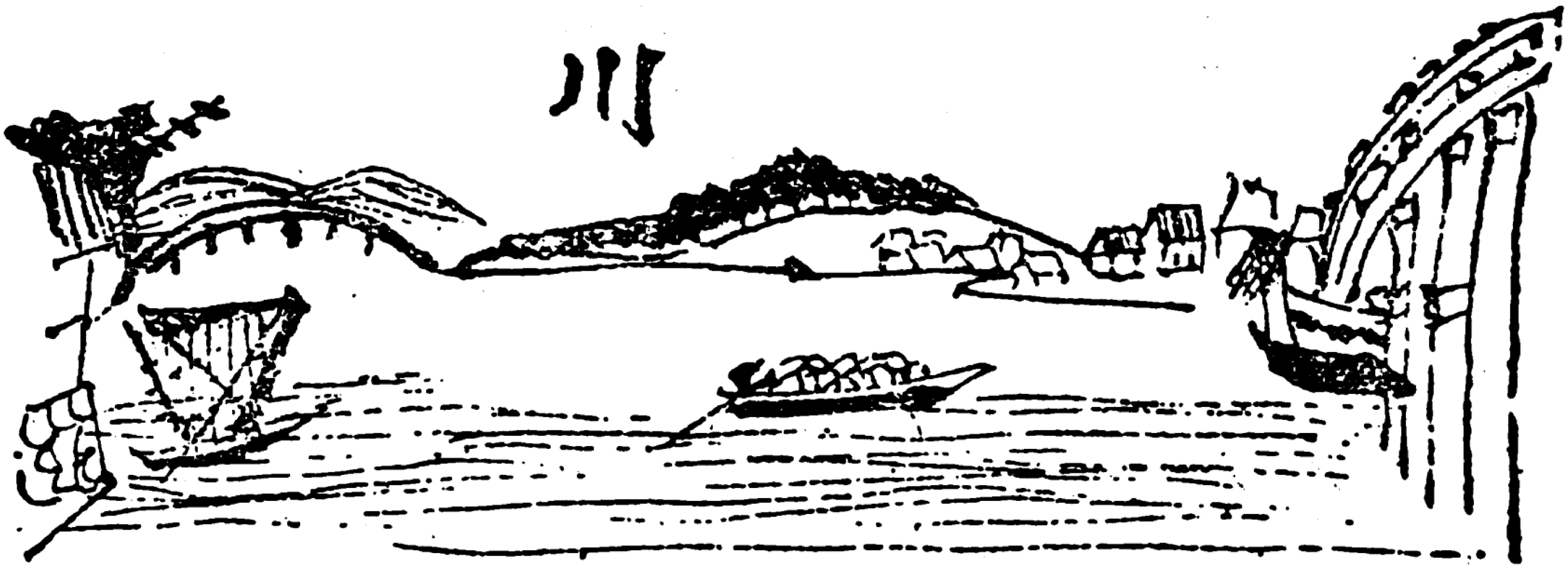
それからが大變だ。約四百年の間、豚の脂に浸み、肥料に染み、全身風雨にさらされてゐた俺を、玩藝齋の親爺め、三日がかりで磨いたは磨いたは、まるで今窯から出て來た樣に磨きあげてしまつた。そして、缺けてゐた口をペンキで修繕してくれたが、そいつが有難迷惑で、臭いこと臭いこと、永いこと豚小屋にゐたことのある俺も、この匂ひには耐えられなかつた。

玩藝齋の店に、俺と一緒に買はれて來た仲間は、隨分多かつた。俺は勘定にうといから數ははつきり判らなかつたが、玩藝齋の親爺は、たまたま大きな買占めをしては、自分の店の品物を補充するのださうだ。で、俺はそこで五百弗價を稱へられた。俺と一緒にこみで三個一弗だつた奴が、二つ共二百弗づゝで、一つはフランスへ、一つはアメリカへ買はれて行つたのを見ると、どうも俺の五百弗は高くはないぞと、その時俺は思つた。

しかし、俺がしばらく玩藝齋の店に居据つてゐた所を見ると、やつぱり五百弗では高いのらしかつた。が、間もなく、日本の東京から來た留錢洞の親爺のために、俺は三百弗に値切られて、たうとう俺は三百弗で日本に買はれることになつた。そして、その日の中にすぐ、やつぱり大勢の仲間と同時に、一つ一つ日本の首飾の樣なものに入れられて、俺達は天津から神戸へ渡つた。

三日の後、神戸へつくと、稅關の前で、俺達の仲間の一緒に來た十個ばかりは、みんな一緒に蓋をとられて見られたが、留錢洞の親爺は、この頃多く支那で出來る玉やヒスイや首飾りの安物を、うんと仕込んで來たと見えて、そんな樣なものが隨分澤山あつた。する

川

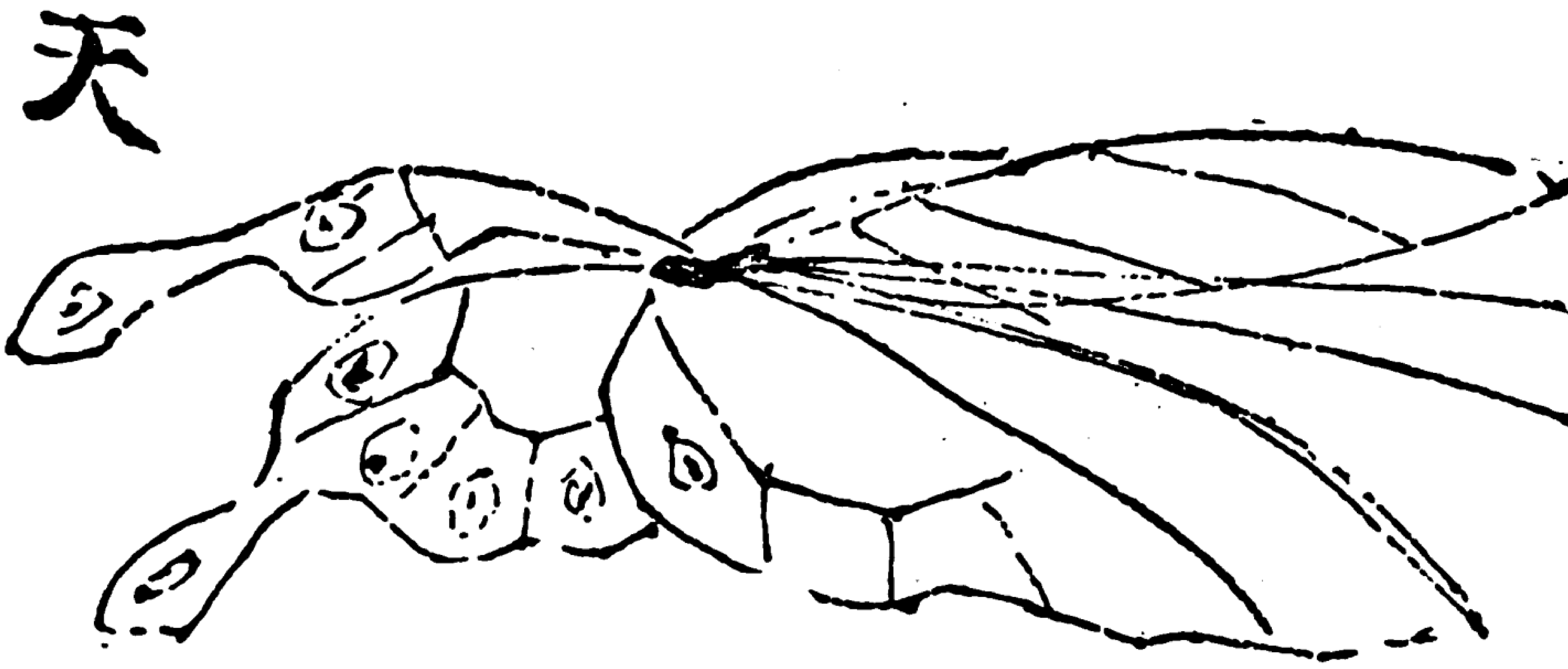


と、税關の御役人樣達は、原價一弗づつの其奴等を　一個五弗づつに踏んで、留錢洞の親爺の膽を寒からしめながら、俺達を見てもやつぱり二三弗位づつにしか言はないので、留錢洞の奴悦んで揉み手をしながら、横を向いては舌を出してゐた。流石に、俺は圖ウ體が大きいので、税關吏も俺だけは五弗と値踏みした。三百弗の俺が、たつた五弗だ。なるほど、税關なんてものは超世間的ものだなと俺もその時つくづく感じた。

　さて、それで税關は無事通過ときまつて、俺達も蓋をされようとする時、そこへ大阪と京都の川下の店の者が馳けつけて、またしばらく俺達をいぢくり廻してゐたが、結局俺達はまた元の通り蓋をされて、汽車の方へ廻されることになつた。それからすぐ、俺達は貨車便で東京驛へ送られ、またそこからすぐ京橋長通りの留錢洞の店へ運ばれた。――後で聞いて知つたことだけれども、京都と大阪の川下といふのは、支那からの荷物が屆くと、必らずその船着き場へ出かけて行つて、其所ですぐその品物の取引方を相談するのださうだ。で、俺なぞは結局値が折り合はなかつたのだらうけれど、氣がついて見ると、東京驛から店へ屆いた荷物が減つてゐる所を見ると、途中大阪と京都で幾個か下されたものらしい。

　その晩、すぐ俺達はみんな首枷から引き出されて、目が廻る程いろんな人間に見られたが、留錢洞め、うまく一人一人順に來る樣に豫めして置いたと見えて、一人來て歸つて、しばらくすると次の一人が來、その人が歸つて、座敷が片づいた頃に後の一人が來るといふ樣に、實業家や科學者や藝術家が、後から後から來るので、さうでなくても長途の旅に疲れてゐる俺達は、もうへとへとだつた。

　しかも、俺の仲間は大抵それで片づいたのに、俺だけは、その晩の中にはたうとう片づ

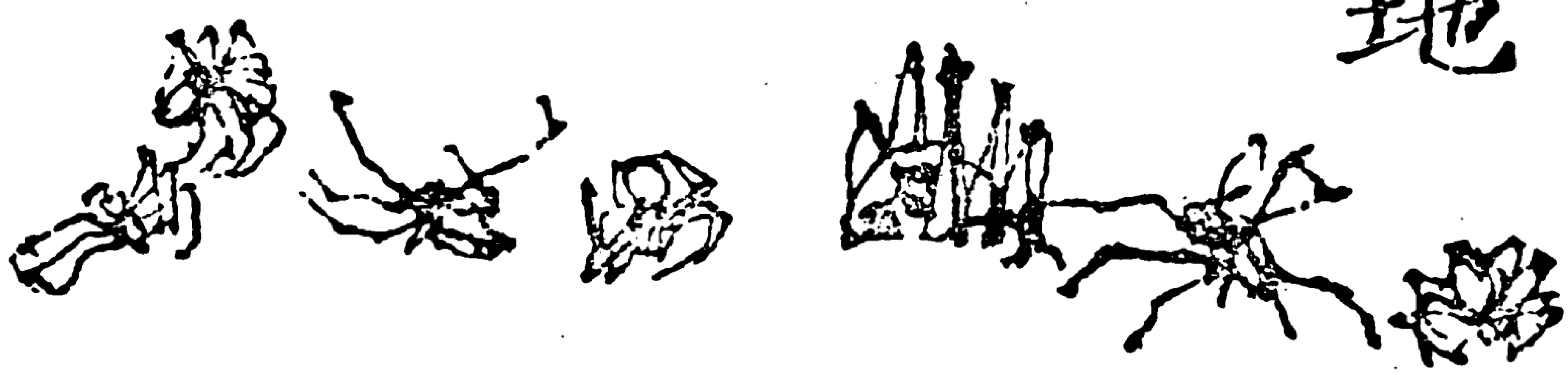


かなかつた。それは、やつぱり値段の點で話が纏まらなかつたのださうだが、留錢洞では俺を一千圓鐚一文缺けても賣らないと息組んでゐる奴を、見に來た奴等は六百圓、七百圓位までなら張り込むが、それ以上はみんな二の足を踏んだのださうだ。それを、今の俺の主人公が、この人はその晩も一番先に見に來た人だが、俺の口部の修繕してあることを指摘して、しかもそれを知りながら八百圓で買はうと言つたので、流石の留錢洞も我を折つて、漸く俺をこの先生に引き渡したのだ。

八百圓とは驚いた。最初は豚の脂を入れるより他には、使ひみちもなかつた俺が、今では八百圓で賣買されるのだ。俺の價値は、人の手を經れば經るほど上つて行く。この分で行くと、俺は今にプラチナよりダイヤモンドより高いものになるかも知れない。いや、なるかも知れないではない、こゝの先生の言ふことを聞いてゐると『單なる鑛物としてのプラチナやダイヤモンドなんかより、たとへ壺一つだつて藝術品の方が、ずつと高價であるべきが當然だ』さうである。さうだとすれば、八百圓位で驚いては『藝術』に對して濟まないわけだ。今後千圓以下だつたら、俺が動かないでゐてやるからいい。

何は兎もあれ、俺の此處へ來て驚いたことは、仲間の多いことだ。俺と同じ樣に外に出てゐるものだけでも驚く程あるのだから、この他戸棚の中や押入の中や、地下室にあるのを數へたら、恐らく數百個の多きに上るだらう。自分の國にさへこんなに俺達の仲間が存在してゐようとは思つてゐなかつた俺は、その仲間がこんなにこの國に來てゐようとは、夢にも思つてゐなかつたので、此處へ來てからは　ひたすらそれに驚きつゞけてゐる、

しかし、俺は此處に來てからは、ひどくしあはせだ。棚でも、壺でも、みんな俺のために特に作られたもので、『僕の所藏品中の逸物です』と、先生は俺を自慢してくれてゐる



が、事實今の所では俺より立派なものは、この家にはないやうだ。

俺の持つ黒の强さ、俺のこのほんとうの逞しさ、そして俺の持つ古さ、これを誰が眞似ることが出來よう。最近、この國で盛んに俺達の模倣品を作る人があるさうで、現にこの家にも二つ三つ來てゐるけれども、失禮ながら俺達とは比べ物にならないので、この家では肩身の狹い思ひをしてゐる、可哀想に。

莫迦、俺はこんな生活は嫌ひだ。前にも言ふ通り、ニスの香も新しい飾り戶棚の上で、俺は日本の平和な光に浴してゐるけれども、俺はこの家の主人公の喫む葉卷の臭ひよりも、支那で流浪してゐる時分に嗅ぎなれた阿片の臭ひの方が好きだ。また、俺はこの家の奧樣達の使ふ香水の匂ひよりも、あの茶館の厨夫達の豚臭い臭ひの方がずつと親しみ易い。

あゝ、顧れば過去四百年、俺の身の上ばかりでなく、何といふ世間の變り樣であらう。そして、俺の祖國の有樣はどうだ。自分の國の藝術すら、新しいものは興す力もないくせに、古いものはみんな諸外國に持ち去られてしまはうとしてゐる。おゝ、名もない俺の親父よ、お前の藝術は、今かうして茲に輝いてゐる。祖國の權威の日に日に失墜して行く時、その國の偉大な古藝術としての俺が、こゝに嚴然とその存在を主張してゐることを、お前へのせめてもの手向けにしよう。

哲學講座

婦人と哲學（第一回）

紀平正美

『女性改造』が更に改造せられるといふに際して、余に哲學の講話をせよと依囑せられたが、余は多忙の身で、とても其の責任を負ふことが出來ぬから、再三辭退したのであるが許されない。それで今の處毎月書き得らるゝか否かの保證も出來ないことを斷つて置かねばならぬ。又次に雜誌へ掲げるものとしての性質上一回で讀切られるものでなくてはならず、而も哲學の講話としては一回で說き盡さるべきものでない、連續的のものでなくてはならぬが、これは中々面倒な事である。公務の餘暇にこれが果して出來るか否かも覺束ない。然し引受けた以上はどこまでもやつて見る積りである。題して「婦人と哲學」といふ、此は通じての標題であると同時に、序論としての今回の題目でもある。

只今は哲學大流行の時代となつた。此は果して何を意味するか。顧ると甚だ今昔の感に堪えぬ次第である。余が當時唯一の大學であつた東京帝國大學の文科大學の哲學科を卒業したのが明治三十三年であつた。が其當時余は進んで哲學を専門として研究しようとしたのを、多くの人々から笑はれ又善意の注意を受けたやうな次第であつた。然しそれは當時にあつては又當然の事でもあつた。自然科學全盛期の餘波を受け、科學的の知識こそは唯一に正確なる知識であつて、哲學とは、云はば書物のみを讀んで居て、瞑想をのみ事とする空想空論であるかの樣に考へられて居たのである。それには哲學の方にも其の罪がないでもなかつたが、哲學果して空理空論を事とするものとなすべきか、然るに今や時勢は又變化して來て、哲學が流行する樣になつたが、其の理由は、唯一なりと信じて居た科學的知識の破綻からであるとなすべきである。否な正當に云へば、科學的知識其のものが誤謬であるといふ事でなくして、其の正當なる用法を考へなくて、直ちに

其を實際上の社會生活にも及ぼし得るものと考へて企圖せられた方法の結果が、今日の樣な所謂思想變動の根本動機となつたのであるから、—その詳細の事も亦後に讓つて置く、—總てを正當なる所へ置かもとする所から、(而て此れが約百五十年前にカントが始めた批評哲學の意味であるから)哲學即ち批評哲學が最近に於て特に强く要求せられる樣になつたのである。それで今要求せられて居る哲學の意義は、總てある所のものを頭から間違つたものとして捨て去るといふ樣な態度を取るのでなしに、總てのもの〻成立の條件を考へて、それを正當なる用法の下へ歸そうとするのである。それで若し今日の哲學は常識とは違ふにしても、其を以て、何等か奥深き或は我等の生活に縁遠き所の秘密を知らんとするもの、又知り得るものなりなど考へたならば、大なる誤解である。

このことをもう少し詳しくする爲に、批判(或は批評)といふ事に就て考へて見る。小兒だとて相當に發達したものならば、自分が直接に關係するものに就て、食物でも、玩具でも、其他人々に對してでも、好き嫌ひの判斷力を有する、即ち批評をする力を有つて居る。即ち一般に人間としての人間ならば、此の力を有つて居ないものはないのである。(而て玆に人間性の尊い所があるわけであるがこれも後の議論に讓つて置く)、然し玆に考へなくてはならぬ事は、斯る批評に直ちに二種の區別があるといふ事に氣付かされるといふ事である。其の一は、小兒の批評に大人が其の儘に服從することが出來ないと同樣に、自分が他人を批評しても、直ちに其の人をして服從せしめることの出來ない樣なもの、即ち無力なる批評と、其の二は多少理窟から云へば服從し難い樣なものと雖どうしても服從しなくてはならぬ、又服從せしむる力のあるところの批評とである。此の力の出所は那邊にあるかは、更に考ふべき問題であるが、前者のやうなものは、一般に主觀的のものと呼ばれる。主觀的といふ事は、一般「自分に關係した事」といふ意味であるが、自分一個の云はゞ我が儘な批評が無力であることは最早論ずるまでもない事であるが、更に一個人でなくとも、例へば家の爲め、國の爲め、乃至人類の爲めと考へてのものであつても、猶ほ我に關係してゐる限りは主觀的である。即ち何等か爲にするものである限りは、畢竟主觀的のものである、而て主觀的なる批評である限り、相手は之をほめれば所謂御調子に乘つて來る、之をそしれば悲觀する。何れにしても人を生かす力はなくて、却て殺してしまう事になる。此の事はよく實際の場合に當つて考へてもらへば、いくらでも其の例證が見出されるであらう。

そこで學問的に要求せられることとは、斯る主觀的なものでなしに、公平なる態度卽ち客觀的なる批評の原理は何かといふ事となる。卽ち此の要求からして、先づ第一に出てくることは、上記の判斷力を又二つに分けて考へることである、卽ち好き嫌ひといふ樣な主觀的の判斷は、之れを價値の判斷(或は判定)といひ、其れを脫した所の、事實あるがまゝの判斷を、事實の判斷とする而て一般の科學の要求する所のものは事實の判斷であつて、價値の判斷ではないとする。斯くて科學は何人にも通ずる所の共通的普遍的なるものを求めることを以て其の職とする。それで例へば法律上の裁判でも、科學的知識が一般になつてから、事實の判斷と、其の上に條文を適用する所の判斷(玆には判決といふ)とは十分に區別せらるゝ。それが昔流の裁判と如何に相違するであらうか。玆に我等は斯る區別の明了にせられた事に就て感謝しなければならぬのであるが、同時に現在に於ては更に又考へなくてはならぬ事になつた。それは法律上の判決といふ事も、社會の複雜となるにつれて、そう簡單に行かなくなつたといふ事である。(此の事も亦詳しくは後に論ずることゝする)。

何人も承認する所のもの、例へば共通的なるものを求め得るとした所で、卽ち玆では例へば法律上の條文がそれであるが、それが必ず批判の力を有し得るであらうか。法律上の條文は、勿論或種の範圍に於ては十分に力を有し得るであらうが、一切の行爲を之に由て律することの出來ない事は明了な事である。更にそれを一般にして、ネグロ人にもホツテントット人にも共通する樣なものを求めた所で、更に一般的に云うて、正義人道といふ事が求め得られたとした所で、それが日常の生活に就て何んの批評力になり得ようぞ。夫婦の德を實現して居ない人が、夫婦關係を批判する力はない、子を有たぬ人が親子の關係を批判する權利はない、卽ち玆には一般に書物や學校で敎へられた知識其儘では往かない。勿論其等を無益といふのでないが、其等の知識を實際上に活用した上に、實現して來た力でなくては、批判の原理にはならないのである。それで今余は玆に哲學の講話をするのであるが、只それを讀み流しただけでは、何の益にも立たず、否な所謂生兵法大疵の本である。却つて害になることがあるかも判らない。

そこで實際上哲學が六ケ敷くなる。若し科學的に批判の原理を求めるとするならば、それは不可能ではないかも知れぬが、共通的なる普遍的なものでは、等しく無力となることである。實際科學全盛期以來、從來は哲學の內に屬すること、

又哲學的といふ事が、哲學を以て深奥なる眞理を研究するものなりとせられる所から一種の名譽であつたが、科學的でなくては空理空論であると考へられる樣になつて以來今日では却て科學的といふ事に一種の魔力を有する事になつた、それで從來哲學に屬してゐたものゝ皆な科學として獨立する樣になつたので、哲學がなほ存在する權利を有するならば、批判の原理―之を「當爲」と名ける―は科學的に研究するのが哲學の唯一の職分なりと考へられる樣になつたのである。然るに所謂科學的の方法では、其の求めらるゝ當爲が等しく無力となる。

科學的の興味は、或はそれで滿足せられるかも知れぬが、實際に役立たぬものとなる。茲に又所謂學者なるものゝ陷る弊害があることを知らねばならぬ。例へば學者が他の書物なり學説なりを批評するに、色々其缺點を數へ、茲に長所もあるが矛盾もあるといふ樣な事を指摘するのであるが、其によつて學者的の興味は滿足出來るかも知れぬが、實際は無爲且つ無力になつてしまう。即ち批評が眞の意義にして批評にならないのである。

それで結局主觀的であり且つ客觀的である樣な（これが即ち絶對的と名つけられる所のものである。換言すれば絶對的とは、それを否定し去らんとすることが却てそれを肯定しなくてはならぬ樣なものを云ふ）批判の原理は如何にして求むきべか、此れが即ち哲學の問題であつて、然も哲學の六ケ敷い所以である。然もこんな樣な働きは、只の夢ではない、上述の如く我等が批判をする、或は批判を受けるといふ場合に、賞しても罰しても、共に生かされる樣な力を感ずることは事實あるのである、而してそれが哲學の問題であるだから、哲學は空理でも空論でもない、たゞ其の研究の方法が科學的では不十分であるといふ事に歸着するのである。更に例を取つて説明して見る。母親が子供を叱るとする。眞に母としての働きがあるならば、子は擲たんとふり上げた手の下にもぐり込んでくるであらう。眞の批評は又これと同樣である。即ち活かす力である。それならば此の力即ち母性愛と呼ばるゝ所のものは、既に氣に入る或は入らぬといふ樣な、主觀性を超越した所のもの、即ち「母性愛」である。然も此の母性愛は、書物を讀んだり講義を聞いたりしてのみ得らるゝ所の客觀的の知識でない、自ら努力によつて實現したる働きでなくてはならぬことは明瞭であらう。哲學とは即ち斯る母性愛の如きものを、更に普遍的なるものとして求めることである。

さて哲學を斯るものと考へて、婦人が果して哲學的たり得るか否かを考へて見る。長く女子教育に從事して居る某老教

が、婦人ほど不可解なものはない、歴史が又よく之を示すが如くに、存外つまらぬもの、事理のわからぬものであると同時に、又非凡なる力をも有つと云はれた事もある。又ある友人が、女性の改造ほど今日の急務はない、然も何故に女子がこうも其の生活を合理化することが出來ないであらうかとも云ふた。余はそれには直ちに答へざるを得なかつた。合理化することが出來たならば、最早婦人でないが故にと。卽ち其の意味はこうである。—婦人には共通的一般的のものを捕へるに不都合なる本性を有つ。而てそれは全く子孫を產み且つ其を育成するといふ天分からたのである。現今の婦人に若し此の天分に就て語るならば、恐らく女子の職分は生殖のみではないといふであらうが、然しそれは生殖といふ事にどれだけ偉大な力があるかを忘れた、自己の天分を輕視した、自ら自己を捨てた議論と云はねばならぬ。實際婦人の產育といふ仕事は、前を承け後に續けるといふ、永恒性の直接的表現である。此の直接的なるものを一轉して、永恒性を得れば、女性其れ自らは哲學それ自らであると云はねばならぬ。然るに若し一般的なる原理を求め、所謂科學的なる知識を得ることを以て、其の儘男子と比肩せんとするならば、それは本性上不得意なものを以て競爭せんとすることであつて、始めから問題とならぬ。よし若干の例外はあるとした所で、條件の條件を考へるといふ樣な科學的のものは、婦人には不向きである。其の直接性の爲の故に、一般的なる原理をも惡用する傾向がある。例へば何等か自分に氣に入つた理論があるとするならば、直ちにそれに執着してしまつて其の理論が却て口實とせられるのである。理論の爲の理論といふ事は除程の修練を必要とするのであるが、其れが婦人には產育の爲に出來ないことになる。昔し希臘に於てはソークラテースを相手に堂々と哲學論をした婦人があつた。而て其の內でもアスパシヤといふ婦人などは其の名も後世に傳へられた程のものであつたが、然しそれは皆な娼婦であつた。日本でも近古迄は太夫といふものがあつて、堂々男子を相手とし得る程の學者もあつたのであるが、然しそれは現に婦人としての天分を捨てたものであることを知らねばならぬ。茲に余が娼婦だの太夫だのを持ち出したならば、新しかりやの女性には甚だしき侮辱と感ぜられるであらうと思ふが、茲に哲學的思考を要する大切なる點がある。卽ち娼婦や太夫の如きものが存在する樣になつた理由條件を考へることが、哲學としては又大事なことゝなるからである。

それで哲學に就ても亦考へて置かねばならぬ事がある。卽ち

ち哲學其れ自らの當體と、所謂專門の哲學とである。上記の理由によつて、專門の哲學が女子にも可能であるかと云ふならば、余は否と答へなくてはならぬ。何となれば專門となれば、謂所科學にも、一通りは目を通さなければならず、其の上哲學としての主なる問題が、時代により東西によつて、相違するのであるから、其等にも一通り通曉するには、哲學史をも知らなくてはならぬ。然も特に婦女子に最も不得手な所の論理學が哲學には必須的のものとなる。此の論理學にも勿論又種々の立場があるが、最も普通のものは、形式論理學であつて、形式を形式として取扱ふ事は、實際直接的なる事を其の生命とする婦女子には、最も不向のものと云はねばならぬ。此等の準備的の學問は、其れ自ら多年の修練を有する、而て此は男子と雖も甚だ困難なるものである。世間には獨學的の自稱哲學者が無いでもない、而て此等の人々の多くは、大學教授など、所謂職業的の哲學者に對して、一種捕はれたるものとして非難するといふ癖を有つ。然し實際上準備的の學問が不足するものから、只今哲學としての問題が那邊にあるかを知らない、從つて多くは獨りよがりの原理を握んで、自ら得意となつて居るといふ場合が少なくないのである。されば婦人に於ては猶更の事と云はねばならぬ。勿論斯く言ふものゝ、婦人と雖、專門の哲學が全然不可能なりと斷言するのではない。やればやれない事はない。然し本來が不得意であるものであるから、男子が十の努力で出來るものを、婦人では千度するの覺悟が必要となる、即ちそこで婦人としての天分を捨てゝの事となるのである。ショウペンハウエルが女は性慾の結晶である、女の學問など、犬のチンチンの如く巧なりと雖醜なりといふた事を、婦人に對する單なる惡罵と見てはならぬ。

若しそれ同時に哲學の當體から云へば、專門的の學者がともすれば傳統的のものに捕へられ、科學的一般的のものに止まつて、所謂惡き意味での職業的のものに陷る弊害があるに反して―而て此の弊害は一般的のものなりと考へて、實は主觀的に墮したものである。―婦女子にあつては、直接の生活其れ自らが、母性愛として轉回せられるが如くに、少くとも主觀性を脫却した大なるものへ到り得るのである、而て婦人は只其の大なるものを捕へ得て居ることを自覺せないのが缺點なのである。即ち余は此の自覺を促したい爲に哲學の講話を爲さんと企てたのである。

それで先づ第一に此の講話をつゞけるに際して諸姉に告げたい事は、自己日常の生活といふ事に深き反省をなしてもら

ひたい事である。我等の生活は生活の爲めに充足せしめられる、生活の目的が生活以外にあるべき筈がない。我今茲に斯くあり」これより外に、明白なる終局的事實はない、其の事實を充足せしむるのが哲學究畢の目的なのである。其れ故にじつと自己を眺めなくてはならない。徒に文化生活だとか、生活改善などいふ、比較から出て來る空想を理想などと間違への、所謂新しき風をするのが改造だなと考へてはならない。我と彼との比較から出る所のものは、畢竟一般的の原理に過ぎない。批評の眞の意義ではない。而てそれは畢竟模倣である。模倣に何の新しい所があらう。如何に新しい學說であつても、風俗であつても、其が模倣である限り、現に古きものと云はねばならぬ。眞に新しきものは、自己の生活の充足よりする自己の創造でなくてはならぬ。而て其れが新の意義での文化である。婦人は學問の哲學者たり得ないが、其の生活の轉回によつて、即ち文化の原動力としての哲人たり得る。婦人に自信力なくして其の本性を墮落せしむる時に、社會は其の原動力を失うて國家が爲に滅亡することは、歷史上に明白なる事實である。佛教に於て菩薩が女性として表現せられ、其他多く民族の神話に於て、主宰的の神が女性として描寫せられて居ることに就て、婦人は三省又三省を要する。天理教に、自己の教祖が婦人であることは、そが陽の教へであるかと云ふのも、理なきにあらずと考へなくてはならぬ。婦人は過去現在未來に通ずる發展の原動力である。

（一三、六、二）

寧ろ性を禮拜せよ（二）

「女人の性禮拜」を讀みて河田嗣郎氏に

平塚らいてう

三「社會的差別觀と差別待遇」に就いて

ここで御論じになつていらつしやいますことに對する私の不滿もつまりは私が前に申上げましたやうなあなたの空想的な、獨斷的な男女の無差別平等主義、性の差別を直に人間としての價値の相異の如くお考へになるところの謬見、人間の性生活に對する偏した見方、婦人問題をあまりに單純にも個人主義的な立場からばかり御覽になつて、他の多くの社會問題との關係を殆ど無視して居らつしやることなどに歸せらさるべきものではありますが、（そしてこれらのことも結局はあなたの婦人論が初期の婦人論になほ沈滯してゐると私が申上げましたあの一言に盡きてゐることとですが）この項はわけても婦人の生活に對する——殊に現代の婦人の新しい惱みや、苦しみや、悲しみに對するあなたの無知や無理解を最も露骨にお示しになつたものとして何とか申上げずにはゐられない氣がいたします。

それは婦人の保護制度に對するあなたの反對意見として婦人解放を叫びながら、保護制度の必要を唱へる私共婦人の立場に對するあなたの疑惑又は抗議として現はれてゐるものに對してでございます。

尤も保護制度の反對論者は決してあなたばかりではありません。私が初期の婦人論者と呼ぶところの所謂女權論者は大方さうなので、この問題に對する賛否は、婦人問題の歴史に於て、否現在に於てさへもなほ爭點となつて居ることのやうではありますが、私から見れば、反對論の理論的根據が例のあの淺薄な、非科學的な無差別平等論である限り、最早今日

に於ては、その中に含まれた反抗的感情に意義を認める以外取るに足らないことであるばかりか、斯う言ふ間違つた理屈の實行は遲かれ早かれ自然から婦人各自の心身の上に、又は社會、人類の上に復讎されるのは明なことですし、又實際上の有力な反對理由としてこれ迄度々擧げられた保護制度の實施による女子の失業の如きは寧ろ局部的な、そして一時的な現象で、これに對しては他の適當な救濟策を講じればいゝのですから、これとても保護制度そのものに對する反對としては根本的なものではありません。その上あなたはこの制度を、女子を男子以上に優遇するものと考へるならそれは間違ひで、實は寧ろ反對に女子は一般的に男子よりも虚弱で、低能で、とかく劣れるものなるが故に、これを憐んで保護しやうとするものだといつて女子の名譽のためにお拒みにならうとなさるかのやうですが　もし社會や男子のこの制度に對する態度が果してさういふものなら、この誤つた態度を正すべきであり、又保護といふ言葉がかうした誤解に導くおそれがあるなら言葉を改めればそれでいゝのではないのでせうか。男女が生理的、心理的に異る以上　又そこから女子には男子にない身體上の故障もあり、人間生産の大きな社會的な仕事を擔つてゐる以上、男女に對し異る待遇が要求されるのは當然で、どちらの不名譽をも意味しないのは言ふまでもないことで　殊にこの保護制度の如きは女子から言へば社會に對する婦人の特權であり、社會から言へば社會の婦人に對する義務に過ぎないと思ひます。

何事も只外部に現はれて來たことだけより見ない者にとつては、婦人解放といふこととこの保護制度とはどうやら相容れない矛盾したことのやうに見えるかも知れませんけれど、單なる表面の理屈に迷はされず、現實の婦人の生活を直視し、正視するものは、所謂婦人の解放と共に、保護制度が今日いかに實際に於て切實に必要とされるか、少くとも今日の社會組織、勞働界の狀態はこの制度を通じてでなければ婦人の職業乃至勞働生活の可能が望み難いことであるか、更に進んではもつと十分な意味での婦人解放は今日既に行はれ、或は要求されてゐるところのものよりも、もつと完全な保護制度を必要とするであらうといふことをも認めねばなりますまい。

どれほど多くの婦人達が、時代の新しい夢に導かれて、同時に經濟組織の變化に起因する一般男子の經濟的無力による婦人自活の必要に迫られて、所謂男性の寄生から經濟的獨立へと、家庭生活から職業乃至勞働生活へと走つたことでせう。又現に走りつゝあることでせう。さうして彼女たちはそ

こに何を見出したでせう。職業は彼女たちが夢想してゐたやうな自由な天地を彼女たちの前に開展したでせうか。彼女たちは自分たちがひたすらに望んでゐた經濟的獨立によつて本當に解放されたでせうか。

別種の奴隸生活！そこに彼女たちは夫とよぶ主人の代りに、資本家又は傭主とよぶ主人のあることを見出さねばなりませんでした。勞働や職業は彼女たちに、自分一人がどうやら食べて行けるだけの收入を與へることは出來たでせう。併しこの所謂經濟上の獨立は彼女たちがもつところの勞働力の全部と、その若さと、美しさと、愛と彼女たち自身の健康は勿論、現在もつところの自分達の子供も、未來にもち得べき子供も、否時としては彼女自身の最後のものである魂までも、資本家の利己心の前に提供することによつて僅に得られるものだといふことにやがて彼女たちは氣付かねばなりませんでした。これは何といふ現實の大きな矛盾でせう。

かうして婦人達は自分達の自由と獨立のために要求した勞働、その勞働のために今自由と獨立とを叫ばなければならない羽目に立ち至つたのです。

今日のこの勞働界の狀態は男子にとつても決して好ましいものでないのは言ふまでもないことでありませうけれど、それがもと／＼男性の勞働界であり、そこへ直に婦人がそのまゝ乘り出して行つたのである丈、婦人にとつては一層よくないものでなければなりません。

あなたが女性保護又は母性保護の例としてお擧げになつていらつしやるやうな夜業の禁止、短時間の勞働制、（これが要求せられるのはあなたが言はれる通り、婦人が男子よりも體的に虛弱だといふ理由によるのは勿論でせうけれど、勞働市場に於て婦人を實際以上に弱くし疲れ易くしてゐる他の一つの大きな原因は婦人には男子が持ち得るほどの休息がないことだと思ひます。何故なら男子は勞働から放たれゝばあとは只休息があるばかりですけれど、婦人には――妻や母である場合は勿論たとへ娘であつても家庭へ歸れば歸つたですぐ炊事や掃除、洗濯、裁縫、繕ひもの、子供や老人の世話などといふやうな雜多な仕事が彼女の手を待つてゐるのが今日では普通なのですから寄宿女工か何かでない限り、婦人勞働者は二重の勞働を負つてゐるので、休息、睡眠の時間は男子よりも一般に少いのです。併しこの事實はともすれば見落されてゐるやうですから、ここでは別に重要なことでもありませんけれど序に書き添へました）產前產後の保護、乳兒を有する母たる勞働者に對して授乳時間を與へること、有毒物を取扱ふ工業に乳

兒の母の使用を禁ずることなどの今日既に或る程度まで行はれてある差別待遇はもとより幼兒ある母の戶外勞働禁止の要求の聲の如きも私に言はせるなら、今日のこの男性勞働界の劣惡な狀態の中で現に働いてゐる婦人勞働者たちの悲慘な數知れぬ經驗に基いて、實際上の必要から要求され、且つ制定されたもので、言はゞ一つの應急策のやうなものなのですから、あなたのやうにそれを現實から切りはなして、只單純に、思想的に――といふよりも寧ろ假空的に――性を禮拜する傾向の表れであるとか、社會的差別觀に基く差別的待遇であるとばかり見てゐられるのはあまりに吞氣過ぎるやうに思はれてなりません。若し婦人に對する何等の特殊待遇も今日なかつたとしたら、彼女たちはどうするでせう。その勞働生活をよく繼續して行くことが出來ますでせうか。恐らく婦人勞働界は今日よりも一層頻繁な新陳代謝によつて辛うじて支持されるより外ないことになり、同時に私共の家庭又は社會は絕えず多數の犧牲者を受取らなければならないことでせう。これを婦人個人の不幸であり、母態の破壞であり、未來の人類の破滅であるといつても別段誇張した言分でもなんでもない筈です。かういふ大きな禍を前にして、私共婦人が女性又は母性の權利のために、同時に子供の權利のために默してゐられないのは當然なことではないでせうか。

私は人間としての男女共通の權利（又は義務）と共に女性としての異なる權利（又は義務）のあることをも認め且つ主張せずにはゐられません。

あなたは今日の婦人達が性の殿堂に片足をかけて、下りたり、登つたりして叫んでゐるとおつしやいました。自ら門戶を閉鎖して解放を叫んでゐるともおつしやいました。そしてそれは大きな自家撞着であるとおつしやいました。併しあなたのお眼に只これだけのこととして映つてゐるこのことの中にこそ現代に生きる婦人たちの限りなき惱みと苦しみが潛んでゐるのではないでせうか。ここにこそ今日の實際問題としての、容易に解決し難い、多くの困難な、併し生きた婦人問題が橫はつてゐるのではないでせうか。

さうです、解放の途上にある現代の婦人たちはあなたがお考へになつていらつしやるより以上に餘に惱み、苦しみ、さうして闘ひつゝあります。彼女たちのこの惱みと苦しみと、闘ひがどんなものであるかそれを一口にここに言はうとすることは困難なことですけれど、併しその最も大きなもの、又は中心となつてゐるものは、何といつても婦人の結婚生活（家庭生活）と職業生活（社會的生活）との矛盾、或は母性

と職業性との爭鬪であり、この相容れない二つを如何にして調和するかの努力であると言へると思ひます。例へばかの結婚制度、家族制度改革の叫び、保護制度の提唱、家庭の社會化としての共同炊所及食堂、育兒院、託兒所の設置の要求等の如きも皆右の矛盾、爭鬪を取除かうとする努力の試みであるとも見らるべきものでありませう。

私の考へでは、一般に男子（無論婦人解放論者であるところの）及び未婚の若い婦人は母性と職業性との間の衝突に就いてあまりに容易に考へ過ぎてゐると思ひます。且つ彼等はいづれも申合せたやうに、兩者の間の調和を見出さうとはしないで、母性を否定することを解決の唯一方法だと考へ、又これをもつて婦人解放の正しい（又は止むを得ない）進路だと考へてゐます。併しこれは母性に對してあまりにも無智であつたり、强て眼を閉ぢてゐたりするからで、女性の心の深奥な要求を拒み、生命そのものに背を向けてゐるやうな婦人解放は私に言はせるなら最初から行き詰つたものです。

本當の婦人解放は、婦人の家庭生活と職業生活との調和に於て見出さるべきもので、これは二つの生活を兩立せしめ得るところの社會制度の中に求めるより外ありません。すなはち私が夢想する社會に於ては、總ての婦人が勞働の自由を得て、男子と同樣にあらゆる方面の社會的任務に從事し得るとともに、家庭に於ける母の仕事も亦他の男女の仕事と同樣（否それ以上にさへ）重要な社會的任務であつて、それによつて收入は無論、社會的地位と一個の人間としての權利をも與へられるのであります。母性保護制度も單に母の勞働を禁止するといふやうな消極的なものでなく、こゝまで進んだとき、總ての婦人を完全に解放することが出來るでせう。

以上不完全ながら申述べたことによつて、あなたのおつしやるところの婦人解放と私がいふところのそれとの距離、相異といふやうなことがほゞ御承知頂けたらうと存じます。なほ「殿堂を降れ」と「主義の問題たるよりも事實の問題」といふ二つが殘されて居ますけれど、結局同じことを別の言葉で申上げるやうなことに終ると思ひますから、枝葉の點に就ては多少まだ申上げたい事も殘つては居るやうですけれど、これで筆を擱きます。實はこれ丈書きますのも健康と戰ひながら可成り無理をしましたので、不十分と知りつつもつい書き直す根氣がなかつたりしてそのまゝに手放しましたので、言葉の整はないため失禮に聞えるやうなところもきつと多からうと存じますが、どうぞお咎め下さいませんやうに。

（一三、五、三〇）

樂聖シユーベルト

—菩提樹について—

馬場二郎



（上）

柔かな靄が、ゼリツツをこめて居ります。その中を蒼々と漂ふ月の光は、絶えず浮動しながら、むかふの峠路から灌木林を撫でゝそれを暗い影からくつきりと浮ばせて居ります。鬱々たる樹々の影には、暗闇と寂漠が宿り、あたりはたゞシーンとして居ります。でも廣々とした空地では、その暗闇は愼ましやかに銀灰色に……殆んど仄白くなつて……恰度この靜かな夜の息づかひのやうに往つたり來たりして居ります。

今、一人のうら若い娘が、羊腸の小徑を降りて來ましたが、この樹陰の切れて居る空所へ來ると、ちよつと立ち止まつて、耳をすませました。長いスカートが地面につかないやうに掲げて持つ右の手は、むつちりと肥えて、而もたわやかに見えます。また、その丸い大きな瞼の中に輝く黒い眼は、子供のやうなあどけない微笑を漂はせて居るやうに思はれます。美しい月影が、娘の眼の上を横斷つて流れて行つたからなのでせうか？娘はなほも、じつと立つて、あたりの樣子に氣を配つて居ります。

こちらの樹陰には、さつきから一人の青年が佇むで居りました。そして娘の姿が眼に入ると、それを食ひ入るやうに眺めながら、獨り悦し相に微笑して居ります。彼は、しばらく待つて見ました。でも待ち切れなくなつたと見えて、とうとうその樹陰を離れて、二人の間に在る空地を横斷りました。

娘は、こんなに突然、青年が近づいて來ても、少しも驚いた樣子も見せないで、じーッと彼を眺めて居ります。そして、彼

が自分に寄り添ふて立つた時、始めて靜に口を開きました。
「靜かな、いゝ晩ですことね……シューベルトさま。
「實際、素敵な晩ですね……御姫樣。
青年も柔らかに……でも少しは笑談らしい口調で、故意と叮嚀にから申しました。すると、娘は探るやうに彼を見下しました。そして、狡滑さうな眼で、じろ〳〵と見廻して、おつかぶせるように申します。
「でも……あなたは……なぜ、御邸の中でピアノを彈いて被居らないんですの？
「夜が、私を誘ひ出したのです。
青年は少してれ氣味に……そして、少しはおど〳〵しながら、やつとのことで、これだけ言ひました。
娘は「わかつた！」と言ふやうな一瞥を、青年の額の上を掠めて閃めかせますと、つと、あちらへ行くような樣子を見せました。彼は、あわてゝ、娘を遮りました。
「いや、お歸りになつてはいけません。
彼はもう、息をはづませてゐるのです。娘はちよつと立ち止まつて、疑ふやうな眼つきで彼を眺めました。
「だつて、わたし……散歩に來たんですもの……
娘は、二足、三足、行きかけました。そして、また、立ち止まつて、肩越しに、ふり返つて、聲をかけました。
「ぢや、あなたも、一緒にいらつしやい……
彼は、跳るやうな歩取りで、娘の傍へ飛んで行きました。そして、二人は歩調を揃へて、大跨に默つて歩き始めました。
總ては、柔かい夜の紗面に包まれて、淡い夢のやうに儚いて居ります。あたりは寂として物音一つありません。ただ、時々、何處かの藪から、クー、クー、と可愛らしい音が微かに聞えて來ます。リンネツトが夢でも見て居るのでせうか？
娘は、瞼の下から時々、閃くやうな一瞥を彼に送ります。然し、彼は、そんなことには一向御關ひなしで、その大きな顏に、遠慮なく、悦しさを一ぱいに溢れさせて居ります。そして、絕えず、その厚い唇を靜かに動かしながら、何か口の中で唸つて居ります。
「何を考へて被居るの？
突然、娘は口早やに尋ねました。彼ははツとして、夢から醒めたやうに、娘のゐる事に氣がついたのです。そして、どぎまぎしながら、
「何あ——に……小さな歌曲ですよ。今頭腦の中を走つて居るんです……
「ぢや、わたしに歌つて見て下さい。」

娘は、命令するやうに申しました。彼は、またも、はつとして口ごもつてしまひました。「困つたなあ！…」と云ふ樣子がありありとその顏に現はれて居ります。

「いや……いや……未だ、うまれては來ないんです。

娘の眼は、流れて行く月の光を浴びて居ります。

「御出來になつたら、聽かせて下さいませね……？

娘は、今度、柔らかに申しました。

「無論ですとも……もう、何にも彼も、ちやんとわかつて被居るくせに……。

彼は子供らしい羞恥に滿ちながらも、「無論」と云ふ言葉に、妙に力を入れました。

娘は、しばらく、待つて居りました。そして、また、靜かに口を切りました。

「あなたは、未だ一度も、わたしに歌曲をデディケートして下さいませんのね……先生。

娘は、ちよつと、間をおいて

「御父樣には、もう四曲も下さつたくせに……。

娘の聲は、恨めし相に響きます。

「でも、御父樣は伯爵なんですもの……。そして、去年はマリイさんに一曲と……、どうして、マリイさんに御上げになつたんですの？、……えゝ？……それから……皆さんのために一曲……でも、わたしには小さい歌謠一つ下さらないぢやありませんか！

無限の恨を含む娘の言葉は、ひしひしと青年を責めたてます。と、月が突然雲の中に隱れてしまひました。そして、娘の顏は、今、面紗で覆はれて居ります。

青年は、全く度を失つてしまひました。でも、質朴な顏を上げて一心に、娘を見上げて居ります。

「あれは、みんな、あなたのですよ。何にも彼もちやんと知つて被居るくせに！、

低い聲は、優しく、たゆたへながらも、娘を逆襲いたします。

「もう……やがて、六年の間……あれは、みんな、あなたのものでしたよ……私の作曲したものは、なんでも、みな……

大きな眼は、じーツと娘の顏に見入りました。それは哀訴に滿ちて！不器用ではありますが……愛くるしく輝いて居りました。

然し、娘は、それには眼もくれません。

「わたし……聞き度くて、聞き度くて、耐らない曲が一つありますのよ。

娘は急に調子を變へて、はしやぎながら、から申しました。

「あなたは、それを一度御唱ひになりましたわ……もう何年も前に……あの櫛で……でも、もう、あれから一度も伺ひません……。

娘は、愛くるしく、笑ひ出しました。

シューベルトは、やつとの事で、微笑しました。素野な……でも、子供のやうに純な微笑が、また、流れ出しました。そして、今までの痛々しい樣子は、いつとはなしに消え去つて居ります。

「ぢや、また、聞かせて上げませう。例の「魔王」の事なんでせう？……さうです……あの「魔王」をね。

娘は默つて頷いて見せました。

「私が、再た還つて來たら……その時、きつと彈いて上げませう。

娘は、突然、立ち止まりました。そして、不安相に

「あなたが、還つて被居つたら……？

眼を丸くして、青年を見据ゑました。その眼は最早や、笑つては居りません。

青年は月の光を浴びながら、大きな……而も不器用な拇指で、丸くふくれ上つた鼻を、性急で、こすりました。

「いや、私にだつてわかりません……然し、私は行かなければならない……私はそれを知つて居る……

娘は、いら〳〵しながら、青年の手をむづと握つて、ゆすりました。娘はもう、泣き聲になつてゐるのです。

「いや……いや、私は決して、あなたを遣りません。いやです……。

シューベルトは娘に優しい一瞥を返しました。その大きな眼鏡の下で輝く眼は、じーツと、娘の眼に見入りました。しばらくして、娘は顏を伏せました。

「何故、御出かけになるの？

娘の聲は、不安さうに哀願し始めます。

すると、沈默して居た青年の顏は、靜かに、娘の方へ對き直りました。

「あの小さな歌曲が……私を呼んで居ます……あれが出來上つたら、再た、あなたの所へ……還つて來ませうよ。

娘の眼は、悦し相に、瞼の下で微笑いたしました。

「あの小さな歌曲……あのう……あれを私に下さるの？

娘は愛くるしく、尋ねます。

「さうですとも！　あれは、勿論、あなたのです

青年は、自分の前に、哀訴するやうに、うつむいて居る顔を見つめて居ります。

「あの歌曲……あの奴は素敵に可愛らしい……あれは人を直ぐに、快活にさせてしまふ……

青年の眼は、きら〳〵と輝き出しました。

「あれは、私にひたと……本當に抱きつくやうに、ひたと寄り添ふて來る……

彼は、また、默つてしまひました。その顔には、夢中になつて、何かに聽き入つて居るやうな樣子があり〳〵と見えて居ります。と、その沈默は、短かい……早い溜息で破れました。

「歌曲が……再た……急に起つて來たのですか?……先生?

青年は、首を振りました。

「いや……他のが……そうです、他のが……でも、今のではありません。今度のは、いつものとは非常に異つて居ります……非常に可愛らしくて……しとやかで……遙かな彼方から……そして、雪のやうに純潔で……あ……それが、今私をしきりに呼んで居る。

此處まで來ると、彼は、ふと、口籠つて、自分の前に眼を伏せて立つて居る、この美しい……そして、育ちのよい顔を熱心に眺めて居ります。

「いや、私には、どうしても、それが言へない……どうしても出來ないんだ……

青年は、しばらくして、獨語のやうに再た、言葉を續ぎました。

「でも、歌曲が……そうだ、私の生命の籠つた歌曲が、私に代つて言つてくれる……そうだ、私がまた此處へ還つて來た時に……。

娘は、顔を上げました。そして、なかばは恥かしいやうな……非常に愛くるしいヂエスチユアーをしながら、シユーベルトに手を差し出しました。と、月の光は、またも彼の女に面紗を懸けてしまひました。

「では、御待ちしますわ……

娘は、優しく申しました。

「どうぞ、その歌曲をね……御待ちして居ますわ。

シユーベルトは、娘のむつちりした手を、しばらく自分の唇に當てゝ置いて、それから、輕く、それを娘の唇へもつて行きました。

夜は、靜かにまろむで行きます。そして、時々に、クー、クーと云ふ微かな聲が夢のやうに聞えて參ります。彼はくる

りと廻つて、やがて、影の中へ消え去つてしまひました。

（中）

DER LINDENBAUM

Am Brunnen vor dem Thore,
da steht ein Lindenbaum;
ich träumt' in seinem Schatten
so manchen süssen Traum.

Ich schnitt in seine Riude
so manches liebe Wort;
es zóg in Freud' und Leide
zu ihm mich immer fort.

Ich musst' auch heute wandern
vorbei in tiefer Nacht,
da hab' ich noch in Dunkel
die Augen zugemacht.

Und seine Zweige rauschten,
als riefeu sie mir zu:
komm her zu mir, Geselle,
hier fiud'st dn deine Ruh'!

Die kalten Winde bliesen
mir grad, ins Angesicht,
der Hut flog mir vom Koafe,
ich wendete mich nicht.

Num bin ich manche Stude
entfernt von jenem Ort,
und immer hör, ich's rauschen:
du fändest Rube dort!

Nun bin ich manche Stunde
entfernt von jenem Ort,
und immer hör ich's rauschen・
du fändest Ruhe dort!
du fändest Ruhe dort!

——Wilhelm Müller

菩提樹

泉に沿ひて
茂る菩提樹。
慕ひ行きては、
うまし夢見つ。

幹には彫りぬ、
愛の言葉。
うれし、悲しに、
訪ひし、その影。

今日も過りぬ、
暗き小夜中。
眞闇に立ちて、
眼閉づれば。

枝は戦ぎて、
語る如し、
「來よ、いとし侶伴、
此處に幸あり。」

面を掠めて
吹く風寒く。
笠は飛べども
捨てゝ急ぎぬ。

遙かさかりて
佇まへば、
なほも聞ゆる
此處に幸あり。

遙かさかりて
佇まへば、
なほも聞ゆる、
「此處に幸あり
此處に幸あり。」

——近藤朔風氏譯

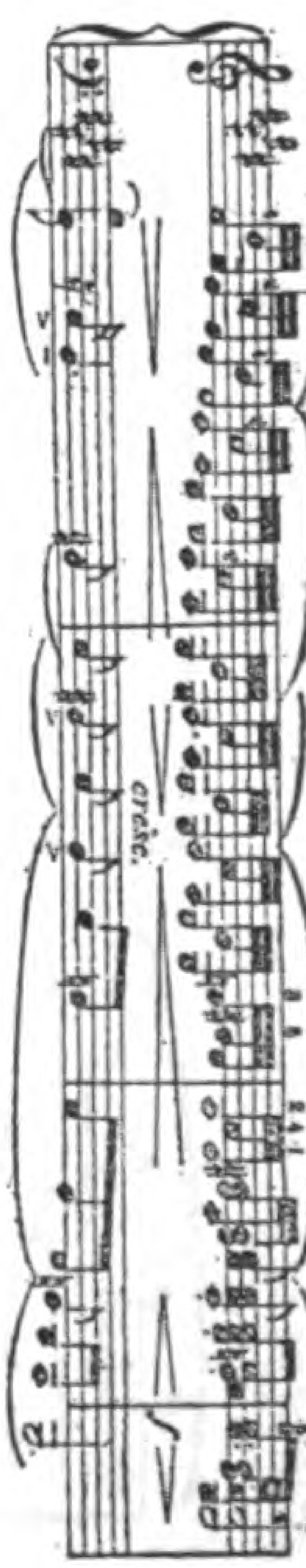
これは、獨逸の詩人ヴヰルヘルム・ミューレル（Wilhelm Müller）の作つた有名な「冬の旅」（"Winterreise"）の中に納められたものなのです。そして、それに、浪漫的樂派の

創立者であり、その祖父と呼ばれて居る、歌曲の帝王フランツ・ペーテル・シューベルト（Franz Peter Schubert）が作曲したのです。

皆さまは、この詩をお讀みになつて何うお感じになりますか？更に、シューベルトの曲歌を御唄ひになつて、それをどう御解釋なさいますか？勿論、詩又は音樂に對する——そして、博くは、藝術一般に對する——觀照は各個人の自由なのです。極端に言へば、その人自身の絶對境地なのです。然しながら、今茲で、私の解釋を御求めになるならば、私は、これを遣る瀬ない戀の悩み——戀の悶え——戀の矛盾——を歌つたものではないでせうか？と申上げます。

先づ、この歌曲を唱ふ時——私は、もう茲で、詩を離れてしまひます——私の眼の前に展開するのは、水々しい菩提樹を中心として、そのわきにある、靜かな湖の面をめぐる、柔かな春の夜のアトモスヒーアです。





ピアノの部の序奏は、この靜かな……柔かい春の夜を亘る微風に、梢が悦しげに身震ひする……その葉づれの音を響かせます。風が絶えると、嘆息のやうな葉づれの私語も、一しきりは、はたと休みます。そして、それは、夜の神秘の中に音なく溶けて逝くのです。

と、その時、忽然として、夜の寂漠を破つて、

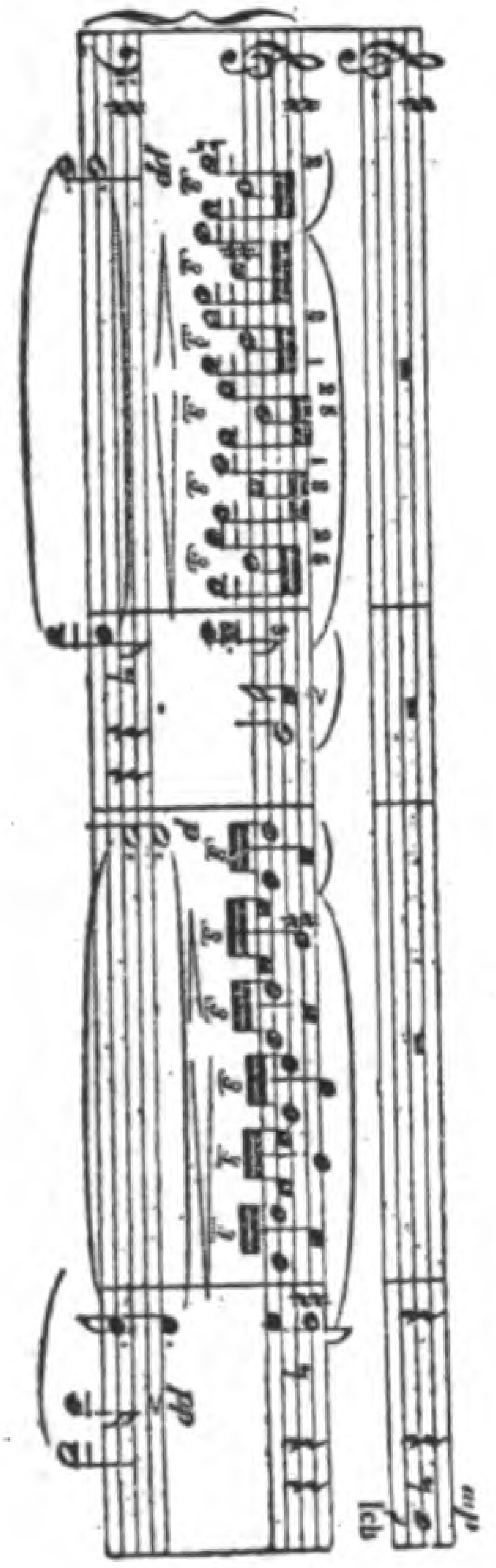
“Am Brunnen vor dem Thore——

と唱ふ、懐しい歌聲が流れ出ます。そして、その歌聲と、歌聲との間には、悦しげな葉づれの音が、またも、聞えて參ります。



この第一節は、文字通りの叙景なのです。戀人は、今、甘い接吻と、樂しい戀の囁きを思ひ浮べて、心ゆくまでその幻想にひたりながら、美しい戀の繪巻物を繰つて居るのです。菩提樹は、申すまでもなく、「戀」を象徴したものなのです。若い二人は、悦しいにつけ、悲しいにつけ、あの水々しい菩提樹の下へ來て、同情と戀愛の樹陰で、慰めあひ、勵ましあひ、美しい希望の未來を囁いたと云ふのです。

と、今度、ピアノの部からは、今までの華やかな、馳想的な音調に引きかへて、淋しい、憂欝な葉づれの音が、短音階で響いて參ります。

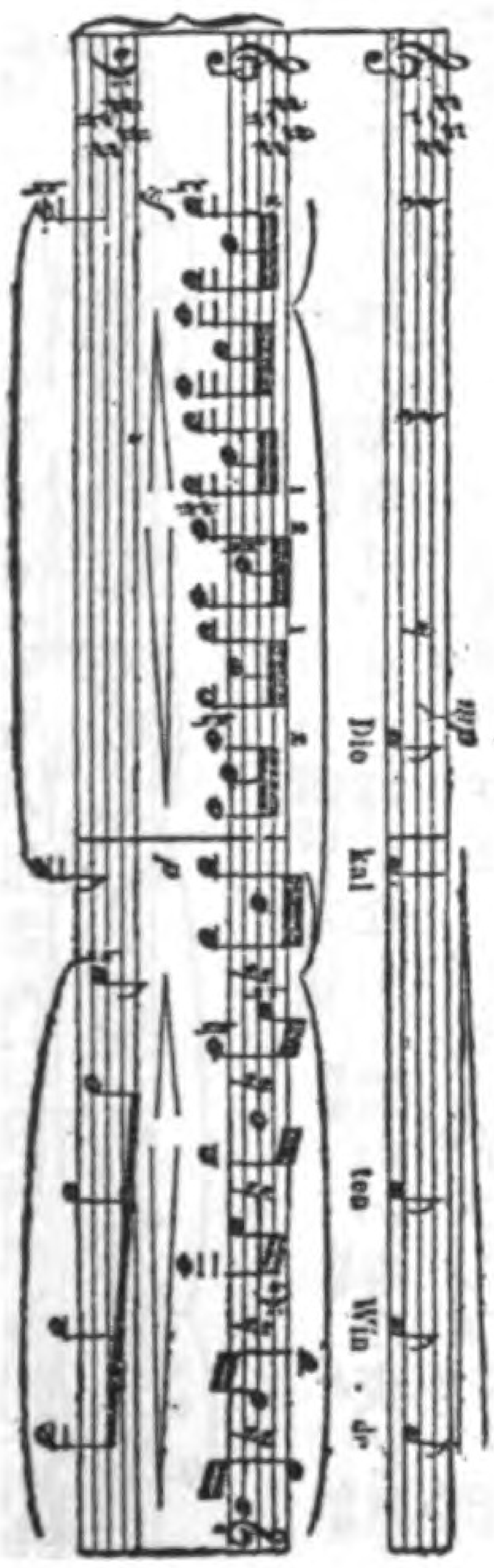


そして、梢からは——底氣味悪い程な夜の寂漠と神秘を揺りながら。——嘆息の聲が漏れて來るのです。

Ich musst' auch heute wan'ern
vorb.i in tiefer Nacht.

「今日も過りぬ、暗き小夜中……」と云ふのは、つまり、戀人は、今日も亦、人知れず、この戀を求めたのです。此處では、勿論、總てが、皆寓意的——暗示的——なのでありますから——「眞闇に立ちて眼閉づれば……」と云ふのは、本當の景色そのものといふよりは、むしろ、戀人のため獨りの心境と云ふ風に見た方がよいのです。眼を閉ぢて、思ひを凝らして聽くと「伴侶よ！こつちへ被居い。菩提樹の陰へ被居い……そして、戀をなさい、……そうすれば、あなたは幸福になります……」と、葉は、微かに身を震はせて、恰も戀に醉ふて居るかのやうに……恰も戀を讃美して居るかのやうに……忍びやかに囁くのです。そして、誘惑（?）するのです。

俄然、この夜の深い寂漠を破つて、一陣の强風がさつと梢を掠めると見る間に、場面は忽ち一變して、時ならぬ大暴風



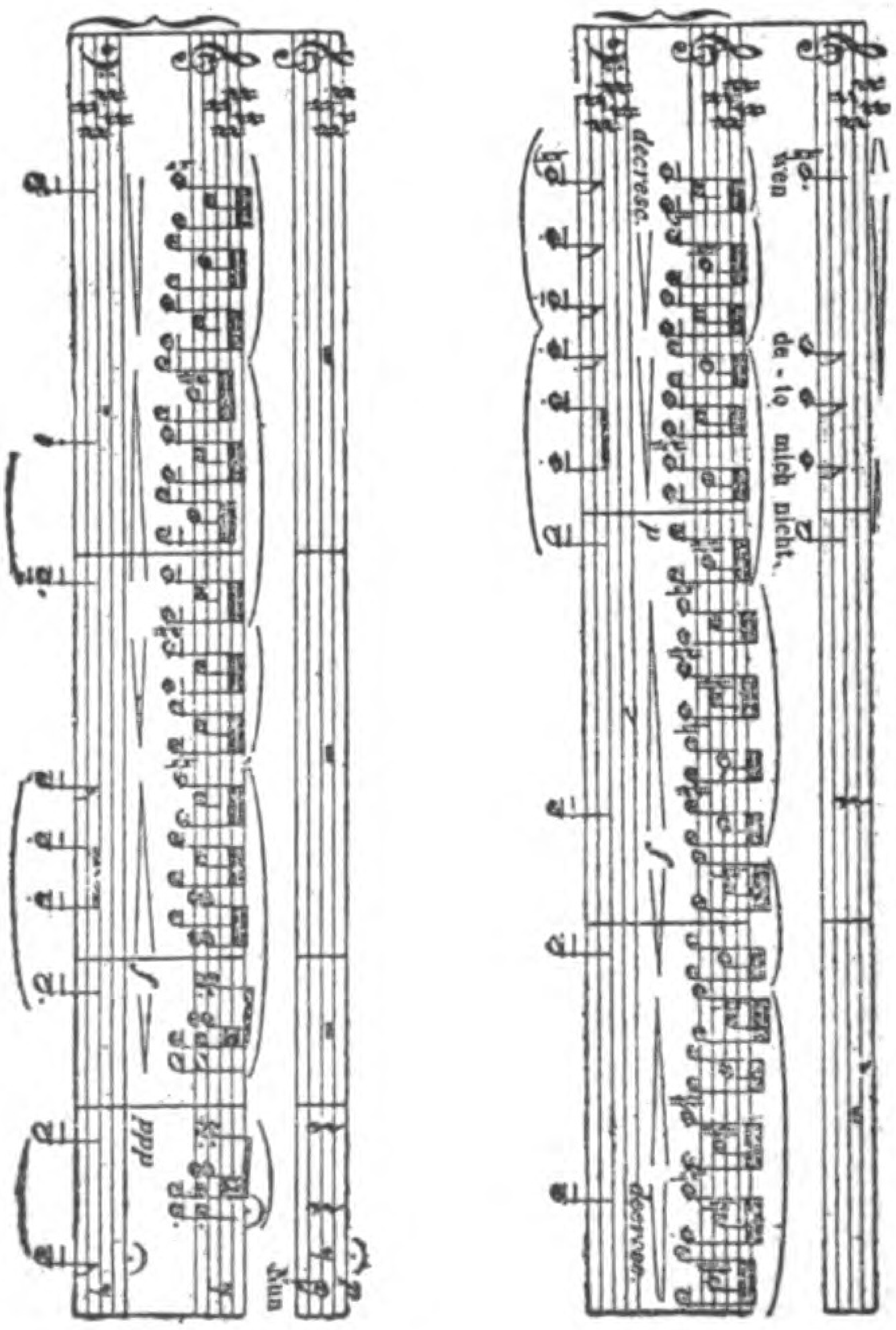
雨となつて參ります。見よ！梢は狂はしげに、絶叫し始めたのです。

"Die kalten Winde bliesen――

彼が今、かうして戀の馳想に醉つて居た時に、忽然として理性が還つて來たのです。そして、それと氣が附いた時、青年は、恐れに戰いたのです。彼は忘れて居りました、……本當にすつかり忘れて居りました。人の世には、強い冷たい北風のある事を！二人が戀して居ると知つたら、人の世は、それを何人と言ふのでせう？人は恐らく、二人を不義密通呼ばはりをするでせう。「御家の法度」として、石で打つでありませう。彼は、それを思ふ時に、本當に恐ろしさに、身を震はせたのです。もう戀などに耽つては居られません。一刻の猶餘もなく、その場を去らなければなりません。そんな、思ひは、ふり拂はなければなりません。

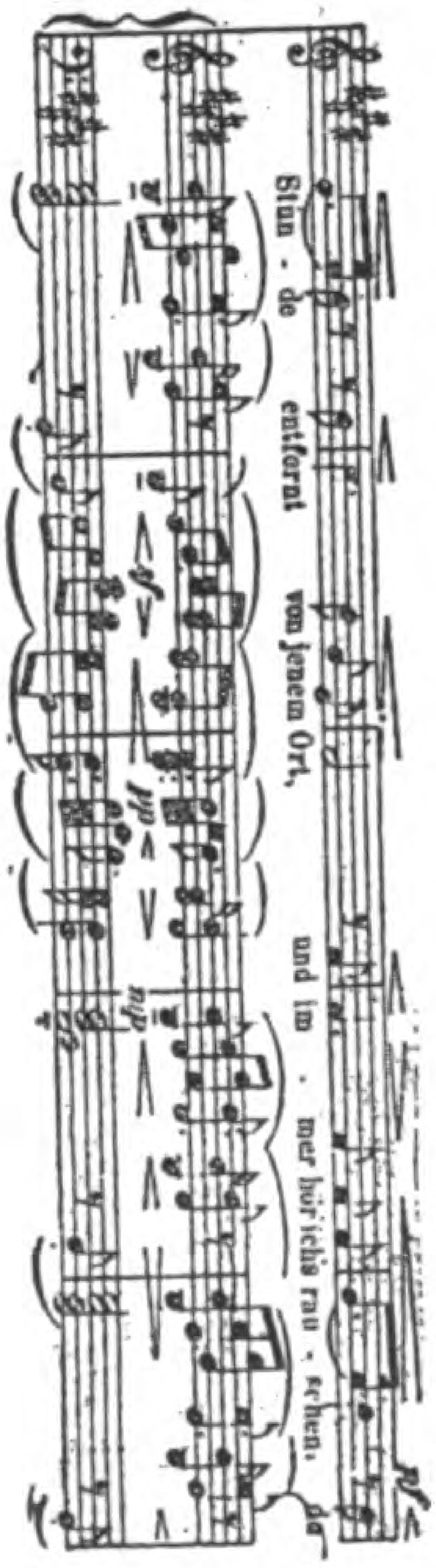
"der Hut flog mir vom Kopf,
ich wendete mich nicht――

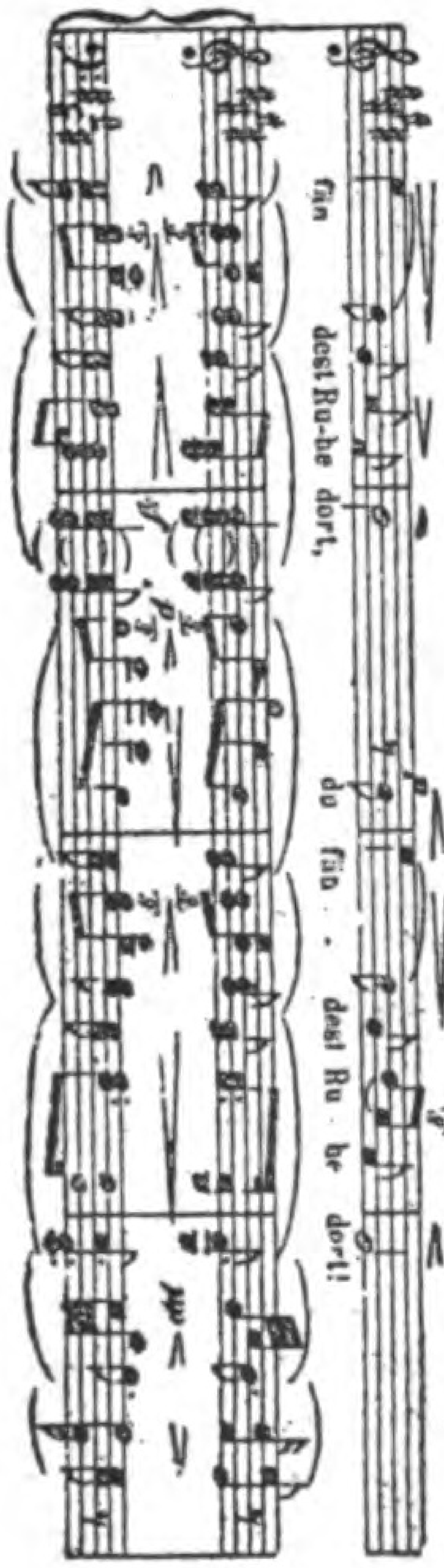
彼は、風に飛ばされた笠――名殘――を そのまゝ其處に打ち捨てゝ、後をも見ずに、ひた走りに走りました。そして、彼の後には、なほも、嵐が一としきり強く、吹きすさびます。



然し、しばらく行く中に、心の中の嵐もやうやく靜まりましたので、立ち留まつて、ほつとしたのです。かうして逃れ來て、安全地帶に入ると、またも思ひ出されるのは、あの懷しい、泉のほとりの景色です。あの懷しい戀の場面なのです。壓へ切れない戀の焔はまたしても、むらがり起つて參り

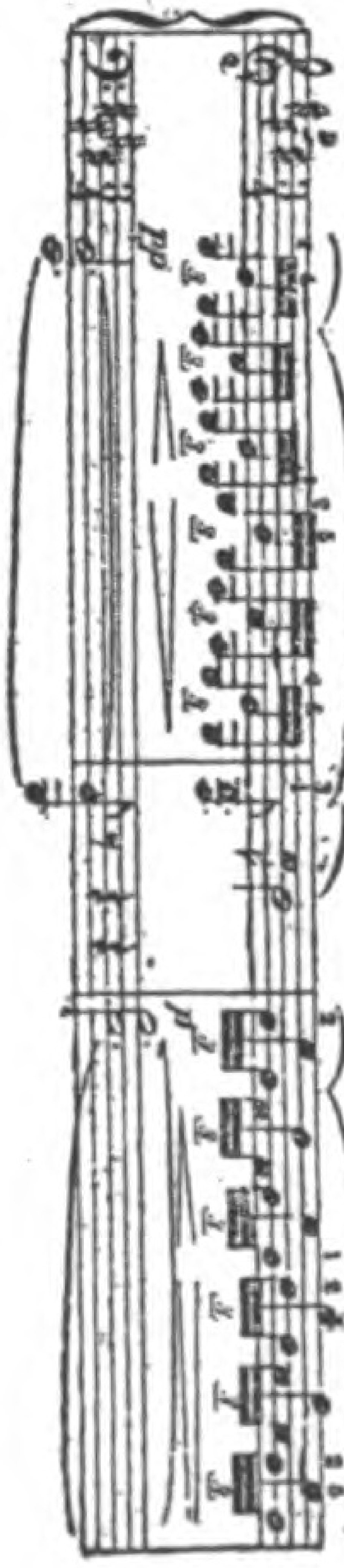
ます。そして、聴くとはなしに耳を傾けますと……あ……またしても、葉ずれの音が聞えて來るのです。





微かではありますが……遥かではありますが……その仄かな囁きははつきりと、而も、打ち勝ち難い魅力を以て、響いて來ます。「仍伴よ！こゝへいらつしやい。菩提樹の下へいらつしやい。戀は悅しいものです。戀は樂しいものです。戀をすれば幸福になれます……」と。

梢の葉は、再び悅しさうに身震ひして、戀の神秘を囁きな





がら、靜かに夜の靜寂を破ります。

* * * * * * *

皆さまは、私の解釋が、餘りに、センテイメンタルだと御嗤になりますか？まるで、ねんねの戲言だと仰いますか？「そんな解釋法は、源氏か、平家へもつて行け」と仰るのですか？實際、私の解釋法は、現代式ではありません。たしかに、それは、現代のやうに、戀を性と結びつけて觀察しなければ、解釋がつかず、戀の色素を試驗管の中に入れてテスト

して見なければ、承知がならず、戀の量は正確に金の重さで計算されなければ、納りがつかず、いや、男女同權で御座い、それ、參政權で御座る……堂々と男子の間に介在して、對等の……などとわめき立てる、殺伐な現代の戀愛觀とは大にその趣きを異にして居るのです。思つても見て下さい。この驚く可き作品を生みました詩人も、作曲家も、實に百年前の人達なのです。從つて、風の音にも驚かれける時代の詩であり、音樂であるのです。ですから、私達も亦、あの時代の實に純眞な……純情的な心でこれを解釋しなければなりません。この頃は、西洋でも、矢張り「人知れずこそ、思ひそめしが」の方でした。この歌曲は、即ちその初心な、純な、おど〳〵した戀の悩みを歌つたものなのです。そして、それは、また、この作曲家たる。シューベルト自身の思ひ悩みを歌つたのでもあるのです。あれ程までも、カロリン孃を戀ひ慕ひながらも、とう〳〵それを打ち開ける事が出來ずにしまつたのです……いや、身を殺して、打ち開けなかつたのです。彼も亦、所謂浮世の義理と人情にからまれて悶えた一人なのです。

私は、昔の人達が有つて居た、さう云ふ純眞な心を思ひ浮べる時、羨ましいと云ふ以上に、たゞ驚かされるのです。その昔、横笛が瀧口入道を慕ふの餘り、嵐峡に身を投じたと云ふやうな傳説を聞きますと、たゞ驚きの眼を見張るのです。何う云ふものか、かう云ふ純な氣持は——所謂文明と云ふ言葉で説明されるものが進むにつれて——だん〳〵と稀薄になつて行くやうに思はれます。今日では、惡化されたウエルテルは澤山居りますが、純な人が少なくなりました。金につまつて、首を縊る人の數は增しましたが、自分の、純情や、主義のために、戰ふ人がなくなりました。私達が今日、かう云ふ歌曲を唄ふ時、それは、恰度、子供の時に讀んだ神話のやうに、私達の現世界とは、全くちがつた天上界の事のやうに感じられてならないのです。

かう考へて參りますと、私は、心からもう一度、浪漫的精神の復興を希ふのです。そのためには、時代錯誤と云ふ罵倒は甘んじて受けませう。私は、心から、もう一度この精神の復活を祈つて已みません。現代は仕事を要求する——それ位の事は、所謂三才の童兒でも知つて居ります。人世は健全な闘技場であらねばならない——それ位の事はだれも知つて居ります。それでも、私は敢て、この浪漫的精神の復活を叫

ぶのです。それは、第十九世紀の中頃に起つたあの藝術の浪漫的主義をそのまゝ指して申し上げるのではありません。要するにその精神なのです。恰度詩や音樂が夜の仄かな嘆息も——あれ狂ふ怒濤をも美化し、純化して表現するやうに、私達もまた、この世の美しいものだけでなく、惡意や、無駄な爭鬪の中に在つて、その人生そのものを美化し、純化して、行く精神を希ふのです。——少し脱線してしまひました。

* * * * * *

この「菩提樹」("Der Lindenbaum")は、非常にポピュラーです。音樂會で、最も屢々唱はれるのも、多分はこの歌曲でありませう。一般の聽衆のためには、旋律が美しい——と云ふよりは、むしろ、わかり易い——のと、和聲や其他、形式なども單純であり、凡てが所謂曰ふ意味に、美しいからなのでせうか？　茲で、私の意見を遠慮なく申し上げれば、何によりも先づ凡てが餘りに寫實的であると云ふ事、凡てがかなり幼稚である事がこの歌曲の引け目なのです。然し、その精神——この歌曲の内に流れて居るいのち——は驚く程美しく、驚く程純です。この點では、この歌曲も——シューベルトの代表作、乃至は、最大傑作と言ふ事が出來ないまでにも——少なくとも傑出した作品であると賞讃する事が出來るでありませう。（次號につゞく）

與謝野晶子論

「常に若い」

土岐善麿

　晶子さんはモウおいくつになられたのだらうか。何しろあの最初の歌集「みだれ髪」がその熱烈奔放さと新しい自由なスタイルとで、青春の一世を驚かしたのは、僕が中學校の三年か四年のときであつた。「新派和歌」といふものがある、といふやうなことを漠然と僅かに知つたばかりの中學生であつたが、修學旅行に四年生と五年生とが伊香保へいつた時、級友のアイといふ男が、ポケットに「みだれ髪」を持つてきてゐた。朝、榛名山へ登るといふので、溫泉宿の湯の香のする庭に整列してゐると、アイが、今度の回覽雜誌には「みだれ髪」の評釋をかくと云つた。アイはその當時紫インキでにきびつぽい謂ゆる星や菫のうたをかいては得意になつてゐた一人であるが、僕は新しく出版された「みだれ髪」をまだのぞき讀みをしてゐたに過ぎない、讀んでもよくは解らなかつた。殊に中學生らしい道德意識から、一種怪しからん歌集といふやうにさへ考へてゐたので、『なま意氣をいふな、貴樣なんかにみだれ髪の評釋なんかできるもんか！』と肩をそびやかして、列のなかで僕はアイと喧嘩をした、この記憶は今になつても時々よく浮んで來る。――アイは其後醫學士になつて花柳病專門の開業醫になつた。

　ヅボンをぶか〳〵に太くこしらへて、帽子を泥によごし

て、靴といへば雨が降ると水の沁み込むものと思つてゐた當年の僕にとつて、「みだれ髪」は異端の歌集であつたが、正直のところ、そのロマンチシズムがよくわからなかつたのである。この歌集が現はれると、モノズキな男が、そのうちの一首一首を狂歌にもぢつて、一册の本にまとめたことがある。なか〳〵うまくもぢつたもので、一種の反動運動ともいへる、ロマンチシズムに對するリアリズムの嘲笑冷罵とも見られる。僕は寧ろこの方に興味をもつて、その狂歌作者の奇智に痛快を感じたものである。

その當時から二十年は經過してゐる。當年の明星派といふものは、たしかに一つの藝術運動として、それに直接關係したものは固より、それに無關係のやうな態度をもつたものも、一種の反動的勢力に支配され、何等かの影響を蒙つたことは否み難い。これは中心となつた與謝野寛氏の才氣と努力、上田さんとか森さんとかいふ先輩の援助、それに參加した人達のすぐれた才能によることに違ひないが、晶子さんの與謝野氏に對するロマンスと才情の溢れたその作品がなかつたら、その勢力はよほど減じられてゐると思はれる。「晶子」といふ名もいかにも貴族的であり、鳳姓の「鳳」といふのもまことにロマンチックで、「明星」の藝術至上主義的運動にそれも一種の色彩を添へたわけである。

二タ昔の間には文藝上の傾向とか主義とかいふものにも種種な變遷推移があつて、殊に自然主義の思想は、當時の青年の生活樣式をも變化させたものであるが、晶子さんは殆んど終始一貫ロマンチシストとして、今日に到つてもその詩人的な『空想』と貴族的な『趣味性』とを失つてゐない。僕は島崎藤村氏の生涯と事業とを考へる時いつも思ふことなのであるが、氏程はつきりと其の一つの生涯のなかに文藝上の推移を體驗し、具象してゐる人は尠ない。「若菜集」「夏草」から「薄梅集」に到るロマンチシズムの詩の世界から、劃然と散文の世界に入つて、リアリズムの態度に精進する　氏の生涯に『詩』の失はれてゐないことは敬重すべきことであると共に、氏の作品を年代的に讀んでゆくと、いかにも一年一年と『年齡』の支配によつて、その生活が正直に、純眞に、その底に流れてゐることを感じる。それでゐて、『藤村詩集』は今でもなほ數多くの讀者をもつてゐるといふことは、文藝にたづさはつてゆくものゝ心的發展のうちに、この詩集の純眞なロマンチシズムの生命が、ある一時期の間アッピールする力を失はないためである。青春の心は、いつでも、だれでも必ずそこを通る。そこに無限の慰めとあこがれとを得る。僕

は島崎氏を思ふごとに、本統に一人の『生活』の姿を眼前にうかべることができるのである。それに比べて晶子さんは、その一つの生涯が、『青春の一時期』といふものに擴大されてゐるものゝやうに感じられる。『常に若い』といふ印象がぬけない。この島崎氏との對比をいひ換へると、讀者として、島崎氏とは一緒に「年」をとつてゆける。しかし、晶子さんとはある華やかな一時期を過ぎると別れてゆかなければならない。晶子さんは年をとるには餘りに『情熱』が有り過ぎるといふのであらう、その有り餘る情熱をぢつと制へて、そこに「いぶし銀」のやうに湛へてゆく態度はみられない。

たゞし晶子さんと島崎氏との、この對比は、『價値』の問題でない。島崎氏の『全集』は『心の糧』として時々ひらいては讀まるべきだ、晶子さんの全集は『若さ』の記念として保存されなければならない。

◇

晶子さんは一時「評論」の方へもむかはれたが、やはり現在、歌の方にその力を注ぎ、また世間も「歌人」として扱つてゐることは極めて當然で本領に還つたものである。そして、何よりも驚嘆すべきは、そのプロダクチブなことで、恐らく、我が古今を通じて、歌の數の多いことは筆頭第一であらう。プロダクチブなことは歌ばかりでなく、その子福者であられることもまた文藝壇の異數であらう。そして作品の發表にも家庭の生活にも、餘所目には何等の疲勞も倦怠もなく思はれることは、本統に『天才』の名に背かないものとして、敬重しなければならない。

僕は時々――つひ御不沙汰勝ちではあるが――お目にかゝりにゆくことがある。大抵は幸ひに與謝野氏お二人に逢ふのであるが、いかにもうち解けた態度で、そして、行き屆いたアドヴアイスなども與へてくださる。富士見町のお宅の二階の應接室、大きな唐木の机を眞中に、寛氏と客との對合に横のところに、晶子さんはつつましくからだをやゝ斜めにして坐られる。コケチツシユといふほどではなく適度のシナを作つて、話題を要領よく進めてゆかれるのは晶子さんである。寛氏は、その輕快な、あいそのいゝ口振りで會話にあひ槌をうたれる。よく解らなかつた「みだれ髮」で喧嘩などをした中學生の僕が、かうしてこの作者と語るなどといふ情景に逢ふたびに、僕も大きくなつたものだと感ぜざるをえない。大きくなつた、といふよりも年をとつたものだと正直にいふ方が適當であらう。「一代の才媛」として、後世晶子さんが、歴史

的に日本の文學の中に殘られることは、一點疑ひもない事實であるが、その晶子さんの天才を遺憾なく發揮せしめる機會を與へたことに就ては、今かうして机の向ふで會話にあひ槌をうたれる寬氏の功勞を忘れてはならない。寬氏が昔の明星を中心とする藝術運動において、この「晶子女史の發見」といふ事業は、氏の功績の最も初め、最も大きな部分にかぞへ擧げられなければならないと思ふのである。

◇

これは餘談であるが——これ迄のことも餘談といへば餘談であるが——數年前のある時、僕は與謝野氏に招待を受けたことがある。いつ何日の晩是非來てくれ、といふ、通知は電話であつたかと思ふ。御不沙汰もしてゐたし、珍らしいことでもあり、光榮でもあるので、その晩、僕は勤先きの仕事を片づけてから富士見町へ行つた。行きつくと、お客は二階に一杯で、僕のほかは一人殘らずもう集つてゐた。既に銘々の前に料理屋式の膳が据ゑられてゐた。見渡して、初對面の人が少なくないので、儘のこちらですこし氣遲れもしたが、こちらへといはれるまゝに、一つだけ僕のためにあけてあつた座蒲團の上へ進んだ。すると、一座は急に、輕快なざわめきと微笑に滿たされた。一座の視線は皆僕に集つて、なるほどねえ、とか、へえ、とかいふ、しかし上品な嘆聲が囁かれた。僕は何事かと思つて、顏をまげると、つひ左隣りに有島生馬氏がゐて、貴族的な微笑をたゝへてゐる。僕はハヽアと覺つた。僕が招待された理由の一つも、これでわかつたのである。

有島氏と僕と、よく似てゐるといふことを人がいふ。これは僕としては、生馬氏にお氣の毒なことで、殊に美術家として氏から見ると ちつとも似てゐないぜ、と抗議を申込まれてもいゝかも知れない。似てゐるといへば額のハゲあがり具合と、顏の輪廓丈けで、資産や才分は僕など生馬氏とは似ても似つかないことを承知してゐる。ところが、甚しい人違ひを晶子さんがしたことがある。いつか九段の能樂堂で、文士や新聞記者などを招待した能のあつたとき、僕が坐つてゐるうしろから、話しかける人がある。見ると、晶子さんだ。その話しかけられる話題が、どうも勝手が違ふと僕は思つたのであるが、さういふ席でもあり、ハアとか、いえとか三四分應答してゐたが、急に晶子さんは、マア失禮しました、土岐さんですね、生馬さんと間違へまして……と氣恥かしげに例のシナを作られたのである。この二人共、隨分晶子さんには

懇意といつてもいゝわけなのであるが、能樂堂の觀客席の薄暗かつたゝめもある。なほ後からのためもあつたかも知れない。

與謝野氏のお宅の招待には特に生馬氏と僕とを並ぶやうに席を設けてあつたものらしい。僕は職業上遲刻して、僕の『額』と『横顔』は一層一座の期待と興味とを添へることになつた。つまらない挿話であるが、こんな招待にも、與謝野氏並に『明星』風の貴族的趣味は窺はれる、客のうちに僕を加へたことは、晶子さんの『才知』からではなかつたか。もとより僕は御馳走のお禮を述べて、一緒に笑つて、十分いたゞいたのであるが、この一夕の『清宴』にも、このグルッペの氣稟や趣味が窺はれることを考へて、一杯のベルモット以上に顏の赤くなつた記憶を、こゝにかき添へておく。

與謝野晶子夫人

新居格

僕は現在の所、いろんなことで與謝野氏夫妻とは近接な關係に立つてゐる。だから晶子夫人に就いて物言ふことは容易すさうで却つてむつかしい。それは近接してゐるから自然に遠慮勝にもなり、思ひ切つて書けないと云ふ意味ではなく、近接して居ればそれだけ取立てゝ感ずることもなくなるものだし、從つて堅苦しく身構へて論ずると云つたやうなことが不自然で變であるからである。

それに僕は詩歌殊に歌に就いて不案内である。晶子夫人の著書は實に多いが僕の讀んでゐるのはその何分の一を出でない。そうだとすれば僕は與謝野夫妻とは相當懇意だと云ふ丈で晶子夫人に就いて論ずる資格がない譯である。だが、歌人として晶子夫人を論ずる人は別にあらう。僕は單純な讀書

生として單純な僕だけの印象を話さう。

與謝野氏夫妻と知合ひになつたのは大正七八年の頃だから大して古い方ではない。尤も僕は中學時代には「みだれ髪」を愛讀した一人である。その時代與謝野氏夫妻と共に吉井勇高村砕雨氏等の名をも知つてゐた。

寛氏が「虎の鐵幹」と云はれ晶子女史が奔放にして多彩な詩風で鳴らした絢爛な時代は、四國の一隅で遙かに想像してゐたに過ぎない。「柔肌のあつき血潮に觸れも見で淋しからずや道を説く君」と云つた風な歌は、歌に親まないが廿幾年過ぎた今日までも印銘されて殘つてゐるとすれば、晶子夫人の情熱的な歌は、當時の青年に力强い影響を持つてゐたか分る。

それにもまして僕の記憶にのこつてゐるものは「君死に給ふことなかれ」の詩であつた。その詩は發賣禁止にされたのではないかとも思つてゐるが、そのころ是非の議論を捲き起したことを僕は記憶してゐる。僕は少年時代から社會主義的議論に共鳴してゐた所爲でもあらうか「君死に給ふこと勿れ」の詩を代言してくれたやうに痛快がつた。

夫妻の文學的活動はこの後ます／＼熾んになり、女史は特に多岐に亘つて活動した。しかしそれらの事を詳說するのは文學史の範圍である。僕は省筆するであらう。

×　×　×

僕は晶子夫人に逢つて知合になつてみると、謙虚で控へ目で思ひ遣りがあり、同情心の厚いデリケートな心持で物事を眺めてゐる人だと分つて、知らない前に考へ違ひをしてゐた概念を訂正した譯である。

物しづかな冬の夜なぞに、火鉢を圍んで話してゐると纖細で物柔らかな心持がよく分る。非常にいゝ人だと僕は信じてゐる。誰でもが大概さうであるやうに與謝野氏の夫妻も想像的概念の上に世間から兎角の誤解を築かれてゐるやうな事がないだらうか。與謝野寛氏には政治家肌を以て、さうして晶子夫人には尊大な人でもあるかのやうに。

しかし、僕から見るとそれはかなりの間違ひだと思はれる。寛氏が政治家肌に見られたのは所謂歌壇の一角から投げ出された僻見で、氏が新詩社に據り派を立て黨を結成して、勢力を張つたのだとしたからであらう。さう思はれるのも無理からぬので、それだけ夫妻が有力な存在であるからであつた。その事に關しては寛氏は復活の「明星」で「沙上の言葉」と云ふものを書き、晶子夫人は近著「流星の道」の附錄「自分の歌に就いて」のなかで黨派を結成する意思のない立場を十

分に闡明してある。

如上のやうな意味で、寛氏が政治家肌だと見られるならばそれは明かに間違つてゐる。しかしそれとちがつた見方からすれば、寛氏には政治家肌の若干がない譯でもなからうと思ふ。その證據は氏が曾つて代議士に出やうとした事があるのを見ても分る。文壇とか歌壇とかを對象としてでなく氏には若干の政治家肌がない譯ではない。しかしそれはむしろ氏は統轄的な頭腦と組織的な才幹とがある人だと云つた方がより多く適當なのではあるまいか。

人であるかぎり晶子夫人にもいろんな缺點もあらう。藝術家だけに氣むづかしさや不機嫌と云つた風のものも多いかも知れない。それにしても僕が交際してゐる範圍では曾つてさうした陰影を見出したことがない。外の人は知らず僕は少くともたゞの一度も晶子夫人からショックを受け取つた事がないのである。與謝野氏の家庭は非常にいゝ家庭であると僕には思はれる。それはみんなが理解の上に立つてゐるからだと解釋したい。かくて僕は與謝野氏の夫妻とも懇意であれば、寛氏の甥に當る赤松克麿君とも友達であり　與謝野氏のところの子供たちの幾人かも知つてゐる。さうした心安さからは人としての批評は出ない。人としての晶子夫人に關しては僕としてはこれ以上かくべき何ものをも持ちえないのである。同性の婦人から見て晶子女史をどう思ふのであるか、時としては僕には不思議としか思はれぬ批評さへがあるやうだ。僕はさうした場合一概に皮相的な誤解だと思つてゐるが女から見ると女史にたいして何らかの不滿があるのかも知れぬが、僕には斷じてないのだからないと云ひ切るより外はないのである。

×　　×　　×

歌人としての晶子夫人、これまたあまりに顯揚な事で明白な定評に坐してゐる。それを歌がてんで分らぬ僕が今更論ずるのも烏滸がましい。

さりながら、彼女も寛氏も素人の歌人を以つて任じてゐる事に就いて一言しよう。尤も兩氏が自分たちは素人の歌人だと云つた所で誰がさう思ふであらう。しかし僕は愚直だからさう思ふのだ。

晶子夫人は「私の歌は固より素人の歌で專門歌人からみて以前も今も侮蔑の的となつてゐますが……」と書き、寛氏も「予等は皆素人の藝術を成すことを以つて志とした。(中略)眞の藝術の萌芽は常に素人の手に在る（中略）また「予等は素人作者の謙遜な心から……」と云つて熾んに素人を以つて

任じてゐる。夫人の「自分の歌に就いて」の所論も、寛氏の「沙上の言葉」の論旨にも僕が我が意を得たものの如くに贊成である。僕が贊成した所以は現文壇の時弊に慨するからだ、藝術のコンマアシヤリズム、藝術のプチブル式成あがり根性から不快を感ずるからだ。それで藝術はもう少し獨存的であり俗情的でない事を欲するからだ。この意味に於いて與謝野氏夫妻の素人論はすきだ。尤もかうした議論は僕自身の好みに偏して、與へられた問題から離れすぎるかも知れぬ。

誰も晶子夫人を素人の歌人だと冗談にもみるものはなからう。しかし同夫人だけではその氣持でゐるのである。だがそんな事は別として泉の如く湧きあがる豐富な詩情は全く稀覯であらねばならぬ。

夫人の歌論!「詩歌の本質と云ふ一文によつてみた所も大體贊成だ。夫人は「幼い子供が自」然に調子のある聲で勝手なことを歌つて自ら滿足してゐる心もちが詩人の制作の心もちです」「詩人は他に呼び掛けず勿論他に教へようとするやうな餘計な事をしないのですが」と云ひまた「他の聽手を豫期してゐない。私一人が彈いて自ら聽き入つてゐる音樂です」と云つた風の考へ方を他の所で云つてゐるが僕は尤な議論だと思つてゐる。

晶子夫人は詩歌は個人本位のものだから閑文字として詩歌を冷眼視したり、詩歌が現代のいろ〳〵の問題に觸れてゐないと云つたやうに非難したりするいはれはないと辯駁してゐる。分けても詩歌が對他的意義を持つときが最も短命になるもので教訓歌とか道歌とかその極端な實例だと云つてゐる。それも受取れる。詩歌は現代のいろんな問題にふれさせる(へ意圖的に)必要はないにしても切迫した時代の激動に沈湎せるものにまで詩歌が這入つて行くと、その人が何氣なく歌ふもので、時代の問題にふれる事にもならうし、詩歌を冷眼視する人のうちにも譯もなくするのと相當の理由があつてする場合もあらうと思ふ。かうなれば詩歌そのもの〻本質論からは離れるけれど僕達は社會的パアスペクチーブから考へてい〻と思ふのである。

× × ×

社會批評家としての晶子夫人は極めて聰明で、合理的で、且つ自由である。時には一味社會主義的であるとも思へる見

方もないではないが、より多く自由主義者である。奇矯と極端とはない、自由と合理とが何と云つても論旨の基調であるらしい。藝術的の人はどうしてもアナキスチックである。夫人が一歩を進めて社會主義的になつて行くにしても、その豐富な詩感からは矢張りモオリスの道を辿るべき人ではあらうと思ふが、今の所夫人は前にも云つた通り氣持もよく冴えてもゐるが自由主義者である。

山川菊榮氏がより多く理知的で全然社會主義的であるにたいし、晶子夫人は全く情感的で自由主義的である。それは二の性格的な相違であらう。

教育家として晶子夫人を論ずる人がある。それは文化學院の學監であるからかも知れないが、同夫人をそれ丈で教育者扱ひするのは早すぎる。所謂教育家では永久にない事は無論だが、變つた意味にでも教育家ではない。尤も夫人には一個の自由な創造的教育觀はあらうし、それの實現的理想もあらう、がそれは同夫人を教育家であるとする譯には行かない。教育家らしい所が少しもない所がいゝのである、晶子氏等の宰する文化學院がブルショア的であり、藝術偏重であるとみるのは少しく酷で この點は僕が曾つて他誌に云つた所であるから略筆する。

女流藝術家にともすればありがちな放縱さは少しもない計りか、家庭の主婦として貞淑でもあり、すぐれてゐるのは周知の事實である。

紙數も盡きたから結論を急ぐ。が高田保馬氏がひそかに親近の門下に洩らして云ふには(これは又ぎきではあるが)後世にのこる、僕らと同時代の人では晶子女史位のものだ、學者なぞも幾人殘らう。僕なぞも遺憾ながら殘らぬと云つた相だ。その言葉には若干の誇張と誇小とがあるにしても、晶子夫人の強いユニークな存在を指示してゐる事は本當だ。

そうした夫人であるとすれば、「以前から短命の豫感される私は、かう云ふ風に歌ふ時がもう幾年もない氣がします。」なぞと近著の自序にあるが、そうした氣持も一面だとは思ふが、また女史の歌である「凋落の淋しき味を思ふこと頻りなれども未だ得ぬかな」と歌ふ人で、いつまでもあるべきではなからうか。(終)

緋のさうび

――(晶子さまに)

茅野雅子

美しく薔薇をかざせる君を見ぬ昨日もけふも億
劫の世も

日のいづる國のほまれと史の上にまづ第一に君
が名をおく

かぎりなき君が若さを讃へむと匂ふさうびを杯
とせむ

燦爛とてる日を吸ひてかがやけるひぐるま草の

匂ふかの家

夏の日のかがやく中の君が家王者の花のひぐるまを植う

光秀七瀬八峰のみ子たちと蜻蛉をとりし夏のおもひで

萩の舎の萩をうつして萩多く咲ける庭よりこほろぎの啼く

金の波銀の沙をばまくごとし君が家にさく白萩の花

栗の花けうとくぬれし雨の日の澁谷の坂も忘れがたかり



文藝講座

小說作法講話

森田草平

緒論

今は小說全盛の時代である。文壇の中心勢力としてあらゆる文學的述作の先頭に立つものと云つて可い。しかもさうなつたのは極めて日が淺い。所謂文學界に於ける新參者である。小說がかの敍事詩、抒情詩、悲劇、喜劇なぞと同列に考へられて、同じ文學上に於ける地位を要求するに到つたのは、最近百年來のことに屬する。敍事詩、抒情詩、悲劇、喜劇なぞは皆希臘時代からあつて、そして、アポロの神の娘なる九人のミューズは、それ〴〵藝術の各科目の守護神であつたと云はれる。が、散文で述べられた物語の守護神であつたものは一人もない。一體、古代の希臘人は散文を卑しんだ。歴史や演說まで韻文でやつたと云はれるんだから仕方がない。希臘人の眞似をして、一々その足跡を辿つた羅馬人が散文に對して同じやうな見解を抱いてゐたのは是非もない。

希臘語や羅馬語に代つて、近世の國語が生れた。それからでも、隨分永い間韻文は古來からの特權を保持してゐた。ボツカシオの「十日物語」やセルヴンテスの「ドン・キホーテ」は散文で書かれた最も古い傑作として吾々に傳へられてゐる。しかもその當時に於てはこれ等の傑作も決して世間からそれに相當した尊敬を拂はれたものではない。散文の小說が眞面目な批判に値ひするものとして認められて來たのは、ずつと後のことである。佛蘭西の學士會が創立されてから二百年の間、一人として散文の小說家でその會員に列せられたも

のがなかつたと云ふ事實に徴しても、大凡その間の消息が窺はれよう。

英文學史について見るに、十六世紀から十七世紀の初頭へかけては、所謂エリサベス朝の劇全盛時代である。降つて十八世紀には、アヂソンだのスチールだのと云ふやうなエッセイストが勢力を占めた。これは時評家、隨筆家のやうなものである。このエッセイストが後年大いに散文小說の興る媒介になつたことは爭はれない。で、その機運に促されて、「ロビンソンの漂流記」を書いたデフオーも出れば「ガリヴアの旅行記」を書いたスウィフトも現はれた。ジヨンソンの「ラセラス」傳やゴールドスミスの「ウエークフイールドの副牧師」なぞも學校の教科書として我國に喧傳されてゐるから序に擧げて置きたい。なほスターンの「トリストラム・シヤンデイ」は、その自由な文體と構想が故人夏目漱石先生に暗示を與へて、有名な「吾輩は猫である」を書かせたと想はれる節があるから、特にその名をこゝに揚げて置く所以である。

が、かうして散文物語が續々出たやうなものゝ、小說が敍事詩の後繼者として戯曲と對立するに到つたのは、どうしても十九世紀以後のことだと云はなければならない。そして、その勝利は一にウォルタア・スコツトの「ウエーヴアレイ・ノヴエルス」（叢書の名）に依つて獲得されたものである。スコツトなぞと云へば、今の讀者は一概に陳いやうに思ふかも知れない。しかし讀んで見れば、手卷を措くに忍びない程面白い。面白ばかりでなく、千古不磨の文學的價値がある。吾々は決してスコツトから毫も敎へられる所のない程小說作法の上で進步してゐるものでないことを記憶しなければならない。

で、スコツトに次いで、佛蘭西のヴイクトル・ユーゴー、大デユマなぞが現はれた。それからも續々といろんな作家が現はれて、自己を最も自由に表現する形式として、散文體の小說を採用するに到つた。一つは金子も儲かつたのである。即ち小說が世間に弘通するにつれて、作者の收入も瘠馬文士と云はれた前時代とは比較にならぬ程增して來た。スコツトは述作に依つて父親の遺した借金を皆濟したと云はれ、バルザツクは印刷業その他の事業に手を出して拵へた借金を辨償するために、情人と一緒に溫泉場へ保養に行つてゐる間も、每日執筆を懈らなかつたと傳へられてゐる位である。二人とも精力家には相違なかつたらうが、投機で拵へた借金が筆で返せる位だから餘程收入もあつたには違ひない。

閑話休題。スコツトの占めた勢力を更に倍加したものは、誰でもない、そのオノレ・ド・バルザックである。バルザック

に依つて小説の勢力が倍加すると共に、寫實主義が浪漫主義に取つて代つた。時代の背景と人物との調和、實人生と作品との接觸、普通平凡の人生の强調——かう云つたやうなものが寫實主義の主張である。そして、かう云つたやうな事柄は、舞臺上の約束から形式上にさま〳〵な制限を受ける戯曲よりも、自由な形式の小説の方で成功し易いことは多く云ふ迄もあるまい。こゝに始めて小説が文學の先頭に立つた。即ち小説が戯曲に先立つて寫實主義に先鞭を着けたのである。そして、戯曲が却て小説に追隨するやうになつた。小説が文學の一形式として意義を有するやうになつたのは、實にこの寫實主義を採用した所にある。

それから又小説の發達につれて、作の筋よりも性格に、同じ性格の中でも類型よりは個性に、だん〳〵興味の中心が移つて來た。斬つたり張つたりの烈しい立廻りを見せられるだけで滿足してゐた間は、强いばかりの勇士でも好かつた。が、さう云ふ勇士や、それに配せられた貞烈な淑女は、所謂類型である。類型はもはや時代後れである。現代の生活を反映する文學としては、もつと複雜で微妙な個性を描いて見せてくれなければ承知出來ない。つまり人間の頭腦の發達につれて、吾々の文學に對する要求も粗から密に、外面的なものから内面的なものに向つて進んで來たのである。かうなると勢ひ文學の方でも心理描寫に重きを置かなければならない。そして、この心理描寫なるものが矢張り寫實主義に伴隨して發明された小説特有の利器だと云ひ得られるのである。勿論その以前の文學に全然心理描寫がなかつたとは云はれない。が、意識してそれが用ひられるやうになつたのは、どうしても寫實主義以後のことである。普通にバルザックと同時代のスタンダール——「赤と黒」の著者——が心理描寫の元祖だと云はれてゐる。そして、この二人の後を承けたフロベールに依つて所謂自然主義の文學が大成された。かう云つてしまつたのでは、餘りに大ざつぱな議論になるかも知れないが、兎に角これ等の人々に依つて小説の眞の分野が始めて發見されたことは爭はれない。即ち寫實主義の文學は先づ佛蘭西に於て確固不拔の地位を占めてから、漸次各國の文學にその波濤のやうな素晴しい影響を及ぼしたものである。

我國の文壇も、後れ走せながら自然主義の澎湃たる影響を蒙つて、その洗禮を受けたものだ。が、それに就いて說く前に、少しく過去の文學を回顧して見たい。

と云つた處で、私は徳川時代の文學について多く知る所が

ない。たゞから云ふ事は云はれる。徳川期の漢學者は皆經世家であつた。少なくとも經世家であることを念としてゐた。後には純文學者を以て目せられるやうな人々も輩出したが、それ等は皆詩人であつた。所謂漢詩人であつた。で、それ等の人々から見れば、烏迹文字を弄ばないものは、御國風を歌ふ國學者と雖もなほ學者を以て遇するに堪へなかつたかも知れない。それ位だから當時の散文小説家たる戯作者どもが、いかに世間から侮蔑の眼で見られてゐたかは想像に餘りがある。又彼等自身も戯作者を以て自ら甘んじてゐた。かの傲岸自ら高しとして、一人戯作者たるに甘んじなかつたと云はれる曲亭馬琴の第一の矜りが、支那の稗史小説の糟粕を嘗めて、學者でもないのに學者らしい顔をする所にあつたと傳へられるに到つては、寧ろ悲慘ではないか。つまり井原西鶴や十返舍一九の時代は、伊のボツカシオ、西のセルヴンテスの時代に比すべきものであらう。處で、この自ら卑しうする戯作者氣質がなほ明治の時代までつゞいてゐたと云ふから驚く。硯友社の尾崎紅葉は居常謹嚴を以て聞えた人である。しかも自ら小説家たるの故を以て、平生の出入にも、世間に對して何となく肩身狭く感じてゐたと云ふではないか。これは當人に自信がないと云ふよりも、世間が小説家を待つに相當の禮を以てしなかつた證據である。今から思へば馬鹿な話だが、夏目先生が大學教授の椅子を捨て――實は教授ではない、講師であつたのだ。大學の名譽のために慮つて、敢て教授と云つた迄である――小説家になつた時、世間は驚異の眼を瞠つた。が、それと同時に、大學教授でも小説を書くものだと云ふことを始めて知つたのである。換言すれば、小説家は漱石先生に依つて始めて世界並みの地位を獲得したことになるのである。が、わが國の文學がその本質に於て世界的となり、世界の潮流と交通するやうになつたのは、どうしても自然主義の運動以後にあると云はなければならない。

自然主義の運動以前にも、二葉亭四迷、森鷗外、その他「文學界」の人々なぞの手で、海外の文學はわが國に紹介されてゐた。作家の側にも、廣津柳浪氏の心理小説、小杉天外氏の寫實小説と云つたやうな、個人〳〵の運動は見られた、が團體的の運動として、理論と作品の兩方面から大々的に自然主義運動の起されたのは、矢張り島村抱月氏の「早稻田文學」一派、田山花袋氏の博文館一派の手を待たなければならなかつた。それに策應して立つた作家としては、島崎藤村氏、正宗白鳥氏なぞの名を忘れてはなるまい。その他所謂自然主義の一派に屬しなかつた作家で、新興文學の樹立に功勞のあつ

た人々も少なくないが、一々その名を擧げることは止めて置きたい。兎に角、かうしてわが國の文學は世界の潮流に棹さすやうになつたのである。

處で、小說が長い間文學として認められず、研究も批評もされないで濟んで來たと云ふことは、一面から見れば、法則に拘束されないで、自由にその驥足を伸ばし得た點に於て、助けられもしないがその代りに妨げられもしないで、十分にその使命に向つて發展の途を辿ることが出來た點に於て、却て幸福であつたとも云はれよう。戲曲が古來三一致とか何とか云ふやうな、嚴格な規則に縛られて畏縮したり、沈滯したり、一たびその束縛を破つて捨てたかと思ふと、二たびそれを拾ひ上げたり、いろ／＼苦しんで來たことを考へ合せて見れば、思ひ半ばに過ぐるものがあらう。が、今はもう小說も立派に文學の形式として成立した。形式としては、行く所まで行つたとも云はれよう。で、若し小說が戲曲と同じやうに文學上の地位を要求してゐるとすれば、今こそその分野を考へて見たり、その作法上の手段を研究したり、その長短を比較して見たりする時期であるまいか。實際、小說はあらゆる文學の先頭に立つて、前代未聞の盛況を呈してゐる。わが國ばかりでない、これを英國の例に見るも、エリサベス時代の戲曲よりも、アン女王朝のエッセイよりも、現代の小說の方が遙に旺盛であると云はれる。英國でさう云はれる位だから、佛蘭西では尙更さうである。その他獨逸でも露西亞でも同樣の事が云ひ得られるのである。

處で、それ程旺盛であるだけに、この形式に依つて自分の天分を試みようとする所謂小說志願者も隨分多い。そして、その中にはこの形式に對して餘り天分も持つてゐない輩に、この道へ入りたがつてゐる者が可なりある。或ひはこの形式を採らないで、他の文學上の形式に據つたならば、一層成功し得るやうな者のあることも考へられないではない。そして、この事は文學の新參者について云ひ得るばかりでなく、隨分有名な大家についても云ひ得られる。ヴイクトル・ユーゴーはあれ程の文豪ではあるが、劇詩人や小說家よりも寧ろ抒情詩人であつた。同じやうに大デュマは小說家よりも寧ろ生れついた劇作家であつたとは、各批評家の一致した意見である。彼等が自己の天分に最も適した道に入らないで、他の道を採つたのは、矢張りその當時の流行に引き摺られたものと云はなければならない。ユーゴー、大デュマにしてさうだとすれば、新進の文學志願者が戒心しなくちやならぬのは云は

すもがな。さう云ふ場合、この小説作法の研究は新入者の指針になつてくれるのである。なほ小説に豊かな天分を持つた作家に取つても、作法を研究してその長短を心得てゐることが、縦しやその天分を助長することはあつても、決してそれに累ひするものでないことは改めて説くまでもあるまい。

で、いよ〳〵その研究を始めるのだが、その前に一寸お斷りして置きたい。今から六十年程前に獨逸のグスターフ・フライタツハと云ふ學者が「戯曲の作法」と云ふ書物を書いた。もう時代後れになつてゐるが、眞面目な研究だけに、今でもなほ劇作術論の根柢にはなつてゐる。その眞似をして、スピールハーゲンと云ふ男が「小説の作法」と云ふ書物を書いた。これは眞似だけに、どうも餘りどつとしない本だと云ふことである。その後この種の研究はしばらく跡を絶つた。處が、亞米利加といふ國は何でも新しい研究とさへ云へば手を出す國だけに、二十世紀の初頭に及んで、續々と同じやうな研究が世に出た。その中でブリス・ペルリイ教授の著書が割合に好いと云ふことだが、私は讀んだことがない。私の讀んだのはクレートン・ハミルトンと云ふ人の「小説の材料と手法」と云ふ本である。亞米利加の本だとて馬鹿にはならない。この本は、私の讀んだ限りでは、比較的纏つてゐて、態度も學者的で、殊にその所説の實際的で直ちに應用の利くやうに出來てゐるのが長所である。私はこの書を骨子をして、私自身の意見があつたらそれも加へて、すつかり日本の現狀に適應するやうなものにして、一通り小説の作法を述べて見たい。他人の褌で角力を取るやうで少し氣持ちは惡いが、私としては今の所これ以上どうも仕方がない。私もまだ創作の方に未練があつて、小説作法の學究になり切つてしまふだけの覺悟は附かないから。それから何處が自分の意見で、何處が借物だといふやうなことも一々斷らない。私としてはこの種の研究に自分の創意を主張するやうな心持ちは今の所毛頭持つてゐないから。要するに、他人の説でもそれがすつかり消化されて、私の所有になつて出て來たら、それで好からうではないか。

以下、この研究の中で觸れなければならぬやうな問題で、心附いたものを二三擧げて置く。

一、寫實主義と浪漫主義。

一、藝術と道德との關係。

一、短篇と長篇とは分量の別に止まるか それとも目的の別があるか。

一、三人稱（敍事詩體）で書くと、一人稱（自敍傳體）で書

くと、いづれが利益であるか。

一、性格と事件と雰圍氣と、いづれが最も重きを置かれべきか。

一、目的のある傾向小説は正しいか。

一、作者が作中の人物に對して好惡を有する場合と、戯曲に見るやうな純客觀的態度と。

一、突飛な大事件を想像すると、日常生活に於ける單純な人物の眞面目な描寫と、いづれがより困難か。

一、モデル問題はどこ迄許さるべきものか。

一、地方色の利害、方言。

一、歴史小説と現代物。

一、小説家の多くは三十五歳以上に及んで始めて傑作を出すと云ふが、その理由如何。

一、科學的精神の作者に對する利害。

一、希臘劇のやうに壓搾したもの（例へばドストイエフスキの作品の如き）と、叙事詩のやうにゆつたりとしたもの（例へばトルストイの作品の如き）との效果。

尤も、こゝに擧げて問題でも、觸れずに濟してしまふものもあらうし、擧げない問題でも、必要上それに觸れることのあるのは豫め承知して置いて貰ひたい。これを要するに、小説は最も自由なる文學上の形式である點を利用して、戯曲以外にその立脚地と長所とを見出す外あるまい。恰度戯曲が物の形に依つて感覺に訴へる長所を發揮すると同時に、それに伴ふ短所（想像力に訴へることが出來ないと云ふ）から生じて來る、さま〴〵の制限的法則を設けたと同じやうに。まあ、大體その方針で研究の步を進める積りである。

序ながら、小説が現在のやうな旺盛の域に達した外部の事情を考へて見るに、いろ〳〵な理由も擧げられようが、その最も主なるものは印刷術の發達にあると云つて可からう。同じ意味に於て、最近劇が再び擡頭して來たやうな觀があるのは、これを國民の都會集中熱に歸して差支へあるまい。實際都會は國の半分である。その勢力に於て、精神に於て、半分以上である。しかし印刷術が人と人との意思疏通の大媒介者であり、大原動力である間は、小説の地位は動かない。その點は安んじて可なりである。

世界婦人欄

二つの近刊書に就いて

千葉龜雄

"Woman and Labour."
Olive Schriner.

オリイヴ・シユライナア夫人の傳記、オリイヴ・シユライナアの一生が、その夫のイス・クロンライト・シユライナアによつて、最近にロンドンのフキツシヤア・アンウヰンから出版された。一九二〇年に死んだ彼女の名が、また新らしい光明をもつて思想界によみがへつて來たのに對し、深い時代意義があることとを感ぜずには居られない。彼女は「アフリカ田園物語」の作家として、普通にすぐれたイギリス女性作家の列にくみ入れられて居るけれども、むしろ、最近の世界が、かの女の名を記憶によみがへらしたものは、その論文集「女性と勞働」の方にあるのではないか。

と、いつても、「女性と勞働」が始めてロンドンで出たのは十三年前の一九一一年二月であるが、その當時から非常な賣高を示した。即ちその年の五月までに四版になつて居る。そして、一九一二年までに、アメリカ、カナダ、スウエデン、デンマルク、オランダ、ドイツでそれそれ飜刻された。ところがこの本國のイギリスでは、一九一四年に廉價版が出たまゝ、戰爭中は絶版同樣になつて居たのが、一九二三年に始めて八版が出て、さかんに讀まれ、つゞいて彼女の全集さへも出版されることになつた。女性と勞働問題を論ずる者は必らず一度は讀まねばならぬといわれるこの論集が、昨年になつて改めて出版されたところにも、時代と背景との對照が連想されるであらう。

自分が遲蒔きながらもこの論文集を近ごろ讀んだのは、その一九二三年版である。尤もこの論文集は、夫人自身の、卷頭の長い序文を讀んだだけでも、涙のこぼれるやうな傷心の事實を見る。もし、この序文を讀まずに、取つつき本文を讀んで了ふと、「寄生生活」「女性と戰爭」「性の差別」「或る抗議」の四つの論文が、お互ひの間に大した理論的聯絡なしに無秩序に、並べられたもののやうに思はれる。が、序文を讀めばそれも無理は無い。夫人が始めに企てたこの大著述は、校正し、序文をつければ、直ぐ出版されるやうなととのつたものになつて居た。それがボオア戰爭に際して彼の女のヨハネスブルグの家が、彼女の留守に英兵の爲に家探しをされ、その原稿を殆んど焚きつくされた。その後彼女が兵士の殘虐な監視の中で、暗いランプの下で記憶を辿つて書き直したのがこの著述であつたのだ——といふのだ。

けれども夫人のこの四論文を貫ぬいて居る一つの抗議は、どこにでもはつきりと、その說かうとする一線の主張を明らかにして居る。

それは、女性が今日在る如き男性への從屬と、男性のみの優越の狀態は、決して在るべき本質の狀態ではない。また在つてはならない狀態だ。何故なら、女性は肉體的にも、精神的にも自然の差別をそのまゝにしても、本質において、決して男性に劣るものではない。原始の狀態において、または生物全體の生活に

おいて、女性の優勝は到る所に認められる。然るに女性を今日のやうな、寄生生活（Par-ositism）の狀態に置いたのは、女性が男性と平等に努力しつゝあつた自然の狀態から女性を引き離して、男性の性的機能としての不自然な狀態に置くことから始まつた。この男性のデゼネレエシヨンが、必然に女性のデゼネレエシヨンをよび起し、女性のそれが、文明の顚覆を惹き起す。そこで現代以後にあつては、女性は、その家庭的、もしくは結婚生活でさへも、どこまでも從屬者のそれとしてではなく、男性と「同じ分け前同じ公平、平等なパアトナシツプ」として、獨立した、平等な地位までに還元されねばならぬ……かういつた主張をもつて全體を貫ぬいて居る。

現代の婦人論としては、もつと科學的な、もつと複雜なものが多く出て居るけれども、十三年前の、女性としての立場からの實感であり、主張としては、やはり女性でなければならない。力强い刺激と暗示をそこに含んで居る。もとより現代世界の婦人勞働の視野は、もつと、もつと廣くなつては居るが、夫人が極力指摘したブルジヨア階級の婦人の狀態などは、やはり依然としてその指彈から逃れ得ない。さすがに女性作家であつただけ、表現の手法ははつきりして快よい。マコナレエや韓退之張りの、疊句法も、夫人の文章辯らしく一寸個性が出て居て面白い。

"Woman: A Vindication,"

Anthony Ludovici,

丸善の新着書の棚の上に、ベエベルの「婦人論」と併んで、アンソニイ・ルウドヴキツシの「女性——或る辨證」がのつて居る。女性におけるデモクラシイの惑作を否定し、女權主義に抗議するといふのが後者の論據だ。この頃の海外の婦人論を讀むと、よくこの二つの抗議の白兵戰を見出す。家庭に還れ！こう女性達に呼びかける。從屬者としての家庭ではなく、平等對立しての家庭に還れす、かういふ議論をくりかへすのが可なり多い。日本が物珍らしさにこれから體驗を始めやうとするところを、彼等はもう體驗がとくに濟んで、これから省察に移らうとするのだ。それと共に、その省察が、凡て社會と人生に必然な、自然法、もしくは社會法の嚴肅な立場から來る。日本のやうに、第二義的な、人生の眞實に根ざさない、形式道德の評議でないところにも啓發されることが多い。

ルウドヴキツシの著書は、約四百頁もある。一口に言ひ盡せぬが、女性を Positive なものと Negative なものとの二つの型に分けて論脚を出發して居る。性欲の消滅を自然の不可抗法であるとして、女性の結婚を社會と文明の原則とし、餘剩の女性、卽ちスピンスタアといはれる階級の女性が、どんなに社會生活の上に、太だしい害毒を流すか。いな、それよりも、スピンスタアである彼等の心理において、どんな潜在的な壓迫と、異常な病的心傾向を發ならうか。彼はそこではフロイドの學理に卽して、殆んど藝術的な、微妙な觀察を發表して居る。說くところは非常に多岐にわたるが、時代柄などに興味をそゝるところの、「老嬢と社會交涉」の一篇を讀むだけても、女權主義主張者に對する、有力な一論陣であることがわかる。しかし、病理の抉摘がいかに深刻に眞實に觸れて居ても、最後のその療法までが、誰でも同一だとは誰も言ひきれない。この抗議に對しても、われ等けやはりそうした定義を持ち出したい。

最近米國婦人界

市川　房枝

この三月から五月頃までの間に、米國の婦人界に起つた主なる出來事をあまし書いてみる事にいたします。尤も婦人界とはいふものの、私はこゝでは特に婦人の社會的な活動に關係した出來事丈をあげる事にします。

▼婦人議員委員長となる

米國合衆國の議會には現在婦人議員はカリホルニヤ州から選出されてゐる。ノーラン婦事一人なのですが、同夫人は此度遞信省の支出に關する委員會の長に選ばれました。米國議會に於ての婦人委員長はこれが初めてです。

▼ミネソタ農民勞働黨と男女平等權憲法修正案

去る三月十二、十三日兩日ミネアポリスで開かれたミネソタ州農民勞働黨大會は、今婦人黨から合衆國議會に提出されてゐる男女同等權憲法修正案を是認するとの決議をし、同州から選出されてゐる議員に對して速かにこれが通過に努力する樣にと打電しました。

農民勞働黨といふのは、主として勞働組合及農民組合から組織されてゐるので、ミネソタ州に於ては、共和、民主のどの政黨よりも政治上勢力を持つてゐる團體です。

▼婦人の夜業禁止と合衆國憲法

米國大審院はニューヨーク州バファロー市の或料理店の持主が「ニューヨーク州に於ける婦人夜業禁止の法律は契約の自由を保證してゐる。合衆國憲法に違反してゐるものである」と訴へたのに對し、去る三月十日愈それは憲法違反ではないとの判決を下しました。

これはニューヨーク州では婦人は夜十時から朝六時まで働く事が出來ないとなつてゐるのに、この料理屋の持主が給仕女を夜十時以後に使傭したのに對し、二十弗の罰金を申渡されたので控訴したのでした。

丁度昨年の四月この同じ大審院はディストリクト・オブ・コロンビア（即ち華盛頓首府のある處で米國議會の直接管轄に屬する地域）から、同地で施行されてゐた婦人勞働者に對してだけの「最低賃金法」は同じ理由から憲法違反だと訴へたのに對し、憲法違反だといふ判決を下して、大問題を惹起しました。

▼禁酒法と米國婦人

去る四月十、十一の兩日全國的な十箇の婦人團體の代表者がワシントンに集つて法律勵行婦人委員會大會を開きました。

法律勵行といふのは一般に現存してゐる法律を勵行するといふのにあるのですが、此會合の主たる目的は、婦人團體が努力してから得た米國の禁酒法が最近殊に勵行されてゐず、これに對して反對の意見が可成起つて來たのに對し、それが勵行をはからうといふのにありました。

右大會では現在の禁酒法を少しも變更しないといふ事を各政黨の政綱の中に入れさせる事、禁酒法違反者はもつと重い罪に處する事、禁酒勵行官は文官任用令によつて採用する事、外國から酒の密輸入を防ぐために、もつと海岸の警備を嚴にする事等を決議しました。

▼婦人會へ千弗の賞金

イリノイ州のロツク・アイランド婦人會は、同會が過去一ケ年間にその市に對して盡した功績に對し、ピクトリアル・レヴイユー社から金一千弗の賞金を貰ひました。

尙同社は來年から毎年五千弗宛、美術、産業、音樂、教育、演劇、科學等の各方面で最も手柄のあつたアメリカ婦人に賞金を與へる事を發表してゐます。

▼各種の婦人團體の大會

毎年春から初夏へかけてこの三四ケ月は、婦人會にとつての總會月でありますが、本年は特に色々なのがあり又ある筈です。

去る四月二十一日から二十五日までは、女子大學出身者會がワシントンで第三回年次大會を開きました。この大會で今迄「男女同等權憲法修正案」に反對してゐたのをやめることにしました。

四月三十日から五月五日迄は米國女子基督教青年會が、ニユーヨークで第五回隔年大會を開きました。同會規約の改正にあたつて、急進派が大勝利を占めました。

尙來る六月二日から十三日までは、二百萬人の會員を持つてゐるといはれる米國婦人クラブ聯盟會が第七回の隔年大會をロスアンゼルスで開く筈です。

も一つ婦人勞働組合總會は、六月十六日から二十一日迄、ニユーヨークで第九回隔年大會を開き、更に二十三日から一週間引續いてブラツク・ウツド勞働大學で講習會を開く筈になつてゐます。

▼名流婦人の招待會

或る南米の婦人からの要求によつて婦人有權者聯盟が、現在の米國婦人の中から十二名の最も有名な婦人を選んで發表したのは、昨年の春頃の事でしたが、去る四月廿八日の夜、同聯盟が主催でそれ等の婦人の招待會を催しました。

これは、四月二十五日から二十九日までニユーヨーク州バフアロー市で開かれた同會の第九回の年次總會のプログラムの一つに入れられてゐました。

▼二つの國際的婦人大會

同じワシントンで五月一日から七日まては國際婦人平和自由聯盟の第四回隔年大會が、同じく九日から十六日まで世界女子青年會委員會大會が開かれました。何れも世界的な會合で全世界から代表者が出席しました。日本からも前者には大橋さんが、後者には長谷川さんが出席された筈です。

前者は大會終了後特別列車で途中主なる都市で講演會を開きつゝシカゴに行き、こゝで十七日から三十一日まで講習を開き更にその後も東部で演說會を開く筈です。この會の會長は日本によく知られてゐるジエーン、アダムス女史です。

▼民主黨と婦人

米國に於ける二大政黨の一つである民主黨は、此の六月ニユーヨークに全國大會を開いて、その政綱及來る十一月に選擧される筈の大統領の候補者を選定することになつて居ります。

この民主黨にも勿論多數の婦人が入黨して居り婦人の委員會といつたものをつくつて居りますが、此度の全國大會に際し、特に婦人委員を任命して婦人に關係した政綱を作成させる事にしました。

▼婦人の新政治團體生る

最近ワシントンで此秋行はれる大統領の選擧に臨む爲めに新しい婦人の政治的團體が生れました。そして其第一回大會を此の五月八日から十一日迄同府に於て開會した筈です。

此會の目的は進歩的な政治運動を助ける爲めですが、同時に婦人の政治的覺醒を促す使命を持つて居るらしく思はれます。發起者の中にはブラッチ夫人、デュボイス夫人、ゾナゲール女史、チャルス、ラッセル夫人などが這入つて居り、評議員中には有名なギルマン夫人やキャット夫人などの名前も見えて居ります。（完）

世界の流行に序す

大橋　房子

□流行とは？

一口に流行といふと、最新流行の品物があれこれと目先にちらつく。が、そんな流行の二字が、實何を意味するかといふことに就いては、我々初めあまり考へやうとはしない。「何々が流行する」といふ場合の、主格を持つた動詞としての流行は、譯語や類語を並べるだけ我々の胸にぴたつと來る言葉であらう。が、流行の二字だけ採り出されて、一個の抽象名詞となつた場合には、前とは反對に字義の不分明さから、ちよつと解釋の施しやうがなくなつてしまふのである。

流行の原語とされてゐる英語の Fashion 本來の字義は、型とか、形とか、樣子とかいつたもので、一つの型なり形なりがその時代に迎合して新しい風俗となるに及んでから二の意義、即ち謂ふところの流行の意味が生じて來たのではないかと思ふ。又、一つの新しい型が風俗となる爲には、その時代の心に觸れ、その時代の基調を掴み、更にその時代の人々が何等かのミディアムを通して表現せんと欲しつゝあるものを、その内部に包含してゐなければならない。人氣に投じ、模倣心理に訴へるのは、前述の條件が具へて後のことでなければならない筈である。

玆にちよつと面白い事實がある。佛語の Fashion である Mode の眞中に綴字一つ加へた Mon e は、世界乃至世の中を意味する。更に又面白いことには、「世界の」或ひは「世の中の」とでも譯すべき du monde といふ熟語の中に、「ハイカラな」とか「最新式の」とかを意味する à la mode といふ形容詞と全然同様の意味があるのである。だから「à femme du monde といへば、英語でいふファッショナブルな女性のことであり、同時に又社交場裡に出入する婦人のことにもなる。つまり、氣のきいた服裝をする程の女なら交際社會に出してもヘマはしまいといふ慾か、或は公の席に出るにはあまり時勢遅れの風をしてゐるものでないといふ心か、とにかく此の熟字の有する二重の意味は社交生活と流行とが切つても切り離されない關係にあることを、明白に物語つてゐるやうに思はれる。

以上は狹義に於ける流行の解釋であるが、現在此の語の用途は決して服裝の範圍に限られてゐない。無線電話も流行である。諷刺漫畫も流行である。「ベナ、」や「マギー」の舞踏音樂も氣狂ひじみた流行の一つである。掘り下げて考へてみると、これらの多方面な流行のあらはれには、時代の主潮ともいふべき一貫した底流があるやうに思はれる。だから、狹義に於ける流行、即ち服裝を中心とする一

つの流行には、目先の轉換とか獨創性の發揮とかいふ點に於いて、文化の一大勢力であるジャーナリズムや、或る意味に於いて時相或ひは時代生活の反影であり表現である藝術と、相伍して進むところがあることにもなゝのであらう。殊に、文學が音と運動と衣裝とを著て現れた劇藝術といふものは、其自身に於いて文學と美術との立體的融合である爲、美術の一部門であり、新流行の道具方である意匠家を通して狹義に於ける流行と直接相通ふものを過分に持つてゐるやうに思れる。

□世界の流行とは？

そこで私は「世界の流行」題下に、これから毎號何を書かうとしてゐるのであるか。既に世界の流行といへば、日本をも含めた各國の流行を意味するものでなければならない。然しながら、日本にゐて日本の流行を亦新しく紹介するのは蛇足である。それ故私は、我が國の流行を或ひは批評することはあるかもしれないが、此處では主として海外諸國の流行を論ずることにしたいと思ふ。いま一つ、取材の範圍に就いて言へば、勿論此處では、狹義の流行卽ち服裝を主とする新傾向を中心に置くつもりであるが、それと同時に、凡そ「流行する」といふ動詞の主格に据ゑられるほどのものは、悉く此の「世界の流行」に主題を與へる資格があることゝ思つてゐていたゞきたい。たゞ、私は功利主義者ではないけれど、衣裝の型ならば、比較的氣持のいゝ、そして應用の可能性のあるものを紹介し、世界に流行する雜多な主體からは、なるべく私共の興をそゝるもの　私共の生活に直接觸れるところのあるものを撰び出したいものと思つてゐる。

都會はあらゆるものを吸收し、更にそれをいろいろの形に於いて發散さゝる現代文化の生んだ巨大な怪物である。流行とは、つまり、此の怪物の腹の中に棲息する意匠家といふ蟲が、そばからそばから嚥下されて來る原料を、も一度その嘴で濟したり捏ねたりして造り上げた型だといふことも出來るのである。茲に於いて「世界の流行」とは「世界的都市に於ける流行」といふことになるのである。

世界的大都といへば、まづ紐育、倫敦、巴里が浮んで來る。そして東京である。伯林、羅馬、ペテログラードなどは、流行といふ見地からは聊か影の薄い感がある。此の點からいつて光つてゐるのは、何といつても佛京巴里である。富の後楯を持つた亞米利加の婦人が、どんなに巴里の香氣に泌みた商品に憬れてゐるか、それらのヤンキーどもがどれほど誇りがに新型の特用權を買ひ占めて行くか――だから紐育の流行は巴里にゐて手にとるやうに判る。實際流行の尺度で計れば、海峽一ツ隔てた倫敦は大西洋の彼岸の紐育より、巴里から遙かに遠い所にある。私は半年の旅の後倫敦の土を踏んで、今更のやうに此の不思議な懸隔を驚異の眼で見た。と同時に、お話にならぬほど鄙びた倫敦の婦人等が、どれほど慘めな熱心さを以つて此の懸隔を越さうとしてゐるかといふ事實に接して、もう一度吃驚せずには居られなかつた。

最近巴里の流行には著しく東洋的色彩が加つた。西班牙埃及等の南國的分子も異彩を放つてゐる。活動寫眞や樂隊を通して、新大陸の蠻風を憬れる氣勢の芽してゐるのも事實である。が、凡ては一度巴里のものとなつて後初めて、世界的流行品としての香氣を放ち、光澤を出し、魅力を生ずることになる。之れを要するに、世界の流行とは實際に於いて巴里の流行、或は巴里といふ一つの兩紗の上に染め出された世界各國の流行を意味することになるのであらう。私は次號から、出來るだけの速さと明確さとを以つて、先づ此の意味に於ける世界の流行を話て行きたいと思ふ。

五浦に於けるタゴール翁を憶ふ

橋本基

半月程前の新聞紙で、タゴール翁が北京大學に招かれて近近に來られると云ふ記事を見たとき、私は翁が日本近くへ來ると云ふ事が何となく嬉しく思はれました。それは一種の懐しい心持です。私が懐しく憶ふのは世界的に有名な詩人としての翁より、唯一人の老タゴールさんとしてゞす。

所が又その後の新聞紙で、私は翁が六月初め、日本へ來られる事を見ました。私は一層嬉しく思ひました。もしかすると會へるかも知れぬと思ふからであります。

その頃私は志賀樣（直哉）と話した事がありました。

「タゴールが日本へ來るさうですネ」

「あゝさう、誰かが招んだの？」

「さあどうですか、公の招待はないさうですが」

「さう、何だか招んで與れなければ來ないやうな事を云つてあつたが、來たら矢張り成るべく優待するといゝのだが、」

「さうですネ」

「どうも印度などと云ふと國際的に利害關係が餘り直接にないもので、政府なんかもそれ程大騷ぎもしないのだらう」

こんな事を話し合つた時でも、私は翁が詩人として、どんな價値のある人であるかと云ふ事より、七年前に見た、一人の立派な老人を思ひ出して居たのです。

こんな風で、私は詩人としての翁をよく知つて居るのではありません。だから「詩人タゴールの追憶」などと云ふ事は云へぬかも知れないが、私は改造社の山本氏から、何かタゴール翁の追憶を書くやうにと云はれた時、しかも〆切に二日しかないと云ふのに、それを引き受けて、兎に角、書いて見る氣になつたと云ふのは、此の稿が貧しいながらも、再び日

本を訪れる翁に對して、何かの意味で、翁を歡び迎へる事にもなればと云ふ心持からなのです。

が、いざペンを執つて見ると、一向に書く事がない。心持では澤山書き度い事があるやうで、いざ之と云つて取立てゝ書かうとすると何にも出て來ない。何しろ、もう七年も前の事で、私は中學校を出たばかりの少年であつたし、翁と一緒に過した日と云つても一週間に足らぬ短時日なので、判然と記憶に殘つて居る事とては僅かなのであります。

この前翁が日本を訪れた時の目的の一つには、翁の最も親しくした日本の友である岡倉覺三氏の墓に詣で、その住ひを訪れる事であつたのださうです。で　その事が分ると、直に岡倉氏の未亡人は翁を迎へる準備のために常陸の五浦の住ひから、東京の私の家に出て來られました。

此の五浦が岡倉氏の住居であり、私がタゴール翁を初めて見た所なのです。その頃、私は學校を止めて自家に居ました。私が幾分英語も分るだらうし、何かの役にも立つだらうと云ふので、岡倉氏の未亡人と一緒に五浦へ行く事になりました。五浦へは前にも度々行つて知つて居るし、タゴールと云ふ異國の詩人に會ふ事にも興味があつて、私は喜んで、五浦行きを引き受けました。そして私と岡倉氏未亡人と二人して、色々買物に歩きました。タゴールさんは西洋の料理を食べると云ふので、西洋の食料品、それから、岐阜提灯だとか、うちわのやうな日本の調度品を買ひ調へて五浦へ行く事になつたのです。

五浦と云ふ所は太平洋に面した、小さな、漁村と迄も行かぬ、漁師の小屋が三四軒もある岩の多い海岸です。岩山が海に突出して、その間に浦を作つて居る。その浦の數が五つある所から五浦、さう云ふ名が出來たものと思ひます。大きな海洋の眺めもあり、岩山や磯の美しい景色も見られると云ふ變化の多い所です。常磐線の關本と云ふ小驛で汽車を降り、大津と云ふ漁師町を過ぎて、一寸した山越をすると五浦です。上野から六時間餘り、可成り不便な所です。

翁の來られる當日、私達は早くから停車場へ行つて、俥の世話や何やかや準備して居ました。車夫は何時も岡倉氏を乘せた大きな體の男が翁の俥を引く事になりました。

停車場の前は、眞黑に日に焦けた鼻を垂らした漁師の子供や、汚れた子守、それに、近くの物賣店のおかみさんや男達が、ガヤ〳〵騷いで居ます。

暫くすると汽車が着きました。買切りの小さな二等車か

ら、初めに岡倉氏の息、その次ぎに翁が降りました。私は非常に丈の高い、銀髪の、銀鬚の翁を見上げるやうにしました。第一にその鋭い眼の力は異様な感じを私に與へました。その眼は私の嘗て見た事のないものでした。少し怖く思ふ程力のある眼でした。が、私達多勢が日本式にお辭儀をするとその眼には柔らかい微笑が浮び、輕く私達に應へました。袖や丈の馬鹿に長い、ダブ〱した印度の服裝が、翁の房々とした髮や髭によく合つて見えます。

私は前に、タゴールさんは印度に居ると大きなお城に住んで居ると聞いて居ますが、目のあたり見ると、そう云ふ話に應はしい、大へん立派な人だと思ひました。

大津町の町長さんが案内役と云ふので、五ツ紋の夏羽織に、山高帽子で先頭の俥に乗り、その次ぎが翁、それから翁の秘書役と云ふ英國人二人がそれに續いて、その後が、翁の親類に當ると云ふ若い印度人、岡倉氏の息、小學校の校長さん、私と云ふ順序で、俥を連ねて、汚い大津町を貫けて五浦に向ひました。後から見て居ると、漁師の子供達が御辭儀するのに翁は一々應へて居ました。岡倉氏の家の門の所には、未亡人、それから岡倉氏のお孫さんに、私の姪などが迎へに出て居ました。翁は岡倉氏の息から紹介されて、未亡人に叮嚀に日本式の御辭儀をされ、子供達を見ると、ニコ〱しながら一々その頭を、大きな手で撫でて居ました。

その晩は日本式の御馳走と云ふので、未亡人の自慢の手料理で、臺所は大騷ぎでした。私は一緒に食事をしなかつたのでその時の樣子は分りませんが、日本の料理も喜んで食べられたやうです。しかし最後に出た、家鴨の丸燒き、矢張り一番氣に入つたらしいと云ふ話です。

翁の寢室は矢張り岡倉氏が寢室に使つて居た、佛壇のある座敷でした。夜は割合に早く床に就かれましたが、蚊帳は嫌ひだからは入らぬと云ふ。然し夏の盛りで殊に五浦は蚊が多い。如何に嫌ひだからと云つても到底蚊帳無しで眠れるものではないので、その英國人によくその事を傳へたのだが、翁はどうしても入らぬと云はれるので、その儘にしたのです。

翌朝、私は早く洗面の事や何かで、翁の寢室の前の緣側を通ると、薄暗い座敷の眞中の床の上に、座禪をする時のやうな形をして坐つて居る翁の姿を見ました。之れは翁の習慣で、毎朝必ずする事で、矢張り座禪のやうなものなのだらうです。私はその姿を見ると直に、よく蚊帳無しで眠れたものだと、秘かにあきれて居たのです。所が、朝食事が濟むと、一人の英國人、それはピアソンと云つて、其後私と大へん親

しくした人ですが、眼のキヨロ〱した、髪の薄い何處か滑稽な感じのある人でしたが、その人が私に話した所に依ると、翁は一晩中蚊に攻められて殆ど眠れなかつたのださうです。顔や手足を大分やられて困つた事を話されたさうです。それを又、ピアソンが笑ひ宛ら話するのを聽いて居ると私も思はず笑はずには居られませんでした。あんなに注意したのを聽かず、一晩中苦しんで居た翁の事を考へると、その朝何事も無かつたやうに默想して居た翁の姿がをかしくてなりませんでした。

朝、食事が濟むと私達は翁と、未だ朝露の乾かぬ芝草の多い庭へ出ました。直ぐ寢室の横に、小さな荒れた池がありましたが、それは幾年にも手入れをした事のない蓮池で、差し渡し二間餘りの唯の泥池でした。普段餘り氣にも留めて居ない池でしたが、朽た葉や莖の間から綠の葉が僅か、それに紅と白の蓮の華が二三、靜かに開いて居ました。翁は暫く、可成り永い時のやうに思ひますが、その蓮池の側に立つてそれを見て居ました。

次に書く詩はその晩翁の手帳に印度の言葉で書かれたものださうです。これは翁が英文に直されたものです。

The same lotus of our clime
blooms here with the same sweetness
only in atothes name.

翁はその日一日中六角堂で過しました。六角堂といふのは庭の端の一丈餘りもある岩の上に建てた、名の通り六角の小亭です。岡倉氏が好みで建てたものですが、粗末な材木で、丹塗、瓦等の硝子戸を五方に廻らしたものです。翁は其所が大變氣に入つたらしく、三時のお茶も、ピアソンと私と二人で、其所へ運びました。お茶と云つても、紅茶に、トーストで、それに日本のおもちやせんべいなどだつたと思ひます。私は初めて翁に紹介されました。そして三人でお茶を飲みましたが、どんな話をしたか、今判然と思ひ出せません。翁は飽きずに海を眺めて居ました。直ぐ眼の下に石の燈籠を置いた大きな磯が見え、その磯續きに鰒を捕る海女の群が銅のやうな色の體を陽に干して居るのが光つて小さく美しく見えます。その近くでは小さな漁舟が網を引いて居ます。それを見てゐた翁は、私に英語で、あの漁師達の捕る魚は何の位の價で賣れるかと訊ねました。私はその邊では小さい魚しか捕れぬので、毎時私達が濱で買ふ時の値を云ふと「それは安い」と驚いたやうに云はれたのを覺えて居ます。私はその時、妙

な事を訊ねるなと思つたので、この事だけはよく覺えて居ます。

座敷の方では、前に一寸書いた若い印度人が、之も滑稽な愛嬌者で、始終翁に叱れて居るのださうですが、日本に來てから、習つたのだとか、日本風墨繪で、日本の卷物に海の寫生して居ました。それは翁から云はれて習ひ初めたのださうです。タゴール一族には畫家が多く、その若い人も繪かきなのでした。私が行くとその繪を見せて、私にも是非描けと云つてきかない。私がいやだと云つてどうしても筆を持たないと、それでは海へ行つて一緒に泳がうと云ふ。それで二人して泳いだり、鰒捕りを見たりして遊んだが、その間にもその若い繪かきは、裸體の儘、矢立から毛筆を出しては、海女の裸體を面白がつて寫して居ました。夕方、食事を濟まして私はその若い繪かきを連れて大津の町の方へ散歩に出ました。道道も例の卷物に寫生をして居た。二人共、まあ私の方がそれでも餘程拙いが、下手な英語で話すのだが、どうにか話は通じました。何でもタゴールさんが餘程、こわいやうな事を云つて居たのを覺えて居ます。歸りは山にかゝると薄暗くなつた。名前を忘れたのだがその繪かきは大變よく話すので、私は殆ど返事だけで濟んで居たのです。色々話して居る内に印度の女の話になり、切りに美しい女が居る事を云ふ。そして、お前には好きな女はないかと云ふ。私は默つて笑つて居ると、自分にはある、今度印度に歸つたら必ず結婚する考へだと云つて大へん亢奮して居た。が、話してしまうと、これはタゴールさんには云つては困る、君だけだ、さう云つて幾度も私の手を握つて居ました。歸つてから二人で、翁の居る、海に近い離れに行きました。其所で翁は寢椅子に横になつて月のない眞暗な海の方を眺めて居ました。海が荒れて居たので、激しい波の音がして居ます。私達が次の間に行くと、翁はその繪かきに向つて鋭い聲で何か、私には分らぬ言葉で云ひました。繪かきも同じやうな言葉で一生懸命云ひ譯のやうに云つて居ましたが、例の卷物を擴げて翁に見せ初めました。その時の翁の聲は殊に鋭い強い調子でしたが、一體にその聲は細い、が然し丸味のある強い美しい響を有つて居ます。誰かが、銀鈴を振るやうなと云つて居ましたが、私はもつと美しいものに思ひました。殊に詩を朗讀して居る時の聲は實に忘れられぬものです。翁は額に皺を寄せた難しい顏をしてその繪を見て居ましたが、どれも感心しないらしく、一々叱るやうに何か云つて居ました。唯一つ大津の濱で描いた繪で、廣い砂原の續いた、その果てに、夕日が沈まうとして居

る、其所に一人、點のやうに人物の描いてあるのを見て居る時には、翁の眼に微笑が浮んで居ました。それから、私達は次の間に來て暫く居る間に、翁の居る座敷の前の松の枝に、岐阜提灯が下げられましたが、翁はそれを大へん喜んで居たやうです。その内に、ピアソンも、茶色の荒い麻で作つた印度の服を着込んで、翁の所へ來ました。翁の座敷に入る前、眼で私達にからかひながら、又すまして翁の前に行くと、之れは又、をかしい程叮嚀に頭を低く下げて、殆ど頭が翁の足に觸れる位に御辭儀しました。そんな記憶があります。何でも印度の禮儀だと聞きました。そして暫くすると、翁が英語で、詩を朗讀初めました。それをピアソンが、手帳に寫して居るのです。それはその日出來た詩だと云ふ事を後で聞きましたが、次の間で聞いて居ると、波の音に交つて翁の聲の響きが、異樣に聞えました。

その翌日でした。ピアソンから私に、翁が是非一緒に印度へ來ないかと云つて居られるがと云ふ話がありました。私は不思議に思ひました。殆ど話らしい話もせず、僅か二日、それも一寸の間一緒に居ただけでどうして私にそんな事を云ふのかと考へました。ピアソンは、P. et が(ピアソンは何時翁の事をさう呼んで居た)大變あなたが好きだと云つて居られたと云ふ事でありました。

私はその頃、自分の將來の事でいろ〳〵迷つて居た時なので、丁度いゝ事と思ひました。何と云ふ判然した目的もなかつたのですが、唯、タゴール翁とどれだけかの時日を共に送り、印度を見て來ると云ふ事が、決して無意味な事でないと考へたので、私一人の考へとしては喜んで一緒に行き度いと云ひました。そして、それから二日目の日、私は母や兄達の諒解を求めるために、翁の一行と一緒に東京へ歸つて來たのです。

然し、私は色々の事情で行かれぬ事になりました。丁度翁が横濱の三溪園に居た時、私はその由を話しがてらお別れに行つたのです。その時、翁は次のやうな詩を書いて呉れました。それを私は今でも自分の書齋の壁に掛けて置きます。

Once we dreamt that we were strangers
We wake up to find that we love each other.
Robindranath Tagore

そして、その下に、

Aug. 24. 1916
Idzura

と書いてあります。

(一九二三、六、一)

米國國民性の側面觀

池田龍藏

一、齒のない日本青年

僕の友人でM君と云ふ紳士がある。今は某大學の堂々たる教授だが、若い時には全くの片田舍で育ち、漸く城下に出て其處の中學に入つた。卒業後志を立てゝ米國に遊學する事にし、會話練習の爲めと思ひ切つて或る太平洋通ひの外國船に乘つた。先生の内は、その村の豪家だつたので、一等客になつたはいゝが、その中學のあつた所謂城下なる町には、當時は西洋料理などは藥にしたくとも無かつたので、船が動き出してから晝食の爲め食堂に行く事となると、サア心配になつて來た。第一西洋料理の名前を殆んど知らぬが、今更仕方がないので自分の席についた。ボーイからメニューを差出されたが、初めから終りまで解らぬ。ヰエーターの先生ヘヘ……此の日本の小憎、料理の名を知らぬのだナーてふ樣な顏をして横で待つて居るので、氣が益々焦つて來るが、元來知らぬのだからいくら讀み直して見てもんで見當が付かぬ。エ、儘よと、先づ第一番目にあるやつを注文した。運んで來たのを見るとスープだつたので、そう心配したものでないと倒れぬ人がよくやる樣に大きな音を立てゝ平げて終つた。又ボーイが獻立書を見せて呉れるので、最初に味を占めて第二番目に書いてあるのを命じた。給仕人は訝しさうな顏をし乍ら引下つて行つて持つて來ると、スープとも書いてないのにまた前より濃いスープだ。まさか斷る譯にも行かず心抱して呑んだ。そんなにスープが三つも四つも書いてある筈がないから今度こそは大丈夫と思つて第三番目のを指差して見た。今度はボーイが吹き出しそうな顏をして料理場に行つて歸つて來た所を見ると驚くべしまた候スープだ。ボーイの畜生一寸敎へて呉れたら何でもないのにと癇癪玉が破裂しそうになつたが、今更詮方ないので、グッと腹の蟲を押へ、流し込む樣にして呑み下した。もうスープには懲々だがそれでも、もう食事を終へたとは云へぬから、一番最後の分を指で示して見た、もうボーイの顏など注意して居られぬので目を伏せ乍ら今度こそは何かよい物が出て來る樣にと念じて居ると、差出されたのは鳥の羽根で造つた小楊子と來た。同じ食卓の外人の手前もうもう居堪らぬ、背後に起つた笑聲を聞き流してコソコソ甲板に急いだ、上氣した顏を汐風に吹かれ乍ら泣き出したい樣

な氣分で居ると、間もなく隣りに坐つた外人がやつて來て、輕く肩を敲き

「貴方は外國料理は初めてゞせう。ネー、今夜から俺が教へて上げるから心配しなくともいいですヨ」

と慰めて色々とメニューの話をして異れた。勿論その當時だからその話の半分も聞取れなかつたが、何でもボーイがその外人に

「あの日本人は齒がないでせうか」

と囁いた事も笑ひ乍ら云つた樣だつた。

一寸落語の樣だが本人から聞いた話だからまさか嘘ぢやないと思ふ。

二、田舍者の洋行沙汰

僕が初めて米國に行つた時にはM君と五十步百步の所だつた。たゞその時は一行が澤山だつたのでM君の樣な失策をしなかつた迄だ。僕は一九一九年の暮に或る會議に出席の爲め米國に渡り、留る事僅かに二ケ月にして日本に歸つた、それが學校を出てから漸く三ケ年餘渺之碌に英語も話せぬ始末だ、そんな小僧が束の間に受けた印象によつて米國々民性側面觀を草すといへば、誰しも嗚呼がましい沙汰の限りだと云ふだらうが、歸朝後一ケ年で再び海外放浪の旅に上り、再び米國を訪ねて三ケ月程滯在して歐洲に渡つた。所が第一印象が依然として訂正する必要を認めなかつたので、敢てこの愚擧に出でたのである。米國でも英國でも乃至は歐洲大陸でもその地に長く住んで居る人に會ふと、よく通り一遍の旅行者にその國の事情が解つて堪るものかと云ふが、全くの田舍者が初めて米國に行つて受けた印象は却つて非常に深かつたので禿筆を呵する事とした次第である。

三、匂ひから判斷した世界各國

僕の狹い經驗から云ふと世界各國皆其の國獨特の匂を持つて居る樣だ。僕の如き極端に文章の才がない奴にはこんなデリケートな問題はとても書き表はす事が出來ぬが、兎に角その國々に全く異つたその國獨自の匂がある。特に地下鐵道で一番その感が深めさせられる。例へば倫敦と巴里と伯林と紐育の地下鐵道の匂は全く違つて居るから、倫敦に居つて紐育の地下鐵道に似た匂を嗅ぐと、急に紐育に居る樣な氣持になる。伯林に居つて巴里の地下鐵道の匂に近い香が鼻を衝つて來ると、巴里に來て居るぢやなかつたかしらと思ふ。そんなら各地下鐵道の匂が何う云ふ風に違ふかと云へば、英國のアンダーグランドは妙に燻つた樣な匂だ、伯林ウンテルグルントはいやに實驗室の中とでも云ふのか藥品くさい匂がする。巴里のメトロは何うもお白粉らしい香がする、以上の匂によつて判斷して見ると、英國は矢張り歷史を尊ぶ老大國で、獨逸は科學的の國であり、佛蘭西は爛熟した藝術的の國だと云ふ事になる。

四、米國の印象

然るに米國のシンボルたる紐育のサブウエーに乘つて見ると、何だ

とはなしに咽せ返る樣な焦々する匂がする、言葉を換へて云ふと青年の男女から發散する、その反對の性を動かさずに置かぬ強烈な匂だ、話は一寸後に戻りますが、地下鐵道から見た各國の特長は單に匂だけでない、その構造でも解る、倫敦のは如何にも古臭い、伯林のは組織的だ、巴里のは美術的だ、そして紐育のは雜薄な新らしい色が見える、然し必ずしもサブに乘るを要せぬ、米國は何處に行つても今云つた樣な若い匂がする、それで米國に於ける第一印象はと人に問はれると

「米國は若い國だ」

と答へる外ない。米國に滯在して居る間に、種々の印象を受けたが結局は若い國の一事に歸する、以下少しく僕の經驗した印象を述べて見たいと思ふ。

五、青年の歴史

米國内地を旅行して見て驚くのは英國や、歐洲大陸に比して所謂古跡が非常に少い事だ。例へば紐育での舊跡と云へば實に寥々たるもので、一七六五年に有名な印紙條例騷動が起つたボーリング、グリン、獨立戰爭に戰場となつたフオト、ワシントン等位に五つ六つに過ぎぬのだ。之を羅馬の如く一木一石として懷古の種ならざるなきに比すれば實に霄壤の差である。羅馬に滯在中パラチノ丘だけでも二日間行つて二千年の在りし昔を夏草に腰打かけて偲び、低徊去る能はざるものあつたが、紐育では一日だけで舊跡は見盡されると云ふ始末だ。然し之は米國の歴史を繙いて見れば決して無理ならぬ事を自得するので、今更米國史を辯じ立てゝも初まらぬが、單にコロンブスが亞米利加を發見したのが一四九二年今から四百三十年前で、日本で云へば後土門御天皇、明應元年足利義直將軍の時、巴里で米國の獨立が確認されたのが一九八三年で、今から僅かに百三十九年光格天皇、天明三年、德川家治將軍の時だと云ふ事だけ考へても、誰しも米國の歴史が如何にも若く、世界の國としては全く青年だと云ふ事に氣がつくと思ふ。フロリダ洲のセント、オーガスチンと云ふ所にフランシス教派の傳道僧の建てた家があるが、之は三百五十二年前のもので米國で一番古い建築だと稱されて居る然るに日本と同じく英國や、佛蘭西や、伊太利等に行けば三四百年前の家などは決して珍らしい部に入れられぬのだ、何しろ米國各地を旅行して歩くと若い國だと云ふ感じが何うしても頭を離れぬ。尤も米國でもヒラデルヒヤ、ボストン等は幾分舊跡らしいものが他の所に比して多い。

六、活動が生命

紐育から桑港に出る途中の事だ、K博士、K前總領事のお供で市俄古に立寄つた。小供が御同行を仰付つたのだから、秘書格であるべきのに、山出しの僕はセクレタリー所が却つて邪魔者だつた。ホテル、ラツサールと云ふのに泊つたが、市俄古からロスアンゼルス迄の寢臺を取らねばならぬので、同ホテル内の切符取扱所に行つた。所がそのオヒスには二人の書記しか居らぬのに切符を買ふ連中が

列をなして待つて居るので、その忙しさがまるで目の廻る樣である。見て居ると左の手で電話の受話機を持ち、右の手で電話の用事をメモに書く、その話が未だ終らぬ中に前の電話が鳴ると一方の受話機を肩と耳の間に挾み、一方の手で他の受話機を持ち、同時に二の電話を聞くと云ふまるで曲藝でもやつて居る樣な始末だ、また紐育などで米國の會社を訪ねて見ると、そこの連中の事務の執方と來たら實に敏捷で、見て居つても氣持がよい位だ、だから米國の會社を見て英國や佛國のそれと比較すると英佛のは眠つて居ると云つてもいい位である。兎に角米國人は若いから老人の樣に悠然と構へ込む事が出來ぬ。一寸でも活動しないで居られぬのである。だから街を歩いて居つても、紐育では倫敦や巴里や伯林などの樣に悠りして居られぬ、少しでも立止ると後の人から突き飛ばされる虞がある。特にラッシタイムと云つて事務所のひける頃に下町を通ると足が地面によくつかぬと云ひ度い位押流される。それで紐育の市中は倫敦の樣にステッキを七分三分に小脇にかゝへ込み、デッケンスの言ひ草でないが、はめもせぬ手袋を持つて紳士然と練つて歩く人などはなく、後から泥棒でも追かけて來る樣な恰好にして爪先で歩いて居る。

七、何處までも開放的

米國人は若いから何としても開放的だ。他人に對して城壁を設けぬ、之が具體的に現はれて居るのは米國人の庭だ、ロスアンゼルスの郊外パサデナ等に行くと如何にも米國式の庭が見られる。日本では庭園と云へば家の裏側にあつて廻らすに高い塀を以てするが、米國では多く家屋の前面にある。それが隣家と連つて居つて、何處かの國などの樣な土塀の上に硝子屑などを植えたものなどは見られぬ。隣りの庭との境は大抵目印の一本の線と云ふか小さな淺い溝だから其の邊の道を散歩すると公園に居ると同じ感がする、そうした類の庭園は英國や歐洲大陸では餘り見られぬ。更に面白いのは汽車だ。第一に停車場に就て云へば紐育、市俄古、華盛頓等の如き一流の都市のは別として二三流以下のデポーになると全く垣などはない、プラットホームにも自由に出入されると云ふ具合だ。また一寸日本人に珍らしく思はれるのは汽車の線路だ、町の中で人道と平行してレールが電車線路の樣に敷いてあつて、長さ十八間、目方十萬貫もある機關車を引張つて居る長い列車が其の上をノソノソ通つて行く恰好は如何にも大陸的だ、一九一九年の暮に國際勞働會議が華盛頓で開かれた時の事、本會議の席に出入を許可されたものに豫め青色の入場劵をくれたが、殆ど之を見もしないでドンドン入場さした。僕は一度もその許可證を出した事がなかつたが、之れが日本なり歐洲なりであればその入口に巡査か守衛が頑張つてゐて嚴重に一々入場劵の有無を檢べるに極つて居る。またその會議に列席した各國代表者の事務所が極つて居る。米國海軍省の分館の中の空間を貸したもので、隣の部屋は例へば最も機密なるべき潜行艇課と云ふ樣な類だ、勿論そんな部屋には入つて行けぬが、大きな室などは事務を執つて居る中を通り拔けさせて居るとは一寸日本の官廳では夢にも見られぬ圖だ。

八、小供らしい大人

日本人は一體に西洋人に較べると、大人否老人らしく出來て居る。所が米國人と來ると特に極端で、大人でも老人でも本當に小供らしい。紐育の近郊にコネー、アイランドと云ふの盛場がある。夏の最中には一日に九十萬人も紐育から遊びに來ると稱されて居る所で、俗惡なる民衆娛樂場としては世界第一である。他の國では多く此の式に眞似て居る。例へば伯林に之に似たものにルナパークと云ふのがあるが、此處は特に亞米利加式と廣告して居る。日本人にとつては米國のコネー、アイランドの馬鹿らしさと來たら全くお話にならぬ位だ、例へばジアイアント、レーサーと云ふものがある。復線のレールが波形に走つて居つて客を乘せた無蓋の電車が二輛同時に出發し、俄に急阪に馳け上つたかと思ふと急に千尋の谷に轉直下して下りて行く。その氣持の惡さと來たらない。それで米國の女等はキアツキアツ云ひ乍ら喜んで居る、僕は米國に來た以上は米國氣分を味はなくちやと云ふので一度試みて見たが何うも閉口した、途中で下り度いと思ふても終點まで行かねば止まらぬ、所が米國人は老若男女の別なくこんな物に二度も三度もブツ續けに乘つて至極樂んで居る。その外、テツクラーとかヘエリー、ホエールと云ふ樣な馬鹿の骨頂を盡したものが數へ切れぬほどある。かくの如く米國人は西洋人の中で最も單純卒直な方で、從つて全く無邪氣で面白い、此のよい例は御國自慢だ勿論何國の國民だつて國自慢をしないものはないが、米國人は特に酷い、米國には成程世界一のものが多いからでもあるが、何んでもかんでも世界一を口癖にして居る、だから國そのものも世界一だと信じて居る、或る時紐育で活動を見たら、競馬の映畫だ、そのホース、レースの騎手は各自世界各國の國旗で造つた服を付けて居る。初めに大分ビリの方に居つた米國が順々に先の奴を追ひ越して行く、その度毎に觀客は矢鱈に手を打つて喜ぶ、決勝點の近くの所で米國が急に最先になると、見て居る連中は歡聲を揚げて嬉しがると云ふ光景だ。まるで大人が小學校の生徒に若返つたかと日本人に思はれる位だ、小供らしい點では更に面白い話がある。或る日二三度訪問した事のある紐育の某事務所に行つた所が、顏の知つて居る若い女事務員が出て來て、

『ハロー、ミスター、イケダ、ミスターFに御用ですか、F君は直ぐ歸つて來るから忙がしくないなら暫く待つて居て頂戴』と云ふ、その娘を見ると今日は胸に勳章の略章を付けて居る、オヤと思つて、

「ミス、O、貴孃は前からその勳章をを持つて居るのですか

と訊ねると、先生の曰くさ

「ノー、これは今朝途中で拾つて來たの」

と、これには僕も少からず驚かされた、無邪氣と云ふか、小供らしいと稱へようか、日本人では一寸想像だに出來ぬ藝當だ、一體米國の勞働者などが衣上の胸に無闇と徽章を付けて居るのは一種の奇觀だが、それをよく見ると一ケ年前位の赤十字社の一ケ年社員章だの、今社のマークだの、牛乳改良運動集の徽章だのが雜然として同居して居る、

（續く）

全國女敎員大會を傍聽して

平林初之輔

日進月步といふ言葉は、現在の日本の婦人に對して、割引きなしに、文字通りにあてはまる言葉である。つい近年まで、完全に、殆んど例外なしに、封建的觀念の中に眠つてゐた婦人の間に、今日では、非常な速力をもつて、新陳代謝が進行してゐる。古い力の崩壞と、新しい力の勃興とは今日の婦人の場合に、最も鮮明に見られる現象である。私は、女敎員大會を傍聽して、痛切にこのことを感じたのであつた。

本年度の全國女敎員大會は、五月二十八日から三日間、お茶の水女子高等師範學校の假建築の講堂で開かれたのであるが、私の傍聽したのはその中の二日目であつた。今當日の所感を述べるに先つて、その日の大會のプログラムを略述してをくのが讀者に便利だらうと思ふ。大會の第一日には、各地から提出された十二の議案を討議して、その中の「女子に對する專門學校の開放」の要求を可決したゞけで、殘りの十一議案は、全部委員附託となつたのである。第二日即ち私の傍聽した當日は、その第十一議案に對して委員會が作製した調査案の討議と評決とが行はれたのである。たゞ時間の都合で十一の中で二つだけは翌日まはしとなつた。

私は、先づこの大會から得た一般的印象を述べ、次いで、委員會の調査案並びにそれに關する討議にあらはれた女敎員諸氏の觀念狀態を、社會進化の一般理論から說明し、更に若干の註文をも附加することを許して頂きたいと思ふのである。

□　□

私がこの大會から受けた印象は、議長席に、緊張味のかけた男子の顏が、まるで男子の社會的壓制を象徵したやうに並

んでゐたのが眼ざはりだつたといふ一點をのぞいては、極めて良好であつた。その理由は、第一に、出席女教員諸氏が熱心で眞面目であつたといふことである。不熱心や不眞面目な態度はたゞの一度も見られなかつた。ことに「女教員をして校長視學其の他の教育上重要の地位を得しむる實行方案」といふ第一號議案に對する討議の場面は最も緊張してゐた。この熱心は、社會的に不當な逆境にたつてゐる者のみのもち得る熱心である。議長は熱心な發言要求者が續出してゐたにも拘はらず時間の都合で討議を終決せねばならなかつた程だつた。第二の理由は封建道德の餘弊たる無用のひつこみ主義が殆んどあとをたつて、卒直と元氣とが横溢してゐたことであつた。大抵の新聞は、この卒直さに對して幾分冷評的な報道をしたり、少くもその「男性的」なのに皮肉まじりに驚いてゐるやうであつた。けれどもそこには冷評に價するやうな何物もなかつた。極めて自然であつた。おまけに聲も仲々よく聞えたし、皆相當に雄辯であつた。第三の理由はその議論が概して實際的だつたといふ點である。輕薄や、虚飾や、感傷的な人道主義などが全くなかつたといふ點である。しかも仲には、討議に附せられる調査案の缺點に對して、適切な、極めて筋のとほつた質問をする人が少なくなかつた。調査案そのものが相當實際的だつたに拘らず　その中から幾分でも非實際的な部分は修正されたり、さん〳〵酷評された上でお義理で可決されるといふ風だつた。第四の理由は、會が甚だ靜粛で、上品で、時間が正確に守られたことで、この點では同種類の男子の會合のとても及ぶところではなかつた。以上の理由によりて私の此の大會から受けた印象は極めて好ましいものだつたのである。

□　□

此の大會で私は、今日の婦人の觀念を支配してゐる二大潮流をはつきりと見ることができた。それは調査案そのものにも現はれてゐたし、討議者の態度や言論には更にそれが判然とあはれてゐた。それは一言で言へば努力主義と改革主義との二つの潮流である。婦人は何といつても現在では體力に於ても知力に於ても男子に劣つてゐるのだから、その社會的地位が從つて男子より劣つてゐるのは仕方がない。それを改めるには先づ第一に婦人が自らの實力を養つて、實力に於て子男と同等までこぎつけねばならぬ。制度の改革などは本質的な問題ではない。――とかういふ風に考へてゆくのが私のこゝでいふ努力主義である。これに反して、婦人が體力にも知力にも男子に劣つてゐるのは、その大部分は今日の婦人が直

接に脊負べき責任ではない。婦人は如何に努力しても男子と同等の地位に達することができないやうに社會のからくりができてゐる。法律的、政治的、經濟的、慣習的に婦人は非常な、殆んど絶望的な地位に立つて男子と競爭しなければならぬ。この障害物を取り除くことが、婦人の實力を養ふ基礎條件である。――とかういふ風に考へるのが私のこゝでいふ改革主義である。

この二つの潮流は、大會の空氣を鮮明に二分してゐた。そして大體に於て第二の潮流が優勢を示してゐることがわかつた。この二つの潮流の衝突の最も激しかつたのは、前にあげた第一號議案調査案の討議の時だつた。或る人は女教員が今日教育上重要な地位につけぬのはその實力が足りないからであると主張して女教員の修養努力の必要を切論した。これに對して或る人は、女教員の實力の足りないのは果して誰の罪かと反問し、更に或る人は、調査案の内に、「男女教員の待遇の差別を撤廢すべし」といふ條項を附加することを主張し、實力の問題ではなく、單に女であるといふだけの理由で女教員の待遇が劣つてゐることの不當を叫び、或る人は、この問題は單に女教員の問題に止まらずして、社會問題であり、人權問題であると斷案した。これに對して、「吾々は虚飾や、物質的慾望にかられて、徒らに世上の輕薄な運動を模倣してはならぬ」とたしなめる人があつたかと思ふと、忽ち「吾々の叫びは、虚飾や、人眞似から出たものでなく、衷心から出た正義の叫びである」ときめつけて滿場の喝采を博した聲があつた。そうしてこの修正動議は、殆んど滿場一致で可決されたのであつた。

もう一つ改革主義の勝利を力強く示したのは、第三號議案の「女教員が教育上主要なる活動を爲すについて自ら反省すべき要點如何」に對する調査案が、殆んど臺なしに修正されたことであつた。この調査案は、努力主義の精神を代表的に示したものであつて、女教員が、自覺に乏しきこと、包容の精神に乏しきこと、理性に乏しきこと等十數項に亘つて女教員の缺點を列擧し、これに對する修養努力の必要を力説したものだつた。ところがこの調査案は、女教員が自らを侮辱するものであるとして、原案全部が修正されてしまつた。この二つの例を見ても、改革主義の精神が如何に有勢を示してゐたかゞわかると思ふ。

この二つの潮流は、單に、大會出席者の色彩を二分してゐたばかりでなく、同一個人の頭腦の中でも分裂衝突してゐることがわかつた。それは相反する二つの意見に對して、双方に

拍手する者や、評決の際双方に擧手する者や、どちらにも擧手しない者があることによつてあらはれゐてた。これは冷淡の結果ではなくて、決断に迷つた結果であることは容易に觀取することができた。

その他では、體育に關する問題が比較的多く論議されたといふ點をのぞいて、特に興味をひくものがなかつたが、たゞ一つ「女教員産前産後に休養すべきにつきては其補充を如何にすべきか」といふ最も實際的な問題が出たことである。この議案は 補缺代用教員を一校又は數校にて採用するといふ調査案が可決されたが、閉會のまぎわにあたつて、この議案の出た神川縣の横須賀の一女教員が、震災後の横須賀の實状をうつたへ、震災と同時に横須賀市では、四十名（或は六十名）の教員が何等の理由なしに馘首されたことを報告して、かやうな狀態では補缺教員をおくなどゝいふことはとても當局者に期待することは不可能なことであるから、もつと別の適切な方法を考慮してほしいと言はれたのに、當日棹尾の大演說でつた。

□　□

次に私は、以上の觀察を組織的にするため、今日社會進化の途上に於て、日本の婦人、特に女教員がどんな役割をはたしてゐるか、婦人の間に進化の作用がどんな風にはたらきかけてゐるかを考へて見やうと思ふ。何となれば、婦人の觀念上の變化は、この事實の變化を反映してゐるのだからである。この事實の變化のために、婦人の中でも最もつゝしみ深い、最も教養のある部分に屬する女教員でさへも、「努力」と「修養」と「反省」にのみたよることができないで、從來婦人にはかたく禁物とされてゐた改革的手段の必要を絶叫しなければならなくなつたからである。

現在の社會を進化させてゐる力は、何物にも組織的に指導されてゐないばかりでなく、色々な制度によりて防害されてさへゐるのであるが、しかもなほ、この力は盲目的に社會を進化させてゐるのである。從來の固定した婦人の社會的地位をばら〳〵に分解して、急速に婦人を新しい組織へ織り込んでゐるのが此の力である。換言すれば婦人の家庭的分業から奪ひ取つて社會的分業の組織へ編入してゐるのがこの力である。この作用を受けて、最も大量的に家庭から社會へ送り出されてゐる婦人は女教員であり、家庭と社會との關門の役目をつとめてゐるのが女子師範學校その他の教員養成機關である。

日本に於ては、女教員は、職業婦人として最も美事に成功

したもの、隨一である。これは社會現象として觀察するとき二つの條件から生じた結果である。即ち、第一に社會がそれだけ婦人を需要したことであり、第二に婦人がこの需要に應ずるだけの資格をもつてゐたといふことである。第一の條件は何を語るかといふと、今日の社會は、もはや男子だけでは維持できなくなつたといふこと、即ち家族制度の崩壞と比例して、家庭の負擔が少くなり、社會の負擔がそれだけ重くなつた爲めに、男子だけではこの社會的負擔に堪へられなくなつたことを意味する。教育の場合について言へば、國家が、六ケ年間子供を強制的に家庭から引き離して公民教育を施すといふ負擔をおふた爲に男子だけではこの過重の負擔に堪へられなくなつたのである。この時に、家庭の負擔の輕減された女子を徒らに昔どほりに家庭に閉ぢこめておくのは社會として如何にも不經濟な話である。けれども婦人に社會事業に參加する能力がなければ、如何に社會が需要しても婦人はこの需要に應ずることは出來ぬ。たとへば戰爭の時に、どれ程國家が兵員を需要しても、老衰者や、病人や、不具者では間に合はぬと同じ理屈である。ところが、婦人はこの能力を十分にもつてゐた。ある點では婦人は男子以上の能力をもつてゐた。そこで從來の家庭的分業が、日と共にばら／＼に崩壞して、婦人は刻々社會的分業の組織へ織り込まれてゐるのである。

ところが、社會は、婦人を自らの懷へ迎へながら、依然として、婦人が家庭的分業に閉ぢこめられてゐた當時の法制、慣習をもつて婦人を遇したのである。そこに一切の悲劇の根元があるのである。此の法制と慣習とは婦人の行く手に設けられてゐる電流を通じた鐵條網のやうなものである。社會進化の盲目力は否でも應でも婦人を社會の中へ押しやる。しかもその關門には鐵條網が張られてある。そこで、歷史の車輪が逆行せず、婦人が奴隷狀態に於てゞあつたにしても、兎に角安定の生活を家庭内で樂しむことのできた時代が再び歸らぬとすれば（それは事實上歸り得ないのだ）婦人は、社會に於てその地位を確立せねばならぬ。鐵條網を取り除かうとする努力、即ち私の所謂改革主義の精神が、社會の最も樞要な教育機關を擔當してゐる女教員の間にみなぎつて來たのは、かういふ事情によるのである。決してそれは、人眞似や、輕薄な動機から出たものではなくて、社會進化の力がたま／＼婦人の唇頭から聲となつて發揚したものに外ならぬのである。

もとより、努力や修養は大切である。けれども努力と修養

が十分の結實をするためには不合理な男女間の差別を撤廢することが何よりの急務である。たゞ婦人であるがために、男子よりも不利な待遇を社會から受けるといふことは、從來の、女子が社會文明に參加しなかつた時代の遺物以外の何物でもないのであつて、婦人が社會文明に參加した今日では當然撤廢されねばならぬものである。

□　□

女教員大會の席上で、女教員の口から、女子が社會的知識、國際的知識を養ふことの必要や、女教員自ら體育の修練につとめねばならぬ必要などが叫ばれたのは、社會進化の力によりて新しくつくり出された事情に適應せんとする女教員諸氏の健氣な決意を示したものである。それにも拘らず、今日女教員は、校長、視學等の職につくことができず（大分縣で女教員が校長になつた實例なのど話が席上で出たのを除いて）、女子であるといふだけの理由で待遇の差別を受け、百千の不便を甘受しなければならぬといふのは大きな間違ひである。この間違ひをだまつてあきらめてゐるのは、婦人が家庭に於てしか必要がなかつた封建時代の道德である。社會の事情がかはれば道德もかはる、かういふ點については、婦人特に、多くの意味で婦人運動の先驅者たるべき女教員諸氏は、最も勇敢に社會の非を鳴らさねばならない。

殊に、小學教育の如き仕事は、婦人に最も適當した仕事であつて、どこの國に於ても男教員に對する女教員の割合は年と共に增加してゐる。日本に於ても小學教育の大部分が、近き將來に女教員の手に握られるに至ることは明かであると思ふ。社會進化の大勢は、それ程女教員に有利な方面に動いてゐるのである。今年の大會でも私は十分愉快な印象を受けたことは前に言つた通りであるが、來年は更に、婦人として、社會人としての徹底した自覺の上に、もう一歩根本的の改革意見が提出され、その實行を見るやうになることを希望してやまない。最近數年來の婦人の進步は、殆んど將來の豫斷を許さない程迅速である。私はこんな老婆心を披瀝したことが恐らく來年は恥かしくなるだらうと思ふ。それを私は望むのである。（五月三十日）

一女教員より女教員達に

——全國小學校女教員大會に出席して——

平田のぶ

女教員會の問題の中心が、女性の美徳たる謙遜から要求に進歩したといふ事は、時の流れのお蔭とは云へ、ともかくも喜ばしい現象だと思ひます。

◇

然し私は、その要求の内容。及要求の態度をみて要求が内に充分熟してゐないといふ事に對する淋しさを覺えるのであります。

こは、我々の要求が何を意味するか、この要求は何に依て充たさるべきかに對する充分の省察を缺いてゐる事に因るものだと思ひます。

お互の愛がその焦點に達する迄は、よし愛しあつてゐやうとも、身體的交渉を持つ事は、肉の奴隷であり利欲であり、賣淫であると信ずる私は、凡ての要求も、それが充分の成熟を見る迄待つべきものだと考へるのです。——勿論これを理由として特權者が拒否する事は許されない事であり、又充分内に熟した時に要求を躊躇する意氣地なさは、最も卑怯なものと思つて居りますが——。

我々女教員が自分の要求に緊張した思索と省察とを加へ、不滿の感情に理性の洗禮を與へて、充さるべき的をはつきりつきとめ、確かな自覺を得る迄は、どんな要求も充されては困ると思ふのです。何が欲しいか、何故ほしいかが解らず、從つて取つて來てもどうしやう目當もなくて、人の持てるくだらないものを、くだらなく持つて來ては大變だと思ふのです。

◇

怒つてはだめです。諸姉よ。かう云はなければならない私

は、やつぱり淋しいです。

現在のまゝの樣な、くだらない校長や視學にならば、我々女教員にも何時だつてなれますよ。

然し私共が「校長や視學」といふ位置を要求するのは、それが『教育上に重要な位置』と考へ、又は思ふまゝに配下を支配し得る高い位置と思ふからではありません。特權のある高い位置、女どもには與へられない教育上重要な地位との意識に反感を持ち、その意識と戰ふ必要を痛感するからであります。

更に外に對して教員のそれぐの生命の尊嚴を保護し、教育の神聖を確立するに都合のよい位置であるからであります。もつと具體的にいふならば、校長の理想に依つて學校の教育が統一され（實は劃一）視學の更る度に郡の教育方針が變つたりするやうな教育界―「戀する事さへ罪」といはるゝ樣な教育者達の頭、之を改造して私共の人間としての當然の生活を生活したいからであります。

◇

一部のもの丈に入場を制限する時、許されたものは許されざるものに對して優越を感じます。許されざるものゝ中には、入場を制限する事の不合理を叫ぶもの、指を咬へて羨むもの、入場を許された特權者達を仰ぎたなく罵るものの三種があるでせう。

校長や視學が、男教員のみに限られ、然もその男教員中の優秀者が選ばるゝといふ事實は、私共女教員には二重入場制限に考へられます。從つて或るものは、益々その制限の不合理を痛感し、又或者は益々特權への憧れを高めます。

私達は果していづれに屬してゐるのでせう。いづれに屬したらいゝのでせう。「お前達は出よ私達が入る」も蟲のいゝ慾しい事であります。「誰かお情で入れて與れるかもしれない」と指をくはへて待つてるのも、さもしい根性です。

◇

「特權」だとして拒んでる地位を、その意識のまゝ肯定して要求しては、私共の自殺であります。

校長や視學は偶然の事實に依つて入場を制限されるべき特權階級でも、教育上重要なる地位でも、あつてはならないのであります。現在の「校長や視學」の如く、一種の支配階級になつてゐるそれを要求してはならないのであります。從つて、「校長視學」に必要な講習會や事務見習をしてはといふ建議の如きは、凡て一種の自家撞着であります。「人が持つてゐる特權だから欲しいのですか」といふ私の皮肉に憤激する前

に反省してほしいと思ひます。

◇

私は最後に今一つ苦言を呈します。そは多くの人々の要求の態度が出來てゐないといふ事です。こは勿論要求に對する自覺を缺き、要求が内に熟してゐないといふ事に原因するものと思はれますが……。

私共の要求は何處までも要求でなくてはなりません。「御願ひ」であつたり「御頼み」であつたり、「して頂く」のであつてはなりません。言葉の綾として「要求」の代りに使はれるものとしても感心出來ませんのに、まして特權者のお情に依頼して、お引立てを被るといふ樣な、さもしい根性は、女性自身を辱めるものであります。私共の要求は、自分一個の爲めであり、女教員全體の爲めであり、更に女性、人類の爲めである事を思ひませう。私恩的に許されるべき性質のものではなく當然求むべきものなのです。

婚姻の基調

（定價壹圓五十錢　送料十五錢）

京大教授　宮本英雄著

第一婚姻法の將來

□社會生活と法律□所有關係と男女關係□自由主義への進展□新團體主義の婚姻

第二夫婦間の貞操

□問題の意義□婦人運動の主張□妻の貞操に關する史實□刑罰法規の廢止□民事法規の活用

第三寡婦の再婚

はしがき□寡婦を財產視せる思想□再婚の制限□基督敎と再婚□寡婦の殉死□家族制度と寡婦再婚□現代への暗示

第四離婚の防止

□離婚は害惡か□離婚の原因□婦人の覺醒

第五婚姻媒酌

□珍らしい訴訟事件□婚姻媒酌とは何ぞ□報酬附媒酌は不法□媒酌後の謝禮□支拂つた報酬の返還

第六家族制度と婚姻

□家族制度の二義□婚姻に對する戶主の同意□戶主又は相續人の婚姻□內緣の夫婦□家族制度と妻の地位□家族制度と離婚

婦人生理學講座（八）

震災其他にて本欄一時休止してゐましたが、本月號より連續して掲載します（記者）

永井潜

雌雄同體

私は七度講を重ねて、性別に關して述ぶる所があつた。卽ち生殖腺（睾丸と卵巣）の相違による根本的第一次性徴性別と、之に附隨せる附帶的性別卽ち第二次乃至第三次第四次性徴とに就いて其の區別を明かにし、生殖腺より送り出さるゝ内分泌物が、附帶的性別を喚び起す爲に重大なる働をなすもので、隨つて附帶的性別は根本的性別に附隨して決定せらるることを論じ、最後に根本的性別の決定は、遺傳學竝びに細胞學の見地より十分なる解釋を與へ得ることを說き、結論として、昆蟲類の如き下等動物では、獨り生殖腺の差別による根本的性別のみならず、附帶的性徴も亦、專ら直接遺傳によつて決定せらるゝもので、斯の先天的遺傳的にきまつた第二次性徴は、生殖腺の爲に影響を蒙ることはないが、高等動物になると、其の關係は一變して、遺傳によつて決定せらるゝものは、專ら根本的性別卽ち第一次性徴のみであつて、斯くして出來た雌雄の生殖腺から、各々固有の内分泌物が造られ、斯の物の働によつて、附帶的性徴が喚び起さるゝこと、隨つて高等動物の體は、第一次性徴以外の差別に關して本來中性乃至は無性であつて、男ともなれば女ともなり得る性狀を具へて居るものであるが、而かも此の中性の性狀を、男女何れかの方向に振りむけるのは、一に生殖腺の內分泌作用によるのであるから、男らしさ女らしさに於て、種々の程度が現はれ、男性にして女性に近づき、女性にして餘程男性に似よつたものが、往々にして出來得ることを說いた。此の結論は、社會生活に於ける男女の地位を、生物學的哲學的に考察

するに當つて、頗る重要なる意義を有つものと言はなければならない。何んとなれば、男女の心身に於ける幾多の差別が、根本的先天的のものでなく、第一次性徵に附隨せる附帶的後天的のものであるとすれば、男女の地位を品隲するに當りては、須からくこの第一次性徵即ち根本的差別の上に立脚すべきであり、而して又一面斯る差別觀より批判を下すと同時に、一面平等觀を以てしなければならないことの動かすべからざる原則を指し示すものであるからである。私はこの重要なる意義を有する結論を、より完全ならしめんが爲に、茲に雌雄同體の問題を提げ來つた。

雌雄同體とは、雌雄生殖細胞を造るべき兩種の生殖線が、同一個體內に存在する場合を云ふのである。是れは大多數の植物竝びに一般下等動物に於ては正常狀態として、見らるゝもので、分業の法則から考へて、生殖の仕事に於ける原始的狀態である。已に述べた樣に、高等動物では、兩種の生殖線が、各々別の個體に出來て（雌雄異體）、茲に始めて嚴格なる意義に於ける兩性の別が生ずるのであるが、而かも斯の雌雄異體であるべき高等動物に於て、往々雌雄同體を示す場合がある。ノイゲバウエル氏は、人間の雌雄同體に關して廣く研究して居るが、氏の涉獵した文獻によるも、一九〇六年迄に、之れに關して一六三二例が擧げられて居る。尤も其の大多數は、所謂假性雌雄同體に屬すべきもので、第一次性徵たる生殖線は、唯一種あるのみであるが、第二次性徵として、男女兩性の性徵が相混つて同一個體に現はれて居るのである。人間に於て、所謂眞正雌雄同體即ち兩性の生殖線が、同一個體に存在し、同時に兩性の第二次性徵が共存して居る場合が確實にあつたかどうか、夫れは甚だ疑はしいのである。

假性雌雄同體にも、種々の類別がある。例へば生殖線は睪丸でありながら、外陰部や一般の第二次性徵は婦人に近似して、乳房は大きく、頭部を除くの外毛髮は少なく、陰囊は裂けて陰唇の狀を呈し、時には又膣樣の盲囊を具ふる場合もある。斯樣な場合、其の人は多く女子として育てられ、又た心身共に女子として自覺し、妻として結婚するのである。或は又、之れと反對に、卵巢を具へながら、外陰部や第二次性徵に於ては、寧ろ男子に類する場合もある。更に又、生殖線と外陰部とは普通の如く匹敵せる性狀を示しつゝ、毛髮や音聲や骨組み等一般第二次性徵に於ては、生殖線に相當せざる異性の性狀を示す場合もある。

扨て斯る事實を如何に說明すべきかと云ふに、元來第二次性徵の決定に關しては、二つの反對せる意見がある。其の一

は、已に述べた樣に、第二次性徴は專ら生殖線の內分泌物によりて後天的・續發的に喚び起さるゝものと主張するスタイナハ、タンドレル、グロス氏等の學說である。之に反して他の一は、專らハルバン氏の提唱にかゝるものである。其の說によると、第二次性徴も亦、第一次性別と等しく、直接遺傳によつて決定せらるゝもので、先天的獨立的のものであり、隨つて生殖線の內分泌物は、高々、此の先天的に決定せられたる第二次性徴を培ふ丈けの作用を行ふのみで、決して新たに第二次性徴を形成すべき有力なる働は無いと云ふのである。此の兩說の中、少なくとも雌雄同體の事實を說明するには、ハルバン氏說が適切であるかの如く見へる。思ふに若しスタイナハ氏等の說の如く、高等動物の體は、本來中性であつて、この中性なるものが雌性若くは雄性生殖線の固有なる內分泌物の働によつて、夫々それに相當せる第二次性徴に迄振り向けらるゝのであるならば、どうして假性雌雄同體に於て見る如く、睾丸があつて而かも女性の第二次性徴を現はし、自己の生殖線に匹敵せざる第二次性徴を顯現するであらうか、其の說明は大に困難であらねばならぬ。之に反し、ハルバン氏の說によれば、第二次性徴は、第一次性徴と無關係に、直接遺傳によつて決定せらるゝのであるとしたならば、生殖線に匹敵しない第二次性徴が現はれ來つたからとて、決して怪しむに足りないのである。

斯く雌雄同體の事實は、一見、吾等が先に揭げ出した結論である所の、雌雄男女は、本來、第二次性徴に關しては中性であつて、生殖腺內分泌物の働を待つて、始めて雌雄何れかの方向に振り向けらるゝものであると云ふ考を裏切るかの如く見ゆるものであるが、併し一步退いて考を廻らして見ると、ハルバン氏の意見必しも當つて居ない。先づ第一に考慮しなければならないことは、若しハルバン氏の云ふ如く、第二次性徴も亦第一次性徴の如く、先天的、遺傳的に決定せられて居るもので、而かも第一次性徴とは無關係であるとしたならば、去勢によつて第二次性徴の發露せざること、竝びに去勢後に於ける生殖腺移植によつて、遲れ馳せながら第二次性徴の出現する事實を、如何にして說明することが出來やうか。ハルバン氏は、生殖腺の內分泌物が、先天的既成的の第二性徴に向つて保護的刺戟を與ふるものとして、第一次性徴と第二次性徴との間に見らるゝこの密接なる關係を說明せんとして居るが、併し、夫れにしては兩者の關係は餘りに緊密であつて、恰も形影相伴ふが如き觀を呈することは、如何にも理解し難いことである。特に又ハルバン說

に對する致命傷とも云ふべき最大難關は、スタイナハ氏によつて成功せられた「性轉換」の實驗的事實である。

已に述べた樣に、スタイナハ氏は、生後僅かに三週間を經過せる幼少なるモルモットに就いて、雄には睪丸を切除して其の代りに卵巢を植ゑ、雌には卵巢を取つて其の後に睪丸を移植し、成長後第二次性徵に如何なる狀況が起るかを觀察した所が、前者は本來雄として生れたにも關らず、身長・毛並・乳房・外陰部等、悉く雌の性狀を呈し、加之、心的作用迄も雌性化して、雄を挑んだり、或は乳房を幼兒に與へて愛育することを見た。之に反して、元來雌たるべかりしものに、卵巢を去り、睪丸を植ゑたものに於ては、心身共に雄性化することが確められたのである。斯の「性轉換」の實驗的事實は、第二次性徵も亦、第一次性徵と等しく、遺傳によつて決定せられてゐるもので、生殖腺の內分泌物は、單にこの既成の第二次性徵を培ふものであるといふハルバン說を以てしては、到底說明することが出來ない。

サンド氏は又た、近時頗る興味ある一新事實を實驗的に確め得た。氏は生後五乃至十五週を經たるモルモットの睪丸に、幼少なるモルモットの卵巢を取つて移植して見た所が、意外にも好成績を以て癒著することを認めた。斯くて人爲的に、兩性の生殖腺成分を一個に集め有する所謂「卵巢睪丸」を造ることが出來たのであるが、斯の動物は、勿論、雄雌同體であつて、第二次性徵に關して、一面には雄性、一面には雌性に見らるゝ性狀を示した。サンド氏の斯の實驗も亦、スタイナハ氏の「性轉換」の實驗と同じく、高等動物の體細胞は、本來中性であつて、生殖腺の働を持つて、第二次性徵が何れの方向にでも振り向けらるゝものであることを明示するのである。

果して然らば、雄雌同體に於て見らるゝ、生殖腺と第二次性徵との間に起る矛盾をスタイナハ氏一派の內分泌說の如く考へることが至當である。元來第二次性徵を決定する主要なる內分泌物を共給するものは、生殖腺であるが、併し其の他の內分泌腺も之に關與するものである。就中・副腎・腦下垂體・甲狀腺松菓腺・胸腺は最も大切である。一例を擧げて見ると、副腎の皮質と、生殖腺就中卵巢との間には、拮抗的の關係があるもので、副腎皮質の機能が過度に高まると、卵巢の機能は抑制されるものである。そこで今胎生期に於て腎臟皮質の過度の教育があると、雄雌同體が起つて、其の人は成長後卵巢を有ちながら、第二次性徵の或るものは夫れと伴はないで、寧ろ男性の特徵を示す樣になる。又た中年の女子に於

て、病の爲に副腎が肥大し、其の機能を增進すると、毛髪や、骨組や、音聲や、凡て男子の樣に變化し、子宮は萎縮し、月經も閉止する。是れ畢竟、中年以後になると、さらぬだに卵巢の内分泌作用が衰退に赴かんとして居る所へ、其れと拮抗すべき副腎皮質の機能が頓に旺盛となる結果として、卵巢の内分泌物の勢力は益々萎靡し、之れと反對に副腎皮質は愈々跋扈して、男性的變態を喚び起すのである。若し副腎皮質の肥大が、卵巢内分泌作用の活潑なる青春期に起ると、卵巢は決して副腎の爲に打ち負かされない。加之ならず、副腎の拮抗作用によつて刺戟を受けて、卵巢は愈々其の機能を增進し、其の結果として、性的早熟を喚び起すに至るのである。

副腎皮質の内分泌作用が、女性に對して或る程度の男性的第二次性徵を加ふるのであるが、腦下垂體の内分泌物も亦男性的第二次性徵の發露と密接の關係を有するものであつて、随つて若しこの内分泌作用が減退すると、男性的第二次性徵は不十分となり、男子にして而かも女子に見ゆる樣な第二次性徵が現はれる。卽ち毛髪殊に陰毛は婦人の如く外陰部を中心として三角形の領域に生へ、男子の如く菱形の領域に發生しない。又た陰莖の發達は極めて不十分であり、皮下の脂肪は堆積して、婦人に見るが如き狀態を示すものである。又た已に前講に於て述べた如く胸腺は小兒時代には發達して、其の機能が旺盛であるが、青春期に入り、生殖腺が目醒めて、其の内分泌作用が俄然活潑になると胸腺は漸次に萎縮を始め大人に至ると全然消滅するものである。斯の意味に於て、胸腺は「小兒の腺」であり、小兒の蕾をして何時迄も蕾の狀態を保たしむる働をなすものである。而して、夫れは丁度生殖腺が「大人の腺」であつて、其の内分泌物の作用によつて、小兒の蕾を大人の花に開かしむるのと正反對の働を爲すのである。試みに胸腺を以て蛙の「オタマジヤクシ」を飼養すると、生長しても何時迄も「オタマジヤクシ」の狀態を保つて居て、蛙に變形しない。卽ち大きな坊ちやんが出來るのである。又た松菓腺の内分泌物も亦已に述べた樣に、或る程度迄胸腺内分泌物と共通の働をするもので、生殖腺の作用に拮抗し、殊に睾丸の發達を抑へつける働をして居る。そこで若し少年期に於て、松菓腺が病の爲に其の内分泌作用を廢止すると、睾丸は斯の抑制者が居なくなつた結果として頓に其の頭を擡げ、小兒の蕾は一朝にして大人の花に咲き出でて、齡は四五歳を出でざるに、身體は早く已に青年者の如き狀態を遂げ、殊に外陰部に於て其の早熟は最も明瞭に

看取される樣になる。而して又精神的殊に性的生活に於ても、著明なる早熟を起すのである。

斯く仔細に考察を施こして見ると、吾等の身體の形成を制御し、其の發育の方向を決定するものは、單に生殖腺のみならず、他に幾多の內分泌腺の存在することを思はねばならぬ。而かも其の際最も重要なる位置に立てるものは、生殖腺であつて、斯の生殖腺なる首相を中心として、幾多の內分泌腺なる閣僚が、互に協調努力しつゝ、身體に於ける形式的、機能的關係を、生理的正常的に調節加減して居るのである。隨つて若し此の協調が宜を得ず、一朝其の均衡が破れ、生殖腺の力足らずして、他の內分泌腺の機能が偏重する樣な場合、生殖腺に匹敵せざる第二次性徵が現はれ來るのは、敢て怪しむに足りない。斯くて內分泌學說の立場から、假性雌雄同體に於て見らるゝ如き、生殖腺と第二次性徵との間に起る矛盾を奇麗に說明することが出來る。

斯く大多數の動物、殊に、人間を始めとして高等なる動物に在りては、本來中性なるべき體の性狀が、生殖腺內分泌物の影響を受けて、夫れに相當せる第二次性徵に振り向けらるるのであるから、第二次性徵たるべきものは、元來雌雄男女に通有なるものであつて之れが卵巢內分泌物の作用を受くれば、雌性の第二次性徵に變化し、睪丸內分泌物の影響を蒙れば雄性の第二次性徵に轉換するのである。一例を舉ぐれば、乳房なるものは人間を始めとして、哺乳動物に於ける第二次性徵として大切なる意義を有するものであるが、其の乳房は、單に女にある計でなく、男にも亦存在して居るものである。つまり哺乳動物といふ種族に通有なる特性である。而してこの通有なる乳房が、卵巢內分泌物の働により著しく發達增大して、女性としての第二次性徵に高められ、之に反して、睪丸內分泌物の影響によつては、寧ろ退化して、男性の第二次性徵に振り向けられたに過ぎない。口髭にした所で、單に男子にのみある譯でなく女子にも亦あるもので、人間と云ふ種族に通有なる一つの種屬性である。唯男子と女子とに於て、之れが發達の程度を異にし、以て第二次性徵となつて居るに外ならない。隨つて去勢によつて第二次性徵が不明瞭になり、男子にして而かも女子に近づき、女子にして而かも男子に似よる場合、之を以て直ちに異性に轉換したものと速斷してはならない。畢竟するに、夫れは雄性乃至雌性生殖腺の內分泌物が缺乏する爲に、一旦第二次性徵に迄高められたる種屬性が、再び中性或は中性に近き狀態に迄逆轉したものと云ふべきである。

斯く一面に於ては、第二次性徵の起る所以を、全然生殖腺內分泌物の機能に歸せなければならない場合があると同時

に、一面に於ては、第二次性徵も亦、第一次性徵と等しく、全然遺傳によつて先天的に決定されるもので、生殖腺の內分泌物は、高々之を培養助成する丈けの働しか有ない場合、加之、時としては全然何等の干渉をも保つことの出來ない樣な場合も亦少數の動物に於ては確かに見られるのである。例へば、蝶や蛾の種類に於ては、マイゼンハイメル氏が實驗的に證明せる如く、雌の仔蟲に於て、凡ての卵巢を取り去つて、之に代ふるに睪丸を以てしても、夫れから發育せる蝶や蛾は、依然として純然たる雌に於て見られる樣な色彩を示して、何等雄性の第二次性徵を示すことがない。又た昆蟲類の或るものは、雌雄によつて血液の色を異にし、雄性は綠色を呈するが、雌性は黃色を帶ぶるものがある。是れは腸の細胞が、雄では食物として取る葉の葉綠素を素通しせしめるに反して、雌では之を黃色に變へる能力を具へて居るからである。そこで今、雄に於て睪丸を切除し、其の代りに卵巢を植ゑて見ても、腸細胞に見らるゝ雄の第二次性徵は、依然として舊態を改めないで、血液の色は矢張り綠色に止まるのである。或は又蠶や鳥類等で、罕れに見らるゝ半身性雌雄同體なるものがある。是れは體の一側には睪丸が、他側には卵巢があつて、而して睪丸のある側の半身は、純然たる雄性の第二次性徵を示し、卵巢のある側の半身は、純然たる雌性の性狀を示すのである。斯る事實は、血液に入つて全身を循環する內分泌物の作用によつて第二次性徵が決定せらるゝものとしては、到底說明が出來ないのであつて、どうしても、授胎せる生殖細胞に於て第一次性徵も、第二次性徵も、先天的に決定せられて居り受精卵が二個に分裂する際、一方の分裂細胞には雄性たるべき遺傳的素質が、他方の分裂細胞には雌性たるべき遺傳的物質が移り行いたものとして說明する外はないのである。

之を要するに一見內分泌學說と矛盾せる如き感あらしむる雌雄同體の問題に就いて見るも、大多數の動物に於て、本來其の體細胞は通有なる中性を具有して居るものであり、この通有なる中性を、特色ある第二次性徵に振り向けるのは、一に內分泌物殊に生殖腺の內分泌物によるものであると云ふ結論に對して、動かすべからざる論據が與へられるのである。

睪丸と卵巢、是れ卽ち眞に男をして男たらしめ、女をして女たらしむべき最後の而して又唯一の根源である。其の他のあらゆる差別は、畢竟するに、第二次的附帶的のものである。睪丸と卵巢とによつて彩られたる表現的差別である。其の本に遡る時、男女共に通有なる一元に歸すべき差別である。斯の差別觀と平等觀との階調によつて、始めてあらゆる男女問題の解決に關して、公平なる批判、至純なる理法の鍵が與へられるのである。

敗戰地の母より

田子靜江

□

今朝盛岡に着きました。高島平三郎先生と、同車であつた事を、朝になつて知りましたので、先生と二時間あまり話しました。『靜江さんあなたは初めから今度のことに贊成したかい。』と例の溫和な調子で斯う仰しやいました。今度の事とはお父樣の立候補のことで御座いませう。先生は二月に三重縣へ講演に御出でになつた時、三重縣の人々は擧つてお父樣に長くゐてこの縣を理想の縣にして頂きたいと高島先生に話されて居つたさうです。『あれ程望みをかけて居た三重縣の人々を捨てることは殘念なことだ』と先生は淚ぐんで話されました。私は先生にお父樣の立候補する迄の成行を一通り御話し致しました。

二月四日の朝私は呼ばれてお父樣の居間にして居る十疊の日本室に入りました。正面の床に原さんの御寫眞は飾られ、その前に千七百幾十通の依賴狀は山のやうに積み上げられ、香を燒いて默して居られたお父樣は『お前も一所に拜むやうに』と申されますので、私も靜かに默拜致しました。

お父樣が大學に居る頃から、始終原さんのお世話になつて居りましたが、お父樣が卒業の時新聞記者になる志望を持つて原さんに御相談に上つたのです。その時原さんのお言葉には、私は新聞記者から官界に入つたが、それは順な道では無い逆な道である。お前は、その反對に官界から入つて、そして勅任迄行つたら後は政界なり記者なりになつて國家のために盡せ、役人も勅任になる迄はどんなことがあつても我慢するやうにとの御言葉であつたので、切角用意した新聞記者になるための書棚や何もかも皆捨てゝお父樣は官界に入つたのでした。崇拜して居る原さんの一言はお父樣のためには重い

ものでした。朝鮮行きの相談もありましたが是非內務省にとの原さんの仰せで、四十一年の十一月に內務省に入りました。其時から原さんからの御紹介で水野さんと床次さんの御世話になつたのです。

□

二月四日の私共の默想は十七年の昔を思ひ出させました。その時から今日迄長い間お父樣は只原さんの一言を守つて來ました。世間からも原樣の直系と見做されて居たので、反對の大隈內閣の時などには、慰めかねるやうな事も度々ありました。けれども原さんの勅任迄はとの御言葉を守つて、今日迄まゐりました。今官を辭して政界に一歩を踏み入れる時なのですから萬感胸に迫るのも無理からぬことです。目に一ぱい涙をためて御父樣は一通の電報用紙をお出しになりました。それは逝かれた原さん宛の電報でした。この電報は新聞などに問題となり、世人の笑ひの種となつたのでしたが、お父樣の其の時の心持を判つて居つた私には、やはり當然のことのやうに思はれました。その當時は高橋さんが、盛岡から出られるなどゝはちつとも考へませんでした。元來が人と爭ふことの嫌ひなお父樣は、殊に原さんの墓前で血を流すやうなことはいたしたくないと、仰しやつて居られました。それで鄕里の皆樣の勸誘によつて立たれたのです。知らぬ人は高橋さんと爭ふことを生意氣だなどゝ云ふ人もありますが、高橋さんはお父樣の立たれてから一ケ月も後に立たれたのです。此所をよく覺えて置きなさい。高島先生とこんなことを話しながら汽車は盛岡に着きました。

□

『靜江さん御主人の心もよく分つた、此の上は必ず勝たなければならないよ、お前も一心になつて働きなさい、』先生は感情に餘つた御聲でしんみりと仰しやいました。私は停車場で御別れして直ぐ高與旅館に入りました。御父樣は外出中で御留守でした。知り合ひの宿の女中が來て、色々なことを話して與れました。

「奥樣今度の選擧程亂暴な選擧はありませんよ、此所の宿になど、壯士は廿人も押しかけるんですもの、そして田子を出して高橋を泊めろと暴れますの。政友會の方が此所にお泊りの時など御前方も○○を貰つて働けと申されました。奥樣幾等私共は女中して居ても、金で盛岡を賣るやうなことは致しませんよ。人を馬鹿にして居る。高橋さんは幾等御金があつ

て、えらい人でも、盛岡には他人ですからね、奥樣御氣をつけなさい。金で仕事をしようとする人程恐ろしいものはありませんよ。」女中は私の前でこんなことを話し、一つの鉢植を持つて來ました。花は八分通り開いて居る。此の梅は蕾の堅い頃地方から頂いたものでした。私は此の梅が咲くやうなら當選なさるに相違ないと觀念して、朝夕水をやつて一心に育てました、もうこんなにきれいに咲いてと嬉しさうにして居ます、この女中は俳句をやります。

　東風吹きて日々に消え行くだるまかな
　　春風に凧のあがりは樂しきぞ

これはこの女中さんの即興句です。

□

御母樣の留守居の間は淋しいでせう。けれどももつともつとお父樣を心配して居るお前方には神に佛に、お父樣の勝利を祈つて居られるに相違ありません。私はお前方を殘して盛岡へ來たのも一つはお前方に勵まされたのです。夜通し御父樣の御身體を案じて、尚朝の床にウツウツとして居つた間などお前方の神に祈る樣子が髣髴と現はれ、感激のあまり泣くことは幾度でせう。そして勵まされました。父樣を思ふお前方の眞心、私は心の盡し力は足りなかつたと悩みました。盛岡へ行く決心もそのためでした。實にお前方の心は私を勵ましてくれたのです。

『御父樣はあれ程盛岡を愛して居るのに、どうして盛岡の新聞は御父樣を惡く云ふんですか』とお前方に質問された時、私は返事に苦しみました。天使のやうなお前方の心には、世間のことはわからないでせう。けれどお前方の此の一言を私は新聞記者の方に傳へたかつた。それがために二度も朝早く尋ねましたが、會へませんでした。正邪善惡を正しく書いて下さることよりも自分の方で亂暴なことをしてお父樣の方に惡い影響の及ぶやうなことが報ぜられたることに力をいれられたやうです。私がお父樣と喧嘩をしたと云ふ記事も、二度出ました。淺ましい心根が思ひやられて心おとりすら致します。人の家を訪問するに、知事夫人ともあらうものが、他人の臺所潜りするとはなどとも申されました。あまり人に反抗する氣分になつた事はありませんが、今度初めてその氣分を味ひました。

□

日本ではまだ婦人が社會的に活動することを一般が喜ばな

い傾向があります。國民生活と密接の關係ある政治などに對してさへも、婦人を全くその埒外に置いてそれに關與せしむることを嫌つてゐるかに見えます。然し乍ら一方には、婦人に參政權を與へよとの、所謂婦人參政權獲得運動を起してゐる婦人達もありますが、社會の多くの人達は、之を以て、變な新しがり屋どもがといつたやうな、嘲笑と蔑視を浴びせかけられて、てんで眞面目な問題にしてをらないやうに見えます。勿論、現在の婦人參政權論者のうちには眞面目に厳粛に、行動してゐる人だちもあるが、その反對に、おつちよこちよいで、人の尻馬に乘つて、わい〳〵輕擧してゐる人達もなきにしもあらずでありますから、識者の蔑視を買ふこと或は當らぬことなしともいへぬとは思ふてゐます。

　婦人が參政權をもつてゐる英國などでも、參政權を得るまでは、可なり突飛なことまでやつたやうであります。一千九百三年には、彼のパンクハース、パンクハーストの母親が中心になつて、婦人參政權を獲得するために、種々雜多な手段方法を講じたやうであります。或時などは、總理大臣がシルクハツトでいかめしく馬車で通るところを、ステツキでシルクハツトを叩き落したり、外務大臣が旺んに政見發表の演說をやつてをつたとき、突然演壇上にかけ上つて「あなたは婦人參政權に贊成しますかどうか」と質問を發して見たり、或は爆裂彈を投げたり、美術館の名畫をナイフでずた〳〵に切つたりして、唯世間の注目をひくことにのみ腐心したやうであります。斯樣な混亂狀態が千九百三年から、千九百十一年まで續いたやうでありましたが、間もなく歐洲戰爭が勃發しました。丁度その時、今までの婦人參政權論者が、決然として立つて、赤十字の特志看護婦になつたり、女巡査になつたり、赤帽になつたりして、約四年間、一意國のために奉公の誠を捧げました。英國は、婦人の國家に捧げた功績を認めまして、遂に一千九百十八年に婦人の參政權を承認したのであります。

　英國はいま男が八百萬人、女が六百萬人で合計一千四百萬人ばかりの有權者があるさうです。それにひきかへ、我が國は、まだ僅かに三百萬の男の有權者があるに過ぎないさうであります。從て、我が國民の政治的訓練は、未だ〳〵英國などに及ばないところがあります。婦人參政權獲得運動の、社會の同情をひかないことも又、止むを得ないことであります。然しこんなことをお前達に話したところで、或は全く興味のないことかも知れませんが、思はず筆が辷つてしまひました。自分はこんど、政爭といふものを直接に見せられて、

今までそんなに深く考へたこともなかつた政治、殊に婦人の政治的自覺などについてさま〴〵考へさせられたので、今少し書きたいと思ひます。

實際、我國の婦人は未だ〳〵政治的には幼稚であることは事實でありますが、然し乍ら、多くの婦人達は從來のやうに、政治的に無關心でゐることが婦人達の唯一の途であるといふ迷夢からは醒めかけてはゐるやうであるし、又社會も、婦人が政治的に活動しては、さう突飛だとも、お轉婆だとも笑ひつこなしにしまはなくば、なりかゝつてゐるやうには思はれます。こゝに一パンクハース、一パンクハーストのなきを淋しくさへ思ふてゐる人々さへあるかも知れぬと察せられるのであります。

斯樣に、如何に異端視され、嘲笑されても年一年と政治の實際運動に參加する婦人が多くなつて來てをります。そして、婦人が政治運動などに參加することが、あまりに突飛であるといふやうな蔑視的な見方も、漸次うすらいで來たことも爭はれないことであります。斯うした機運に向つて來たことは、實に理の當然で、世の多くの婦人達は此の機運に乘じて、益々實際政治に接し、それに十分の理解をもつて進むといふことは、最も必要なことであると思ふのであります。殊に私は今回の總選擧で、選擧界の實狀を見て、一層その感を深めたのでした。

一體盛岡は原さんが無競爭で代議士に當選されるやうになつてから、政治的に桃源の夢を夢みてゐました。從つて、政治的に訓練される機會がかなり少なかつたのであります。それで御婦人の方なども全く選擧などに對して、積極的に御活動をなさるやうな方が少くて、多くは第三者的な、全く不關焉の態度をとられるのでありましたが、中にはさま〴〵の非難や壓迫を意とせられずに、御活動下すつた人達もあります。そして盛岡のやうな、政治的に平穩であつた土地に於てさへ、例へその數は少なかつたとはいへ、御婦人が選擧に對して、とに角積極的に活動したといふことのうちには、矢張時代の力の偉大なることが暗示され、そして將來、婦人が、政治的に益々活動するに至る時の、あまり遠くないことを、感ずるのであります。

□

寢も忘れ、食も忘れて、御活動下すつた御婦人の中には、市内での名流の夫人方が尠からず居られます。新聞や、運動

する方々は是等御婦人方の活動を妨げるやうに、種々の方法を講じましたが、然し、奥様方は少しも恐れません。益々熱心に良人を動かし、兄弟を働かし、親類友人を働かしました。婦人のねばり強い活動の事は、今に始りませんが、一度婦人が決心した以上は、男のそれにも優つて根強いものであることを證據立てました。

□

こんな話もあります。Mさんと云ふ下駄商をしてゐる人の御養子は、宮城縣人で高橋さんにつく事を進められましたが、その養母はお父様の若い頃から知つて居られるので、いつも子供の教訓にお前方もよく勉強すれば田子さんのやうに偉くなると、子供の手本にして居りましたのに、養子が宮城縣人だからとてどうしてつかれませう、子供達孫達に笑はれます。私はどんなことがあつても田子さんにつきます。先日などは養子は宮城縣人會を除名されたと云ふて、悔しがつて居りました、二三日前も高橋さんに賛成しないと云ふて亂暴し、店の硝子戸をさんざんに壊はされました。壓迫を受ければ受ける程、心は正しい方に漕ぎます、さうしてこの奥さんこそは、毎日子供を負つていろ〳〵の方面に運動をして呉れました。

仁王小路に西尾さんと仰しやる方があります。その奥様は非常に熱心に運動して呉れましたが、傍ら御父様の身邊を案じて、毎日四時に起き方角を見て、河原に砂を採りに行き、その砂を持つて神に祈り御父様の身邊に撒いてくださいさした。雨の日も風の日も一日も怠りません。熱烈な御婦人賛成者は、荻野夫人、一條夫人、藤田夫人、佐藤夫人、村田夫人、上林夫人、上關夫人、佐々木夫人、根子夫人……に尚凡ゆる階級の御婦人でした。茲に謹んで感謝いたします。そして今度の選擧程婦人や子供の熱心になつたことは無いと皆様が申されてゐましたが、いろ〳〵の意味が含まれてゐると思ひます。

□

選擧の一週間前には最う足の感覺すらなくなりました、私の姿を見ると、後先に敵派の青年は、十人もつくのには閉口しました。全國の皆様の御同情に嬉し泣きをすることも度々です。毎朝宿の玄關へまゐりますと小包は山と積んであります。菓子、果物、罐詰類です。これ程幾百人幾千人の人々の誠心を以てしても、矢張り勝てなかつたと云ふことは、誠に殘念なことゝ思ひます。お金の御寄贈も今日で五千圓を越え

ました。千圓を頭に十圓五圓三圓は最も多いのです。中には現金がないからとて勸業債券やら公債證書を下さる方もあります。

選擧の前日九日の午後、厨川方面にまゐりました。いつの選擧にも此所で勝負が定まると言はれて居るそうです。有權者が最も多く、しかも筋肉勞働をする人々が多い所で、此所はまるで戰場のやうでした。私共の車が行くと、護憲靑年は十人ばかり後をつけます。それを見ると味方の靑年は四五人追ひかけます、途中でかなりひどい喧嘩が初まります。事務所へ行くと十人許りの靑年は色々の話をして呉れます。一週日前からは、殆ど寢ずの番で、雨の降る夜などは夜通し畑中にたつてぬれるのも厭はず、活動して居るのですが、護憲靑年の徽章を手に入れて敵派の運動者と有權者との會見を料理屋の屋根に昇つて探つた人もあるそうです。私は二ケ月家業を休みましたけれども こんな難儀は 何でもありません。田子さんさへ當選して下されぱと泣いて居た人もありました。眞に泣かされます。

九日の夜など私のねるのは夜の二時半頃でした。それ迄色々な方に御目にかゝつたり訪問したりして居りました。三時少し過ぎ位に大聲で「起きて下さい／＼大變です、早く起きて采配をふつて貰ひます。」と云ふのでびつくりして起きますと、其所へ飛び込んだのは一睡もしなかつた吉田さんと云ふ人です。敵派は大變なことを企みました。こちらの同情者の多い本町の沼宮內旅館が、火事と申しますので味方の消防などが乘込んで行きましたが、何もありません、それを機會に今敵派では盛んに〇〇をして居ります。火事場の方へ味方のものが行つたもので、手不足です。どうかして下さいと申します。直ぐに御父樣は熊井さんを連れて事務所廻りを致しました。此の火事こそ敵の策略で御座いました。警察では田子の身邊は危いと云ふので火事場へ駈けつけました。その警戒の手の緩みが敵派のつけ込む所でした。そして有權者の〇〇がこのとき行はれたといふことです。四時には號外は出ました。小火しかも根も葉も無い小火に、號外が出ると云ふのは前代未聞です。そして其の號外は小火があつてから僅か三十分後に出ました。その號外に曰く「田子派の靑年高橋派の事務所に云々と」何事かをなさんとして、虛僞の火事を企て、敵派の手を緩めさせる迄は未だしも許されませうが、その罪迄も田子派に着せるとは言語同斷なやうに思はれます。而かもその號外を持つて市中を自働車で驅け廻り、投票場たる市役所の前で讀み上げます。このやうなやり方で勝たうとする

とは淺猿しくさへ感ぜられるのです。昔から親孝行するなら先づその親を愛したものを愛し、敬したものを敬するやうにと敎へて居ります。故人の愛を受けて居つた一青年が、郷土に培はれて芽を出そうとして居るのに、その芽をちぎり根を切つて、郷土から拔き取つて捨てる、と云ふ、若しこんな惡戯をするものを見たら、誰しもその不心得を諭し度くなるのです。高橋さんの原さんを拜む意思は何處にあるだらうかと時々疑ひたくなります。故人の墓は拜まなくとも、故人のあれ程愛して居つた郷土の人を育てゝやるのは、故人に盡す道ではなかつたでせうか。

□

一婦人からの手紙にこんな事が書いてありました。

私は名も無い一婦人ですが今度の選擧で若しも高橋さんが勝つやうなことがあつたら私は泣いても泣いても足りません。切角子供を育てゝ大きくしても少しよくならうとする時に、他縣の人が來てその芽萠えやうとして居るものを根から捌つて捨てられるやうでしたら私共としても子供を育てる勇氣もなくなります。どうぞ郷土のため、子供の將來のために戰ひ、母たるの心理を諒せられ是非勝つて下さい、御願ひです。

又こんな手紙がまゐりました。

私は三戸の者ですが盛岡通過のとき、貴下の宣傳ビラが風に吹き飛ばされてあはや溝へおつこちそうでした、その時學校歸りの一少女がそれを危くもひろつて板に貼りつけました。風雨は烈しいので幾度となく貼り損つたのですが、袂から針を出して遂に貼りつけたのでした。私に感慨無量なものがありました。それは小さい事ですが而し貴下に對する可愛い、而かも熱心な同情者のあることを見て只涙ぐましい感じを受けました。

とあります。

□

盛岡市にKと云ふ藝者があるさうです。盛岡人かどうかは知りませんが、恐らく盛岡生れでは無いでせう。前に述べた火事の噂のあつた町に居ますが、市役所の前の秀清閣の中に入り込んで居たそうです。と云ふのは投票の日有權者は大部此所に引張り込まれたのです。七時から九時迄の間に此所の門を潜つたものは、八十三名と稱せられ警察でしらべにかゝつた時は、既に遲かつたのです、此の門を潜つた人は再び現

はれません。そしてこの裏門から市役所の表門に通じて居るのです。此處で色々の手段が行はれたらうと皆樣が殘念がります。私はこんな惡いことをお前方に知らし度くないのですけれど事實は知つて置く必要はあるのです。

□

開票の日、今から考へてもぞつとします。十二時半それ迄の刻々の苦痛はぬきにして通信係であつた熊井さんは眞青な顏をしてワツト泣きながら飛び込みました。お室の中にはお父樣と私と二人でした。「負けたか!?」と申しますと「殘念です」と申して泣き崩れました―それは眞實ですか?」私は信用することは出來ませんでした。間も無く十人餘りの人々はどや〳〵と入つて來ました「何とも申譯はありません。吾々の働きが足らないのです」と皆泣き出します。御婦人の方々も五六人見えました「本當に殘念です。この復歸はきつとします金で盛岡を買ふなんて賣る人も惡いが、金を出して人を迷はすのは、それ以上惡い。女でもこの殘念さは永久に忘れません」と慨く人もありました。

午後の二時頃青年は悲しみの極端にどんなことをするか知れないと云ふ報告がまゐりましたので御父樣は直ぐその方にまゐりました。そして七百人餘の青年を引連れて原さんの邸前に報告にまゐりました。次いで公園に集つて挨拶をして別れたそうです。

負けても吾々は正しい道を歩いて來たのだから少しも愧づる所はない。今後共決してくやし紛れに輕擧のないやう。

とのことでした。

晝となく夜となく澤山の人が來て泣きます。中でK町の床屋さん正直な善良そのもの〻やうな人ですが、私は今迄神や佛を信仰して正直に家業を勵んでまゐりましたが、惡の榮える世の中ならば、神も佛も無いのです。凡ては金です〇〇です私今日から神棚に金をあげて拜みます、高利貸を初めます」そして金の暴威をふるひますと云ひながら泣いてゐます。かう云ふ種類の御話は昨日から十人あまり聞きました。恐ろしい思想の惡化です、高橋さんは盛岡を汚しに來たのですと傍に居る人は申しました。

夜になつて五六人の客が入つて來ました、中に白髮の老人が一人居ます。間もなく三十五六の人が老人の前に來て『お父さん濟みません私の働きが足りなかつたのでこんな事になりました申し譯が御座いません。免して下さい。』と泣き伏しました。不審に思ふて見てゐますと老人は徐ろに語りました

『罪はお前一人にあるのではない責任はみんなにある此の政戰の初まつた頃、自分は老人で思ふやうに働けないからお前は私と二人分働くやうにと申し渡したのだ今日迄二ケ月も家業を休んで働いたお前の働きに不足は言はれない。勝負は時の運だ。殊にも此方の今度の負けは立派な負けだ。點數の上で負けたので精神の上で勝つて居る。點は買收出來るが精神の買收は出來ない。負けても威張れる正々堂々たる負けだ、愧づる必要はない、只殘念なのはお前方はまだ若い此の次の選擧にはきつと田子さんの代議士になつた姿が見られる。俺は最う七十三才だ。この次に田子さんの代議士になられた姿を見る事は覺束ない、今日の恨みを持つたまゝ冥土に行かなければならないかと思ふと、それが殘念で堪らない。俺は田子さんの親類でも何でも無いけれど盛岡人として盛岡人を愛するのは人情だ、もう一度決心しろ、そして此の次と云ふことを考へろ、金で買はれた盛岡を眞實と熱心で取かへせ、なあ、泣いて居る時でない、俺も、俺も石に嚙りついても田子さんの代議士の姿を見る迄生き度い、』一座はひつそりとなりました、座に居る人々は皆啜り泣きをして居るのです。

□

私は今度の選擧で、さま〴〵の悲喜劇を見せられました。こゝに物語るものは、ほんの一つ二つに過ぎませんが數へあぐれば幾つも幾つもあることだらうと思ひます。

　親が高橋派を應援して、子供が私達の方を應援してゐる一家がありました。しかし、その親子には世間にありふれたやうな親の權利を以て壓迫して子を我が黨にひき入れやうとする暴戾が見られなかつたのです。そしてそこに實に世間的でない美しさがあつたと感心しました。

　そのお父さんが子供にいふに、

『昔、保元の亂のときは、親は子を、子は親を、敵として弓を引き合つた。いま我々親子が、二手に分れて選擧戰にのぞむといふことは、いはゞ古の保元の亂のときのやうな感がする。私は、年老いた高橋さんを今度だけは是非立てたいと思ふから、高橋さんを應援するが、然し、お前は決して俺が高橋さんを應援するからといつて、俺の心にひかれてはならない。お前は飽くまでも青年として、田子さんを應援するがいい。そして高橋さんを破るために戰ふがいゝ。決して油斷してはならぬ。』

　と、親が子に對して戰を宣したといふことです。

政戰は續いた。敵も味方も必死に戰つた。遂に開票の日になりました。四十九票の差で破れたのです。多くの客はそれからそれへとひつきりなしに來ました。

その時二人の親子の人も來訪して、始終を物語り黯然としてゐましたが、美しい親子の眞情に私は少なからず打たれたのでありました。

又こんなこともありました。或青年の方が、早朝、私達の宿をたづねてくれました。その顏には、一種の感激が燃えてゐました。

そしてそのとき一株の白百合をおくつてくれました。

「これは百合です。根さへあればまた來年には今年に增した美しい花が咲きます。甚だ不吉なことをいふやうですが、運拙く假令今度落選するやうなことがあつても、百合のやうに根さへあれば、此の次は一層美しい花が咲きます。それで私は白百合を捧げたいと思ひます。」

恁ういつて新聞紙に包んだ一株の白百合をおくつて呉れました。

私はその時、一寸不快な感じを持ちましたが、開票がすんで當落が明瞭になつた瞬間、その青年が、憂鬱な表情をしてたづねてくれました。そして、白百合をおくつた眞情を話して呉れました。私は前に不快を感じたとは反對に、その好意を素直に受入れることが出來ました。

□

十三日の午後高松池に殘念會があるから出ませんかと御夫人の方が誘つてくれました。七百人許りの青年が集るさうで、男子の方の會に出るのもどうかと控へて居りますと、御夫人方が大勢集つて居りますから直ぐ來て下さいと誰か迎ひにまゐりましたので急いで出ました。盛岡市から廿町あまり、上野の不忍の池と似よつた淺い池です、周圍には櫻が澤山植ゑて景色の絕好な處です、有志の人は各々熱辯を振ひます。手を叩くもの泣き出すもの樣々です。七百人の豫定の青年は千八百名許りでした。御婦人も四十人餘り居られました、共に不幸を別つ心の結合は人間生活中で最も美しいものです、勝つた方には誰しもつきたがるのですが負けた方で共に手をとつて慰め合ふと云ふことは却々出來難い事です、美しい天然の中に、美しい人情の輝くのに私は醉ふやうな心地になりました。向ふの山でも此方の岡でも皆萬歲を叫びます、けれど現在の萬歲ではありません、將來の萬歲を稱へて呉れるのです。御父樣は最後に負くる日は勝つ日の第一日なりと申した

時には破れるやうな萬歳の聲が起りました。

□

終りにお母樣が一言云ひたいのは、千鶴子がおくつてくれた次の二つの手紙は、私に何時までも忘れ得ない心の印象を殘したことです。お前達のことを思ふたびに、何時もお前達が、此の選擧のために、陰乍ら、どんなに心をくだいたか、母として、私は、たまらなくいぢらしい。お前達が樂しみにして待つてゐる、子供まとゐの日も近い。やがて溫い夕の會でも開いて、それからは一層勉强いたしませう。

千鶴子の手紙　―(第一信)―

お父樣もお母樣もお變りありませんか、每日盛岡のことが氣になつて勉强もろくに出來ません、私共のことは決して御心配なくお父樣の勝つやうお骨折りして下さい。

小さいあつちやんもとんちやんもよく私共の云ふことを聞き分けておとなしくして居ります。

私共は朝起きた時と夜ねる時にはきつと神樣や佛樣に願をかけます、昨日も清正公樣にお參りに行つて是非お父樣の勝つやう拜んで參りました。私の級に四十人許りお友達が居りますが、皆お父樣の勝つ樣神樣に賴んで吳れます、私は本當に〳〵嬉しく思ひます。

お父樣はきつと勝ちます、是非私共の一心で勝たしてあげます。お父樣萬歲。

―(第二信)―

まあ何と云ふことでせう、今朝迄は良かつたのにどうして惡くなつたのでせう。私は不思議に思ひます、學校で皆さんは私の顏を見ると田子さん殘念ね、何か高橋さんの力では道でないことをしたのでせう。とお仰しやるんですの、私は悲しい氣分になりました、けれど私の神樣に賴みやうが足りなかつたかも知れません。此の次にはもつと一心になります。

お父樣もお母樣もあまり御力を落さないで御用が濟んだら早くお歸り下さい。私共は此れ迄色々御心配をかけましたが此れからは決して我儘も言はず一生懸命御手傳を致します、御父樣のために働いて下すつた皆樣によろしく。

私は感慨にあふれて色々書きました。しかしお父樣にも私共にもこの戰は大きな修養でした。お父樣は「七十日間の攝心」「七十日間の座禪」と申されますが、この落選の敎訓に省み一層修養したいと思つて居ます。

「針の木」越え

大橋繁子

サア、もう何年前のことでございませうか――何しろ、昨年の震災で、お伴れの一人だつた友人を亡くし、登山用具もテントぐるみ燒いてしまつたあとであつてみると、どうしても一昔前のことゝしか考へられません。

その頃はまだ山登りが今ほど流行つて居りませんでしたし、目針す針木から越中越えの北アルプス横斷は人も知る難路なので、たいていのものは私達の無謀を嗤つたくらゐでしたが、牛來山に對して不思議な憧憬を持つてゐる私のことではあり、殊に前年白馬を試みて思ひにまさる高山の妙味を嚙みしめた直ぐあとでしたので、もとより、他人の忠言に迷はされよう筈もありません。良人の外に若い、力になる二人のお伴れの出來たのを幸、大仕掛な遠足にでも出掛けるつもりで、いそいそと、しまつてあつたテントや登山用具を土藏から出したり、食料品を買ひ整へたりして居りました。かねてから親交のある大町對山館の主人と打合せの手紙を往復した結果、八月四日の夜汽車で出發、中央線の甲府から松本へ、松本から更に大町へ、翌日の午過には百瀬愼太郎氏の出迎へを受けて、對山館の一室に登山前の意氣を養うて居たのでございます。

未明に目覺めて旅裝を整へ、梯子を降りて行くと、ひえびえする白光を湛へた上框に、前日頼んで置いた案内人が、もうがやがやと、立つたり踞んだりしてゐました。何れを見ても澁紙を張りつけたやうな顔色の屈強な山男、五人は忽ちテント、食料品、防寒具、草鞋、樏の類を輕々と荷つて私

共の前に立ちました。その日の私の出立は、といへば、洋服の下着に浴衣がけ、鍔廣の海水帽を目深に被つて、足には厚い草鞋を着けて居りました。同行の男三人は夏服にソフトの輕裝、英國仕込のM氏だけは、山男が何と言つても靴を脫がうとはしませんでした。

初めて白馬へ登つた折には別の道を、北方四谷まで馬車で行つた――その時のことなどなつかしく思ひ浮べながら、私は男の足に遲れまいと、朝露の小路を西北に、元氣よく步いて行きました。對山館から三里足らずの所に西正院といふお寺があります。これからは全く人家が絕えるといふので、私達は少し早めに足を休め、植込の葉越しに朽ちかけた墓石などの見える境内の一隅で、初めてのお辨當を開きました。

西正院を出ると道はだらだら上りになります。ところどころ崖の上に、燃えるやうなカンゾやギボシなどが咲き亂れてゐます。それに見惚れて立ち止まつてゐると、今度は細い白樺の丸木橋を渡らねばならないといふ注進が來る。見れば高い午後の日の直射を受けた河原では、一行中最年少のS君が、わたりぞめの功を誇らうと、人夫等を押し退けながら、その長い脛を醜してゐました。それも、これも、たゞ面白く、私達はいつの間にか三里の旅程を終へて、大澤の河原に第一夜のテントを張りました。盛夏の日の下をせつせと步いてゐる間は汗みづくだつたのに、假寢の小夜の出來上つた頃には足洗ふ水も氷のやうな冷さでした。雜炊を焚く寄集めの薪が、暮れるに從つて赤々と四邊の闇にもつれ、時々煙草を吸ひつける山男の骨張つた顏が、その明るみの中に恐しいほど大きく浮び出るのでした。原始時代に歸つたやうな思ひでぼんやり人夫達の作業を傍觀してゐると、ふと冒險的な活動寫眞の一場面を生きてゐるのではないかといつた氣持が湧いて來ます。罐詰を開けたり、ハムを切つたり、固形アルコールで飯事のやうにシチューのお鍋を暖めたり、私達は賑かにおいしいお夜食を終りました。

一日の旅の疲れで、若い人達は橫になると直ぐ、快げに眠つてしまひましたが、私には毛布の下で石が一つびとつ數へられる氣がして、どうしても寢つくことが出來ません。石地の底から滲み出て來るやうな冷氣、テントの四壁を煽る風、流れの音、森の響……私には、男達の立てる淺ましい鼾までが、テントに忍び寄る猛獸の呻りのやうに聞えて來るのでした。

日の出ぬうちに假寢の小屋を疊んで、愈々針木の雪溪に向

ふ。幅約二丁、白馬の雪溪のやうな雄大さはないけれども、迂廻屈曲して急勾配な山の腹を上つて行くところに、白馬とは全く別の情趣ある面白い雪溪です。私達は登山杖と樏とによつて辛くも中心をとりながら、一面に鱗形の凹點を刻んだ此の急勾配を、一足々々根氣よく登つて行くのでした。時々行手を霧に閉されたり、驟雨の脅しを受けたりするので、私達は雨具で身をかためました。霧の霽れ間に怖々見返ると、足下には、屈んだら一息に辷り落ちさうな急勾配が、高樓の頂きから下を覗いた時のやうな不安と魅惑とを同時にそり立たせます。雪溪を挾んで威壓するやうに聳えた山々は、逃足の早い霧の襲軍に、崩れたかと思ふと、又前よりも一層いかめしい姿を黝々と現します。その襲軍を突き破つて雪溪の盡る岩間に立つた時には、子午線の掛つた眞夏の太陽が惚けたやうに白々と、光りの雨を降らせて居りました。此處らは一面の偃松帶です。私達は、葉の込んだ低い此の棚を横に、雪溪の中途で道伴れになつた大學生の一行と、愉快な午餐の舌鼓を打ちました。

偃松の間を更に登ること數町、私達は昔佐々成政が乘り越えたといふ信越國境の峠に立ちました。峠の頂には都會では容易に見られぬ黒百合やミヤマウスユキサウなどが、其處此處に、小ぢんまりと叢を造つて居ります。少し下つた所で私達はひどい雨に遇ひました。南澤の澤地に降りた時には、雨具を貫いた水が、肌を傳うて氣味惡く流れるといふ始末。その上此處らには道らしい道もないので、行きつまつては徒渉し、石づたいに少し歩いては又腰まで水にひたさねばならなくなり、穿くそばから草鞋は切れる、足は傷く。さすがに意氣沮喪して、お天氣ならばまだ日の高いうち、澤邊の石地に露營の準備を始めました。雨はなかなか降り止みさうにもありません。が、着換の用意もない山旅の身なので、私達は燃えしぶりがちな焚火の上で、絞るほどに濡れた雨具や衣類を、代るがはる乾しました。

目を覺して、所々雨じみの出來たテントの尖端に黄色い朝日の陰を見出した時の喜びといつたらありませんでした。同じ澤づたひの難路でも、日の光りを浴びての渉り心地は全く別です。南澤から針木澤、そして私達は午少し過ぎに黒部川の岸までたどり着きました。此の黒部川といふのが又大變な難所で、水は絶壁と絶壁との間を奔亂して行くのに、渡るべき架橋といつたら丸木一本ないのです。たゞ數條の針金が此方の岸から對岸へと張られてあり、それに捨兒でも入つてゐさうな籠が一つ、賴りなげにつる下つてゐます。此の川を越

えようとするものは、いやでも一度棄兒の眞似をしなければならないのです。人夫の一人はずつと川上の淺瀬を徒渉して向ふ岸に立ちました。勇氣を鼓して私共の一人が、ぎしぎしいふ籠の中に踞んだまゝ身を沈めると、對岸の人夫が一本の針金を引いて、棄兒の籠を手繰り寄せることになるのです。數年前三越あたりで、針金づたひに傳票を帳場へ送る裝置がありましたが、つまりあれを少し擴大し、原始化したものが、黑部川の渡しだといつたら大した間違ひはないでせう。たゞ籠に身を委ねたが最後、泣かうと喚かうと針金一本の命です。上は無限の碧空。數丈下には渦巻く奔流。乘つてゐるのもさることながら、絕壁の上で自分の順番を待ちながら、それを觀てゐる氣持といつたらありません。

しかしながら、苦あれば必ず樂がある。籠渡しの苦行が終ると間もなく、私達は西正寺以來初めて、人間の住む家に迎へ入れられることが出來ました。その名を平の小屋といひます。小屋を守る翁は黑部川の奔流にもまれて育つた岩魚のピンピンしたところを振舞うてくれました。金串にさして火の側に立てられたのを見ながら、焼けるのを待つて食膳に移す。粗食に悩み、罐詰の臭氣の鼻について來たところへかうして供された生魚の美味は、山登りの經驗のない方々には解らう筈もありません。

平の小屋から丈まである熊笹の籔を分けてザラ峠に向ひました。中谷の雪溪を横切ると、左右の崖に石楠花が一杯咲いてゐました。その間々には華奢な櫻が、滴りさうな櫻坊をつけて居ります。「初夏になると、山にも櫻が咲きます」と、その一片を入れて愛した對山館主の風流を、今更のやうに思ひ起しなどしました。もう一息で峠に出るといふ所の急勾配を攀登りながら上を仰ぐと、濃い紺青の大空が、傾斜の盡きる頂の一線とかつちり隅を合せてゐる天蓋のやうに、恐しく近く見えるのでした。峠の上は又一面の偃松帶です。密生した林の間を踏み分けかねて、苔のやうな葉の層に足を突つ込んだり、小林に縋りそこねて危く傾斜面へ辷り落ちやうとしたり、つい鼻先の根方に雷鳥の羽ばたきを聞いて驚いたり——私達は時々面白半分の悲鳴を擧げながら、峠の鞍部を這ふやうに歩いて行きました。偃松の網をやつと逃れ出ると、切り立つた崖の斷面にトウヤクリンダウなどが可憐な眸を開いてゐます。五色ケ原に近いな、と思ふと鉛のやうな草鞋も急に重みを抜かれた氣がしました。

何千尺の高山の上、千年の雪を固めた雪溪の彼方に、自然の植物園であるお花畠のあるといふことは、山へと志すも

のにどれほどの驚異であり、喜びであるかもしれません。往年白馬のそれを見た時にも、これでこそ苦しみがひがあつたと狂喜したことでしたが、此處五色ケ原の御花畠は、畫家が御輿を据ゑてしまふといふだけあつて、その詩趣といひ、その美觀といひ、白馬のそれなどとは全く比べ物になりません。他の山々では僅かばかりの岩間を埋めてゐる高山植物が、此處では見渡す限りの高原に一面の被ひを掛けてゐるのです。見晴しのいゝ一隅を擇んで一夜の宿を建て終ると、人夫は周章て洗足の水を汲みに行きました。ぐづぐづしてゐると、せつかく日光のぬくみで溶けた雪田の水が氷結してしまふといふのです。さう言はれてみると、匂やかな御花畠を撫でてテントに當る薄黒い風も、急に冷氣を加へて來たやうです。風を除けてテントの内部にちゞこまつてゐても、寒さは加はるばかりです。おしまひには歯の根も合はぬほど慄へて來るので、ココアを沸かしたり、蠟燭に手をかざしたりしましたが、それでも寒くて一晩中おちおち眠ることも出來ませんでした。眠れぬまゝ早曉に起き出で、日の出と共に眠りから覺めた花の高原を見晴した時には、踏む足もすくむ一種崇高な感激に涙ぐまされました。挿繪で見慣れた可憐な小岩かゞみや白山いちげ、南京小櫻などに塗りつぶされた原のうねりの向うには、陽に射られた純白の雪田が微塵に碎いた無數の寶石のやうに、色樣々の生きた光りを放つて居ります。その上を、狡猾な雷鳥に混つて紺の装でキリヽとかためた岩燕が、すくふやうに飛び交ふのです。

「これを樂園と呼ばないで、他にどんな樂園があり得やう。」

と、私は思はずも歡聲を洩したことでございます。

去りがたない此の仙境をあとに、私達は又鞍部の偃松帶をザラ峠にもどつて、其處から立山温泉の方に下りました。人間生活から全く超脱した五日の山旅に底まで洗はれた私共の心には、此の温泉に集つて來る人達が、なつかしいといふよりは、俗世の臭氣を一層厭はしいものに嗅がせてくれるものゝやうに思はれました。で、私達はそこそこに立山温泉を出て最後の旅の日の名殘を惜しみながら、芦峅への行程を急いだのでございます。雪溪も、籠渡しも、五色ケ原の仙境も、如實に見て來た人間の夢、あと一晩の眠りから覺めればそこにはもう痛い現實が、のつぴきならぬ生活といふものが、私達を待ち構へてゐるのだといふことを、歩きながら私は、しみじみ考へて居りました。

政戰は續いた。敵も味方も必死に戰つた。遂に開票の日になりました。四十九票の差で破れたのです。多くの客はそれからそれへとひつきりなしに來ました。

その時二人の親子の人も來訪して、始終を物語り黯然としてゐましたが、美しい親子の眞情に私は少なからず打たれたのでありました。

又こんなこともありました。或青年の方が、早朝、私達の宿をたづねてくれました。その顏には、一種の感激が燃えてゐました。

そしてそのとき一株の白百合をおくつてくれました。

「これは百合です。根さへあればまた來年には今年に増した美しい花が咲きます。甚だ不吉なことをいふやうですが、運拙く假令今度落選するやうなことがあつても、百合のやうに根さへあれば、此の次は一層美しい花が咲きます。それで私は白百合を捧げたいと思ひます。」

斯ういつて新聞紙に包んだ一株の白百合をおくつて呉れました。

私はその時、一寸不快な感じを持ちましたが、開票がすんで當落が明瞭になつた瞬間、その青年が、憂鬱な表情をしてたづねてくれました。そして、白百合をおくつた眞情を話して呉れました。私は前に不快を感じたとは反對に、その好意を素直に受入れることが出來ました。

□

十三日の午後高松池に殘念會があるから出ませんかと御夫人の方が誘つてくれました。七百人許りの青年が集るさうで、男子の方の會に出るのもどうかと控へて居りますと、御夫人方が大勢集つて居りますから直ぐ來て下さいと誰か迎ひにまゐりましたので急いで出ました。盛岡市から廿町あまり、上野の不忍の池と似よつた淺い池です、周圍には櫻が澤山植ゑて景色の絕好な處です、有志の人は各々熱辯を振ひます。手を叩くもの泣き出すもの樣々です。七百人の豫定の青年は千八百名許りでした。御婦人も四十人餘り居られました、共に不幸を別つ心の結合は人間生活中で最も美しいものです、勝つた方には誰しもつきたがるのですが負けた方で共に手をとつて慰め合ふと云ふことは却々出來難い事です、美しい天然の中に、美しい人情の輝くのに私は醉ふやうな心地になりました。向ふの山でも此方の岡でも皆萬歲を叫びます、現在の萬歲ではありません、將來の萬歲を稱へて呉れるのです。御父樣は最後に負くる日は勝つ日の第一日なりと申した

時には破れるやうな萬歳の聲が起りました。

□

終りにお母様が一言云ひたいのは、千鶴子がおくつてくれた次の二つの手紙は、私に何時までも忘れ得ない心の印象を殘したことです。お前達のことを思ふたびに、何時もお前達が、此の選擧のために、陰乍ら、どんなに心をくだいたか、母として、私は、たまらなくいぢらしい。やがて温い夕のまとゐの日も近い。お前達が樂しみにして待つてゐる、子供會でも開いて、それからは一層勉强いたしませう。

千鶴子の手紙　—(第一信)—

お父様もお母様もお變りありませんか、毎日盛岡のことが氣になつて勉强もろくに出來ません、私共のことは決して御心配なくお父様の勝つやうお骨折りして下さい。

小さいあつちやんもとんちやんもよく私共の云ふことを聞き分けておとなしくして居ります。

私共は朝起きた時と夜ねる時にはきつと神様や佛様に願をかけます、昨日も淸正公様にお參りに行つて是非お父様の勝つやう拜んで參りました。私の級に四十人許りお友達が居りますが、皆お父様の勝つ様神様に賴んで吳れます、私は本當に〱嬉しく思ひます。

お父様はきつと勝ちます、是非私共の一心で勝たしてあげます。お父様萬歳。

—(第二信)—

まあ何と云ふことでせう、今朝迄は良かつたのにどうして惡くなつたのでせう。私は不思議に思ひます、學校で皆さんは私の顏を見ると田子さん殘念ね、何か高橋さんの力では道でないことをしたのでせう。とお仰しやるんですの、私は悲しい氣分になりました、けれど私の神様に賴みやうが足りなかつたかも知れません。此の次にはもつと一心になります。

お父様もお母様もあまり御力を落さないで御用が濟んだら早くお歸り下さい。私共は此れ迄色々御心配をかけましたが此れからは決して我儘も言はず一生懸命御手傳を致します、御父様のために働いて下すつた皆様によろしく。

私は感慨にあふれて色々書きました。しかしお父様にも私共にもこの戰は大きな修養でした。お父様は「七十日間の攝心」「七十日間の座禪」と申されますが、この落選の敎訓に省み一層修養したいと思つて居ます。

「針の木」越え

大橋繁子

　サア、もう何年前のことでございませうか――何しろ、昨年の震災で、お伴れの一人だつた友人を亡くし、登山用具もテントぐるみ燒いてしまつたあとであつてみると、どうしても一昔前のことゝしか考へられません。

　その頃はまだ山登りが今ほど流行つて居りませんでしたし、目針す針木から越中越えの北アルプス橫斷は人も知る難路なので、たいていのものは私達の無謀を嗤つたくらゐでしたが、生來山に對して不思議な憧憬を持つてゐる私のことではあり、殊に前年白馬を試みて思ひにまさる高山の妙味を嚙みしめた直ぐあとでしたので、もとより、他人の忠言に迷はされよう筈もありません。良人の外に若い、力になる二人のお伴れの出來たのを幸、大仕掛な遠足にでも出掛けるつもりで、いそいそと、しまつてあつたテントや登山用具を土藏から出したり、食料品を買ひ整へたりして居りました。かねてから親交のある大町對山館の主人と打合せの手紙を往復した結果、八月四日の夜汽車で出發、中央線の甲府から松本へ、松本から更に大町へ、翌日の午過には百瀨愼太郎氏の出迎へを受けて、對山館の一室に登山前の意氣を養うて居たのでございます。

　未明に目覺めて旅裝を整へ、梯子を降りて行くと、ひえびえする白光を湛へた上框に、前日賴んで置いた案內人が、もうがやがやと、立つたり跼んだりしてゐました。何れを見ても澁紙を張りつけたやうな顏色の屈强な山男、五人は忽ちテント、食料品、防寒具、草鞋、樏の類を輕々と荷つて私

共の前に立ちました。その日の私の出立は、といへば、洋服の下着に浴衣がけ、鍔廣の海水帽を目深に被つて、足には厚い草鞋を着けて居りました。同行の男三人は夏服にソフトの輕裝、英國仕込のM.氏だけは、山男が何と言つても靴を脫がうとはしませんでした。

初めて白馬へ登つた折には別の道を、北方四谷まで馬車で行つた——その時のことなどなつかしく思ひ浮べながら、私は男の足に遲れまいと、朝露の小路を西北に、元氣よく歩いて行きました。對山館から三里足らずの所に西正院といふお寺があります。これからは全く人家が絕えるといのふで、私達は少し早めに足を休め、植込の葉越しに朽ちかけた墓石などの見える境內の一隅で、初めてのお辨當を開きました。

西正院を出ると道はだらだら上りになります。ところどころ崖の上に、燃えるやうなカンゾやギボシなどが咲き亂れてゐます。それに見惚れて立ち止まつてゐると、今度は細い白樺の丸木橋を渡らねばならないといふ注進が來る。見れば高い午後の日の直射を受けた河原では、一行中最年少のS君が、わたりぞめの功を誇らうと、人夫等を押し退けながら、その長い臑を翻してゐました。それも、これも、たゞ面白く、私達はいつの間にか三里の旅程を終へて、大澤の河原に第一夜のテントを張りました。盛夏の日の下をせつせと歩いてゐる間は汗みづくだつたのに、假寢の小夜の出來上つた頃には足洗ふ水も氷のやうな冷さでした。雜炊を焚く寄集めの薪が、暮れるに從つて赤々と四邊の闇にもつれ、時々煙草を吸ひつける山男の骨張つた顏が、その明るみの中に恐しいほど大きく浮び出るのでした。原始時代に歸つたやうな思ひでぼんやり人夫達の作業を傍觀してゐると、ふと冒險的な活動寫眞の一場面を生きてゐるのではないかといつた氣持が湧いて來ます。鑵詰を開けたり、ハムを切つたり、固形アルコールで飯事のやうにシチューのお鍋を暖めたり、私達は賑かにおいしいお夜食を終りました。

一日の旅の疲れで、若い人達は橫になると直ぐ、快げに眠つてしまひましたが、私には毛布の下で石が一つびとつ數へられる氣がして、どうしても寢つくことが出來ません。石地の底から滲み出て來るやうな冷氣、テントの四壁を煽る風、流れの音、森の響……私には、男達の立てる淺ましい鼾までが、テントに忍び寄る猛獸の呻りのやうに聞えて來るのでした。

日の出ぬうちに假寢の小屋を疊んで、愈々針木の雪溪に向

ふ。幅約二丁、白馬の雪溪のやうな雄大さはないけれども、迂廻屈曲して急勾配な山の腹を上つて行くところに、白馬とは全く別の情趣ある面白い雪溪です。私達は登山杖と樏とによつて辛くも中心をとりながら、一面に鱗形の凹點を刻んだ此の急勾配を、一足々々根氣よく登つて行くのでした。時々行手を霧に閉されたり、驟雨の脅しを受けたりするので、私達は雨具で身をかためました。霧の霽れ間に怖々見返ると、足下には、屈んだら一息に辷り落ちさうな急勾配が、高樓の頂きから下を覗いた時のやうな不安と魅惑とを同時にそそり立たせます。雪溪を挾んで威壓するやうに聳えた山々は、逃足の早い霧の襲軍に、崩れたかと思ふと、又前よりも一層いかめしい姿を黝々と現します。その襲軍を突き破つて雪溪の盡る岩間に立つた時には、子午線の掛つた眞夏の太陽が惚けたやうに白々と、光りの雨を降らせて居りました。此處らは一面の偃松帶です。私達は、葉の込んだ低い此の棚を横に、雪溪の中途で道伴れになつた大學生の一行と、愉快な午餐の舌鼓を打ちました。

偃松の間を更に登ること數町、私達は昔佐々成政が乘り越えたといふ信越國境の峠に立ちました。峠の裏には都會では容易に見られぬ黒百合やミヤマウスユキサウなどが、其處此處に、小ぢんまりと叢を造つて居ります。少し下つた所で私達はひどい雨に遇ひました。南澤の澤地に降りた時には、雨具を貫いた水が、肌を傳うて氣味悪く流れるといふ始末。その上此處らには道らしい道もないので、行きつまつては徒渉し、石づたいに少し歩いては又腰まで水にひたさねばならなくなり、穿くそばから草鞋は切れる、足は傷く。さすがに意氣沮喪して、お天氣ならばまだ日の高いうち、澤邊の石地に露營の準備を始めました。雨はなかなか降り止みさうにもありません。が、着換の用意もない山旅の身なので、私達は燃えしぶりがちな焚火の上で、絞るほどに濡れた雨具や衣類を、代るがはる乾しました。

目を覺して、所々雨じみの出來たテントの尖端に黄色い朝日の陰を見出した時の喜びといつたらありませんでした。同じ澤づたひの難路でも、日の光りを浴びての渉り心地は全く別です。南澤から針木澤、そして私達は午少し過ぎに黒部川の岸までたどり着きました。此の黒部川といふのが又大變な難所で、水は絶壁と絶壁との間を奔亂して行くのに、渡るべき架橋といつたら丸木一本ないのです。たゞ數條の針金が此方の岸から對岸へと張られてあり、それに捨兒でも入つてゐさうな籠が一つ、頼りなげにつる下つてゐます。此の川を越

えようとするものは、いやでも一度棄兒の眞似をしなければならないのです。人夫の一人はずつと川上の淺瀨を徒渉して向ふ岸に立ちました。勇氣を鼓して私共の一人が、ぎしぎしいふ籠の中に蹈んだまゝ身を沈めると、對岸の人夫が一本の針金を引いて、棄兒の籠を手繰り寄せることになるのです。數年前三越あたりで、針金づたひに傳票を帳場へ送る裝置がありましたが、つまりあれを少し擴大し、原始化したものが、黒部川の渡しだといつたら大した間違ひはないでせう。たゞ籠に身を委ねたが最後、泣かうと喚かうと針金一本の命です。上は無限の碧空。數丈下には渦卷く奔流、乘つてゐるのもさることながら、絶壁の上で自分の順番を待ちながら、それを觀てゐる氣持といつたらありません。

しかしながら、苦あれば必ず樂がある。籠渡しの苦行が終ると間もなく、私達は西正寺以來初めて、人間の住む家に迎へ入れられることが出來ました。その名を平の小屋といひます。小屋を守る翁は黒部川の奔流にもまれて育つた岩魚のピンピンしたところを振舞うてくれました。金串にさして火の側に立てられたのを見ながら、燒けるのを待つて食膳に移す。粗食に倦み、鑵詰の臭氣の鼻について來たところへかうして供された佳魚の美味は、山登りの經驗のない方々には解らう筈もありません。

平の小屋から丈まである熊笹の藪を分けてザラ峠に向ひました。中谷の雪溪を横切ると、左右の崖に石楠花が一杯咲いてゐました。その間々には華奢な櫻が、滴りさうな櫻坊をつけて居ります。「初夏になると、山にも櫻が咲きます」と、その一片を入れて愛した對山館主の風流を、今更のやうに思ひ起しなどしました。もう一息で峠に出るといふ所の急勾配を攀登りながら上を仰ぐと、濃い紺青の大空が、傾斜の盡きる頂の一線とかつちり隅を合せてゐる天蓋のやうに、恐しく近く見えるのでした。峠の上は又一面の偃松帶です。密生した林の間を踏み分けかねて、苔のやうな葉の層に足を突つ込んだり、小枝に縋りそこねて危く傾斜面へ辷り落ちやうとしたり、つい鼻先の根方に雷鳥の羽ばたきを聞いて驚いたり――私達は時々面白半分の悲鳴を擧げながら、峠の鞍部を這ふやうに歩いて行きました。偃松の網をやつと逃れ出ると、切り立つた崖の斷面にトウヤクリンダウなどが可憐な眸を開いてゐます。五色ケ原に近いな、と思ふと鉛のやうな草鞋も急に重みを拔かれた氣がしました。

何千尺の高山の上、千年の雪を固めた雪溪の彼方に、自然の植物園であるお花畠のあるといふことは、山へと志すも

のにどれほどの驚異であり、寂びであるかもしれません。往年白馬のそれを見た時にも、これでこそ苦しみがひがあつたと狂喜したことでしたが、此處五色ケ原の御花畠は、畫家が御輿を据ゑてしまふといふだけあつて、その詩趣といひ、その美觀といひ、白馬のそれなどとは全く比べ物になりません。他の山々では僅かばかりの岩間を埋めてゐる高山植物が、此處では見渡す限りの高原に一面の被ひを掛けてゐるのです。見晴しのいゝ一隅を擇んで一夜の宿を建て終ると、人夫は周章て洗足の水を汲みに行きました。ぐづぐづしてゐると、せつかく日光のぬくみで溶けた雪田の水が氷結してしまふといふのです。さう言はれてみると、匂やかな御花畠を撫でてテントに當る薄黒い風も、急に冷氣を加へて來たやうです。風を除けてテントの内部にちゞこまつてゐても、寒さは加はるばかりです。おしまひには齒の根も合はぬほど慄へて來るので、ココアを沸かしたり、蠟燭に手をかざしたりしましたが、それでも寒くて一晩中おちおち眠ることも出來ませんでした。眠れぬまゝ早曉に起き出で、日の出と共に眠りから覺めた花の高原を見晴した時には、踏む足もすくむ一種崇高な感激に涙ぐまされました。挿繪で見慣れた可憐な小岩かゞみや白山いちげ、南京小櫻などに塗りつぶされた原のうねりの向うには、陽に射られた純白の雪田が微塵に砕いた無數の寶石のやうに、色樣々の生きた光りを放つて居ります。その上を、鷹揚な雷鳥に混つて紺の裝でキリ、とかためた岩燕が、すくふやうに飛び交ふのです。

「これを樂園と呼ばないで、他にどんな樂園があり得やう。」と、私は思はずも歎聲を洩したことでございます。

去りがたない此の仙境をあとに、私達は又鞍部の偃松帶をザラ峠にもどつて、其處から立山溫泉の方に下りました。人間生活から全く超脱した五日の山旅に底まで洗はれた私共の心には、此の溫泉に集つて來る人達が、なつかしいといふよりは、俗世の臭氣を一層厭はしいものに嗅がせてくれるものゝやうに思はれました。で私達はそこそこに立山溫泉を出て最後の旅の日の名殘を惜しみながら、芦峅への行程を急いだのでございます。雪渓も、籠渡しも、五色ケ原の仙境も、如實に見て來た人間の夢、あと一晩の眠りから覺めればそこにはもう痛い現實が、のつぴきならぬ生活といふものが、私達を待ち構へてゐるのだといふことを、歩きながら私は、しみじみ考へて居りました。

勝部謙造著

ディルタイの哲學

定價壹圓八拾錢
送料十七錢

最新刊

彼は極めて平凡なる日常茶飯事を通じて、極めて深遠なる哲學を解き、趣味ある文辭にて精神科學、自然主義的世界觀、自由觀念論的世界觀、客觀觀念論的世界觀を明にした。此點に於て他の追隨の出來ぬ世界の一大天才だ。彼は哲學的思索の形骸を捨てて所謂概念の核心を捉へ得た哲人だ。本書の第五篇藝術論に於て美學、詩學、創作の心理を說いた所など現代人の琴線に強く麗しく響く。世界に特立したる此人の哲理を說くに、我哲學界の少壯勝部氏は第一の適任者である。

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

厨川白村著

倉田百三著

超克

第四十版

此の書は、ソクラテス的勇氣、卽ち合理的實行意志を以て、自分の内なる「賤民」を征服せんとする思索的努力を跡づけたものである。「轉身」の序文に約束した、自己超克の成績を幾分擧げ得たかと思ふ。自分は、惡の魅力から脱し切る爲に、善と福との嚴密なる一致の觀念に到達した。又善を盡く、且つ其の度に從つて生かさんと努力して、基督敎主義と、希臘主義との調和の手がかりがついたやうな氣がする女性美に就いても其の美を盡く、且つ其の度に從つて生かさん事を努めた。此の書は、自分の此れ迄の論文集の中浮いた點の最も尠いものとして、自分を顧みて下さる人々に、讀んでいたゞくのに氣持がいい。(著者)

定價貳圓貳拾錢

送料十九錢

四六判上製

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二



イージーおしめ
決して衣服や蒲團を汚さず
外出にも絶對御安全!!
到る處の藥店にあり
特長
◉伸縮自在の純ゴム製おしめカバーにして體裁頗る上品◉大小便は決して漏れず、赤ちやんの衣類は常に清潔◉着脱に手數がからず、洗濯はたゞ水をかけろ計りで奇麗になりますカサ張らず旅行携帶に便利
イージーおしめ定價
別）子）小形（一二歳）七〇銭（純ゴム製）八〇銭
（製（ル大形（三四歳）八〇銭 九〇銭
純ゴム特製 一圓十銭 一圓卅銭
◉振替口座東京一三〇〇二番直接發賣元へ御注文の節は送料十二錢添へ前金に御願ひ致します。代金引換は送料二十四錢切手御前送下さい。
發賣元
東京向島寺島町曳舟驛前
大和ゴム製作所
電話墨田局四二一、一〇三三、一〇三四番

夏座敷

夏座敷の工夫

津田青楓

夏の座敷は、ひろびろと涼しい感じのすることを主として工風したいと思ひます。

わたくしは日本座敷しきや持ちませんが、夏は椅子にいたします、藤椅子の餘り重くるしくないものならば決して不調和ではありません。卓はなるだけ小さな低いものを好みます、普通の椅子と組になつて賣つて居ります卓は、高過ぎて不愉快です。卓の高さが椅子にかけた時、むねのあたりにあるやうなのは何となく輕快な氣持がなくていやです、これには朝鮮の机（實はお膳）が恰度手ごろで、高さも大きさも一番いゝやうです。その机の造り方が雜木で極めて素朴なので日本座敷には非常によく調和いたしますし且つ軟かな感じのするものです（ニス塗のギゴチない西洋家具はまつぴらです）日本には餘り澤山ありませんが、模造でもいゝからあゝ云ふ感じの家具を造るといゝと思ひます。支那品は少し重くるしい感じがありますが、西洋家具よりはましだと思つて私は卓には朝鮮と支那のものをとりまぜて使つて居ります。床の間や床わきの飾り方は西洋風に云ふとごた〳〵といろんなものを飾りたてるわけですが、こいつはよした方がいゝです。夏の座敷は出來るだけ何も彼も仕舞ひ込んで何一つ置かないやうにするのが涼しくつていゝものです。床には矢張り掛物があつてもいゝと思ひます、成る可くなれば書がいゝと思ひます。そして花は毎朝とりかへることです、夏の花は午後になると

しをれますから午後は捨てた方がよろしい、無精をしてしなびた花をいつまでもつゝ込んでおくならば花なんか寧ろ生けない方がよろしい。周圍の唐紙は全部とつて仕舞ふことです、椽側と座敷の境の障子もはずした方がひろ〳〵としてよろしい。次の間と座敷との間には西洋流にカーテンを引くといゝと思ひます。そのカーテンは日本ものゝ模様のある紗を水色に染めたのがいゝと思ひます、お茶席風に二寸ばかりの無地の切れで緣をとつた几帳風のものを左右に二枚つるしてもいゝ譯ですが、これは飾り茶人臭くつて反感が起り且つカーテンの樣に全體つるしておくと（一枚にして）場合によつて全部あけはなすことも出來るし、又全部しめきることが出來ると思ひます。この次の間との境界は衝立を使つてもいゝと思ひます。これもレストランやキヤフエーにあるやうな西洋臭いものでもいけないし、日本製のキヤシヤな、いやにペカ〳〵したものでもいけないが、私が今日迄見たうちでこれなら使つてみたいと思ふものがたつた一つあつた。それは支那製で周圍が唐木で中を班竹で張つたものであります。それならば籐椅子を置いた座敷の境界に使つても決して不調和でないと思ひました。

要するに夏の座敷はなるだけ必要のものゝ外は仕舞ひ込んでしまつて座敷をひろ〳〵と見せることです。そして家具でも器具でもアクドイ色のものを使はないことです。最後に一番大切なものは掃除を叮嚀にすることです。掃除を叮嚀にする氣のないものは座敷の飾りつけなんかを考へて見るのは愚かです。

夏座敷の趣味

田中喜作

京都の古い商家の薄暗い家に生ひたつた私は夏を迎へて間毎の建具が葭戸に代る頃になると籐莚と皮蒲團の冷い足さはりに快よき觸覺の疏懶を味つたことが、今でも夏の懐しさを記憶させてゐますが、今日の我々の生活乃至多くの中産階級の生活には、もうそんな餘裕なんか少しもありません。隨つて今日では特に夏座敷の趣味といふものを私は全然有つて居ません。また多くの人は『涼しさう』と云ふことを望まうとしても、私はそれだけでは滿足出來ないのです。事實にテルモメーターの指度が下降してくれなければ仕方がないので

すから、若し私の生活が容すなら冷却裝置を完全にする以上は夏も冬も特別な趣味を望みたくはありません。私の妻が夏座敷に對する何等の趣味をもつてゐないことにも不滿を感じなければ、多くの友人を訪問して、夏も冬も同じ客間に接することをも不思議とは思ひません。隨つて一般の家庭の婦人に望むことも、單に夏座敷と云ふことではなく、要するに婦人の根本の美的修養の向上以外にありません。それだけあれば夏でも冬でも自らい〻居室が出來上るものと思ひます。若しこの言葉が餘りに抽象に過ぎるなら『單純を求めること』それだけです。ある畫聖が云つた『三つの小さなものを描く代りに一つの大きなものを描く』ことです。この言葉も尚餘りに漠然としてゐるなら古名匠の建てた茶室に端坐して見ることです。そこには大きな線の組立以外に何ものもない。何もないから美しいのです。復雜なる高貴を求めることは我々の生活では及びもつかないことです。是れは夏でも冬でも同じですが、特に夏に於てそうです。

夏座敷の心持

森田恒友

兎も角夏は、涼しそうで淸らかといふことを第一條件とせねばならぬ。現代吾々の生活狀態なり氣持なりからは、又あまり健康でない私などは、冬の寒い季節から春先の不順の季には、洋室でベットに寢る方が暖かでもあり健康によいと思ふことが多いけれど、夏になると矢張り日本座敷の方が數等心持がよいといふ氣持になる。之れは日本の氣候が變化が多くて、夏と冬とに格段の相違がある爲めでもあり、又吾々日本人の趣味が自然の樹木の美を稱するような念が多いことからも來て居るかと思ふ。それは西洋室の窓から庭前を稱するよりも、日本座敷に端座して、椽先の綠樹を見て樂しむ方が、何だか涼しい氣持が多いようだし、腰掛けて庭を見るより、座して樹木を見上る方が暑を忘れるといふような氣持に近いように思はれる。とりわけ夏は、この綠の樹葉を見るといふことが、觀念から這入る忘暑の氣持に非常に大事な役目をも

つので、斯ういふ點から日本の夏座敷では、室内裝飾といふ以外に、庭前なり窓先なりの自然を室内に呼んで涼しい樂しさとしたい。假令ば窓先に楓の青葉が清々しく茂るとか、緣先に梧桐が高く聳えて、自から座敷を少し暗く、ほんのりとした光線にするとかいふことが、夏を涼しく靜かな氣持にする。よく二階家は風透しがよいといふが、眼の先に綠樹が無く、瓦の上を吹く風のみを呼び込んだのは、一向涼風といふ樂しみを得ないように感ずる。古來文人墨客などの、趣味の肥えた人が、よく廂の出た軒の低い家屋を好んだ心持は、全く居を樂しむといふことから來て居るだらうと思ふ。低い軒先に落葉樹を植ゑて冬は日當りよく、夏は綠葉の風を呼びたいものだと思ふのが居を樂しむ人の心であるかと思ふ。兎に角座敷に綠の光りをほんのり呼び込んで、部屋はサツパリとした程度の裝飾に止め、浴衣がけで打輪片手に座ぶとんの上に坐するといふ心持は、日本人だけが浴する夏の生活の氣持で、隨分よいものだと思ふ。私などは成るたけ夏座敷は、くど／＼しい裝飾品を片附けて、座に呼び入れる光線の色、庭前の綠樹や、草花などの自然を、座中の裝飾に更へることにしたいものだと思ふ。それ程夏の生活の心持には自然を呼び入れたい、

マイ・サンマーハウス

稲垣足穂

困りましたね。夏座敷の感想などいふものは、きまりきつたものゝなかでの最もきまりきつたものではありませんか。したがつて、平凡だといふことゝ共には、それはもう充分に洗練された趣味になつてゐる、今さら私のやうな者が口出しする必要はないといふ意味にもなります。金魚、螢籠、芭蕉の懸物、簾、風鈴を手初めに、日本や支那のえらい藝術家によつて試みられた水に近い高殿や、山のなかの塔などといふのは、誰にきいても間ちがひなく、又何人も條件さへそなはれば容易にやつてゐる――またやらうとしてゐるところのものではありませんか。それで滿足せずに西洋風を求めたかつたら、これも六つかしいことはなく、活動寫眞に現はれるもの、又、私たちのモストポピユラーな雜誌「邸宅と庭園」とでも云ふものをひらいたらいゝまでのことです。

で、私には別に云ふことがありませんが、それだけではあ

つけないなら、ついでに、きはめてバカ〳〵しいことながら、私が考へてゐる夏座敷の工夫をきいて戴きませう。座敷と云つても西洋間です。かなり廣い天井の高い、その天井は穹隆形で、したがつて室も圓形だと思つて下さい。そのまんなかには、やはり圓い大理石の水盆があつて噴水があがつてをり、まはりに仙人掌だのパームツリーだの鉢植を一ぱいにならべるのです。さて夜、壁にあるボタンをひねると、パツと電燈がきえて（その電燈が直接に光を出さない裝置になつてゐるのは云ふまでもありません）室内がまつくらになる、と、どうでせう、私の頭の上には、燦爛として涼しい星空がひろがつてゐるのです。——即ち、二重になつてゐる圓天井に、月と星型のこまかい穴が一ぱいあけてあつて、スイツチをひねると共に、天井裏と入れかはりにともつた電燈によつて、かくは目さめるやうな人工の星月夜を現出するのです。そして……と、私はなほファンタシーを走らせます。その下で、いゝハヾナをくゆらして、目のきれいなお友だちと話をしたら、それこそ吾々のやさしいトライアングル入りのワルツにあるStarlight lovそのまゝの境地でないか……が、こんな部屋を造つたら、三晩くらゐで倦いてしまふかも知れません。が、何事も結局倦くことにかけては同じだとすれば氣まぐれに一つやつてみても面白いではありませんか。そんな計畫をやる金が自由にならなかつたら、せめてせまい自分の部屋の天井だけでもいゝ、美しいスクアリーナイトにしてみたいものだ——と、私は今も思つてゐるのです。

涼しい設計

山本拙郎

煖爐の火に片頬を紅く染めて林檎を焙りながら、ヸクトローラでも聽くのが西洋住宅の冬の夜の樂しみならば、疊の香の新しい軒深い部屋に、枕元には櫻實の白い皿と、改造社の新刊書でもおいて、午睡を貪るのは日本座敷の夏の日の享樂ではないでせうか。軒先には岐阜提灯が靜かに垂れて、拭きこんだ椽側には洗つたやうな楓の青葉が影を映してをりませう。

日本の民家がその民族と共に、朝鮮の東の岸を傳つて北から來たといふことは、鳥居龍藏博士や西村眞次氏や今和次郎先生などの研究によつて漸く有力な學説となつてゐるやうで

ありますが、私は嘗て學校の敎室で伊東忠太先生から見せて頂いた南洋の民家の寫眞と、伊勢神宮との類似を無意味に思はれない氣がします。淺學非才な私共が私見を挾むわけでもございませんが、所謂四つ目の間取は出雲大社と共に北方系のもので深い軒の廻りや、椽の開放的なところなどは南方の風ではありますまいか。起元の何れにもせよ、日本の住宅は暖流に洗はれて雨が多く、空氣の濕つた日本で發達した形式だと言つた方が、正確な言ひかたでせう。冬には閉口ですが夏にはとても素敵です。

西洋間でも日本座敷でも、夏のことを考へるならば南から北へ吹き通しになつて居たいものです。晝間の風は大概南から吹きますけれど、夏の日が暮れますと涼しい風が北から吹いて來るものです。湯殿の煙突の白い煙がすらすらと南へ流れてゐるのに、北が塞つてゐるために、晝間の暑さがいつまでも部屋に殘つてゐるやうだつたらずいぶん口悔しいとでせう。西洋館は窓が小さいためにどうしても晝間のほとぼりが殘りがちです。そうした夏の宵のためにも、バルコニーや、テレスはなくてはならぬものでせう。

私共の住宅生活に於て日光、空氣、樹、草花、などに相當の注意を拂ふものならば、日光の美しさのことも考へておきたいものです。東に緣側のまはつた日本座敷の青疊の上にいつぱいに流れこんだ月の光に較べますと、西洋館の窓から見た月は貧弱なものです、東をうけたヹランダか蔦の絡んだテレスのペルゴラでもあつたならば、水のやうな月光の下にセレナーデのレコードでもかけることができませう。

部屋を冷たくすることは、部屋を溫めることにも增して實行しにくいことです。滴下する水の間を通した空氣をパイプで送る方法もありますが、劇場などで大仕掛にする時の外不經濟でせう。氷の柱を立てゝおくのも効果がなくはないでせうが、家庭一般にはどうですか。

壁の厚い、窓の極く小さい小部屋を作つて、電氣冷藏機の冷却函を裝置することは少し道樂に墮する嫌はありますが、時を惜んで勉强でもする人達にはおすゝめしてみたいとも思ひます。扉を開く度に冷たい重い空氣が床を傳つて流れ出て、溫い空氣が上の方から入りかわりますと、それをまた冷たくするために、モーターが動かなければなりませんから、床を一段低くして冷たい空氣があまり流れ出さないやうにすることも必要でせう。氷柱を置いた樣に空氣の濕つぽくなる憂はちつともありません。

小さい窓にはステインドグラスでも嵌め込んで、壁は澁い

然しあまり暗くない色の瀬戸張りに、床は洒落た石疊みにして、波斯の絨氈でもお敷になつては如何です。

青葉と籐椅子

伊藤貴麿

住宅は趣味から云つては、日本趣味をとるが、便利から云つては、どうしても、洋式に屈せざるを得ない。それも金にいとひがなければ、どちらにしても、二つ併せ得られるのは勿論である。

私にとつては、故郷の家庭の事は、思ひ出すだに餘りに古い事であり、それよりも十數年の下宿生活。住居に工夫し、趣味を求めた事などはあつた道理がなかつた。今度引移つた小宅もたゞ縦に雨露をしのぐばかりにて、震災後の事なれば、横には風も防げない有様である。地震後友の家に、故郷より老人が來つて、夜臥せらんとした所、隙間もる寒風に堪へやらず、頬被りをして寢たといふ話を聞いたが、今より我が陋宅の冬を思へば、夏なほ恐しと云ふべきか。

夏座敷といふ標題を頂いたが、現在の如き生活狀態では、特に時節によつての、住居の工夫も趣味もあつたものにあらず、さりとて空想や得られない要求などは、微塵も考へる事の嫌ひな男なれば、御返答に反くも是非もない。もし何事にもあれ、趣味要求などの答を求められんとせんには、文化的婦人に求められたし。總じて、女の空想、要求の好きなるや、あに女權擴張論者のみならんや、彼女等の生活の貧弱にして、住居の陋なればなる程、必ずや縷々として貴意をみたすべき、空想と名文もあることであらう。

たゞ郊外生活者に、さまで得難くない夏の唯一の要求を申せば、青葉である。青葉の夏座敷は、其の茂みと葉裏の陰のみ黒く見え、座敷はクワツとする程明るい。藍光色の電氣をつけて置くのもよく、明るい月空とけぢめのない程暗くして置くのもよい。さりとても一歩、岐阜提灯を吊つて家庭の團欒を得んなどは、過ぎたる心の餘裕にして、たゞスタンドの笠を選んで、其なつかしき色を、新しき頁の上に親しむ程の程度か。

も一つ是非必要なるは一脚の籐椅子である。一年の半は、我々の住居では、脚を折つて坐らねば寒し、坐れば早く疲れる。其の點に於て、夏に恵まるゝは籐椅子の快である。そ

れもたゞ、首をもたせてうまいするに足り、小册子を手にして、肱を托するに足ればよい。

かうありたいこと

手塚かね子

夏と云へば私には年中での尤も幸福を味ふ時なので、夏座しきといふ題は更にいろ〳〵のことを思ひ起します。

みどりの庭に水打ちして、縁の端にかけた靑簾を背景に水色の麻の座蒲團を敷いた處が想像されますが、此麻の座蒲團も暑い夏には冷えやりと心もちのよいものでありますが、――そして私は大變好きですが、近頃の洋服を着された來客や、美しい衣服をまとはれた婦人客の爲めに、籐椅子の輕そうな、そしてよき程の高さを持つた質素なのがいくつか並べられてあり、同じ籐製の六角形のテーブルが中央に置かれてあるといふやうなことは、尤も夏座しきをゆつたりとくつろいだものとしますでせう。

近頃男子の方がめつきりと洋服になり、時とすると洋裝の御夫婦連れが御見えになつたりいたしますのと、又日本服を着された婦人方は、びつしよりあせになつて、絽の御召も皺になつたりして御氣の毒に思ひますので、夏座しきのお座ぶとんは夕方などだけ用ふる樣にして眞晝は椅子にいたしたいものであります。

夏座しきになくてならぬものは、團扇ですが、なるべく冷たい風の出るもので、そしてかるいものがなつかしく思ひます。

瓶にさゝれた夏草も見のがすことの出來ないもので御座います。かくて涼しい思ひをかはしつゝ曇りなき談話に心の淸々しさを味ひながら、夏休みに歸省したといふ娘さんの、心をこめた茶菓の支度には、胡瓜と海老の美しい配合のサンドウヰッチに、冷めたいレモンテー、さつぱりした御馳走の後で、水蜜桃のアイスクリームの上品なお味の加減、こんなことは眞夏にはなくてならない心の用ゐ方でありませう、暑い最中に見た眼ばかり涼しそうな葛まんぢうなどよりは、ほんとうに涼しい心もちになるものゝ方がよいと思ひます。

夕陽の頃になれば、一層の趣を感ぜずには居られないのであります。

室のあかりは、軒燈籠位の方が涼しい感じがいたしますも

のですから、座しきの中央に電燈をさげずに、すいつけにしてどこへでも持つてゆかるゝ樣になし、なるべく室の隅の方に置き、形もぼんぼり形の被が面白いと思ひます。

夕べには軒の青簾はとり除いて、充分に涼風をあみつゝ、中學校で習つた物理を應用して作られたといふ弟子さんの廻り燈籠の都おどりの影にぎやかに眺めることも夏座しきの一つの趣きでせう。

夕餉の膳には新味を添へた手料理がよいと思ひます。なるべく新らしい魚や、野菜を涼しげに調理し、食器との配合や、盛り合せの工合などにも心を入れてすることは、一層人生味を豊かにいたしませう。

そして夏の夕餉の御馳走には日本料理が趣味も深く、淡白でよろしうございます。今頃なればお向物としては、酢貝にかつら胡瓜をちらし、山葵を添へたもの。又は、鱸のあらひを、氷簾の上にならべて、穗紫蘇や、わさびを添へたもの。椀もりは、冷ずましに、種は鶏肉の葛打ちに、鏡茄子。又は海老のつらゝに、夕がほの短冊。鉢肴の鹽燒や、夕月燒。香の物は、茄子紫漬。

食後は何と云つても洋風物がよろしく、時節柄フルーツゼリーの冷いものか、簡單なものとしては、パイナアプル、櫻實、林檎、桃、バナ、などのフルーツサラドがよささうです。

夜に入りますと共に音樂が欲しくなりますが私は、笛の音のやうなやさしい、細くて深いピヤノの音が好きです。

夏ざしきといふ題にどうかと思ひながら自分がかうありたいと思ふことをかいてしまひました。

空想二つ

相内　八千代

客を待つ爲の座敷のことなど絶えて考へた事もないから、單に、部屋の意味で書いて見る。

一

日本間、仄暗い四疊半。夏は、大きい部屋ほど爽かに涼しげで快よいものであるけれど、私には、廣い部屋は心を落着かせないから——心を外の方に逃れゆかせるやうで好ましく思へないから、坐つて背後のあきの丁度よい四疊半を採る。

そして、綠葉に濾された外光の投影する影の多い、床の間の無い部屋。南、濡緣。北、一間の出窓。西、琵琶棚、押入。東、濡緣に接して半間の出入り口。

竹材を其處にも此處にも使ふ。濡緣、天井の棹、窓格子、靑簾、琵琶棚の柱、棚板。

部屋の色、茶の濃淡に紫靑、一點の白。——茶色の壁。茶緣りの靑疊。襖ふち。襖紙は白けぬ程に茶を游めた色鳥の子。壁は泥壁でもかまはない。たゞ、壁も襖も紫靑の色鳥の子で腰張りをする。

窓には、普通簾をかけるけれど、此處には細めの繩暖簾をかける事とする。出入り口も同樣。繩暖簾は仲々面白い味ひを出す。我孫子の湖上園の土間を見てから殊にさう思ふ。

調度は、黑の小机一脚。苦茗を煮る器一器。琵琶棚の暗きに白い壷ひとつ。花はあつてもなくてもよい。若し、座蒲團を置くなら、木綿又は麻の紫靑色無地の小座蒲團。しかし、座蒲團より、圓坐めいた敷物、——太い本綿の糸に心を入れて編む印度土人の手細工を眞似た敷物を置きたいと思ふ。

此の部屋を圍む庭には、部屋に近く、竹。遠く、柿。竹は澤山。薄澤山。二三本づつかためて雁來紅、わづらはしくなく處々。飛石などはなくもがな。

部屋の心持、閑雅。淸楚。

この部屋に、終日を、白い壷と對して靜坐してゐたらどんなにか心が堪能することゝ思ふ。

四

洋風がまへの空想

私のむつ八つの頃によく見かけた小い中庭、あの濃やかな情趣。それから、中庭の側をはね板で渡つて離れがかつた部屋に行く時のあの渡り心地。私達、日本人に親しいそれらの趣きを、新な洋風家屋の中に生したいと思ふ。例へば、スパニツシユ風の Patio の心地に。殊に夏は、戸外の部屋としてあゝいふ中庭をもちたいと思ふ。石燈籠や飛石の代りに一面に靑芝を敷いて。碧の欄を二つ三つ程置けばよい。欄は一寸お茶をのせる位の卓の代りにもなるし、本をのせる事も出來る。

もし、椅子を置くとすれば、丸太組の無雜作な無骨な椅子、女でも一寸男手を借りれば造られる、外國の農民などがもつてゐるやうな椅子。

この緣の部屋は三方を樺太土人の小屋のやうな——樹皮をつけたまゝの丸太の家で圍ませる。これが此の部屋の壁とな

る。蔦を家の外壁一面にはわせて。恰度、昔、子供の時、幾度も繰り返し讀んだバーネットの秘密の花園の中の垣根のやうに深く。

かくして、この部屋はます／＼綠色となる。晴れ晴れとかがやかしく。

そして、中庭の一方、――外庭に續く境には、日向葵と蜀葵とを幾層にも植ゑる。白日、日光の直射に眩く、あの快よい烈しい日向葵の黃色は、この綠の部屋に無くてはならないものである。

鈍重で輕快、輕快で鈍重、何處かに此の心地が出てゐると此の部屋は十分。

二つの空想に願ふところは、單純、素朴、稚拙。そして、夜のこと、雨の事など餘り考へてゐない空想。

夏の家

與謝野晶子

あてやかに白き扇の羽ばたけるたそがれ時の內房の椽

黑檀の卓水に似ぬ白鳥は棲まねど手など頰などうつして

あぢきなし籐のむしろの冷たさは溪間の石にまさるといへど

七月の朝なり白き麻を着て机に倚れば朴の花めく

いつしかと葭の障子に變りたる女座敷と夕立の雨

わが窓は夏の木立の小暗くて夕月めきぬひるの光も

夕立にてまりの花の濡るる見て浴まほしくなりにけるかな

風通ひものの哀れになるものか山に向へる窓多くして

山莊やその客室に夕暗の先がけのごとありぬおのれは

庭の蟬啼く日はありのすさびにもとるここちせぬ白き琴かな

ソーニャ・コヴァレフスカヤ（續）

野上彌生子

ソーニャがワルデマール・コヴァレフスキの眞實の妻となつたのは、ロシアに於ける今度の新しい生活の間であつた。彼女にこの決心をさせるに至つた原因はいろ〳〵あるが、最も主なるものはお父樣の死であつた。イヴァン・セルゲエヴイッチはもう昔ほど頑固な壓制的な將軍ではなかつた。彼は自分に反抗してめい〳〵獨自の路を進んで行つた娘たちに對して今では優しい愛情を注ぐと共に、前の共產主義者たる一人の婿の過激的意見をも、自然科學者たる今一人の婿の唯物論的傾向をも寛大に見た。殊にソーニャは彼の一番のお氣に入りであつたので、宿痾の心臟病のためにお父樣が急に亡くなつた時には、彼女の胸には充たすことの出來ない深い空洞が生じた。アニュータにはどんな悲しみも分ち合へる愛する夫があつた。それにソーニャ自身には、――彼女はこの時ほど夫と自分との不自然な關係を淋しく思つたことはなかつた。而して誰からか優しく慰めて貰ひ度いと思ふ一圖な願ひが、二人の間にあつたすべての偏見を打ち破つた。

次の冬には一家を擧げて聖ペテルブルグへ移り、一八七八年――彼女が二十九歲になつた年――には一人の娘が生れた。この頃はソーニャの青春の絕頂期で、優秀な知識階級の尊敬と愛を集めて、人生のあらゆる渦――祝祭、演劇、講義、會合の樂しい刺戟――に身を投じてゐた。匿名ではあつたが初めて小說を發表したり、詩や劇評を書いたりしたのもこの頃であつた。夫のワルデマールは盛に飜譯をして、ブラームスの有名な『腦』なども譯した。若し彼等の生活がこ

の儘順調に進行したのであつたならば、今私たちの知つてゐるやうなマダム・コヴァレフスカヤは終にこの地上には存在しないですんだかも知れなかつた。けれども運命はソーニャを單なるロシアの知識ある社交婦人にはしておかなかつた。破綻の起りはコヴァレフスキの變な企業熱であつた。ソーニャがお父樣から貰つた遺産は餘り多くなかつたのに、彼等の生活は幾分の贅澤は已むを得ないと云ふ情況であつたから、夫婦は收入の途を講ずるために色んな事業に手を出した。一時はすべてが好都合に發展しさうであつたが、本質的に金儲けの出來る二人ではなかつたので、事業は頓てつぎ〳〵に失敗した。併しソーニャは一度の打擊に百萬圓を損しても平然とそれと打ち勝ち得たと云ふ。何故なれば、彼女が富み度いと思つたのは、その空想的な熱烈な性質が人生のすべての現象に引き込まれて、有らゆる事を知らうとしたに過ぎなかつたからで、失敗すると共にそんな空な計畫は直ちに放棄しようとした。ところで平生は決して金なぞに心を動かした事のない學者肌のワルデマールが、今度は不思議と金儲けに熱心になつて、やりかけた發明事業を止めようとしなかつた。彼は當時(一八八〇年―八一年)住んでゐたモスクワの大學で古生物學の教授に任じられたので、ソーニャはどうにかして彼に今一度學問的興味を呼び覺まさせようとして、自分も一緒になつて地質學の研究をしたり、彼の講義の下準備をしたり、出來得る限りの努力をしたけれども無駄であつた。一つは彼に或る山師がついてゐたのが惡かつたのである。終にその男はソーニャがゐてはワルデマールを思ふやうにすることが出來ないと考へたので、夫婦の離間策を講じ出す。彼女は夫に對して激しい嫉妬を起さなければならぬやうな羽目に陷される。これは彼女の性格に取つては忍びきれない屈辱であつた。それ以上其處にゐれば下劣な探偵をしたり、醜い喧嘩をしたりしなければならないと思ふ怖れのために、彼女は今一度一人にならう、この苦しいゐなから遁げよう、家と國を捨てゝ自分と自分の小さい娘のために未來を作らうと決心する。彼女は佛蘭西に行つて再び淋しい研究的生涯に入つた。

この間に彼女は波蘭土の革命家で、數學家で、且つ詩人であつた一青年と親しい交際をした。二人の精神は同律で燃え



Sophie Kovalevsky.

1887.

立つ二つの火焰の如く似てゐた。二人はまたプラトンの戀愛觀に對して共同の堅い信仰を持つてゐた。併し自分たちはその結合に於ては既に大事な條件を失つてゐると信じてゐたので、彼と彼女の關係は何處までも思想の交換や、感情の抽象的な解剖以上に出でなかつた。——これはまたソーニャの早い時代の戀愛の特性でもあつた。

この時に當つて、最も殘忍な運命が彼女の上に落ちた。夫のワルデマールは、自分が詐僞師に瞞されてゐたのを知ると共に自殺したのであつた。この報知は彼女の神經を寸斷した。別れてゐても、二人は手紙も書き合へばまた逢ふ約束もして、どちらからも優しい思ひを運んでゐたので、どんな苦痛の間でも彼を助けないで置き去りにして來たと云ふ後悔のために、ソーニャは死さうなほど、煩悶したと云はれてゐる。

さてソーニャがまだ聖ペテルブルグにゐた時分、同じワイエルシュトラスの門下であつた瑞典の人ミッタッハ・レフラーの訪問を受けたことがあつた。彼は先生のワイエルシュトラスが度々ソーニャの拔群の才能に就いて噂するのを聞いたので わざ〳〵ロシアに訪ねて行つたのであつた。當時ソーニャは科學的研究には最も遠ざかつてゐたにも拘はらず、思索の明敏や、複雜な數學上の問題に對する迅速な理解力で訪問者を驚かした。數年の後、ミッタッハ・レフラーが新設のストックホルム大學の數學教授に招聘された時、第一着にマダム・コヴァレフスカヤを講師に推薦しようとしたのもその訪問の際に受けた深い感銘を忘れなかつたのと、彼自身婦人問題の熱心な共鳴者であつたので、自分の科學の分野に於ける最初の眞に偉大なる婦人の名を新たな大學に結び付け度いと思つたからであつた。彼の内交渉に對するソーニャの返事には彼女の態度と決心がよく現はれてゐる。

「……私がストックホルムに招聘せられるかも知れないと仰しやつて下さる事や、それに就いてのあなたのすべての御盡力を心から感謝いたします。私自身としては、若し講師の位置が得られるならばきつと悅んでお受けいたしませう。私はそれ以上のものは望んではをりません。實際私はその地位を少しも恥しいとは思ひません。高等教育のために自分

の智識を用ゐる事や、大學へ入らうとする婦人の通路――これまではただ除外例や特別の恩惠としての與へられて、獨逸の諸大學に於ける場合の如く、理由なくして勝手に引き戻されるかも知れないやうな特權を確實にする機會を持つ事を心から滿足に思ひます。

富んではをりませんが、私の財産で十分獨立して暮らして參りますから、この場合報酬の點は御心配に及びません。何にも增して私の願はしいのは、自分の大事な目的を盡すことゝ、同時に私と同じやうな研究をしてゐられる人々に取り卷かれて働くことでございます。……

親愛なる教授よ。これ等は私一個人の感情でございます。併し私は他の熟慮をも申添へなければなりません。ワイエルシュトラス教授はストックホルムの事情がよく分つてゐられるだけに、大學が教師の中に婦人を許さうとはお考へになりません。その上尚ほ大事なことは、あなたが何處までもこの革新を主張なすつては、あなた御自身の地位まで誤りはなさらないかと氣遣つてゐられます。この事に關する、私たちの愛する先生の意見をあなたへ御通知いたさないのは私としては餘り勝手過ぎると思はれます。不斷から多くの興味も持つて下されば、助力も用意され、私自身でも最も眞實な友情を感じてゐるあなたのために、若し私が障害となるやうなことがあつたならどんなに悲しいかお分かりになる筈でございます。……』

併しソーニャが一年後に發表した二つの優秀な研究の價値は、容易に彼女の地位を決して　一八八四年（三十四才）の正月にはストックホルムに到着してゐた。彼女の自叙傳を受けついだアン・シャロッテ・レフラーとソーニャ自身との接觸はその時に始まつたのであるが、それは極めて自然な順序であつた。ソーニャの紹介者としてその就職に骨折つたミッタッハ・レフラーはアンの兄であつたから。アンは彼の家で初めてソーニャに逢つた時の第一印象を女流作家らしい精細な筆で次の如く描いてゐる、

『私が入つて行くとソーニャは書物を手にして圖書館の窓の近くに立つてゐた。こちらを向くまでに私はその莊重な横顔をよく見る暇があつたが、稍大きな目鼻立ちで、たつぷりした褐色の髪毛を無造作な引きつめの束髪にしてゐた。釣合ひはよく取れてゐなかつたけれども、すらりとした姿で、がつしりした頭の割には身體が小さ過ぎるやうに見えた。口は大きく、圓い生き／＼した唇をしてゐた。その線のかつきりついてゐるのが非常に表情的であつた。手は全く子供見たいに小さくて、二つの靜脈の浮いてゐるのが幾らか傷にはなつてゐるもの丶、上品であつた。併しその眼！それは驚くべき表情を持つた眼で、あらゆる人を引きつける特種な魅力を彼女の顔に與へた。色は交る／＼灰がかつた緑になつたり、褐色になつたりするので何色と極めることが出來なかつた。知識に輝いて、人の心の奥底まで洞察するやうであつたが、同時に優しく樂しげで磁力かなんかのやうに直ぐ人の信用を得た。如何にも大きな凸狀の眼であつた。時々疲れるとちよつとした痕がつくのはひどい近眼のためであらう。

彼女は頓てふり向いて兩手をさし伸ばしながら私を迎へた。幾らか恥しさうに見えた。挨拶は寧ろ常習的であつた。彼女は汽船で非道く齒が痛んだ話をしたので、私は齒科醫にお連れしませうと云つた。――』

一學期間のソーニャの講義は非常に立派なもので、學生間の評判も素晴らしい勢であつたから、大學は五年間の契約で彼女を教授にし、俸給も普通は年に二千クローネであるのを倍額支給した。これに依つて當時喧しい議論となつてゐた問題――大學教授の職を婦人に許すことの可否に對して、彼女は最初の決定的範例を示めしたのであつた。併しこれは婦人問題に就いて特別の理解を有してゐたストックホルム大學にして僅かになし得た英斷で、伯林ではソーニャが自分の講義の參考として、大學の或る講義を聞かうとしたのさへ――ワイエルシュトラスの特別の斡旋があつたに係はらず――容易に許されなかつた。

ソーニャのストックホルムの生活は少くとも初期に於ては十分彼女を滿足させてゐたらしい。彼女は若々しく、元氣で、

新しい研究を初めたり、また講義の準備をしたりすると共に、社交界にも出入して、至るところえり拔きな仲間の中心となつた。アン・シャロッテ・レフラーはこの頃のソーニャに就いて斯う云つてゐる。

『ソーニャの性質の中には強い諷刺的な分子があつた。彼女は天才と知識の崇拜者で、凡庸を輕蔑した。同時にすべての人生の衝突に對して、些々たる事にまでも詩人の理解と同情が與へられてゐた。自分の友達に關係した事だと、家事のごた〳〵や、着物のことまでも興味を持つて聞いた。

彼女は女生徒のやうに單純で、氣取りがなくて、自分が他の婦人に立ち勝つてゐるなどとは思つてもゐないと云ふ評判であつた。けれどもこれは間違つてゐた。彼女の磊落なのはたゞ表面だけで、事實は非常に内氣であつた。たゞその態度や、知識の彈力や、ものを樂しまうとする望みや、すべての人間的なものに對する心理的興味が思ひやりの深い外觀となつて、有らゆる人を魅したのであつた。余程厭がつてゐるのでなければ、自分より劣等なものには滅多に皮肉を洩らさなかつたが、同等と思ふ人には遠慮なくやつつけた。……』

次の一節はその冬の休暇に伯林に行つてゐたソーニャからミッタッハ・レフラーに送つたもので、この異常な婦人の出現がストックホルムの社會に卷き起した大きな波紋を暗示する點で最も興味のある手紙である。

『……あなたのお妹さんはクリスマスの贈物として、ストリンドベルクの一つの論文を送つて下さいました。その論文の中にストリンドベルクは女が教授になるなんてことは、二二ケ四と云ふこと程正確に奇怪なことだ。最も不快な、且つ下らない無駄事だと論じてゐます。畢竟するに私は彼の云ふことが正しいと思ひます。たゞ瑞典には私以上の數學者は澤山ある。私が選ばれたのは女を祭り上げる動機からだけだと云ふ彼の意見には異議を挾みます。』

此處でストリンドベルクの名前に出逢つた序でに、ソーニャがストックホルムに到着した時分のスカンヂナビヤを文藝史的に一瞥するのも無用でないであらう。當時イブセンは既に『人形の家』に依つて婦人問題の上に怖ろしい爆彈を投じ

た後で、『幽靈』『人民の敵』と續け、丁度『鴨』を發表した年であり、イプセンより二十一若く――ソーニャとはたつた一つ違ひの年上であつた――而して婦人問題に就て明らかにイプセンの敵對者であつたストリンドベルクは、彼の『結婚』の列篇に依つて、ストクッホルムの社會に大なる物議を引き起してゐた頃であつた。ミッタッハ・レフラーがイプセン流の婦人問題の代表的理解者であつたらしい關係から、またその妹のアン・シャロッテが、ストリンドベルクの作物上では決して愉快な役を演じない若い女流作家であつたところから推測して、ソーニャのこの手紙の中に引かれたストリンドベルクの辛辣な惡口は、如何にも當時の彼の云ひさうな皮肉であると共に、私はソーニャの冷靜な自信に充ちた態度を痛快に感ずる。

ソーニャは併しストックホルムでのみ暮してはゐなかつた。彼女は一學期毎に休みを待ち兼ねるやうにして大陸に去つた。絶えず何かの強い精神的刺戟なしには生きられない彼女の激しい一面の性格に取つては、斯んな北國の小さい町の生活は餘りに沈滯過ぎたのであつた。ソーニャは到るところに多くの崇拜者を持つてゐたが、殊に伯林の一人の崇拜者は彼女のために優しい親切を盡した。ソーニャが勉强のために一般の娘たちが樂しんだやうな快樂を若い頃何一つしなかつたのを嘆くと、彼は自分の別莊に彼女專用のスケート場を拵へたり、また四五人の友達のみをえり拔いて、一緒に舞踏の稽古までしたと言はれてゐる。併しいつも斯んな愉快な休暇ばかりはなかつた。彼女は度々ロシヤに呼び戻された。それは主としてアニュータの病氣のためであつた。アニュータのその後の生活は決して幸福でなかつた上に、重い病氣にかかつてゐたので、ソーニャは遠い路を幾度も彼女の病床に急いだ。ソーニャは斯くてお姉さんに對しては最後まで優しい妹であつたと共に、彼女の一人娘の小さいファウフィに對しても愛情の深い母親であつた。併しソーニャは自分の新たな任務に專念するために、當分はこの小さい娘をストックホルムに連れて行く譯には行かなかつた。

母親としての愛と公人としての責任の間に横はるこの抵觸に就いて、ミッタッハ・レフラーに當てた次の手紙は、ソーニャの强い決心を示してゐる。



Sophie Kovalevsky.

1887.

立つ二つの火焔の如く似てゐた。二人はまたプラトンの戀愛觀に對して共同の堅い信仰を持つてゐた。併し自分たちはその結合に於ては既に大事な條件を失つてゐると信じてゐたので、彼と彼女の關係は何處までも思想の交換や、感情の抽象的な解剖以上に出でなかつた。――これはまたソーニャの早い時代の戀愛の特性でもあつた。

この時に當つて、最も殘忍な運命が彼女の上に落ちた。夫のワルデマールは、自分が詐僞師に瞞されてゐたのを知ると共に自殺したのであつた。この報知は彼女の神經を寸斷した。別れてゐても、二人は手紙を書き合へばまた逢ふ約束もして、どちらからも優しい思ひを運んでゐたので、どんな苦痛の間でも彼を助けないで置き去りにして來たと云ふ後悔のために、ソーニャは死にさうなほど、煩悶したと云はれてゐる。

さてソーニャがまだ聖ペテルブルグにゐた時分、同じワイエルシュトラスの門下であつた瑞典の人ミッタッハ・レフラーの訪問を受けたことがあつた。彼は先生のワイエルシュトラスが度々ソーニャの拔群の才能に就いて噂するのを聞いたので、わざ〳〵ロシアに訪ねて行つたのであつた。當時ソーニャは科學的研究には最も遠ざかつてゐたにも拘はらず、思索の明敏や、複雜な數學上の問題に對する迅速な理解力で訪問者を驚かした。數年の後、ミッタッハ・レフラーが新設のストックホルム大學の數學教授に招聘された時、第一着にマダム・コヴァレフスカヤを講師に推薦しようとしたのもその訪問の際に受けた深い感銘を忘れなかつたのと、彼自身婦人問題の熱心な共鳴者であつたので、自分の科學の分野に於ける最初の眞に偉大なる婦人の名を新たな大學に結び付け度いと思つたからであつた。彼の內交涉に對するソーニャの返事には彼女の態度と決心がよく現はれてゐる。

『……私がストックホルムに招聘せられるかも知れないと仰しやつて下さる事や、それに就いてのあなたのすべての御盡力を心から感謝いたします。私自身としては、若し講師の位置が得られるならばきつと悅んでお受けいたしませう。私はそれ以上のものは望んではをりません。實際私はその地位を少しも恥しいとは思ひません。高等教育のために自分

の智識を用ゐる事や、大學へ入らうとする婦人の通路――これまではただ除外例や特別の恩惠としての與へられて、獨逸の諸大學に於ける場合の如く、理由なくして勝手に引き戻されるかも知れないやうな特權を確實にする機會を持つ事を心から滿足に思ひます。

富んではをりませんが、私の財產で十分獨立して暮らして參りますから、この場合報酬の點は御心配に及びません。何にも增して私の願はしいのは、自分の大事な目的を盡すことゝ、同時に私と同じやうな研究をしてゐられる人々に取り卷かれて働くことでございます。……

親愛なる教授よ。これ等は私一個人の感情でございます。併し私は他の熟慮をも申添へなければなりません。ワイエルシュトラス教授はストックホルムの事情がよく分つてゐられるだけに、大學が教師の中に婦人を許さうとはお考へになりません。その上尙ほ大事なことは、あなたが何處までもこの革新を主張なすつては、あなた御自身の地位まで誤りはなさらないかと氣遣つてゐられます。この事に關する、私たちの愛する先生の意見をあなたへ御通知いたさないのは私としては餘り勝手過ぎると思はれます。不斷から多くの興味も持つて下されば、助力も用意され、私自身でも最も眞實な友情を感じてゐるあなたのために、若し私が障害となるやうなことがあつたならどんなに悲しいかお分かりになる筈でございます。……』

併しソーニャが一年後に發表した二つの優秀な研究の價値は、容易に彼女の地位を決して　一八八四年（三十四才）の正月にはストックホルムに到着してゐた。彼女の自敍傳を受けついだアン・シャロッテ・レフラーとソーニャ自身との接觸はその時に始まつたのであるが、それは極めて自然な順序であつた。ソーニャの紹介者としてその就職に骨折つたミッタッハ・レフラーはアンの兄であつたから。アンは彼の家で初めてソーニャに逢つた時の第一印象を女流作家らしい纖細な筆で次の如く描いてゐる、

『私が入つて行くとソーニャは書物を手にして圖書館の窓の近くに立つてゐた。こちらを向くまでに私はその莊重な横顔をよく見る暇があつたが、稍大きな目鼻立ちで、たつぷりした褐色の髮毛を無造作な引きつめの束髮にしてゐた。釣合ひはよく取れてゐなかつたけれども、すらりとした姿で、がつしりした頭の割には身體が小さ過ぎるやうに見えた。口は大きく、圓い生き〳〵した唇をしてゐた。その線のかつきりついてゐるのが非常に表情的であつた。手は全く子供見たいに小さくて、二つの靜脈の浮いてゐるのが幾らか傷にはなつてゐるもの丶、上品であつた。併しその眼！それは驚くべき表情を持つた眼で、あらゆる人を引きつける特種な魅力を彼女の顔に與へた。色は交る〳〵灰がかつた綠になつたり、褐色になつたりするので何色と極めることが出來なかつた。知識に輝いて、人の心の奥底まで洞察するやうであつたが、同時に優しく樂しげで磁力かなんかのやうに直ぐ人の信用を得た。如何にも大きな凸狀の眼であつた。時々疲れるとちよつとした痕がつくのはひどい近眼のためであらう。

　彼女は頓てふり向いて兩手をさし伸ばしながら私を迎へた。幾らか恥しさうに見えた。挨拶は寧ろ常習的であつた。彼女は汽船で非道く齒が痛んだ話をしたので、私は齒科醫にお連れしませうと云つた。——』

一學期間のソーニャの講義は非常に立派なもので、學生間の評判も素晴らしい勢であつたから、大學は五年間の契約で彼女を教授にし、俸給も普通は年に二千クローネであるのを倍額支給した。これに依つて常時喧しい議論となつてゐた問題——大學教授の職を婦人に許すことの可否に對して、彼女は最初の決定的範例を示めしたのであつた。併しこれは婦人問題に就いて特別の理解を有してゐたストックホルム大學にして僅かになし得た英斷で、伯林ではソーニャが自分の講義の參考として、大學の或る講義を聞かうとしたのさへ——ワイエルシュトラスの特別の斡旋があつたに係はらず——容易に許されなかつた。

　ソーニャのストックホルムの生活は少くとも初期に於ては十分彼女を滿足させてゐたらしい。彼女は若々しく、元氣で、

新しい研究を初めたり、また講義の準備をしたりすると共に、社交界にも出入して、至るところ選り拔きな仲間の中心となつた。アン・シャロッテ・レフラーはこの頃のソーニャに就いて斯う云つてゐる。

『ソーニャの性質の中には強い諷刺的な分子があつた。彼女は天才と知識の崇拝者で、凡庸を輕蔑した。同時にすべての人生の衝突に對して、些々たる事にまでも詩人の理解と同情が與へられてゐた。自分の友達に關係した事だと、家事のこたくや、着物のことまでも興味を持つて聞いた。

彼女は女生徒のやうに單純で、氣取りがなくて、自分が他の婦人に立ち勝つてゐるなどとは思つてもゐないと云ふ評判であつた。けれどもこれは間違つてゐた。彼女の磊落なのはたゞ表面だけで、事實は非常に内氣であつた。たゞその態度や、知識の彈力や、ものを樂しまうとする望みや、すべての人間的なものに對する心理的興味が思ひやりの深い外觀となつて、有らゆる人を魅したのであつた。余程厭がつてゐるのでなければ、自分より劣等なものには滅多に皮肉を洩らさなかつたが、同等と思ふ人には遠慮なくやつつけた。……』

次の一節はその冬の休暇に伯林に行つてゐたソーニャからミッタッハ・レフラーに送つたもので、この異常な婦人の出現がストックホルムの社會に卷き起した大きな波紋を暗示する點で最も興味のある手紙である。

『……あなたのお妹さんはクリスマスの贈物として、ストリンドベルクの一つの論文を送つて下さいました。その論文の中にストリンドベルクは女が教授になるなんてことは、二二ヶ四と云ふこと程正確に奇怪なことだ。最も不快な、且つ下らない無駄事だと論じてゐます。畢竟するに私は彼の云ふことが正しいと思ひます。たゞ瑞典には私以上の數學者は澤山ある。私が選ばれたのは女を祭り上げる動機からだけだと云ふ彼の意見には異議を挾みます。』

此處でストリンドベルクの名前に出逢つた序でに、ソーニャがストックホルムに到着した時分のスカンヂヤビヤを文藝史的に一瞥するのも無用でないであらう。當時イブセンは既に『人形の家』に依つて婦人問題の上に怖ろしい爆彈を投じ

た後で、『幽靈』『人民の敵』と續け、丁度『鴨』を發表した年であり、イプセンより二十一若く――ソーニャとはたつた一つ違ひの年上であつた――而して婦人問題に就て明らかにイプセンの敵對者であつたストリンドベルクは、彼の『結婚』の列篇に依つて、ストクッホルムの社會に大なる物議を引き起してゐた頃であつた。ミッタッハ・レフラーがイプセン流の婦人問題の代表的理解者であつたらしい關係から、またその妹のアン・シャロッテが、ストリンドベルクの作物上では決して愉快な役を演じない若い女流作家であつたところから推測して、ソーニャのこの手紙の中に引かれたストリンドベルクの辛辣な惡口は、如何にも當時の彼の云ひさうな皮肉であると共に、私はソーニャの冷靜な自信に充ちた態度を痛快に感ずる。

ソーニャは併しストックホルムでのみ暮してはゐなかつた。彼女は一學期毎に休みを待ち兼ねるやうにして大陸に去つた。絶えず何かの强い精神的刺戟なしには生きられない彼女の激しい一面の性格に取つては、斯んな北國の小さい町の生活は餘りに沈滯過ぎたのであつた。ソーニャは到るところに多くの崇拜者を持つてゐたが、殊に伯林の一人の崇拜者は彼女のために優しい親切を盡した。ソーニャが勉强のために一般の娘たちが樂しんだやうな快樂を若い頃何一つしなかつたのを嘆くと、彼は自分の別莊に彼女專用のスケート場を拵へたり、また四五人の友達のみをえり拔いて、一緒に舞踏の稽古までしたと言はれてゐる。併しいつも斯んな愉快な休暇ばかりはなかつた。彼女は度々ロシヤに呼び戻された。それは主としてアニュータの病氣のためであつた。アニュータのその後の生活は決して幸福でなかつた上に、重い病氣にかかつてゐたので、ソーニャは遠い路を幾度も彼女の病床に急いだ。ソーニャは斯くてお姉さんに對しては最後まで優しい妹であつたと共に、彼女の一人娘の小さいファウフィに對しても愛情の深い母親であつた。併しソーニャは自分の新たな任務に專念するために、當分はこの小さい娘をストックホルムに連れて行く譯には行かなかつた。

母親としての愛と公人としての責任の間に横はるこの抵觸に就いて、ミッタッハ・レフラーに當てた次の手紙は、ソーニャの強い決心を示してゐる。

一八八四年、六月三日、モスクワにて

……私はたゞ今Tから長い手紙を受け取りました。それには私の子供を是非一緒にストックホルムへ連れて來るやうにと申してゐます。小さい娘と一緒に住み度いのは山々ですが、それでも彼女は矢張りモスクワに殘して置かうと決心いたしました。この家で大變幸福にしてゐますのですから、連れて行かない方がよいだらうと思ひます。ストックホルムでは娘を入れるやうになつてゐる家庭もありませんし、それに私は時間も精力もすべて新しい務めの方へ抛つてしまはなければなりません。Tのさう云ふ一つの理由には、多くの人が私がちつとも娘に構はないと云つて非難するだらうと云ふ事があるのです。併しそんなことは私の眼中には何の價値もない事を申して置きます。私や子供の幸福に關する重大問題でなければ、人生のすべての些細なことはストックホルムの貴婦人たちの判斷に任せます。私は假りにも、これらの貴婦人たちの眼に、善いお母さんと見られたいと云ふやうなことは、許し難い臆病だと思ひます。……」

次の今一つの手紙は、明けの年の夏休みに娘と彼女を預けてある從妹の家で暮らしてゐた時、アン・シャロッテ・レフラーに書いたものである。アンはその時兄のミッタッハ・レフラーと瑞西に滯在してゐたので、ソーニャにも來て一緒にアルプスに登らないかと誘つてやつた手紙の返事である。ソーニャはこの夏は其處を離れない約束をしてあつたので、アンとアルプス登りの出來ないのを非常に殘念がつた末に斯う云つてゐる。

「……自分が婦人の權利の代表者として仰がれてゐるストックホルムでは、私は自分の最大の絶對的の義務は、自分の天才を啓發する事だと常に考へてゐます。併し有りのまゝを白狀しますと、此處では誰でも新たに逢ふ人には『フフウフィのお母さま』として紹介されるので、私の誇りには一大打擊です。その言葉からは、私には迚も出來さうもないとあなたが思ふやうな婦人道德が無數に呼び出されます。あなたの哀れな友達を現在支配してゐるこれ等の勢力は中々强いのですから、少くとも八月十五日までは私を此處に引き留めてしまひます。たゞ一つ出來さうなのは、ルマ

ンディであなたと出逢つて、お兄さんと一緒にアペルデーンへ行く事です。直ぐと御返事を下さいな、親愛なる、優しいアン・シャロッテ、あなたは本統に幸福ですねえ、私はあなたが羨ましい。………』

私たちはどうかするとこの手紙は、自分の友達の誰かから貰つたもののやうな氣はしないであらうか。ソーニャの生涯が私たちに特種の魅力を持つてゐるのも、これ等の溜息や苦痛が、また他の場合に於ける彼女の喜怒哀樂が、私たちの感情に最も近いからである。實際、彼女が單なる變成男子のやうな冷淡な女學者に過ぎなかつたならば、彼女に對する私たちの親愛の情は、その半ばを失ふであらう。否、ソーニャは何處までも女性であつた。あらゆる女性の長所と共に、あらゆる女性の缺點を兼ね備へた偉大なる女性であつた。而してその女らしい自然の欲望──若い頃には熱心な研學のために抑壓され勝ちであつた激しい情熱が、漸く成熟の頂點に達した生理的條件と相俟つて、彼女の身内に大きな焔を燃やし始めたのもこの時分からであつた。彼女は一人の知識が他の一人のそれに立ち優つてゐる男女の合同を力説して、彼等の協力は二人の熟した果實を産出する上に是非必要だと信じた。この思想を自分で出現しようとするのが彼女の一大目的であり、その意味から、自分の第二の自己たり得べき男を見出さうとした。彼女と有名な北極探險家ナンセン博士との間に起りかけたローマンスの如きも、この思想の發現に外ならないと思ふ。實際ソーニャに取つては戀愛に限らず他の何事に於ても、或る強い力の感化が常に必要であつた。例へば自分の科學的の仕事に失望して、科學は決して人間に幸福を齎らさない。殊に婦人が科學に天才を持つことは、決して幸福の見つからぬ地位に彼女を引き込むから尚ほ不幸だといふやうな嘆聲を洩らしながら、遁げるやうにして巴里に去つた彼女が、秋の第二學期には別人のやうに元氣よく研究的野心に燃えて歸つて來る。ポアンカレーを初めその他知名の數學者たちと樂しい一夏を送つたことがこれ程に影響するのである。

一八八六年にはソーニャはまたアニュータの病氣のためにロシヤに歸つた。不幸なお姉さんを優しく看護しながら、二人の小さい時分のことなどを回想し、現在の狀態と思ひ比べて深い感慨に耽つてゐるうちに、彼女は一つの戯曲を思ひ

つく。それは同一の人に二つの異つた路を歩かせて見たもので二部に分たれ、一部では、斯くあつたと云ふ事を書き、今一つでは、あつたかも知れない事を書く筈であつた。ソーニャはストックホルムに歸ると早速アン・シヤロッテ・レフラーにその構想を話して二人の合作にするに極めた。直接の執筆者は勿論アンで、ソーニャは側で縫ひ取りをしながら、アンのペンと同じ速度で自分の想像力を働かせると云ふ行き方であつた。二人はその戯曲が完成したら巴里に持つて行つて華々しく發表しようと樂しんでゐるうちに、ロシヤからまたアニュータの危篤を知らせて來たので、ソーニャはすべての計畫を抛つてお姉さんの病床に馳けつけなければならなかつた。その滯在の間、ソーニャがアンに當てて書いた手紙には、アニュータに對する彼女の眞情が溢れてゐるが、中には斯んな手紙もある。

「……私はまた仕事を始める氣になつて、暇のある度に數學の問題を考へたり、ポアンカレー氏の論文に思を潜めたりしてゐます。文學的の仕事をする氣にはなれないのです。――何もかも陰氣で沒趣味です。斯んな時には私は寧ろ數學的のものを好みます。自分と全くかけ離れた世界に入つて、非人間的の問題を語るのが面白いから。――たゞ、私の親愛なる、たゞ一人のアン・シヤロッテ、あなたはいつも可愛いお馴染ですわ。私がどんなにあなたを懐しがつてゐるか申されません。私たちは死ぬまでお友達でゐなければなりません。あなたがゐなかつたら、私の生涯はどうなつたでせう。……」

今一つの手紙はソーニャがどんな秘密な手紙でもよく散らかし放しにしておく癖があるのに對して、アンから厳しく云つて、決して誰にも見せないやうにと書いてやつた手紙の返事である。これに依つて私たちはこの女友達がどんな面白い附き合ひ方をしてゐたか想像されると共に、ソーニャの鋭い皮肉を見ることが出來る。

「哀れなアン・シヤロッテ、あなたの手紙が誰が惡者の手に渡るかも知れぬと云ふ恐怖は慢性になつたやうですね。私はあなたの病氣の症狀がます〳〵非道くなるらしいので大變心配です。併しあなたのやうな斯んな讀み惡い字を書く人

は、その點では安心しなさいと云はないでゐられませんわ。受け合ひますとも。事件に直接興味のある二三の人々以外に、誰があなたの水差しの持手見たいな字なんか辛抱して讀むものですか。あなたのこの間の手紙に關して云へば、一番に郵便屋からしていけないのです。私がやつとあれを受け取つた時には、封筒の字がくしや〳〵になつて消えてゐたので、机の上に擲げて召使たちやG家の人たちに檢閲させました。皆んな珍しく見事な手跡で、而してひどく面白い手紙だと云ふことになりました。私は今日飜譯のことで、モウトン教授を訪問する積りですから、あの手紙を持つて行つてあの人の客間へ落さうと思つてゐます。あなたを有名にするには、私には斯んな事位しか出來ないのです。」

斯んな冗談がソーニャから出るやうになつたのも、一つはアニュータの病狀に持ち直したからであつた。――併しそれも運命の一時的延期で、その冬には終にアニュータはこの世の人ではなかつた。巴里で受けた手術の後の激變で、ソーニャは臨終にさへ間に逢はなかつた。

一八八八年のクリスマスの前夜、ソーニャはこの二年間に亘つて完成した一つの立派な研究に依つて、佛蘭西科學々士會からボルダン賞を貰つた。これは從來婦人に授けられた最大な科學的榮譽のみならず、斯界で彼女と肩を並べてゐる程の男子は誰でも熱望してゐた至上の名譽であつたから、今ソーニャがこれ等の競爭に打ち勝つたことは、異性の學者たちに對する一大勝利であつた。殊にその授與式は巴里に於ける佛蘭西科學學士會の大會に際して、世界の著名な科學者たちの集まつた中で行はれたので、成功は一層華々しい光輝を以つて飾られた。彼女は當夜の女王であつた。あらゆる尊敬、あらゆる賞讃 あらゆる祝辭が頭の上に降り注いだ。がたゞ一つ彼女に取つて一番大事なもの――幸福だけが缺けてゐた。實際ソーニャはその名譽と偉大と光輝の瞬間に於て、破れ小屋に震へてゐる乞食よりもみじめに哀れであつた。何故？彼女は女であつたから。――

これより一年ばかり前ソーニャはM――と呼ぶロシアの一紳士と友達になつた。彼がどんな男であつたかはソーニャ自

身がアン・シャロッテに書いた手紙の一節が最もよく説明するであらう。

『……私はその人（M――）に對する自分の心持を解剖することはとても出來ません。その人が私にどう云ふ風に見えるかと云ふ一番よい表現はミュッセェの斯う云ふ詩です。

あの人はひどく快活で、　ひどく陰鬱だ。
憎らしい隣人で、　立ち優れたお仲間だ。
怖ろしく素直で、　一番氣むづかしい。
驚くほど眞實で、　ひどく狡い。

それにその人は生粋の露西亞人です。あなたが他の人々から水壓機を用ゐて搾り出したよりかもつと多くの獨創的な天才を、その人は小指の中に持つてゐるやうな人です。……』

最も美しいもの、最も偉大なもの、最も獨創的なものに對して常に強い憧憬を持つてゐるソーニャが激しい熱情で彼に引きつけられて行つたのは最も自然であつた。併しどんな戀愛の間でも彼女は自分の研究を打ち捨てることは出來なかつた。殊にその頃はボルダン賞のための論文に思ひを潜めてゐた時分であつたので二人の間は段々こぢれて來た。M――は最初は口に出さなかつたけれども、自分の勉強に沒頭してゐるソーニャを見ると冷淡な態度を見せた。彼はソーニャの勉強を單に虛榮心を滿足させ、名譽と卓越を得ようとしてゐるに過ぎない。而かも婦人のそんな名譽は決して男の眼を引きつけ得るものではないと信じてゐた。これはソーニャに取つては悲しい嘆きであつた。彼女は考へる。歌姫や女優の勝利は屹度男の心を征服するし、また女の美は社會に持て囃される。然るにどうして男の空想は、科學界の名譽の月桂樹を得ようとして眼を盤らせ、額を皺ませてゐる女の勉強に捕へられないのであらう。――時にはソー

ニャは男の心を失つてまで研究に從事しなければならない自分を情けなく感ずる。それでも仕事を止めることは出來なかつた。斯うして女性としての要求と、科學者としてのそれ等の杆格は、巴里に於ける名譽ある滯在の間に最も痛ましい爭點にまで發展した。M——は祝宴や面會や訪問に忙殺されてゐる彼女に對して男性らしい反感のみを以つて臨み、終に自分か科學かどちらかを選べとまで云ひ出した。その時ソーニャがミッタッハ・レフラーに當てゝ書いた手紙は、彼女の苦悶を明白に物語つてゐる。

一八八九年　巴里にて

親愛なるゲスタ——私は只今あなたの御親切なお手紙を頂きました。あなたの友情をどんなに有難がつてゐますでせう。この友情のみが、人生の私に呉れた唯一の善いものだと確信してゐます。私は自分がどれ程貴重にそれを値踏みしてゐるかこれまで碌に口に出したこともなかつたのを恥しく思ひます。親愛なるゲスタ、どうぞお許し下さい。本統にたゞ今は私を慰めて呉れるものは何一つないのです。お祝ひの手紙はあらゆる方面から參ります。併し人生の不思議な皮肉に依つて、私は現在ほどみじめな氣持のすることはありません。私は犬見たいにみじめです。いゝえ、犬達のために彼等が人間ほど、分けても女ほど不幸でないことを望みます。多分、もう少ししたら幾らか理性的になりませう。少くともこの心の狀態に打ち勝つために十分努力いたしませう。私は仕事にかかつて再び實務的な問題に沒頭するやうにしませう。勿論あなたの助言にお縋りしなければなりません。現在の私に出來ることは、この悲しみを自分一人で持ちこたえて、社交界に立ち交らないやうに、噂の種にされないやうにするだけです。この週間は澤山な招待を受けました。……でも今日はあんまり悄れ込んでゐて、あなたにそれ等の祝宴の話をしてあげる氣にはなりません。……家に歸つて來ると部屋の中を行つたり來たりしてゐます。食べることも眠ることも出來ないで、私の神經組織は憐れな狀態になつてゐます。——當分の間、左樣なら、最も親愛なるゲスタ、いつもお友達でゐて下さいまし。私にはそれが何處ま

でも必要だと云ふことは分つてゐて下さいますね。ファウフィによろしく。それからあの兒の面倒を見て吳れてゐるSにお禮を申して下さいまし。暖かき愛情を持つて、あなたのS。』

當時ミクタッハ・レフラーはストックホルム大學の學長であつた。而してソーニャは二年前に小さい娘のファウフを連れて來てゐたので、巴里の旅行の間彼に娘の監督を頼んでゐたのであつた。彼女は春の學期だけ休まして貰つて、當分巴里から歸らなかつた。其處からアン・シャロッテ・レフラーに斯う書いてゐる。

『……あなたの運命は何處までも幸福で、私の運命は絶えず苦しいのだと云ふ事は、私は前から知つてゐました。私が宿命論、いゝえ寧ろ定命論から信ずるやうになつたらしい壽命以上に、まだ生きてゐるのは隨分不思議なことです。私は人間が持つてゐると想像されてゐる自由意志をます〳〵信ずることが出來なくなりました。この苦しい自分の運命は、一小微點でも變化させる力のないのを生理的に感じます。今では私は殆んど屈服してゐるのです。勉强だけはしないではゐられないからやつてゐます。でも希望は捨ててしまひました。どうにかし度いとさへ思ひません。すべての事にどの程度にまで無關心になつたか、あなたは分からないでせう。……併し斯んな事はもう澤山です。何か他のことを話しませう。私はあなたが私のポートランド語の物語を氣に入つて吳れたのを悅んでゐます。若しあなたがあれを瑞西語に譯して下すつたらどんなに嬉しいでせう。……

私はまた私の幼年時代と姉のこ、と姉の文學的閲歷に於ける第一步。それから私たちとドストエフスキとの關係に就いて長い物語を書きました。……』

これが卽ち『ラエフスキイ家の姉妹』と題されたソーニャの自叙傳で、年代から云ふと彼女が三十九の時に書かれたものである。その時分はソーニャが最も文學的に傾いてゐた頃で、アンに當てたその他の手紙にも色々な腹案や講想について書いてある。二三ケ月前の偉大な名譽ある婦人科學者は、今は最も熱心な女流文學者であつた。この激變は果して何を

意味するか。――ソーニャの性情が或る場合科學者よりは藝術的なものに適してゐたのは拒まれなかつたし、彼女自身にも前者は苦痛で、後者の仕事に初めて樂しみを見出したと云はれてゐる。併しこの場合の變化をさう簡單に片附けてよいであらうか。若し私の臆測が許されるならば、これはM――との關係に依つてソーニャがひどく敍情的になつてゐたのと、M――の交友の多くが文學者や詩人であつたのに起因すると共に、彼女の文學上の仕事は科學的な研究ほどM――との間を邪魔しなかつたのではないかと思ふ。私は其處にソーニャのしほらしい娘のやうな思慕を見る。而もそれまでにして繋ぎ留めようとした男の心を彼女は最後までしつかり自分のものにして仕舞ふことは出來なかつた。彼等の間には絶えず誤解と衝突が續き、仲直りの後に直ぐ喧嘩がはじまつた。ソーニャの地位や名聲が高まるほど、それは一層苦しさの增す地獄であつた。一八九〇年のクリスマスはソーニャはアン・シャロッテ・レフラーと巴里に滯在してゐた。その時ソーニャの親しくしてゐた那威の作家ヨナス・リイは丁度巴里に來合せてゐた作曲家グリーグ夫妻などと共にソーニャを招待して晩餐會を開いた。當夜リイは彼女のために一場の演説をしたが、それは著名な科學者として、若しくば文學者としてのマダム・コヴァレフスカヤに對して敬意を拂つたのではなく、『ラエフスキ家の姉妹』の中に現はれた『小さいターニャ』に滿腔の同情と感激を寄せたものであつた。リイはあれ程愛され度いと思ひながら、誰からも理解されなかつたその子供のために悲しんだ。後年人生はあらゆる贈物――名譽、卓越、成功を彼女に齎らした。けれども子供はまだ其處に立つてゐる。大きなもの欲しさうな目をして、空つぽな兩手をさし伸ばしながら。この小さい娘は何を欲しがつてゐるのか。――彼女はたゞ自分に蜜柑を一つ呉れる親切な手を求めてゐるのだ。――その演説は當時のソーニャを最もよく洞察した批評であつた。その時ソーニャは感情のこもつた美しい聲で斯う叫んだと云はれてゐる。

『リイさん、有り難うございます。私はこれまで祝辭も澤山頂きましたが、斯んな嬉しいのは一つもありませんでした。』

たつた一つの蜜柑を呉れる手――おゝそれは何んと云ふ無慾な容易な要求であつたらう。而かもソーニャの場合には――

偉大な婦人先覺者の要求としては、最もむづかしい、不可能に近い願望であつた。

『あの人と私はお互ひに到底理解されないことが分かりました。私はストックホルムへ歸つて働きませう。働くと云ふことが今後は私の唯一の慰藉でなければなりません。……』

斯んな手紙を書いたのもその頃である。併し彼女はもうM――なしに生きることは出來なくなつてゐた。ストックホルムに歸つても、大學の講義は義務以上はでなかつた。而かも彼女の經濟狀態は、最初と違つて教授の收入を無視する譯に行かなかつたから、職を捨てゝ自由にM――と暮らすことは出來なかつた。殊に彼女は他の一般の婦人のやうに社會の見つかり次第、どんな屈辱の中でも結婚すると云ふやうなことは最も恥づべき事だと信じてゐた。この苦しいディレンマの中で僅かに彼女を慰めたものは、學期の間の休暇にM――と旅行することであつた。一八九〇年の十二月には二人は丁度結婚してゼアノで夫と共に住んでゐたアン・シャロッテを訪ねて、皆んなで樂しい正月を過すために伊太利に旅行した。――不運な電報の行き違ひでアン夫婦とは逢へなかつたのであるが――ソーニャはM――と二人でゼノアの美しい『死人の代理石の園』を見物した時、突然顏色を變へて、斯んな不吉な豫言をしたと云はれてゐる。

『二人のうち、どちらか屹度今年中に亡くなりますよ。お正月にお墓へ來たんですもの。』

讀者はソーニャのこれ等の言葉を科學者に不似合な迷信として驚くかも知れない。併しこの點では彼女は飽くまでもロシャの婦人らしい特性を有してゐた人で、若い時から何事に對しても斯う云ふ豫覺を感じてゐたし、それがまた不思議なほど當つてゐた。(序でに私たちがソーニャに就いて見る時、一瞬間も忘れてならないのは彼女がロシャ人だと云ふ事である。若し彼女の性格や行動の上に何かの疑惑が生じたとしても、この一事を思ひ出すことに依つて、忽ち釋然とするであらう。)

今度の忌はしい豫言が實證されたのは間もなくであつた。彼女は伊太利旅行の歸途伯林にワイエルシュトラスを訪ね、二月四日の朝ストックホルムに着くと病氣になつた。途中に流行病などがあつて、無理な廻り路をしたのと、激しい寒氣が

その直接原因であつた。而かも明けの日は一日勉強をして、六日の金曜日には大學の講義に出た。彼女はストックホルムに居さへすれば、決して一度も休講したことはなかつたと云ふ。六日の晩は觀測所で開かれたる或る會合にまで出席した。けれども其處でひどく發熱した。ソーニャは中途で席を立つたけれども馬車が手に入らなかつた。ところで彼女は連れがないとストックホルムの路がよく分らなかつたので、方角違ひの電車に乘つて、家に歸り着いたのは大變遲くなつた。病氣は急激に惡くなつて九日の金曜日には彼女は既に自分の死を悟つたらしかつた。

『この病氣はとても快くなりません。――身體の中に何か變化が起つた氣がする』と云ふた。

彼女は終にその晩の明け方に亡くなつたのである。丁度その晩は彼女の娘のファウフィが或る子供の會に招待されてゐた。ソーニャは自分の病氣のために小さい娘の樂しみを無駄にさせまいと氣を揉んだ。而して娘が寐て扮することにしてゐたジプシイ風の裝ひをして病室に入つて來ると、ソーニャは母親らしい慈愛に充ちた微笑でそれを眺めて、澤山遊んで來るやうにと云つて送り出したと傳へられてゐる。私はこの一節をいつも涙なしには讀み得ない氣がする。數時間に迫つた死の前にすら、尚ほ娘の一度の舞踏會を取り外づさせまいと骨折つたソーニャの心遣ひは、單なる母親の愛情や優し味の發露であらうか。否、それは人生の快樂に對して彼女が如何に高く値蹈みしてゐたかを證明するに足りる。偉大になればなる程孤獨と寂寥を增し、榮譽と成功に達すれば達する程心の悅びから隔離された末、終に闇黑の怖ろしい死に直面したその時のソーニャの眼には、一と晩の舞踏會は何物も犯し得ない眞に絕大な價値そのものであつた。

私はソーニャの不意の死が歐洲の學界からまた一般の社會からどんなに深い哀悼と禮儀を以て迎へられたかと云ふやうな餘事で讀者の注意を引かうとは思はない。然らば彼女の棺を前にして私たちが考へなければならないことは何であらうか。彼女の波瀾多き生涯は實に私たち婦人にその貴重な考案を與へるために過されたやうなものであつた。婦人問題の臨床講義としてその屍を自ら解剖臺に乘せてくれたのである。若い讀者姉妹よ、私はこの貴重な屍に對してあなた方各自が愼重にメスを取られんことを望む。彼女の一筋肉を剔抉し、彼女の一內臟を點檢することは、やがてあなた方自身の一筋肉、一內臟の眞の組織、眞の作用を闡明することに外ならないであらうから。(完)

創作

一瞬間（小説）　正宗白鳥
春遠からじ（長篇小説）　ハッチンスン作　木村毅譯
室内花卉（短歌）　木下利玄
鳳凰天に搏つ（長篇小説）　柳原白蓮
雨上りの道（小説）　小川未明
女（戯曲）　秋田雨雀



一瞬間

正宗白鳥

海水浴へ行く途中で、私は、ふと向うからやつて來る僧侶に目を留めた。そして、「あの人だな」と思出した。

二三ケ月前に、故郷へ歸つた次手に内海を渡つて、伊豫の松山へ行つて舊友のHを訪ねた時、Hは、「大磯には、××寺にKといふ男がゐるよ。學生時代に非常に懇意にしてゐて、僕は一夏寺で避暑をしたことがあつた。Kは快活な非常に面白い男だから交際して見たまへ。僕から手紙を出して置かう」と、氣輕に云つて、紹介の名刺を呉れた。

私は名刺を鞄に入れて歸つた。そして、散歩の折などに××寺の前に立つて、境内を覗いて見たことはあつたが、自分から、紹介の名刺を持つて訪問する氣持にはなれなかつた。それでKといふ僧侶の顏は知らない筈であつたが、ふと途中で出會つた僧侶の顏を見ると、「Kといふのはこの人だつたのか」と、意外に感じたのであつた。この人には、ほゞ三十年前に會つたことがある。

先方でも、微笑を浮べて私の方へ近づいた。Kは肥つてはゐたが、ひどく青い顔をしてゐた。二人は一度期に輕い挨拶を取交はした。

「君が此方にいらつしやることは、新聞で知つてゐました」

「久振りですね。あなたは元から大磯にいらつしやるんですか」

「僕は去年まで東京で働いてゐました。極く俗な仕事をしてゐたのです。Hにはお會ひになつたさうですが、どんな風でした」

「あの會社では相當にいゝ地位に上つてゐるんでせう」

私は立話をしてゐるのは、暑くつて苦しかつたので、直きに別れて海の方へ行つたが、Kに會つたのを緣に、三十年前の事が私の胸に懷かしい夢として浮び上つた。

それは、私がはじめて上京した年の夏であつた。興津で耶蘇教の夏季學校が開かれたので、私は歸省の途次そこへ寄つて、十日ばかりを過した。大病に罹る前だつたので、何となく氣分がすぐれなかつたが、それでも、日頃尊崇してゐた名士の講演を聽いたり、いろ／＼な青年の中にまじつて自由に話をしたりするのを、若々しい樂みとしてゐた。會員は數軒の宿へ別れて泊つてゐて、待遇に厚薄があつたが、毎日食物の比較をして、喜んだり憤つたりするのも、青年らしい樂みになつてゐた。私やK君は一番惡い宿に割當てられてゐたのであつた。ある晩、宿の女中が二三人、寢床を延べに來た時、蚊帳を釣りながら、戲談を云合つた果てに、そのうちの一人が、「お前さんは蚊帳のなかに入つて皆さんと一しよに寢なさいよ」と云ふと、年長の田舍牧師が、「馬鹿なことを云はないで、サツサとあちらへ行きなさい」ときつい顔をして叱りつけた。K君は、ハヽヽと聲を立てゝ笑つて、「それよりも、僕が君たちの部屋へ行つて、蚊帳の中で一しよに寢ようかな」と、女中に向つてあたり關はずに云つた。女中は默つてゐたが、田舍牧師は苦い顔をした。私は、Kといふ奴はいや

らしいことをいふと、ひそかに不快を感じてゐた。
談話會の席上、Kは隨分遠慮なしに、講師に向つて議論を吹つかけた。時々は論鋒が鋭くなつて、講師の太刀先が危く見えるやうなこともあつた。
「あの時分、Kの顏付が坊主くさいと思つてゐたが、やはりさうだつたのだ」と、三十年前の疑ひを私は今解決したやうに感じた。
その後、ある日、私は例の時刻に海に浸つてゐると、そこへ、海水帽を被つたKがやつて來たが、彼れの裸體を見ると、醜のやゝ肥つてゐるのとはちがつて、胴は著るく痩せてあばら骨が見えた。
「僕は相當に泳げるんだが、この頃は過激な運動をすると息が苦しいんで、水に漬つたばかりでちつとしてるんですよ。意氣地のない話ですが……」と、Kは勇ましい波乘遊びなど見ながら、淋しさうに笑つた。
「どこか惡いんですか」と訊くと、
「いや、大したことはないんですが、東京であんまり働き過ぎたので……」Kは自分のやつてゐた事業の話をちよつとしかけたが、直ぐに話題を轉じて、「興津でお目に掛つた時から三十年も日が立つたんですなあ。早いものですなあ」と、感歎したやうに云つて、「あの時は、僕もよく泳いでゐたんでせう。君は覺えてゐませんか」
「さうですね。あの時分は、僕は東京で重い感冒をやつた後だつたから、水泳ぎは遠慮してやらなかつた筈です。あなたはどうだつたか知ら」
「汽船で江尻まで行つて、三保の松原まで歩いて、それから引返して久能山へ登つて、歸りに阿部川餠を食べて靜岡から汽車に乘つたことがありましたね。あの時はよく歩いたものだ」
「ちや、あの遠足の時にあなたと一しよだつたんですね。僕はあの時は、内村先生の後にくつゝいて、先生の話ばかり聞

いてゐたので、外の事には注意しなかつたんです。先生も京都に蟄息して貧乏してゐられた時で、途中で喉が渇いてみんなが茶店へ寄つた時に、先生が汚い蟇口から一錢銅貨を出して葛湯の代を拂つてるのを、僕は傍から見てゐて、譯もなく感動したのでした」

「さう〳〵、内村――が盛んに講義をやりましたね。あの人は今は何をやつてゐます?」

「やはり雜誌を出してゐますが、時々讀んで見ると、三十年前と同じ事を云つてゐますよ」

「さうですか。三十年と云つても一瞬間見たいなものですからね」

Kはさう云つて、顔にぶつかゝつた水を手の平で拭つて、眩しさうな目をして私を見詰めながら、お互ひの年齡について口を利いた。

「君などとは違つて、僕は三十年間いろ〳〵な俗務をやつて來ましたが、今度東京生活を諦めて此處に落着いてから、過去を思出すと、一瞬間見たいな氣がしますよ。僕は宗教學校を出たくせに、投機業もやつたんですからね。しかしこれからは落着いて一瞬間を一年のやうに長く生きたいと思つてゐますよ。人間の盛りをあはたゞしく通つて來たことを後悔してるんです」

「僕はまた自分で書齋にばかりゐて、人間の盛りを通つて來たのを後悔してるんです」

「しかし君は、いゝでせう」

私は、Kの衰弱は肺患のためではないかと疑つたので、顔を接近して話をするのを恐れて、間もなく側を離れて、水泳を試みた。そして暫くして泳ぎ疲れて濱へ上つて見ると、Kの姿はそこらに見えなかつた。

震災直後のKの活動は屢々私の目に觸れた。寺は可成り激しく破損してゐたのに關はらず、門前に立札を出して、罹災

民を収容したり、死者を無料で弔つたりしてゐた。軍隊の宿をもしてゐた。私は、法衣を纏ひ鹿爪らしくかまへたKが、俥や自動車で事ありげに通つてゐるのを見た。

地震の後仕末も大分ついた時分、私は寺の門前で彼れに行會つたので、また立話をした。

「お忙しかつたでせう」と訊ねると、

「いや、僕の方は別段忙しくはなかつたのですが……」と云つて、彼れは自分のした救濟事業を喋々と語つて、老いた青い顔にもあか味を帶びるほどであつた。そして、私を内へ招いた。私は彼れの病氣について警戒する氣もあつて、彼れの居室へは入らなかつたが、本堂の廊下まで寄つて足を休めた。見ると、Kの妻君だか誰れだか分らないやうな女が、赤ん坊を抱へて綾しながら前を通つた。私は寺と赤ん坊との不調和を感じて、Kも多少の羞恥を感じてやしないかと思遣つて、見ても見ぬ風をして、世間話を續けてゐたが、Kはやがて赤ん坊の方へ向つて兩手を出して笑顔をして、頤をしやくりながら「ホイ〳〵」と無骨な聲で呼掛けた。赤ん坊はニコリ〳〵笑ひを浮べた。

「この子はね」と、Kは私の方へ向つて、「この子は孤兒なんですよ。××村の百姓の子なんだが、家が潰れて兩親とも即死したのに、この子だけは、不思議に生命が助かつたのです。倒れると同時に、母親がこの子を前へ拋出したらしいんです。御覽なさい。可愛らしいゝ赤ん坊でせう。世話のし手がなくつて警察でも困つてゐたのを、私が一時預つたのですが、今度私の子供として育てることにしました。隨分世話は燒けますが、可愛いゝものですよ」

「ちや、その子は非常に幸福な譯ですね」と、私はお世辭を云つた。

「子供のためよりも、僕のために幸福ですよ。地震のお陰といふのも可笑いが、僕は今度の騷ぎで、三十年間に知らなかつたいろ〳〵ないゝ經驗をしました。それで、子供を天から授つたやうに思つてるんです」

Kがそんなことを云ふのは、私には可笑かつたので、

「興津の時分には、あなたは非常な議論家だつたが、年齢を取ると、人間は氣持が違つて來るんでせうね」と、揶揄ふつもりで云つたが、Kは、

「いや、この夏海の中で君に會つた時と今とで、僕の氣持がまるで違つてゐますよ。……可成り忙しい思ひをしたのに、身體は却つてよくなりました。少し肥つたでせう」と、眞面目に答へた。

顔付は昔ながらに坊主くさかつたが、用語や話つぷりには、佛教徒らしい所は些しもなかつた。これで經文なんか覺えてゐるのだらうかと疑はれた。

その後數ケ月間途中でKに行會ふことはなかつたが、梅の咲く頃ある用事のために寺の前の道を通ると、盛んな葬式が施行されてゐるのが目についた。好奇心から石段を上つて見ると、梅花の薫つてゐる庭には、十人あまりの僧侶が、立派な寢棺のまはりを經文を口にしながら、巡つてゐた。一團の會衆は鉦を叩いてゐた。たゞの葬式ではあるまいと思つて傍人に訊ねると、死者はKその人であつた。

どうせ長生はしないだらうとは思つてゐたが、その死のあまりに早きに私は驚いた。それで、會衆の後に立つて哀悼の意を死者に捧げた。

彼れの死因は無論肺患に違ひないと私は獨り極めにしてゐたが、その後間もなく私は痔疾の出血に悩んで、かゝりつけの醫師の診察を受けた時、醫師はふと、

「あなたの出血は原因が分つてるからいゝですが、××寺の和尚には困りました。腸の出血なんですが原因が分らんで困りました。東京の病院に一年も入院してゐて、原因がハッキリ分らないまゝで歸つて來たんですよ。死ぬ時分にはひどい出血で、あらゆる止血劑を用ひても些しも止らないんですからな」と云つた。

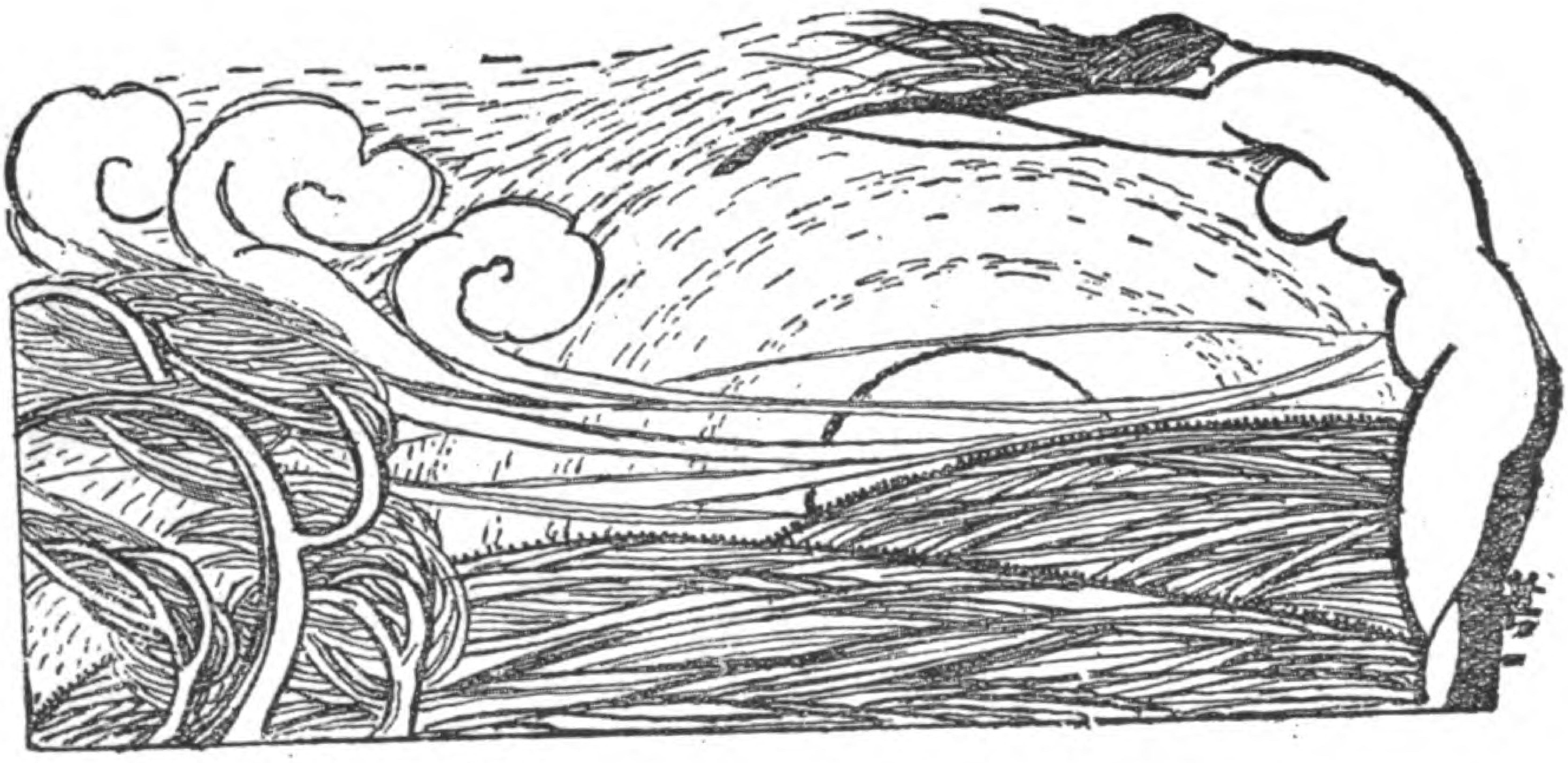
「あの和尚はあなたの御厄介になつてゐたんですか。私はあの人の病氣は肺だとばかり思つてゐました。海水浴なんかや

つてゐましたよ」

「だから困るんです。震災後はいろんなことで奔走したりして、此方の云ふことをちつとも用ひないですから」と、醫師は死者が日常の衞生に無頓着だつたことを云つた。

私は數十日間を東京の病院で過した後、自分の家へ歸つて、ある日、散歩の次手に××寺の墓地へ入つて、Kの墓を捜してその前に立つた。ふと見ると、直ぐ近くに新しい卒塔婆が立つてゐて、墓標に××嬰女と墨痕新たに記されてあつた。年齡と死んだ日によつて、それが例の赤ん坊の埋葬所であるやうに、私には思はれた。「和尚の死んだことが、この赤ん坊の夭逝の原因なのだらうか」

私はKの墓よりも、その卒塔婆に對して、冥福を祈りたい氣持になつて、暫くその方へ眼を注いでゐた。



春遠からじ（第一回）

ハッチンスン作

木村毅譯

本號から譯載する『春遠からじ』は原名イフ・ウインタア・カムスと云ひ、最近數年、英米ではパピニの『キリスト傳』以上に、熱狂的歡迎を受けた小說です。日本や獨、佛、露などの作と著しく形式を異にするため、或は最初に於て讀者諸氏を躓かせはしないかとの懸念もありますが、本號に載つた第二章の後半から愈々本筋に入り、單に面白いばかりでなく、生活問題、兩性問題等に關し、樣々な意味の深い暗示を投げてくれます。

……………………O Wind,
If Winter comes, Can Spring be far behind?

——Shelly

あゝ、風よ。
冬來なば、春遠からじ

——シエリー

第一編　メーベルの卷

第一章

時は一九一二年、所はペニイ・グリーンに於て、年齡三十四歳のマーク・セェバアを解らうとするには、厄介だが、やゝ遡つて一九〇四年彼が結婚當時まで還つて見る必要がある。併しかうすればより明瞭に彼を觀察する事が出來るであらう。もし廿數年も昔に豫備校で彼と一緒に月日を送つた連中が、今彼に會はうものなら、ある變化が生じたのに眼を見はらないでは居られない。

ハブグッドと云ふお喋りの代言人も、實にその眼を見張つた一人であつた。

『昨日、僕が一體誰に會つたと思ふ? セェバアに會つたんだよ。それ、覺えてゐるだらう、昔ヰッカモートの學校にゐたあのセェバアさ。……みんなで Puzzle-h ad（頭腦混亂）と云ふ綽名をつけてゐたあの男さ。ヰッカモートでも、又外の教師でもが何か敎へると、必ず額に八の字を寄せて「どうもそこがハッキリしませんが……」と、のろ〳〵物を言つてたじやないか。……さう、さう、それからそれと眞反對なもう一つの癖があつた。ヰッカモートでも外の教師でもが、セェバアになり、又吾々になり、ひどい懲罰を加へた後で、吾々がその事で不服でも並べ立てゐると、彼は同じやうに頭を壓さへては言つたぢやないか、「だが僕には先生の氣持が分るよ」つて。もし誰かゞ「それぢやどんな氣持だつてんだい、鈍馬奴。」とでも言はうものなら最後、奴さん、愚にも付かぬ誰言を辯じたわ、辯じたわ! お了ひにはこちらで持てあまして、「畜生奴! やりたいのならいつまでも彼の辯護をやつてろ」と言つたじやないか。さうすると彼奴め、又きまつたやうに「君たちこそへなちよこな馬鹿野郎だ、僕は彼の辯護をしてゐるのじやない。此の事件に關して見た所教師の

方が正しいからそれを言つてるのだ。彼を誹謗するのはよくない」と言つてた。……面白かつたね、あの頃は。……そして『頭腦混亂』先生は愉快な、いい奴だつた。……僕は彼に會つたんだよ。……尤も會ふのは昨日に初まつた事じやなく、折々その機會はあるんだがね、と云ふのは彼の商會と少しばかり事務の繋がりがあつて、一年に一度はそこまで出掛けて行くんだ。所かい、所はチッドボロウだよ。彼は勿論變つた。尤もそれや、君だつて變つた。何しろヴァンダイク式の髯が出來たんだからね。ハハハ！　セェバアにはそんな目立つた變化はない。僕が昨日彼と出會つて著しく氣付いた事は、その顏色が非常に沈んでゐる事だつた。何か落し物でもしたか、それとも自分の居る場所は一體どこだらうと訝つてでも居るやうな恰好だつた。……全く變だつたぜ。僕は昨日、さう云ふ不敬な冒瀆的なことを仕出來した場合、あの男がよく口にしてゐたあの恐ろしい言葉のことについて話しかけたんだ。……全くあれは魂消るやうな言葉だつたじやないか。――この際もしもあのセェバアが昔と同じに頭をおさへて、「だが僕には彼の氣持はよく解る」と言つて吳れなからうものなら、僕だつて張り合ひがない。そこで僕は昔と寸分違はぬ同じ言葉、同じ表現法を以て、彼に昔のことを思ひ出させ、それについてやたらに彼を戯つたんだ。

『その冒瀆的な人間とはどんな者だと、彼が考へてゐるかつて？　そんな事は知らんさ。彼が教師について何を辯護してゐたのか解らなかつたのと同じく、さぐる術はないよ。それ、君も知つてる通り彼はよく譯の分らん事を言つてたじやないか。凡ての人は平等だ。然るに或る者は上流階級となり、或る者は下層階級となつてゐる。そしてそれを保持する點に立法の基礎はある――と一般には言ふが、此れは拒否したつて、一向神に對する冒瀆となりやしない。既に冒瀆でないとすれば、同時に、又宗教を非議したからつて所罰せられる理由はない。國家はその何れの道に於ても手出しをする事は出來ないのだつて――繰返すまでもない。君もよく記憶してゐるだらう。ま、そんな風な調子で、僕は昨日、氣がついて見ると舊友セェバアに向つて學校時代に言つてたのと全く同じやうな冗談を言つてるのだつた。『畜生奴！　やりたいならい

つまでも彼の辯護をやつてろ。」と言ふと、あのセェバアは――待てよ、一寸注意しておくが、吾々は製作場の隅に居ながら、心はキッカモート學校の運動場の昔に還つて、みんな子供になつた譯さ。『頭腦混亂』先生、ポケットから手を拔き出して指彈きを初めた。――あの癖は君も知つてるだろ――そして「君達こそへなちよこな馬鹿野郎だ。僕は彼の辯護をしてゐるのじやない、此の事件は見た所彼の方が正しいからそれを言つてるのだ。彼を誹謗するのはよくない」と言ふ所なのさ。少くとも昔だつたらね。所が奇態な事にや、今度は「君達こそへなちよこな馬鹿野郎だ」と言はない。彼が昔口癖にさう言つてた事を思出させてやつたんだが、彼は笑つて「さう、そんな事もあつたかね。そして僕は、みんなに分つて貰へない時には腹を立てたね――」と言つてから又、「さうだ、へなちよこな馬鹿野郎だと、僕は確かに言つた。變だつたな！」と附け加へた。そして數千哩も彼方を――勿論事務所の中にゐてだよ――見るやうにして窓から外を眺めたきり、ピタリと話を止めて了つた。

『うん、つまり僕は彼の事務所で彼に會つたんだ。彼はチッドボロウでかなりな仕事をやつてゐる。派手にやつてるよ。フォチュン、イースト・アンド・セェバア商會」てんだ。……聞いた事がないつて？はゝあ、して見ると君は敎會の事には肩を入れないと見えるね、君が敎會の事に一寸でも興味を持つて居れば、讚美歌の本なり、肘突蒲團なり、又は演壇の椅子、帳、尖閣、何でも入要な時には、そのチッドボロウの「フォチュン、イースト・エンド・セェバア商會」へ買ひに行くやうになるんだ。それから學校方面の使用品も、樺の鞭から机に到るまで――そのフォチュン、イースト・エンド・セェバアで買ふのが一番だよ。彼等はつまり敎會及び學校用具の大きな供給者なのだ。「寺院學校用具供給並に意匠家」と自稱してゐる。彼等はまさしくそれなんだ。相當な敎會なり、信用ある學校なりで、それを彼等以外に依賴する者はない。彼等が開業の第一世紀に於て、敎會から最初の注文を受けた時、チッドボロウにゐたもんだから彼等は今に到るもそこを動かうとしない。彼等はそのストーンヘンヂに於て乾度日の光のやうな眩しい設計をしたんだらうと思ふ。どの道彼等はこの

大英國に於ける堂々たる商會の一つだ。そして舊友セェバアはその大株主だ。彼の前には親父がその地位を占めてゐて、代々繼續して來たのだ。フォチュンとイーストとは教會の監督だつたと思ふ。でなかつたとしても兎に角、その外觀は權威と信仰との上に立つてゐるやうに見えるさ。一人は確かに僧侶だよ。で、つまりその場所に絡はる傳統が、そこから製産さるゝ優良な品に更に權威を添へると云ふわけで、期せずして捌け口がいゝと云ふ次第さ。セェバアの奴、まるで、濡れ手に粟と云ふやうなうまい事をやつてるよ。

『結婚したかつて? 勿論結婚した。子供はないが、もう結婚して以來暫くになるだらうよ。僕はチッドボロウに行つた時、彼の所まで寄り道して一度食事の饗應に預かつた事がある。君も畫を描くなら畫材をさぐりに、彼の棲家――ペニイグリーンへ行つて見給へ。古風だが、しかし甚だ繪畫的だ。チッドボロウからざつと七哩、道程は七哩で、そして風俗、習慣、見掛けその他は七世紀も古代なんだからね。家鴨の游ぐ池あり、クリッケットの球場あり、家は悉く之をめぐりて建つと云ふまことに古風な一閑村だ。丁度ケート・グリーナウェイ(一八四六―一九〇一・畫家)の繪のやうだと僕はいつも思ふ。村がまるで居睡りをしてゐる。百哩以内に町があり、チッドボロウのやうな喧騒な都市を近くに控えてゐる所とは思へんよ。行つて見給へ、いや君は是非行かなきやならん。そして舊態依然たる風光に接したいなら、急いで行つてみる必要がある。そこだつて進歩しつゝある……寧ろ進歩させられつゝある。……つまり此の數世紀間眠を貪つてゐたのが急に目付け出されたわけだからね。チッドボロウやアルトンや、ショヴェンズベリの町々から、その苦しい勞役を逃れて來た人々がみんな此處に住居をするのだ。つまり一種の郊外庭園となつたので、教會も既に建つてゐる。場所の割には素晴らしく立派なものだが、新任牧師の言ひ草によれば將來の發展を見越したゝめなんださうだ。彼はまるで情熱の如くに發展を策しつゝある。この宗門の猛虎とも言ふべき男は、萬事、と云ふ中にも取りわけ自分を恐ろしい勢で進歩せしめてゐる。バグショウ――ブーム・バグショウと云ふ名だ。一癖ある男――と云ふものが假りに存在するとすりや彼など正しくその

一人だ。だが僕の見る所によると、あそこの住民はみんな一癖あるぜ。
『まあ、スケッチ帖でも携へて行つて一見するさ。セェバアは喜んで迎へるよ。妻君か？……なか〳〵美人だ、とてもシャンだ。可愛い女だ。併し、あの「頭腦混亂」先生なんかに向く女とは思へないね。彼が注意を惹かれる事になんか、些少の興味も持たないやうな顏をしてゐる。彼も細君の興味を持つて話すやうな種類のことには、多少あてられてゐるやうだつた。細君はあの地の住民みんなについて、又彼等が如何に珍物の寄り合ひであるかと云ふことについて、盛んなゴシップをふり撒く。何さま彼女の話には一寸妙な所があるよ。セェバアは屹度、前にもう散々その毒氣にあてられてるんだらうよ。それに彼等夫婦の間には――その、何と云ふかな、一寸藥味のきき過ぎたやうな變な所がある。しつくりと融け合はない二人の人間の間に醸されるやうな、妙に堅苦しい感じが通つてゐる。尤もこれは單に僕の推測に過ぎないかも知れない。假りに僕と女房とが互に角づき合つてゐる時、君が家に來合せて呉れたとなりや、快刀亂麻を斷つが如くに此の妖氣を一掃し去つて呉れるであらう。僕等と來たらまことに優柔不斷な夫婦だからね。だが此りや要するに、暫く前、僕が彼等夫婦に對して下した推斷だ。だが、どうもあの女はセェバアに向く女でないとの印象は消し難い。妖氣を帶びてるとでも言ふかな。「頭腦混亂」先生を良人としちや、少しく喰ひたりないだらう。まあ、彼が分り切つた事に頭を抱へて「あゝ、僕にはどうもそこがハツキリしない」と言つて細君に怒り付けてゐる圖を想像して見給へ。奇態な奴だよ。しかしいゝ奴だよ。どうだ、一杯やらないか。』

第二章

一

以上、饒舌なるハプグッドの言葉を假りて人物と場所と組織と、換言すれば生活と家庭と事業と、更に換言すれば人間

的存在の一小斷片の蜘蛛網とその錯綜とその樂しさとを紹介した次第である。生活。それは不可思議な業務だ。神秘にも此の世に生れ出でた吾等は、足場を選んで歩みつゞけ、効果があがりもせぬ事に、多少宛の空しい寄與をなし、化合と排列とを潜り、時、日、年と繼起して來る事件、錯愕、驚駭に遭遇し、そのため卷きこまれたり、沈沒したり、そして又見付け出されたりする。吾々みんな同じ樣な冒險を試みるので、泳手は各々、此の暗い、巨大な、空洞な海を、投げ捨てる事の出來ない重荷を負ひながら乘り切るのではあるが、しかしそれでも自分の個性だけは失はない。神秘なる旅よ！據るべき海圖もなく、行衞も定めぬ最終の旅——だが終極はなき旅よ！此の神秘な、恐ろしい冒險につゞくに、同じく神秘にして、目の眩みさうな結果が生れてくる。——併しいつまで經つても究極と云ふものはない。そして此の運命から最後に生じて來るものは死、消滅、——遠逝！全く人を啞然として自失せしめるやうな展開！神秘な不幸な到達であり、恐ろしい神秘な通路であり、神秘な驚くべき出發である。それを遁れる路はない。或ひはそれに入らうとし、或ひはそれを避けやうとしても、人間の意欲など何の益にも立たぬ。又それを打破し、解決すべき見込みも付かない。奇怪なる事實よ！全く神秘な、解いても無益な謎をかけられたと云ふものだ……これが人生だ！

さて話を、ベニイグリインなるマアク・セェバアとその妻メーベルとの、夫婦のことに戻すが、まあ、この神秘な奇怪な生活といふ業務の中に捲きこまれてゐる彼等を一寸見るがいい。人生が奇怪な事實であることに一種の恐懼を抱くのは、マアク・セェバアが心生活の一特長で、殊にメーベルと結婚してから、この癖が一層ひどくなつた。

二

饒舌家なるハブグッドの謂はゆる「古風な所だが禮讓的」なるベニイ・グリインは、狹い肉皿のやうな形をして、淺い盆地の中に位置してゐる。東西に開け、南北はやや急角度をして傾いてゐる。即ち北に向つて土地は輕快な上向きの傾斜

を型作り、牧場や果樹園が設けられてゐる。ペニイ・グリイン遊園地計畫の敷地として選定せられてゐるのは此處であつた。敷地の彼方にはかなりな廣場があつて、ロード・タイパアの所有地なる「北畝」もその中にあつた。タイパアは遊園地計畫者にその敷地を賣つた。彼は賣渡證書に調印した時、快活に『何だつて活用するに越したことはありませんからね。これで先祖の者もみんな地下に瞑するでせう。』と、言つた。計畫者達は、一廉の善事業を遂行した人にふさはしいやうに恭々しく應對したにはしたが、しかし内心ではペロリと舌を吐いてゐた。

ペニイ・グリインの西はシヨヴェンズベリで、チッドボロウの背後から日は昇るのであつた。北畝の高みから眺めると、ペニイ・グリインは、皿が傾斜を辷つて、その動力の止まつた所で停止したやうな、印象を與へた。が、勿論よく落付いてゐて、靜かな風を帶びてゐた。それが辷つたのはつまり周圍の世界の忙しさうな交通を避けやうがためである。シヨヴェンズベリからチッドボロウへ通ふ大街道を回避するためである。北畝の彼方遙かに遠い所にある大都市に往つたり　來たりするものを避けるためである。此の大街道はその弱々しい、引込思案の觸角を怖づ怖づと延ばして、ペニイ・グリインを認めると云ふよりも寧ろ無視した。そしてシヨヴェンズベリの向ふ一哩の所をペニイ・グリインの方角へ伸びて行つた。

所が此の素晴らしい大街道は南英國に延びて行つてゐる中に其の觸角を多くの移住地にまで擴げて行つた。そしてその土地のもつ活力に應じて、——排水したり、砂利を敷いたり、タールを塗つたり、電柱電線で以て飾り立てたりして、その活力を百倍に殖やす事も出來れば、その反對に、雜草を生ひ繁らせたり、溝を枯渇させたり、恣に土地を衰滅させて、忘却の布巾の中に包み終ふせて了ふ事も出來る材能を以つてゐるかの如くに、土地々々に向つて對應した。そして此の素晴らしい大街道は謂はゆる由緒だとか傳統だとかいふことには一顧だも拂はうとしなかつた。尤もその點になれば、ペニイ・グリインだつて同じ事だ、疾くの昔にその觸角を布巾に包まれてゐる癖してゐながら、やつぱりそんな物は氣にも掛

けなかつた。

けれども今はそこに鐵道が引けやうと云ふのである。

その中に鐵道が引けると云ふ事に關し、かう云ふ噂が立つた。此の大街道の周圍に蟠居してゐるものゝ住居は、まるで形のいゝ、手入れのよく行き屆いた指に嵌められた柘榴石の如く、不恰好で見つともないのに反し、ペニイ・グリインの住宅と來たら、萎れて見返る者もない指に輝く寶石の如くに、それを引き立たせてゐるから、そのため鐵道も引けるのだ……と。

三

饒舌のハプグッドがペニイ・グリインをケート・グリーナウェイの繪畫のやうだと言つたのは名言である。村の東端には大街道から分れ出た一支道が更に二つに分れて、クリッケットの戯場があり（但し夏期）、家鴨の泳ぐ池があり（冬の盛り場である）。又四時を通じて、幾世の世紀の遺物があり、壞れた腰掛に取卷かれてゐる楡の木立があり、壞れた柵はめぐらされてゐるが疾くの昔に土に埋つて了つた井戸があるグリインの村を、めぐつてゐる。南端には崩れた灰色の壁に圍まれた村有の獸欄があつて、今では村の若者同志が仲間を抑込めたり、『パウンド一號』と稱する遊戯をする事に使用されてゐる。

南端はタイパアの武器庫と眞向ひにいつもワークと稱する一族が住居し、經營してゐる鍛冶場がある。此の鍛冶場はもとグリインに於けるたつた一軒の人間の住居であつた、と云つて惡ければ、個人に依つて即ちたつた一人によつて經營されてゐる仕事場であつた。こゝは代々ワーク族によつて勝手に繼承されて來はしたが、言ひ傳へによると、彼等はこゝに住居すべき權利はないのだと云ふ事である。しかし數世紀の間（少くともその反證を擧げる者のない限り）こゝは彼等に

依つて占められ、而もいつでも只ワークが一人しか住んでゐなかつた。そして事が起るまで誰も氣付く者のない不思議な方法で、父のワークが死ぬると、いつの間にか子のワークが來て、仕事場を繼承してゐる。それ以前に此處を繼承した代々の祖先も皆此の通りであつたらしい、村では又ワークが此處に住む權利がないと云ふ問題にも觸れて、かう云ふことが言はれてゐる。即ち誰も此の鍛冶場がどうしてここに出來るやうになつたのかと知つた者が一人もないがこの鍛冶場はいつかは取拂はねばならぬのだと。そして此の話に對しては代々のワークが衷心から賛成して決して異議を唱へた事がない。ワークが何故ここに住まうやうになつたかは、自らも他の村の人と同じやうに少しも知らないのである。併しいつか立退かねばならぬ事だけは明確に承知してゐる。夏の夕方になると村の重立つた連中がタイバア武器庫前の廣場に集まつてこの問題を討議する。その時には代々のワークが必ず熱心に街道の方を見つめたり、又は時計を取り出して、彼等を立退かすべき力が前方に現はれて來た、併しそれは聊か支拂期間を過ぎ去つてゐるとでも云ふかの如くに眺めたりするのであつた。

現在のワークは二人で、老ワーク、小ワークと呼ばれてゐた。小ワークの方でも六十歳であつた。老ワークも小ワークも死んで了つた曉、これを繼承すべきもつと若いワークが何處から來るのであるかは誰も知つた者がない。又知らうとして氣も揉まない。恰もこの次の法皇がどこから來るか誰も知らないが、併し來ることは必ず來るのと同じく、世繼ぎのワークも亦現れるのである。老ワークは鍛治仕事は既に止め、一日椅子に腰かけて小ワークを見守つてゐる。日が暮れると老ワークも小ワークも村を過ぎつて獸欄の所まで散歩に出掛けるのが例になづてゐる。併し決して肩を並べてではなく、老ワークが先に立ち、小ワークは直ぐその後へついて行く。二人とも杖を持ち、同し角度と歩きぶりとをして道を行く。獸欄の所へ到達すると、その壊れた灰色の壁にじつと眼を注いで、鍛冶場を立ち退かすべき力がそこにあるか、それともその力は確かにそこにないかを見究めでもするかのやうに、眺め入つてゐる。それから來た時と同じく一人づつ前後して

後退りをし、タイバア武器庫の前のベンチの空席に腰をおろす。

四

ペニイ・グリインが大好きだつたマアク・セエバアは、村の人間なり、組織なりに對し、自分の取る態度と、妻の表明する態度との間に、幾分なりとも喰ひ違ひのなかつた事は殆んど稀なのを、時折甚だ不思議だと考へてみる事があつた。併しメーベルは實を言ふと、此のペニイ・グリインを大して好んでゐないのであつた。二人のワーク老人はよく彼等のために役立つて呉れた。メーベルはある時ワークを非常に繪畫的だと考へ、結婚して間もない頃であつたが、寫眞に撮つてアルバムに收めるため、自分の家に二人を招待した。

二人の老人は、一人宛前後に並んで、やつて來た。が彼女は撮影はしなかつた。と言ふのは老人が丁度來着いた所へ、セエバアが歸り合せて、老人が廚房で茶を飲むため小間使に案内されてゐるのに、吃驚したからであつた。だがメーベルに言はせれば、良人や自分と一緒に、庭で彼等が茶を喫する位が、どうして不可ないのか？

メーベルはセエバアの所謂「ふくれ面」をした。そしてふくれ切つた所で言つた。『では誰かが勝手に訊ねて來た場合はどうします？』

『なに彼等が尋ねて來たのだつて？』と、セエバアは問ひ返した。

メーベルは、茶を運んで來た序に、ワーク老人達はどうしたものであらうかと吩咐けを待つてゐる女中に向つて、非常に落付き拂つた靜かな聲で或る命令を與へた。

女中はそれを聞くと出て行つた。セエバアは附加へて言つた。『追ひ歸して了ふんだらうね。ほんとに僕は膽を潰したよ。』

半時間の後、二人の老人は臺所に招じ入れられて、茶を御馳走されると、再び女中に依つて家からつれ出され、村へ歸されたが、それは丁度年老ひた家鴨が草の中へ追ひこまれてゐるやうであつた。

セエバアは茶碗をおいて、庭から出て行く彼等を眺めながら、笑つて言つた『なんて馬鹿なこッたい。僕がこんなにも氣を配つてゐる家の屋根の下で、彼等に茶を飲ますなんて。』

メーベルは女中を呼ぶために、小さな銀のベルをチリリと鳴らして、それを聞かない風をした。

五

ペニイ・グリインの家々は皆、ケートグリイ・ナウェイの繪畫のやうな風趣を帶びてゐたが、此れは村自體が既にその趣きを持つてゐたからであつた。傾いた皿形の上部に位する所には大きな家々が立ち並び、下部に位する所は多く土着住民の小屋で占められてゐた。そこには又五軒の店もあつた。その一軒は肉屋で、毎週火曜と金曜とに、チットボロウから一人の屠牛者が荷馬の尻をひッぱたきながらやつて來ては店を開いて、半週間分の肉を提供するのであつた。それから雜貨店と呉服店とがあつて恰も大ロンドンの繁華の如く、中で種々様々なものが商はれてはゐたが、只一つの店に一人の帳場しかゐなくて、それが何事をも仕切つてゐる所がロンドンとは違つてゐた。雜貨店へ入ると片手では一ポンドの茶を手渡され、片手では一足の長靴を手渡されると云ふ風で、その便利なことは到底オックスフォード街などで見られるものではない。呉服店と來たら此の方針を更に進歩させたもので、着物を賣り、切手を賣り、リノリュウム、絨氈、壁紙、ペンや紙まで賣つて居るばかりか、葬式を出し、墓まで建てて呉れる。尤もこんな禮々しい儀式はせいぜい五年に一度位しか執行されることはないが――生憎とペニイ・グリインの人間は皆長壽である。――併し、その用意はいつでも出來てゐて、どうかして葬式を出したいものだと待ち望んでゐるのである。店の納戸には呉服店主人ピノック氏がゐて、その前には廿

二年間（彼の言草によると）持ちこして來た棺桶があつた。これはピノック氏が拔目のない商賣振りの中で、たつた一つの見込違ひを代表するものであつた。二十二年の昔老ワークは死にかかつたばかりでなく、實際死んだも同樣になつた事があつた。ピノック氏は商品補充のためチッドボロウへ出掛け、葬儀屋へ寄つて老ワークにぴッたりと合ふ位な大きさの棺を買つた。その時それを買つたのは、その日雇つた大八車の上に乘つけて歸ることが出來て、馬車賃の儉約が出來るからであつた。彼はそれを運んで歸つた。そしてペニイ・グリインに入つて最初に出會つた人間は、人もあらうに老ワークその人であつた。不思議なことに彼は重病から甦つて、頑固にも階段を降り、戸口へ出て、日なたぼッこをしてゐるのであつた。此の時のピノック氏の驚きやうと來たら、まるでその棺が危く彼自身の役に立つ所であつた。尤も寸法が合はないから、到底彼自身の役に立ちつこはないし、その外にも一人として、その棺にはまりさうな人間はゐないのであつた。死ぬことは老ワークより脊の高い人も死んだ。又老ワークより脊の低くてよく肥つてゐる人も死んだ。だが棺は使へないままで殘つてゐた。幸ひ橫倒しにすれば棚として使へるので、棺は本來の務めは果さずに、戸のない戸棚として使用されてゐた。併しそれは恐ろしく高價についた戸棚であるには違ひない。そしてピノック氏の室の中に、せつかちな、氣まぐれな投機の馬鹿々々しさを戒しめる紀念碑の如くに立つてゐるのであつた。

六

ペニイ・グリインも又ローマと同じく、決して一日にしてなつたものではない。但しペニイ・グリイン庭園住宅の家々には、熱心なる計畫者と、熱心なる契約者（彼等はお互に競爭し合つて）と、それから待ち憧れてゐる借家人とが、早く移り住むことが出來るやうにと思つて、殆んど一日に成ると言つてもいゝ位な速度で進行させつつあつた。ペニイ・グリインは又一日間で建つたのでもなかつた。ペニイ・グリインに數ある家と小屋とは、多種多樣な建築樣式の下に建てられて

ゐた。それは初めからそこに住むつもりで、充分に廣く、家具もよく調へ、日當りもよくし、床も丈夫に張つた家を望む人々に依つて建てられたばかりでなく、此の地に鐵道が引けて騒がしくなる事などは豫想もせず、自分達の子供の子供の又子供のためにも役立つやうにと念じて工事する人に依つても立てられた。セェバアの家は灰色の石造で、戸口の上に一六六七年の文字が刻んであつた。

『もう殆んど二百五十年にもなりますのね。』と、ある時メーベルが言つた事がある。

『そして僕は賭けてもいゝがね。』、とセェバアは答へた。『今、お前がやつて呉れてるよりも立派に、この家が監理された事は、一度もなかつたらうよ。メーベル。』

此の言葉は決して不當でなかつた。メーベルはいろんな點に於て模範的婦人であり特に模範的な妻であつた。家の中は塵も留めず淸められ、非の打ち所なく治められてゐた。家事用の室は別にして、一階に四つの室があつた。一つは朝の室で、夫婦は大抵そこに住んでゐた。一つは食堂、一つは客間。室にはみな掛金のつけいゝやうに恐ろしい重い樫の戸が取りつけてあつた。客間は二段高く、食堂は一段低く、そして朝の室と第四室とは同じ平面にあつた。どの室も下壁を低くして澤山の窓が取つてあつた。又どの室も、大變靜かな場所へ――何となく此の邊にあらうとは豫期出來ないやうな室へ、たとへ室があるとしてもかうした形のものであらうとは考へられないやうな室へ導くかのやうに、通路は設へてあつた。セェバアは此等の室々へ入つて行く度に、快い驚きを感じなかつた事はない。その上それは、建築の巧妙に出來てゐる加減か、それともメーベルの手際の傑れてゐるためか、感心にも夏は凉しいやうに、冬は温かいやうに用意が出來てゐた。

たつた一つセェバアが此の家の中で好まなかつたのは、一階にある第四番の居間であつた。それは彼自身の居間になつてゐて、メーベルが良人の特殊な用事と嗜好とに適するやうにとて、設備も裝飾もしたものであつた。しかし彼女はそれ

を良人の den（讀書室と云ふ意味もあるが主として洞穴の事を云ふ）だと呼んだ。セェバアは特に男の住む室がさう云ふ言葉で呼ばれるのを呪ひ、又嫌つた。彼はその言葉の中には男のだらしなさと云ふ意味も含まれてゐるもののやうな氣がしてならなかつた。彼はきちんと整理のついたのが好きで、だらしないのが大嫌ひであつた。彼は又此の言葉が、彼の『合宿所的觀念』と名付けてゐる風俗や習慣を意味してゐるやうに思つた。合宿所的觀念とは、卽ち、男と云ふものはだらしのない、快適な室を所有してゐなければならぬ。男はそこに入りこんで恣に煙草の煙の中に浸つたり、「周圍に自分のものを撒け散らし」たり、「身邊にパイプや好きな繪を置いた」り「古びた獵用のジャケツやスリッパ」を着用したりする事を意味するのだが、彼は此等の言葉や觀念が含蓄する凡ての事を呪ひ、又嫌ふた。隨つて彼は古びた獵用のジャケツを持たなかつた。もし持つてゐたら庭師にでも呉れてやつたであらう。彼は又スリッパを履くことを嫌つた。履いた事だになかつた 彼は浴みをした後でも長靴を履いて居り、正餐に短靴と履き換へるまで脫がないのが習慣であつた。なかんづく彼は、洞穴と云ふ言葉によつて常に蠱ひ出される幻想を 呪ひ又嫌つた。それは一人の女房の扉を開いてゐる代表的洞穴の幻想であり、いやに氣取つた聲でこれが洞穴に蟠まつてゐるジョオジでございい』などと言つてゐる女房の幻想であり、合宿所の婦人達がその女房の肩越しにのぞきながら、古い獵用のジャケツを着、スリッパを履き、女達を眺めて齒をむいてゐる歸化人を、からかふやうに笑つてゐる所の幻想であつた。セェバアに取つては、此れは實に言ひやうのない、恐るべき幻想であつた。

メーベルは少くとも彼のこの氣持を察知することが出來なかつた。彼女は全く常識と一般的習慣との上に立つてゐる女であつた。マアク（セェバア）はそれを容してゐた、それは云ふにも足らぬつまらない、滑稽な事に過ぎなかつた。が――その時には氣付かず、後に明かになつて來た事だが――これは彼が結局メーベルに自分の態度を了解させる事が出來なかつたのだと云ふ事實となつて現はれて深刻な意義を帶びて來るやうになつた。

此の洞穴の事件と、もう一つ召使に關する事件とは、結婚早々の時に於て、二人の間に起つて來た問題であつた。ロン

ドンから蜜月の旅の歸りがけ、マアクは急電でショウヴェンズベリなる父の病床へ呼ばれた。メーベルだけが家に歸つた。一週間經つと幸ひに父の病氣は恢復したので彼は妻の許へ歸つて來た。メーベルは家の整理に急がしかつた。彼女はたのしい誇りと幸福とを以て、家中、良人をひつぱり廻して見せた。セェパアも同じ幸福に浸りながら彼女と手を組んで歩いた。第四の室に來た時にメーベルは愉快げに言つた。『そしてね、これがあなたの洞穴ですよ。』

マアクはわざと呻いて見せた。『あゝ、南無三。洞穴などと言つちやいけない。』

『だつて洞穴じやありませんか。どうしていけないの。』

『僕は絶對的にさう云ふ言葉は排斥したい。』と、彼はチラと眼を光らせた。『そしてこんな厭な、古いスリッパを誰が此處へ持つて來たんだい。』

『これは私の父が使つたのですよ。特にあなたが此の室でお履きなさるやうにと思つて、私が持つて來たんですわ。あなたはこんなスリッパを些ともお履きなさいませんのね。』

彼は、彼女の重い父が履きへらしたスリッパの上を眺めた。彼は彼女の父があんまり好きでなかつた。

『うむ、僕は履かないんだ。』と、彼は言つた。そして幽鬱に胸中で思つた。『餘計なお世話だ。』と。

『だけどあなた、どうしてそんなに洞穴と云ふ言葉を排斥なさいますの。』

彼は笑ひながら説明した。終りにかう言つた。『洞穴と言はれるとまるで、のらくらな遊惰者の室のやうな氣がするからね。のらくら者の室は考へたばかりでも氣觸が惡くなる。』

『ではつまり、あのお室をのらくら者の室と言ふのがお氣に召さないんですのね。ね。』

彼女は全くまじめであつた。そして多少不機嫌だつた。『もう私申しませんわ。だけれど、どうしてさうなんだか、私、理由が分りません。そんな奇妙なお考へを伺ふのは初めてですわ。』

彼は、自分の奇妙な考へに對して彼女の執つた態度に、漠然たりながら一寸驚かされた。『さあ、それから、二階を見やうじやないか。』

『ええ、參りませう。』

彼が室を出ると、彼女は扉を閉ぢて言つた。

『ね、これがあなたの洞穴よ。』

恰かもそれは彼から何一言も聞かなかつたものゝ如くに！　仄かな、一時的の不愉快が彼を打つた。

（七）

二人が完全な歡びと幸福とを以て、二階から降りて來た時に、召使の事件がもち上つた。メーベルは輕快に彼に先立つて梯子段をおりて、良人が降りて來ると微笑の顔を彼の方へ向けた。『愉快だ。吾々には屹度幸福が來るよ。』と言つて、彼は彼女に接吻した。

『今度は臺所を御覽になりません？　そりや素敵に綺麗なんですよ。』二人は相より添ふて行つた。

臺所の戸口に來ると、彼女は立止つて、不思議な程小聲で、召使に對する長たらしい説明を囁いた。『二人居るんですけれども、屹度どちらも綺麗な娘になりますよ。姉妹なんです。あなた御存じ？　二人とも一つ所に奉公したいんですつて。そしてね、二人共村の若者の中にいい人を持つて居るんですつてよ、家には兄弟みんなで十一人も居るんですつて。大變ですわね。』

彼女の聲は次第々々に低くなつた。それは恰も、此の二人の女中は彼女が網を打つて捉えて、臺所へつれて來た世にも珍らしい展覽物で、扉を開いてのぞくのは何だか勿體ない事ででもあるかの如くに、彼女は一種の興奮を抑えて慄へてゐ

るやうに、マアクには思へた。彼は、彼女の聲が充分に聞きとれなかつたので、頭をかがめた。臺所の戸口の廊下は仄暗かつた。その仄暗さと、ひそ〳〵とした彼女の囁きと、彼女の興奮とが、彼に、妻と二人で或る神秘な謀反でも企ててゐるやうな感じを味はせた。この家と女中偵察との醸し出す全體の雰圍氣の、初め娛しく思へてゐたのが、次第に不思議な陰謀的な不快さと變つて來た。

『この料理番はチッドボロウの料理學校に入つて、全科を卒業したんです。』

『へえ、そんな代物かい。』

『しッ！』

何がしッ！だ。なんて譯の分らない事なんだらう。

（八）

メーベルは臺所の戸を開いた。『臺所がどんなに綺麗になつたか、旦那樣が見に入らしつてよ。』

黑い着物と、硬々に糊のついたエプロンと、帽子とリボンとをつけた二人の女中は、無作法に立上り、無器用なお辭儀をした。一人は脊が非常に高く、一人はどちらかと云ふと小柄であつた。情人があるにしては、高い方はあまりに嚴つく、小さい方は又あまりに陰鬱だと思つた。メーベルは、良人には世に又とあるまじき模範品を見せ、模範品には自分の良人を紹介するかの如くに、女中達からマアクへ、又マアクから女中達へと眼をうつした。そしてピンで止めた、生氣のない全く無人格な標本でも指示してゐるやうな調子で、彼女は言つた。『二人は姉妹で、ジンクスと云ふ名前なんです。』

マアクはその標本を吟味しながら、自分が道化者にでもされてゐるやうな感じに襲はれてゐた。女中達の名前はよくその人柄を現はしてゐたので、彼は初めていやな感じから救はれた。『え、ジンクスだつて？ では、のッ坊のジンクスに、

ちびのジンクスだね。え。』と言つて彼は笑つた。（のッ坊のジンクス（High Jinks）と云ふのは底ぬけ騒ぎと云ふ意味なので、早速それを應用して女中のあだ名としたのである）この洒落は彼には非常に滑稽なものに思へた。のッ坊のジンクスとちびのジンクスは、吹き出して笑つたが、ふしぎにもその時一人からはあの嚴つさが、もう一人からはあの幽欝な色が消えて了つた。

すると急にメーベルは、彼女の標本とそれを入れた籠（女中と臺所）とに興味を失つたやうだつた。彼女はマアクを臺所から急き立ててつれ出して、庭へおりた。そして庭を造り直すことに關する彼の計畫には、碌に耳も傾けないで、うか／＼と返事をしてゐた。

突然彼女は言つた。『ねえ、あなた。臺所であんな事を仰有つては、いけませんわ。』

彼は心の中で、厩と小舎との隅へ、間に合はせでもいいラケット・コートが作れるかどうかと考へてゐる所であつた。

『え、臺所でどうしたつて。』

『のッ坊のジンクスにちびのジンクスだつて仰有つたあの事よ。』

『メーベル。たしかにあそこの隅には、立派なスカッシュ・ラケットの設備をする事が出來るよ。砂利は皆埋まつて滑かになつて了つた。』

『あなたは私の申上げる事は聞いて居らつしやいませんのね。』

彼は兩手を彼女の身體の周圍に廻はして、嘻々として抱きしめた。『失敬、失敬。お孃さん。何だつて？　のッ坊のジンクスとちびのジンクスとがどうとか言つたな。アハヽ。當意即妙の綽名だらう。さうじやないかね。』

『即妙じやないわ。私、些ともさう思はないわ。』

彼女の言葉の調子に、マアクは思はず手を解いて、しげ／＼と彼女を見詰めた。『思はないつて？　本當に？』

『思ひませんわ。即妙じやないわ。』

ある本能が今笑つてはならないと云ふ事を彼に豫覺せしめたが、併し彼はどうしても笑を抑へる事が出來なかつた。この綽名は彼には非常に滑稽なものに思へた。『だがうまい名前だよ。ね、さうじやないか。のッ坊のジンクスとはうまい表現だらう。僕の言ふ意味は分るね。ちびのジンクスとは離して考へてさ。』そして彼は再び笑つた。

メーベルは唇を嚙んだ。『私、いやですわ。レベカには些とも、のッ坊のジンクスらしい底抜け騒ぎのやうな所はありませんわ。』

彼は笑を爆發させた。『あつちや大變だ、ないからこそ其の綽名でいいんじやないか。』

『そこが腑に落ちませんわ。』

『少しも腑に落ちない事はないじやないか。この事件はお前がます〱滑稽に陷らしてる譯なんだよ。のッ坊のジンクスにちびのジンクスよ！ 僕は二人をさう呼ぶよ。』

『マアク。』彼女は嚴格に言つて、又嚴格に言葉を切つた。『私ほんとに、あなたがそんな事を仰有らないやうに、心からお願ひしますわ。』

彼は吃驚して見つめた。それが取るにも足らぬ下らない事であるのを說明しやうとした。しかし彼女はそれを了解しやうとしなかつた。『私、わかりませんわ。』

この時再び、漠然とした一時的の不快が彼を打つた。

（九）

マアク・セェバアはその夜眠れなかつた。眼が醒めたまゝで横になつてゐた。晝間の例のつまらない事件がすぐに思ひ出されて來た。のッ坊のジンクスとちびのジンクスとは滑稽だ。これを打消すことは出來ない。抗いやうもない滑稽だ。

勿論つまらない事ではある。しかし彼に取つては思はず笑ひがこみ上げて來るやうな種類のつまらない事である。それのに彼女にはそれが解らない、絕對にわからない。が、もし、つまらぬ小さな事だとは言へ、彼の胸には觸れて來ることを、彼女は少しも解らうと努めやうとしないとしたら……？　彼は額に皺を寄せた。饒舌のハプグッドが、『それ、覺えてゐるだらう、彼はきまつて額に皺を寄せたじやないか。』と言つた通りに。

　メーベルの望みで、寢る時でも部屋の中には仄かに灯がつけてあつた。彼は身體をもたげて、自分の傍らに愛らしく眠つてゐる妻を見た。彼は考へた。『こんな事は問題にするのを止めやう。彼女の立場になつて考へれば同じ不平があらう。あの洞穴の一件がさうだ。彼女は洞穴と云ふ言葉を好み、僕はそれを絕對に嫌ふ。のッ坊のジンクスとちびのジンクスが、僕におかしいのに、彼女はおかしくないと云ふのも、つまりはそれと同じ事だ。』

　彼は、妻の寢顏の上に亂れかゝつてゐる一房の髮を、指でやさしく拂つてやつた。……メーベルよ！……いとしい妻よ……輕い衾の下で彼女の胸は何と云ふやさしく息づいてゐる事であらう！……彼女の顏は何と云ふ靜穩なことであらう。彼女は何と云ふ安らかに、平和に、そこへ橫はつてゐる事であらう。彼は思ふた。『三週間前までは彼女は自分の室でひとり淋しく眠つてゐたのだ。それが今は僕のものになるため、僕の所へ來てゐるのだ。妻よ！あらゆる事、凡ゆる人と絕つて、そして僕の胸へ來てくれ。』

　言ひやうのないやさしい思ひで彼の心は一ぱいになつた。彼は急に、この女と二人で乘り出した大きな冒險の事を痛切に胸に感じて來た。彼等はもと二つの生命であつたのだ。それが今は一つの生命になつたのだ。そして各自が別々に送つて來た生活は全然あらためて、一緒に、未知の新らしき海へ、新らしき船を漕ぎ出さうと云ふのだ。前途には何が二人を待つてゐるであらう。

　彼女は身動きした。

彼は續けて考へた。單一の生命！　二つの生命から作り出された一つの生命！　二つの性質から生れて來た一つの性質！　神秘にして且つ驚くべきMetamorphosis（變化）。彼女は彼女の性質を彼の所へ持つて來、彼は彼の性質を彼女の所へ持つて行つたのだ。彼等は相混交して一つの性質となるべきなのだ。……しかし此の時、不似合にも又不條理にも、彼の心は『のッ坊のジンクスとちびのジンクス』と云ふ奇怪な言葉を拾ひ上げて、それを彼に思ひ出させた。ひとしきり笑ひが抑へやうもない程彼を擽ぐつた。

彼女は眠さうにきいた『マアク。あなた笑つて居らつしやるの？　何を笑つて居らつしやるの？』

彼は彼女の肩を撫でて言つた『何でもない事だよ。』

これでも一つの性質か？

第三章

一

これでも一つの性質か？　だが結婚生活の第五年目に、セエバアは、妻が自分と寢床を並べて眠つてゐる時に、彼女、及び、彼女と一緒に乘り出した結婚と云ふ痛切な、大きな冒險について、考察する事が最早不可能になつた。二人は別々の室を占めるやうになつた。結婚生活の第五年目に麻疹がペニイ・グリインで流行した。マメールはそれに罹つた。二人の寢室は自然彼女の病室と代つた。セエバアは別室で寢ることにした。協定は平和に行はれ、この事件では二人の間に何も云ふ事はなかつた。彼女は恢復した。それでも二人は互に別室を占めてゐる事をやめなかつた。尤も此れは世間にも有り勝ちの事である。

この關係の持續中、たつた一つ語つておかなければならない事が、メーベル全快後の最初の土曜の午後に起つた。彼は

土曜日にはチッドボロウの事務所へ出勤しなかつた。そして妻の病氣中考へてゐた考案、即ち二人の寢室を同時に書齋にも兼ねて使はうとする考へを實現しやうと思つた。彼は『洞穴』を嫌惡するのをどうしても抑へる事が出來なかつた。彼はその室に居ると不愉快でならなかつた。

此の土曜日の晝食に彼は言つた。『今日、午後、僕が何を計畫してゐると思ふ。僕はね、あの寢室へ本を全部を持ちこむ積りなんだ。』

彼はこのため洞穴問題が再燃して來はすまいかと、多少懸念したが、メーベルはたゞ『では、女中達にお手傳ひさせなさると、ようございますわ。』と、言つた丈けであつた。

『さうだ、よからう。』

『では私から命じませうか。』

『そうしてくれ。』

その午後書物は動かされた。洞穴はそれを吐き出し、寢室はそれを吞んだ。のッ坊のジンクスとちびのジンクスは、主人の前に絶えず愛嬌笑ひを見せながら、階段を昇り降りすることを、寧ろ面白がつてゐた。書架の運搬は一仕事であつた。それは幅の狹いのや、背の高いのや、みんなで四つあつた。最初のに手を掛けた時セエバアは命じた。『そこを縱にしたまゝで運ばう。僕がもち上げるから、お前等二人は上を掴むんだよ。さうすれば僕が下を持つ。』

この手筈で、彼等は階段の上で踠いた。のッ坊のジンクスとちびのジンクスとは後によろめいた。愛嬌笑ひはここで擴大されて、喘ぎ喘ぎしながらも、聲を立てて笑ふ笑ひと化して了つた。その半ばで異樣の音がした。

『どうしたんだい、その音は?』セエバアは汗を流して、喘ぎながら言つた。

『私の着物の裏が音を立てたのでございます。』とのッ坊のジンクスが答へた。

『何だ。（姉妹はひきつるやうに笑つた）さあ、ちび君、お前がしつかりしなくちやいけないんだ。なぜ、そんな變な格好に身體を曲げてゐる？』

苦しさうな笑ひ。

メーベルが下の室に現はれた。『それをお擡げよ、レベカ。サラももたげるんですよ。そんなに屈んでて、どうして動くことが出來るもんですか。』

二人は本箱を腰のあたりまでもたげたので、今度は動くことが出來るやうになつた。

『そら、しつかり。』と、セエバアは言つた。

取り上げられた本函の兩端に、何やら一種の感じがあつた。

二

セエバアは此の室が好きであつた。同じやうに仕切つた壁に三つの窓が付いてゐて、庭が見晴らせた。その間の空間、つまり端の窓と端の壁との間の二つの空間へ、一所に一組づつの書架を据えた。

メーベルは此の移動に少しの興味をも示さなかつた。又茶の時にこれに就いて何一つ話出す事もしなかつた。夕方、彼女が正餐のための衣裳換えに行く途中、戸口を通り過ぎるのを聞いて、彼は呼び入れた。

彼はシャツの袖をまくり上げて本を整理してゐた。『どうだ、變なことはないか。』

彼女は本と室とを見た。『結構ですわ。だけれどあなたのお室は別に階段の下にあるのに、この寢室へあなたの物を運んで居らつしやるのは、何だか變ですわ。』

『あゝ、だが僕はあの室が嫌ひなんだよ。あんな所へは入りたくもない。』

『あなたが嫌つてらつしやることはよく存じてゐます。』彼女はプンとして、出て行つた。

三

しかし此所の移動は洞穴を全く放棄すると云ふことを意味しないで、彼女の言葉にある『この寢室へあなたの物を運ぶ』と云ふことを意味した。つまり夫婦が各別室を占めると云ふ事が前から彼女の意識にははつきりと存してゐたわけである。

しかし二人ともその點に詳しく註解はつけなかつた。旅をする場合、境界標は、實際そこを通り過ぎる時よりも、寧ろ通りすぎて了つてから、より多く屡々、注意にのぼるものである。それは大抵過去詞を取る。『ここに境界標があるよ』と云ふことは稀で、『あそこに境界標があつたつけ』と云ふ方が普通だ。

四

この本箱はセエバア自らの設計であつた。彼は非常に自分の藏書を愛好し、その配列についてもいろんな事を考へてゐた。どの本箱も最低の棚が床から三呎は離れてゐた。彼は見る事の出來ない所へ本を置くことを嫌つた、又棚は掩ひがなく、ガラス戸さへも嵌めてなかつた。彼は本を取り出す際、そんなものがあつて、更らぬ手間を掛けねばならないのを嫌つた。彼は本を、丁度手の屆く位な高さの所へ、邪魔物なしに置いとくのが好きであつた。彼は本が、中に含蓄されてゐる意味のため好きなのではなく、本そのものとして直接好きなのであつた。彼は話し下手で、自分の考へを纏めるのが容易でなかつたから、この間の消息をはつきり傳へる事が出來なかつた。彼は時折、物を書きつけておく手帖へ、ある時から書いた事があつた。『人がその友人の手の感じを知り、又好むのと同じやうに、私は書籍の感じを好み、又書籍の感じを知

こてゐる。人が一語をも發することなく、たゞ友達の顔を眺めて娯しむ事が出來るのと同じく、私は書物を開かずして、しかもそれを眺め、それを讀む事が出來る。私は書架にある書物を眺める時、――さうだ、彼等に對して私が感じてゐるのと同じ感じを彼等も亦私に向つて抱いてゐる事を、感ずる。』彼は又かうも附け加へた。この方が恐らく明かにその氣持を説明してゐる。『いつか誰かが來て私の本の一册を抽き出して、それを逆しまのまゝ元へ押し入れたとする。それを見る事は私に取つて恰も、室へ入るといきなり、自分の兄弟が逆立のまゝ壁へ縛りつけられてゐるのを見出したのと同じ、グロテスクな苦痛な感じを與へるであらうと思ふ。私は急いでその兄弟を釋放しに飛び掛るとしても、少くともそれは逆さまの本を正しく向け換へるのほど敏速には行かないであらう。』

彼が特に購求した最初の本は――家兎を買ふやうにではなく犬を買ふかの如くに――十七歳の時バイロンの、非常に厚いそして密字で組んである通俗版の全集を買つたのが初めてであつた。それを買つたのは一面から云ふと、學校の終末學期に『ドン・ジュアン』の話を聞いたためでもあるが、他面又詩を讀むと云ふ事は何だか大變えらい事のやうな氣がしたからでもあつだ。彼はそれを内々でこつそりと讀んだ。と云ふのは、彼がバイロン詩集を買ひたいと云ふ意嚮を母に話すと、母は、あんな詩人の作は讀んではならない、母の幼時その父はバイロン詩集を火箸で挾み上げて、庭で燒き捨てた事があると、言つてきかせてくれた。これに興味を煽られて、彼はバイロンを買はうと決心したのである。

彼はいつもの讀書の際の習慣に隨ひ、几帳面に讀み初めた――つまり初めから順を追ふて辿つた。『若き淑女の死を悼みて』（パーカア將軍の令孃と脚註がついてゐた）『Eに與ふ』『Dに與ふ』と云ふ工合に。こんな風で全體には七百八十頁あり、『ドン・チャン』は終りに近い五百頁代の所にあつた。

彼は刻苦して三十六頁讀み上げた時、詩を讀むのは仲々骨だと思つた。そこで今度は途中を飛ばして五百三十三頁の『ドン・ジュアン』の所を開いた。その韻を踏んである事が彼を驚かした。詩とは"True it is"（そはまこと）"Jew is"（そは猶太人）と云ふ風に韻を踏むものだと云ふ觀念が彼には無かつた。彼は頁をめくつて、節を數へるとまさに六十。各節の行數を數へると全體で二千百八十……ホウウウー　最初の三十六頁だけで躓いた彼には、七百八十

頁と云へば實に無限の長さであつた。彼はドン・ジュアン一篇を頻りに評判とならせ、彼の祖父をしてその詩集を火箸で挾み出して庭で燒かしめるに到つたやうな句を漁り初めた。が遂に見出すことが出來なかつた。彼はこんなつまらない物は擲つた。

　しかし此のつまらない物を擲たうとした時、彼の目は偶然にも、ある二行の句の上に留つた。それは肉體に加へられた打擊の如く、彼に異常な興奮を覺えさした。

　サッフォの戀と歌に燃えし
　希臘の島よ、希臘の島。

　彼は思はず息を呑んだ。それは何と云ふ異常さだ。それは何と云ふ惡魔だ！　此の地上のものとも覺えぬ靈妙な輝きを帶びた美が眼の前に現はれ出たやうな氣がした。深碧の海にかこまれた白と綠との島々……そして音樂。遠くに聞ゆる仄かなる喇叭の調べ……驚き！　彼は讀み續けた。『デロス立ち、フェボス躍る所。黄金なす常夏は彼等に照りぬ。』勁烈、――いや、勁烈とも言つて了へない。だが、やつぱり勁烈で、目の眩むやうな、心臟の絞められるやうな物を含んでゐる。更に調べも異り、描き出す幻影も違へど、灰色に塗れた次の如き一句もあつた。

　山々はマラソンを見、
　マラソンは海を眺む。

　音樂よ！　喇叭の音の、微けく、微けく、又微けくなりて、遂に消えたるが如き趣き！山々の上に高く、海の彼方に遠く、竪琴の音の響き行くがやうである。

　彼は言つた。『あゝ、僕は混亂して了つた。』――そしてバイロン全集を投げ出したのであつた。



室内花卉

木下利玄

或人より花をおくられたるに

牡丹

牡丹の花にむすべる玉は今朝ほどのきり雨の露か臈たきかもよ

瓶の牡丹うす紅を匂ふ二花のおのづからもてるけぢめを愛す

艶々の白と紅との牡丹花受け朝鮮の壺のふくらみゆたか

夜の室に牡丹が放つ香をつよみ壺次ぎの間に遠ざけにけり

芍薬

花を下に嬬がもてこし茎ながの白芍薬に蟻つきてをり

瓶に挿す白芍薬に蟻つけり季節の花のこの鮮らしさ

瓶に挿す芍薬の花茎長にかたむきかゝりて此方に薫る

瓶にざす白芍薬の花二茎あまりうつくし室内に來て

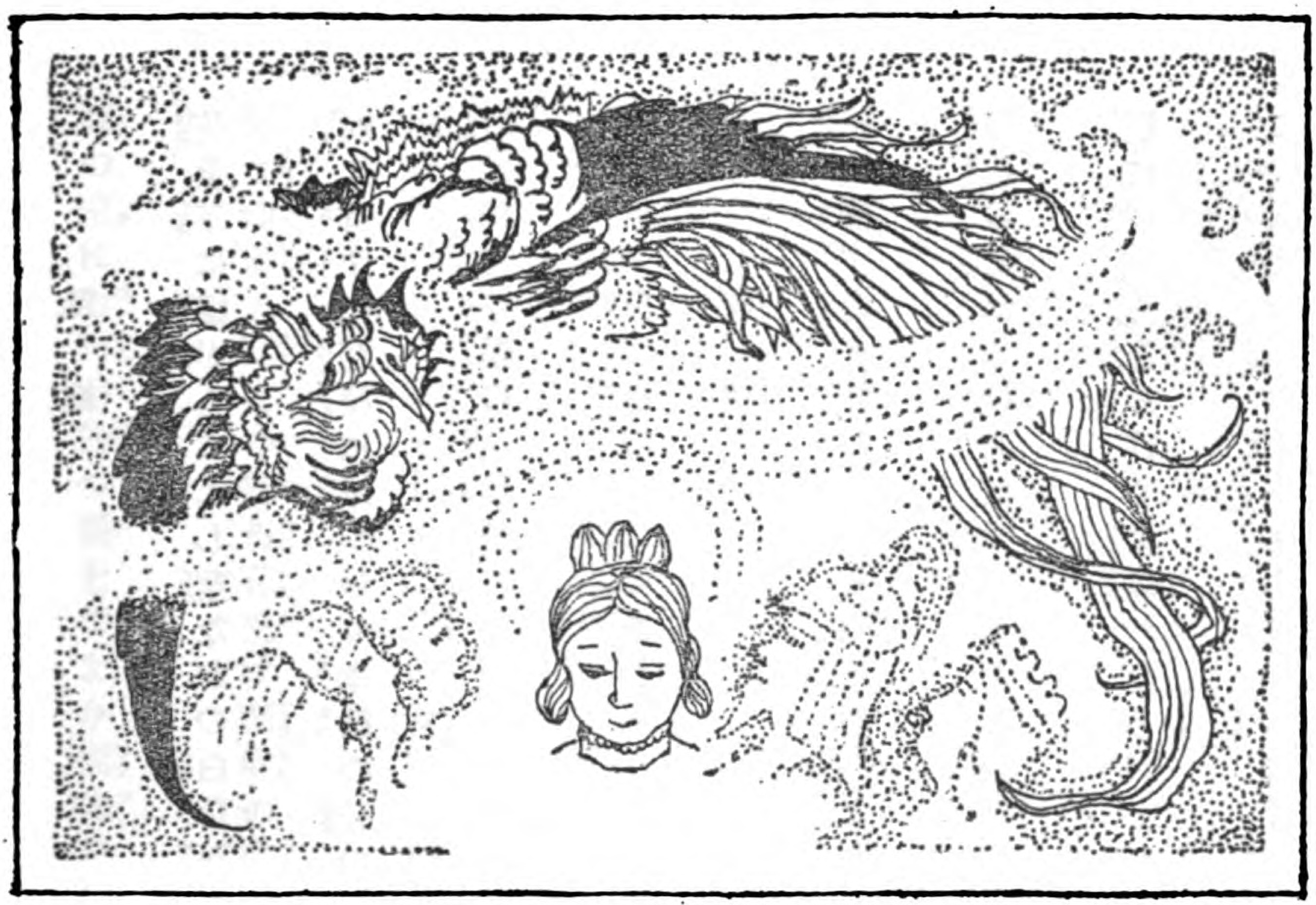
薔薇

瓶に挿す白と紅とのばらの花あひよりてあるに白もよく紅もよき

剪花の紅ばら挿せば美々しかる簇りつくれり壺一ぱいに

瓶に挿す燕脂紅ばら朱紅のばら見るに心のときめきおぼゆ

この薔薇は鮭の紅みもち匂ひもよく西洋花らしさよいかにもしやれたる



鳳凰天に搏つ

柳原白蓮

□

其後いくばくもなくして帝は崩御あらせられた。その眼を患らはれてからの晩年は、哀れにも淋しく、いとあぢきない日のみが續いたのであつた。さればとり分けて眼病の外に、生命を脅やかされるやうな重い病氣とては無かつたのだけれども、思つたよりも短かつたその生涯は、遂に照りはゆる暇もなくして凋落してしまつたのである。そこには大海原の波の末にうち沈む太陽の莊嚴さもなく、東雲の空にうすれゆく山の端の月のそのおもかげさへもなかつた。そして帝位といふ尊嚴の名にはふさはぬ淋しい運命のもとに、あはれ高宗皇帝は世を終られたのである。帝のさびし

い運命を共に分ち擔ふべき筈の武后は、帝の淋しさが深くなればなるほど、却つて益々旭日昇天の勢を示して居た。彼女のこの得意な時代への思ひがけない展開を見てゐる帝には、云ひやうのない果敢なさが募り、それがために齡よりも早い終焉へと急がれたかたちがあつた。その最も近く君側に侍べる人々までが、いつしか武后のけしきをのみ窺ふやうになつて、帝への奉仕が、ともすれば武后の顏色一つで左右せられることさへある。其の中にあつて、人知れぬ心淋しい生涯を續けてゐられた帝には、死そのものゝ方が、むしろ自由への逃れ道であつたのかもしれない。

さて、大葬の儀は、王朝時代の範に則り、最も森嚴に、最も鄭重に執り行はれたことはいふまでも無かつたが、茲には歷朝のそれと異つてひとつの人知れぬ哀話が殘されてゐた。それはいふまでもなく彼の後宮のをと女が帝の崩御を傳へ聞いて、禁園の中の池に身を投じて死んで居たことである。勿論この死は程經てから、御庭がゝりの役人によつて發見せられたのであつて、まだその死が帝を慕ふ餘りの殉死であつたことを、人々の多くは知らなかつたが、常に宮中との關係も淺からぬ由緒ある寺の尼達によつてこのをと女の遺骸は、手あつく葬られ、その靈は懇ろに供養された。云ふまでもなく彼女が死の瞬間までも肌身を離さず懷に抱いてゐた一管の横笛と、頸に懸けてゐた拜領の玉飾とによつて、その哀れな心づくしのほどはさとられるのであつた。けれどもそのことは秘かに事の眞相を知つて居る帝の侍臣達の同情の涙につれて、時折彼等の間にのみ内々噂されるに過ぎなかつた。その遺骸の頸に懸けられてあつた玉飾は、まさしく帝の御物であることは、やがて多くの人々の知るところとはなつたが、それが何うしてこのをと女の胸に置かれたものかはまだ誰人も知らなかつた。勿論自らの生命を護るためにも、固く口を噤んで居る彼の侍臣達が、遂に最後までことの眞相を打ち開けやう筈はなく、このをと女の死はたゞ不可解な自殺だとして、やがて日を經ると共に世人の記憶から拭ひ去られてしまつたのである。

昨日までは太唐の支配者として兎も角も權威並びなかつた帝も、今は一片の哀話のかげに一抹の香煙のやうに消え去ら

れ、王者の實權はいよ〳〵武后の身一つに收められてしまつたのであるが、萬乘の帝位は一刻も缺くことが出來ないので、次の御位はともかくも王子の哲に依つて嗣がれ、哲は直ちに即位して中宗皇帝となられた。けれどもこの中宗皇帝は事實上權力は少しもなく、たゞ「虚器を擁して」帝位をふんでゐられたに過ぎず、萬機は相變らず凡て武后の方寸から出てゐた。かくしてともすれば邪魔者あつかひにされがちな氣の弱い中宗は、その退屈な日々の仕事を、幾分勝氣なそして聊か惡性な韋妃によつて、僅に慰められ勵まされてはやう〳〵に其日〳〵を送つてゐたのである。

今しも武后の御居間に伺候した感業寺の尼僧嫦娥尼は、久々の御機嫌奉伺と、自分がこの度先住の死後、そのあとを嗣いで住職した御禮を兼ねて、久方振りに參内したのであつた。武后の嫦娥尼と廣い御間にただ二人相對座して居られる其側に置かれた大きな鼎の中からは、披香博士が點香して行つた沈水香のかほりが、丁度春の糸遊のやうにあるか無きかの煙りを息づいてゐる。

「それで何ぢやな。亡られた庵主は、あの後つひぞこのわしを訪ねては下さらなんだが、わしのしうちに何ぞ氣に入らぬことでもあつたのかな？」

と、武后は穩やかながら、それでもいくらか不機嫌らしく云はれる。すると、

「いゝえもう、それは御方樣の御事について、たとへどのやうな御噂を人が傳へませうとも、先住は何もかもよく心得てゐられました。年をとられて、屢々の外出も大儀になられましてからは、常日ごろ御懷しうは存じ上げながらも、つい御目通りを願ひ出ることもなく、併し目のあたりに御顏を拜みませいでも、先住は私共の氣付かぬ以上に何事をもよく解つてゐられたので御座いました」

と嫦娥尼は武后の御心のとけるやうにと、物靜かに御答するのであつた。

武后の背後には見事な瑠璃屏風と並んで、其昔漢の成帝が、寵姬のために三年の輪を留めて造らしめたといふ鴛鴦萬金

錦の高貴な垂帳が色麗はしく、かつ厳然と張られて、その尊容をうち守つてゐるのである。嫦娥尼はこの垂帳を後にして自分と向ひ合つてゐられる武后こそ、その昔自分と同じ尼僧寺に、敬虔な法の御弟子として、信仰の朝夕を倶にせられた方であつたのかと、今更ながら深い感慨に耽るのであつた。武后はまたも言葉を續けて嫦娥尼に問はれた。

「わしがこの四百餘洲の支配者となつてから、豐饒な田の面は黄金の波を打ち、百萬の笑ひが天地をゆるがせてゐることを、庵主は知つておいやつたであらうなう?」

「それはもう、御方様なればこそと、いつもさう申されてゞ御座いました」

と答へながらも嫦娥尼は女として、否、男でさへもよく成し得ぬ程の此の大國の執政を、何のためらひもなくやつてのけられるこの偉大なる女性を見る時、唯もう恐ろしいやうな氣がしてならなかつた。その昔自分等の友として暮してゐられた其の頃の、ともすれば人一倍はにかみやの、そしてどこかまだ無邪氣な子供らしさの殘つてゐた人の姿が、またしてもまざ〳〵と目の前に浮んで來るのである。或は境遇がさせるものかも知れないけれども、とかくに威壓的な今の皇后よりも、ありし日の翠女との心置きない語らひのほうが、どんなに嫦娥尼にとつては、なつかしい思出であつたかしれない。併しかうして久方振りに參内すれば、武后はよろこんで「他ならぬ尼故に御心易く思召」この殊更手厚い御もてなしから、數多の附人達も遠ざけられたのだといふ、その有難い思召はよくわかつてはゐながらも、なほただ二人切りの間のうちでも、何うしても昔のやうな親しみは湧いて來なかつた。云ふまでもなく、既に高位に驕つてゐる武后と、なほ依然として市井の一尼僧である嫦娥尼の淋しい心持とこの間には、踏み越えることの出來ないほど廣い深い溝がへだてられてゐたのであらう。

「庵主がこのわしを知つて居られたのは何より頂上ぢやが……。この地上人類の棲むところは廣くとも、その中の幾分かはわしの掌のくぼみの中にこつとりと入つたのぢや。それからといふものは、この四百餘洲億兆の民草は、先例

にない程の幸ひを得た筈なのぢやもの」

嫦娥尼は、武后の御側の龍香握魚碧玉臺の上に置かれた、紫金被褥香爐の中から、かすかに洩れる紫の煙りのいとふくよかに舞ひ昇るのをうち見やりながら、

「それはやがて御方様が皇帝と御なり遊ばすも、すべては天意ぢやと、先住は亡られます前にも申してゐられました」

「何？　わしが帝位に？」

と云ひかけて武后は、一寸の間考へ込んでしまはれた。何事もよく未來を云ひあてた庵主のこの言葉は、彼女に軽からぬ感動を與へるのであつたが、併しその事を折返して再び言葉に出すことは、現在の武后にとつてはまだ憚らなければならぬものがあつた。話は一轉して、

「して此度そなたが庵主となられたからには、何ぞ望みもあるかや？」

「望みと申まして別段に……。唯若い佛弟子達が、正しい信仰を得て、來世の有難い淨土への結縁を結んでくれましたらなら、それがまづ何よりなので御座ります。けれども先住のやうな器量をもちませぬ私には、人の師表となりまするに、餘りに力の足らぬことを案じて居るので御座います。此頃の朝夕の私の祈りは、たゞこればかりなので御座います。併し御佛はこの智慧も力も貧しい私に、足らぬものを與へて下さいますことゝは充分に信じて居るので御座いますけれども……」

「尼！　その「けれども」がまた修業の足らぬ處ぢやぞへ！　おほゝゝゝ法に於てはそなたが姉弟子ぢや、わしが說法はちとさかさまごとかもしれぬが……」

と武后は中々の御機嫌である。

「何う致しまして恐入りまする」

と嫦娥尼も恐縮しながらにこやかにお答へするのであつた。して武后の逆說法はなほ續いて、

「そなたは目に見えぬ御佛の力をのみ賴らずに、ちと己れの力と人間の助けを貸りたならどんなものぢや。自然の力を待つてゐるばかりが御佛の思召でもあるまいに、人間あつての佛ぢや。いや、御佛とはつまり天といふ鏡に撮した人間の姿に過ぎない。己れの力と願との上にこそ天上の冥助も加はる筈ぢや。たゞ漠然と手をつかねてゐて、それが何にならう。口廣いことを申すやうぢやが、そなたがもしもわしの力を借りやうとならば貸しもせうほどに何なりと心置きなく話すがよい」

嫦娥尼には武后の力をかりねばならぬやうな希望は何もないのであつた。けれども武后の方に却つてこの新らしく庵主となつた嫦娥尼に望みがあつたのである。嫦娥尼はこの武后の言葉をうけて、

「仰せごと有難う存じまする。何事も及ばぬといふことのあらせられぬ御方樣の御力を拜借いたしますれば、この世の中のことの何でも出來得ないといふことは無いので御座いますから……」

その時武后は何か遠い昔を思ひ出すかのやうに、窓から見える青空を見つめてゐられたが、

「あの尼僧寺、ほの暗い中に尊いみあかしのゆらめく淸淨な寂寞の塔の中からも廣い人の住む世界は見えようもの、誰人かこの廣い樂土を見詰めてゐるものはないであらうか。尼とても人ではないか、まして女ぢやもの、わしは彼女達を淸い尊い寂寞の塔の中から出してやらねばならぬと思ふてゐるのぢや。なう！　尼！」

此のことは第一嫦娥尼から望んで自分へ相談しかけられてもよい筈だのに、と武后には思はれるのであつた。だが武后と嫦娥尼との意見にはまだ大分のへだたりがあつた。

「でも御座いませうが御方樣！なまなか人の世を見ますれば、烈しい苦樂の波に漂はねばなりますまい。それが不憫でなりませぬ。若い尼などは、塵界の外に寂光の夢をでも見てゐた方が、結句幸ひかとも存じまするが……」

武后は嫦娥尼の言葉をさへぎつて、

「よしんばそれが苦樂であらうとも、それはそれで構ふことはないではないか。これが人の世ぢやもの。尼寺の外を見せぬ偏頗な生活よりも、苦樂を見るが寧ろ人らしうてよい。そのむかし天竺に生れた釋氏は、ともかくも人間最後の逃れどころ、落ち付き處を死ぢやと敎へる。わしは若い尼達を直ちに人の世から、死の彼方へとはやり度うない。未來への道程には、まだ／＼樣々なものがある筈ぢや。愛の道も、人の情も、そのひとつ／＼なのぢや。それを何で見てはならぬのぢや。なう尼！」

嫦娥尼は何とも考へずに、たゞ默つてうなづくのみであつた。

「そなたは何と思ふてぢや？　わしとそなたとはその昔、共に相弟子の朋輩同志であつたのぢやが、そなたは今日までもなほ美しう聖い尼御前ぢや。わしはあの時先后に迎へられて、人の世に出てしまふたが、尼！　そのことをわしは少しも悔いては居らぬ。それればかりか、この唐の國はわしがあつて初めて萬民の福利を得たのぢやもの」

またしても武后は、己れの偉大なる力をすべての女の上にも望まうとしてゐられるのではないかと、嫦娥尼はひとり胸の中にその無理な願ひであることを考へないわけにはゆかなかつた。武后ほどの御力は、それこそ千萬人はおろか、天が殊更に何かの評論によつて、この地上に遣はされた立派な人間の一人に違ひない。特別に造られた人をもつて、凡俗を推すことは、決して許さるべきことではない筈。武后のこの慾を聞いた嫦娥尼は、今自分が何ものよりも深く愛してゐる若い弟子達の身の上を第一に氣遣はずには居られなくなつた。

「それは御方樣！　私とてもで御座ります。今日この年に相成りますまで御佛にお仕へ申して、五濁の汚れもしらず、罪ふかくては到底過し得ぬものだといふ、女の若い日の惱みも知らなかつたことを、この尼はいつも感謝いたして居るものなので御座います」

「それはそなたはそれでよいかも知れぬが、何もしらぬ若い少女達を、わしはあゝいふ目隠しをしたやうな生涯の中に、終らせようとは思はれぬのぢや。愛と情は共に佛と惡魔の兩面かもしれぬが、徹底すればつまりは同じぢや。惡も極まれば善にもなる、善も過ぎれば惡にもなる。血潮の流れの音も聞えぬ木石に、若い娘の御守は分に過ぎた贅澤ぢや」

この時嫦娥尼は喫驚したやうな目をむけて武后を仰ぎ見るのであつた。そして心に何か念ずるやうにうつむいてしまつた。今この尼の前にある女性こそは、人民の上に臨む大君ではなくて、唯一個の信仰を失つてしまつた哀れな女性としか尼僧の目には映らなかつた。今はあらゆる女の中の最も高い位の御方とは知つてゐても、道の邊りを行乞して歩く女乞食の群よりも見すぼらしい運命に、やがては廻り會ふのではないかと、信仰深い嫦娥尼は、この人のために、心に祈念をこらすかのやうに何事をか默禱しながら、却て默つてしまつた。武后は何の頓着もなく、

「御佛への仕へよりも、生きた人々への供養をさせたがよいと思ふのぢやが、尼は何と思ふてぢや？」

またしても尼の返事を促がされたので、此度は嫦娥尼も自分の心に萌した運命に對する恐怖を抑へて、至極穩やかに靜かな言葉で御答するのであつた。

「それは誠に有難い思召かは存じませぬが、この尼は強つて申上げねばなりませぬ。俗人の住む世の中には、ともすれば地獄道に墮入り易い落し穴が、そこにもこゝにも御座います。その危いところへ見す〳〵美しう聖い生活を送れば送られる娘達を近づかせようとは思はれませぬ。それは却つて可愛想なことでは御座いますまいか？」

嫦娥尼は何としても武后の意に、贊成し得ぬ自分の心が、もしや武后のお怒りにふれはせぬかと、恐る〳〵訴へるのであつた。

「尼！　本能と道德とはいつも敵同志ぢや。して不平の雲の最も多く渦卷くところには、尤も烈しい鬪の烽火が上るものなのぢや！」

「さあ、それ故に尼は若い少女達を俗人の世に手離さうとは思ひもよらぬことだと存じますので御座います」

武后にはこの嫦娥尼の心もよく會得されぬではない。けれどもこの場合どうしてもこの尼の心を打ち開かせようとつとめて熱心に說き聞かされるのだつた。

「尼！　なう尼！　先住ならばこの場合何と申されたであらうかといふことをよく考へて見るがよいぞへ！このわしを見てもわかりさうなものぢや。わし自身がまづ先に立つて、彼女等の先達をしてあの月隱しの塔を出て來たのぢやもの、早う若い尼達も許してやるがよいぞへ！　尼！」

嫦娥尼は武后がともすれば我見よがしの意見を吐かれることを得心出來ないばかりでなく、武后はよいとしても、あの淨い美しい佛弟子達の、御佛の姿そのまゝに寫して育て上げた女達を、今更惡魔の巷に滿ちた淺ましい世の中に、何うして出せようかと思ふのであつた。そして嫦娥尼は武后に、

「あの許して？　赦してやれいとは？」

これが何でゆるしなのかといふ風に問ひかへした。

「おゝ、成程、許すと申した言葉が惡かつたならわしがあやまりませう。まあ惡いことは云はぬ。全國幾千萬の尼達を、まづ最初そなたの寺から追放なされい。何れは誰も罪の器ぢや、追放ぢや」

「御方樣も御存じのことゝ存じまする。そも／＼當國多人數の僧侶の出來ましたのは、一つには六朝時代の惡政のため餘りに辛い世の中から逃れて寺に隱れ、御佛に御縋り申したためだと承りました。斯う申し上げることは、甚だ恐れ入る儀かは存じませぬが、國の政事を遊ばす御方樣故に申上げも致すので御座います。それほどの思召ならば、まづ此の世の制度から改めて頂かねば相成りますまい」

と嫦娥尼は、武后の限りない權威の前にひれ伏してゐる一布衣の身である自分を忘れて、言葉強く申上げるのであつ

た。武后は初めて嫦娥尼の言葉を心から満足したらしく、

「おゝ尼！　よくぞ云はれた。それぢや、それぢや、わしもこの世が餘りに地獄に近いところぢやといふことは、しみじみ身にも覺えがある。わしはこの地上に天國を建設たいが本當の願ひなのぢや。やがて追放されるそれ等の多くの尼達にも共々に力を合せてもらはねばならぬ。先づ今日の場合兎も角も早い言葉で云はうなら、還俗させるのぢや」

「もしもそれを望みますものが御座いましたならば……」

尼は不服でならぬのを、それでも幾分讓歩した氣で、斯うお答へしたのである。

「何の尼！　長い間の習慣と、懶墮性に愚にされ切つてしまふた女子共ぢやもの。籠の中の小さい鳥に、籠の廣さの幾萬倍を飛んで見い、といふたなら、阿呆な小鳥は見ぬ先から腰をぬかさうぞ。何でもよい。知らないでもよいのぢや。たゞ放してやりさへすれば、自然に空高く飛べるやうにもならう。自ら食をとる道も覺えようもの。弱いものなら餓えて死ぬるも惜しくはないではないか」

嫦娥尼はこんな滅相な話がまたとあらうかと、涙ぐましい心さへしたのである。

「してこのことは御方様の御命令なので御座りまするか？」

と恐る〳〵尼僧は問ふのであつた。といふのも今はこの世界にも比ない程の大きい唐土に於ては、實に生殺與奪の絶對の權威者である則天武后だといふことは、尼とてもよく知つてゐたからである。其時武后は急に今までの態度とはうつて變つて力強い決然とした辭で云ひ放たれた。

「おゝそれはわしの望みぢや。彼女達幾千萬の人々をあの窮屈な籠の外へ放して見度いがわしの希望ぢや。たとへ尼寺から尼達を追放するからとて、わしは決して佛法を滅しようとするのではない。わしはたゞ教へを現實に生かさうとするのぢや。深い教へは益々深からしめ、廣い法の道は愈々廣く流布させねばなるまい。わしは今度高僧玄奘三藏をして

大般若經六百卷を飜譯させてゐる。その爲めには玉華宮をさへ寺院として與へたほどなのぢや」

嫦娥にはこの終りの力の言葉に幾分か救はれたやうにほつと息づいて、

「おゝやつぱり御方樣はよくお解り遊ばして入らせられます。彼女達にも充分にその道を心靜かに究めさせて……」

「いゝや、可愛い小鳥が籠の中で歌ふたとて何になる。彼女達を自由の空に放してやつたなら、それこそ生命の讃美に心からの喜びの歌をうたふであらう」

と強い言葉の下から、此度はしみ〴〵とした聲で一人言のやうに、

「やがて彼女等の上にもこの世の幸福は湧いて來るに定つてゐる。それはわしが造つてやるのではないが、わしから產れてくるのぢや。すべての生命のもととなる女を一人たりとも無益には出來ぬ。凡そ生命あるほどのものなら、大地の恩をしらぬ筈はない。大地は女ぢや、諸々の生命を生む女を禮讃させねばならぬ」

嫦娥尼はなかば放心したやうに、

「おゝあの人達に子供を生ませようと遊ばすのぢや。おゝ、何といふ思召ぢややら……。あの美しい淨い信仰の人々を……」

「尼！わしのいふことを思ひ違へてはならぬ。斯うして女には初めて眞の信仰が生れて來るのぢや」

嫦娥尼は遂に武后の強い權威と鋭い意力とに打たれた、身を支へる力を失つて、そこに打伏してしまつた。

□

侍郎の張昌宗は、近頃武后が何うしてから、自分にばかりとりわけて氣六つかしくなられるのかと、今朝からのことなど、もう一度思ひ返して見たりした。召されて少し行きようがおそいと、このろくでなしが、何をぐづぐづ致してゐたかとお叱りになる。御側に謹んでひかへゐれば、木偶の坊めがと罵られる。はてはそちのやうな阿呆はないと、御口癖のや

うに仰せられながら、それで晝となく夜となく御用に少しの暇もない。しかしそれよりも、もつと〳〵辛いことは、數多の御側の宮女達に、妙な嘲笑を浴びせかけられることである。いつそ誰かに代つて貰ひたいとでも云ひ出さうものならどんなひどいお咎めをうけやうもしれぬ。いゝや、それでもいよ〳〵御氣に召さぬ時は、御暇が出よう。何であんなに御無理ばかり仰せになるのか一向に合點が行かない。とう〳〵今日は此所だけは女の持場と定つたものだとばかり思つてゐたのに、御化粧の間の掃除から御飾りつけまで云ひつけられた。よしや自分がやつと大人になつたばかりの身そらで、武后の御目から見られたならまだ子供かもしれないけれども、それでも男だ！それにこんな女のする仕事を命令されたその御心持が彼にはつく〳〵恨めしいものに思ひなされるのであつた。此頃のやうに物につけ事につけ、一々辛く當られることは、つとめの身にとつては、ずい分苦しいことである。「何うしたなら皇后様の御機嫌に叶ふことが出來るのだらう」と、彼は口のうちにつぶやきながら、はては途方にくれた心をついうつとりと、見るともなしに窓の外を眺めてゐた。そこにぼんやり突立つてゐた時間がどの位たつたか、彼にはよく解らなかつたけれど、暫らくするとそこへ女の話聲と、裳裾をさばく衣摺れの音とが後の方に聞えて、二人の宮女が何かしきりと話合ひながら入つて來た。侍郎が驚いて長い間の迷想から醒めたとき、その二人の宮女も吃驚したやうに聲高い叫びを上げた。誰もゐる筈でないところに、しかも思ひかけぬ男に出合つたのだ。そこは誰も許なくては入ることの出來ぬ皇后の御化粧の間だ。そしてそこにゐたのは若い侍郎であつたのである。

「おや！　誰かと思つたら……………」

と一人は言葉鋭どく咎めるやうにいふた。

「一體何しに來ました？　こゝは殿方御禁制のところなのですよ」

その言葉は押し迫るやうでも、顔には微笑を含んで居た。そしてその二人は顔を見合はせて、何かしら互ひに頷づき合

ふらしかつた。すると若い侍郎は至極眞面目に、

「私は皇后様の御申付けで、今日はこゝの掃除をしてゐるのです」

この女達は自分が御命令をうけて働いてゐることを知りながら、わざとこんな意地惡い咎めだてをするのだといふことを、侍郎は充分に推量してゐた。彼は男禁制の場所に、自らすき好んで來る筈はないのである。それに今朝大勢の宮女たちの前で彼に心憎いあてつけをなされたのを、この人達とても既によく知つてゐる筈である。とかく宮女達は何でも針ほどのことを棒ほどに取り沙汰する。のみならず一寸御廊下で躓いたやうなことでも、天下國家の一大事のやうに噂する。この女達の口さがなさに、常日頃から屈托しきつてゐる彼は今この女達が徒らな興味から、面白半分にこの仕事を見に來たのだと察して、いたく迷惑なことに思つた。

「何、もう直ぐにすみます。決してなまけてなど居たのではありません」

彼は女達の餘計な饒舌のために、あらぬ咎めをうけることの、一再でないのを思ひ出して、もう最初から云ひわけをしてゐるのであつた。そしてさう云つてゐる間も、さも忙がしさうに體を動かして居たのである。やがて一人の女は侍郎に身をすりよせるやうにして、

「なあに、よう御座いますよ。貴方がそんなことをなさらないでも、こゝは私共が致します。私達はこゝの御係りなんですから」

侍郎はこの人達がこんなに甘いことを云つても、皇后様の御前に出ると、必らず怠けて居たとか、または仕事がぞんざいだとか、さんざ惡口をついて、果ては嚴重なお叱りを受けて苦しんで居る彼を見て、意地惡く面白がるためしを知つてゐたので、少しも油斷はしなかつた。

「でも今日だけは御命令ですから、私一人にさせて下さい」

「まあいゝではありませんか、私共も手傳つて上げますから。そんなにひとりして一生懸命になさらないでもねえ」
と云ひかけて相手の女に何か目くばせをすると、もうひとりのが、
「丁度いゝ時ですわ、ちつとお休みなさいまし。そして何ぞ面白い御話でもなさいましな、ねえ？よろしいでせう？」
でも侍郎は既に女達の優しい言葉のうらに潜んでゐる憎らしいたくみを讀みとつて、却つて腹立しくなるのを抑へながら、
「でも早く私がしてしまはないと、またどんなに叱られるかしれませんから」
と女達の側を逃げるやうにして、御部屋の隅々を掃いたり淸めたりしてゐた。
「おほゝゝゝ、貴方が叱られるつて？おほゝゝゝゝ」
またしてもひとりの女は何か面白さうに、甜高い聲で笑ふのであつた。此の間も若い侍郎は、休みなくそしらぬ顔で、唯專心に體を動かしてゐる。
「まあ可愛らしいこと！貴方は皇后樣が本當に貴方を御叱りになるのだと、思つていらつしやるの？」
と二人の中の年嵩の方のが云つた。
「えゝ本當ですとも。私は此頃何うしてだか、しよう叱られてばかり居るのです」
と云ひかけて若い侍郎は暫し手をやすめた。彼はつひ今しがたもそのことを考へて途方にくれてゐるところだつたので、氣まぐれな女達だとは思ひながらも、初めてこの人達が入つて來た時よりは、いくらか親しみをましたまゝに、
「何うしたら私にも皇后樣の御機嫌をとることが出來るのでせうね」
と何氣なくその屈托しきつた意中を、この二人の女に訴へるともなくいふのであつた。女達は、さも困つてゐるらしいこの無邪氣な愛くるしい少年の顔を見て戯談ふやうに、

「それこそ何でもありはしませんわ」

と答へたが、その唇はこぼれさうな笑ひを無理に抑へてゞもゐるやうに見えた。でも若い侍郎は眞顔になつて、

「えゝ、どうすればいゝのです。敎へて下さい後生ですから。私は本常に辛いのです。貴女方も知つていらつしやるでせう？　昨日なんかも『茶を持つて來れ！』と仰せられましたから、急いで御側にもつて出ると、『こんな熱いのはいやぢや』と御意あらせると共に強くお打ちになつたものですから、あの御大切な御立派な得難い御茶碗は、私の手からころげ落ちて、粉末塵に碎けてしまひました。すると『こゝな粗忽もの奴が！』との御叱りで私は一日中を一間の中に閉ぢこめられてしまひました」

二人の女の唇には、忍ぶやうな笑ひは上つて居なかつた。そして如何にも同情するやうな口吻で、

「えゝ知つてゐますとも。貴方は皇后樣の御氣捬に觸れて、一間のうちに擯禁なされたのだときゝました」

と一人が云へば若い女はまた、

「しかも貴方は御湯殿の中に、素裸にされてゐたのだといふ話でしたよ」

若い侍郎はもう涙ぐんで、

「何うして私にはあんな御無理ばかりを仰せになるのでせう。私にはそれが本當に辛いのです」

と侍郎がそのうらむ目を伏せると、女達は互ひに目を見合はせて、意味ありげににつこりと笑つた。

「貴方はほんとうに悲しいの？

女の笑ひを見た若い侍郎は急に腹立しくなつて突劍どんに、

「何が可笑しいのです」

と聲高く咎めた。すると女二人はもう堪へ切れないで、とう〳〵聲を立てゝから〳〵と笑ひ出してしまつた。若い侍郎

はすつかり怒つて、

「私はもう貴方方とは口をきゝません」

とくるりと脊を向けるなり、もうこんな人達には決して構ふまいと決心したらしく、さつさとまた布片をとつて、そこら邊りを拭いたり物品を片よせたり、すべての物の位置を考へたりするのであつた。

「まああなた！　そんなにお怒りなさらないでもいゝではありませんか」

となほも話かけやうとする女の言葉には何にも答へずに、侍郎は大きな鏡の前の花壺に、さつき持つて來て置いた樣々の香りの高い美しい花を挿しかへて、幾度も離れて見ては形をなほしたりしてゐた。

「見事な御花ですこと！」

と女はまた話題を變へて話かけたけれども、若い侍郎は飽く迄この人達とは無關係にそしらぬ顔して働きつゞけてゐるのであつた。今はもうとりつくしまもなく默つてこの樣子を見てゐた女達は、暫らくすると何事をか決心したやうに、思ひ切つて侍郎の側にすりよつて來たかと思ふと、前とはまるでちがつた態度で、

「貴方がもしや私の部屋へ入らしつたなら敎へてお上げしますわ、ね！　貴方が皇后樣の御機嫌をとる方法を……」

と女が耳許に來て囁く聲に喫驚して、彼は思はずふりかへつたが、もう一人居た筈の若い方の女の姿は既にそこにはなかつた。そしてそこに居殘つてゐる年嵩な方の女はおそろしく血走つたやうな目なざしをして、彼を見据ゑて居るのであつた。侍郎はやゝ勝手のちがふ樣子に邊りを見廻したが、ふとこの女の只ならぬ振舞を見て、いさゝか氣味の惡いやうな妙な氣持になつて、

「えゝ、何ですつて？　貴女のお部屋にですつて？　この私が？」

と不思議な迷を解くかのやうに女に尋ねると、この女は眞面目な顔をして、

「えゝ、さうなのです」
と念を押すやうにいふ。
「私は男ですもの、残念ながら貴女方のお部屋に入れて頂く光榮をもつわけには參りませんので」
と彼は投げ出すやうに云つたまゝ、又くるりと横を向いたなり、さつさと働らいて何かしら忙がしさうにやつてゐる。
女はその樣子を恨めしげに暫らく默つてながめてゐたが、急に侍郎によりすがりその肩を抱きすくめ、そしてその耳許に口をよせて囁やいた。
「貴方まだお解りになりませんの？………あのね…皇后樣の御機嫌をとるのは………何でもありはしませんのよ」
とかなり長い間その手を解からうとはしなかつた。女の暖かい息が耳にふれる度に、若い侍郎は氣持ち惡るさうに、其の手から逃れようと藻搔いたが、女はそれをさうはさせまいとして益ゝ力を加へる。すると女の強い力に捕へられてゐる年若な侍郎の顏は、段々と紅くほてつて、そこには云ひ難い不快と、うす氣味惡さとが胸のあたりにこみ上げて來た。彼はとう／＼堪り兼ね、渾身に力をこめてやうやくその手の下をくゞりぬけた。と共に彼は一目散に外へ飛び出してしまつた。

外へ逃れ出た彼は、廣い禁闕の中を築山と云はず池の圍りと云はず無我夢中で走り廻つたが、遂には心神ともに勞れ果てゝぺつたりとそこの柔らかい草の上に身を横たへたまゝ氣も遠くなつてしまつた。斯る間も若い侍郎の頭の中には宮女の怪しい囁きが、とめどなく駈け廻つた。彼はまるで夢か幻かを追ふやうに、その言葉の意味を、心のうちに幾度となく繰りかへして見たけれども、遂に何の返答も與へられなかつた。だが、やがて遠い／＼心の果てにもしやといふ朧氣な想像が小波のやうに打ちかへして來たが、それはやはり大海原に漂ふ小舟のやうに、またとりとめもなく流れ去つてしまふのであつた。彼は益ゝ充血して重苦しくなる頭を押へながら、幾度も／＼朧氣なこの想像を、しつかりと自分の身に摑

まうとあせつたあげく、とう〳〵それがはつきりと自分の心にうち當つたとき、彼ははつとして我にかへつた。そして自分は今おそろしい禍と幸との谷合に落ち込んで居つたことに氣がついた。侍郎はやがて悦びとも悲しみともつかぬ涙にかきくれて居たが、幾何もなく夕方の冷い風に吹かれて、やつと夢から醒めたやうに、生氣づいて空を仰ぎ見ると、そこには細い月がほんのりと浮んでゐた。

こんなことのあつてからといふものは、この若い侍郎は武后の前をそんなに恐れなくなつた。叱られてもおど〳〵としてゐるやうなことはなくなつたばかりでなく、はては一寸したことにもすぐ涙ぐむ子供らしい氣弱さも失せてしまつたして武后はその俄の變りやうを決して見逃さなかつた。

「そなたは誰に敎へられたのぢや」

といつものやうに、さん〴〵無理なことを云つて困らせて見てその擧句に、此度は急に聲を柔らげて問はれるのであつた。

「何をで御座います?」

といふ侍郎の答は、どこやらに落ち付きがあつた。

「そなたは誰によつて一夜のうちに男になつたのぢや。隱さずにいふて見い!」

とその言葉は嚴しかつたけれども、若い侍郎は何の恐れもなく、

「私はきのふのまゝの私で御座います」

とたゞ一言御返事をしたゞけである。

其後彼が武后の寵をうけてゐるといふ噂が大分人々の口の端に上るやうになつてから、よほど日を經た後の或日、侍郎にあてゝ書いた見事な女文字の手紙が、わざとのやうに武后が朝夕の御通路に當る渡り廊の床の上に落してあつた。それ

を目さとく見付けられた武后は、丁度その時も御附添ひしてゐた侍郎にむかつて、

「これ！その品物をひらふのぢや！」

と云ひつけられて初めてそれと氣がつき、急いで手に取り上げたが、彼はその表には麗々しく書きつけられた自分の名前に、且つ驚きかつ狼狽するのであつた。皇后は侍郎の樣子に鋭い注意を拂つてゐられたが、やゝ强い語氣で問はれた。

「そちが落したのぢやな？」

「いゝえ、私は一向に覺えが御座いませんので御座います」

とこの不思議な落しものを手に持つたまゝ侍郎は、不安さうにお答した。

「すると、そちは存じて居らぬと申すのぢやな？」

「左樣で御座います、私は一向に……」

「そんならそちのものではあるまい。わたしが見て遣はさうぞ！」

とそれを受けとらうと手を出されたので、侍郎は不安にかられて少しためらつたけれども致方なくそれを武后の御手に捧げた。武后はひとりそれを開いて見て、自ら先に立つて御座所にかへられるとそのまゝ、それを御手筥の中に入れてしまはれた。若い侍郎は如何にも氣になるらしく、

「何が書いて御座いましたので」

と怖る〳〵問ふのであつた。

「うむ、そなたのことを思ふてゐる女子ぢや。何と覺えがあらうがな！」

と武后は笑ひながらいはれる。若い侍郎には、これぞと思ふふしがないのではなかつた。中にもいつぞや御化粧の間で生れて初めての恥かしい呟きを聞かせたあの女が、其後もそのしつこいながし目を幾度送つたかしれぬ。彼は色々のこと

を思ひ出して、無氣味な戰慄をさへ覺えるのであつた。勿論下らない女の愚痴が今武后のお目にふれたに過ぎない。然しこのためいまにどんな恐ろしいことが呼び起されるかもしれぬ。自分には何の罪も無いことと信じてゐたけれど、それにしても、彼の胸の奥には底のしれない暗い不安が潜んでゐた。侍郎はおづ〳〵とまたしても手紙のことを武后に伺ひ上げるのであつた。

「私にどんな用事が書いて御座いましたので……？」

「そちがそんなに氣がかりなら一寸拜ましてやらうぞえ」

と武后は冗談のやうに云はれながらも、その御顏は至極眞面目に、その麗はしい眉の下からは、强い監視の眼眸が投げられて居た。侍郎は武后の手から下されたさつきの手紙を、急いで注意深い目でそれを見たが、表書の見事な手跡は彼には初めて見る女文字であつた。そしてその中をとり出して見ると、これはまた思ひがけない表書と全く異つた、しかも立派な學識ある人の筆らしい男文字で書かれた一聯の詩が這入つてゐて、その詩は不都合にも武后をさん〴〵に罵つたところの不敬な文字で滿されてゐた。これを見た彼の顏は、事の意外さに驚いて、見る見る蒼白になつてしまつた。侍郎が先程から思ひ廻らしてゐたのは、彼の御化粧部屋で逢つた女であつたけれども、その女が又何故にこんな不都合なものまで入れて、しかも自分の名あてにしたのか、その心を計り知ることが出來なかつた。

「これは誰かゞ私を陷し入れやうとしての計略かとも存じまするが……」

と彼は恐る〳〵申立て武后の顏を見上げると、武后から何とも御返事はなかつただけに一入その御怒りのほどもわからなくつて、彼はそこに居ても立つても居られぬ心地さへしたので、遂に過ぎ去つた彼の日の出來ごとを何もかも武后にうち明けてしまつたのである。武后は侍郎に、

「その女がまた何でかういふ惡戲をして見る必要があらう」

「私が餘り御寵愛を受けてゐるといふて、人々が色々つまらないことを申しますので、あの女がもしかすると妬んで居るのではないかと、これは私の推察なので御座いますが……」

「何？　化粧部屋の女風情が……」

武后は云ひ放つたきりで、その女をどうしようとも云はれなかつた。

やがて火急の御召とあつて、武后の御前に出たのは、狄仁傑、姚元崇、宋璟等の宰相であつた。そしていまの詩文をこれ等の人々に示めされた時、既にこの宰相達は皆この詩の出所を知つて居た。この時姚元崇は口を開いて、

「左樣なれば申上げますが、これは駱賓王と申すある在野の詩人の作と思はれます。この詩人は先頃見事な女人讃美の詩を作りまして、それが今では大分人口に膾炙するように相成りましたのを、誰いふとなくそれは皇后樣を讃美したものだとの評判が立ちました。假したとへ御讃め致すにもせよ、かういふ高貴な御方の事を詩作して市に出すからには、一應は屆け出でるべきだと申して、本人を招んでたしなめてやりましたところ、彼は誠に聞き捨てならぬことを申したので、その場で直ちに入牢申付けましたので御座います」

「聞き捨てならぬとは、何のやうなことを申たのぢや」

姚元崇は一寸の間躊躇したが、それでもありのまゝを申上げるにしくはなしと考へて、

「彼駱賓王の申しますには、自作の詩は皇后樣を讃美したのではない、と斯樣申すので御座います。それだけならよろしいので御座いまするが、そんなことをいふ皇后の已惚れも甚しい、天下の詩人をして己れを讃美させようなどとは と……。餘りの雜言無禮は實に聞き捨て相成らぬと存じました」

武后は流石にいさゝか不快さうに、

「わたしには何れも初耳ぢやのに、あわて者の駱賓王が、自分こそ何を已惚れてゐるのぢや。誰も彼の筆に謳はれて、

得意になるほどの阿呆者は、まあこの唐の國の女性にはないわ。併し此處のこの詩は、まさしくわたしのことを罵つてある。寧そ見事なものぢや！　これ程の才筆をなぜにそなた達は今日までわたしに知らせなかつたのぢや、其點はそなた等も手ぬかりぢやぞよ」

「はつ、實は御耳の汚れともなりませうと存じまして。彼には刑期滿ちて一たん釋放致しましたもので御座いますが、またしても斯樣なことを致すからは早速捕へてなほ此上の重刑に處するやう申付けるで御座いませう」

武后はあわてゝ、

「誰が彼に重刑を下せといふのぢや。わたしはそんなことを命令はせぬ。それ程の人を入牢などとはけしからぬ。早速に召出してこの宮中に召使ふやうに計らひあらうぞ！」

と聞いて、姚元宗は自分の耳を疑ふやうに、

「それはまた何と仰せられます。彼は詩人であり、學者である身分を忘れて、斯る不敬な文學を並べますることは、用捨相成らぬ儀かと存じまする。若し天下の才筆を求められますならば、他にも相當の者はいくらも御座います。何を苦しんで彼如き不敬漢を御入れ遊ばす必要が御座いませう」

「いや、決して不敬なものではない。彼はいさゝか思ひ違ひを致して居るにもせよ、彼本人は思ひのまゝを申したのであらう。稀代の才筆は天下の至寶ぢや、彼を落泊の無頼の輩中にまぎれ込ませて置くことは、此上もない損失であらう。速やかにこの宮殿に迎へたがよいぞえ！」

と武后は嚴命されたのであつた。

斯うして貧しい駱賓王は、忽ち擧げられて長安の主簿となつた。そして何程もたゝぬのに自らその職を辭し度いと願ひ出でた時、武后は彼を御側近く召し出して、

「そなたはこのわたしのためには生死も辭せぬ筈ではないか。思ひがけない恩命に忽ち身には錦繡を帯び、榮耀の冠を頂く身分となつたのは誰の守護があればぢや」

と如何にも不機嫌らしく云はれるのであつたが、駱賓王は何の憚るところもなく、

「とかく殿上の方々に於かせられては、下々の心持とは全く見當の喰ひ違ひが多く、これは誠にお互ひ様の不幸なので御座います。仰せの通り拙者は元々田野の廢人、それが皇后様の御命令とて、思つても居ない出世を致しましたのが第一の誤りで御座いました。併しこの釣り合はない立身も、ひとつには皇后様の御望みだつたので御座いませう。して拙者はその型のやうな善政とやらの御粗末な景物だつたに相違御座いません」

「ほんにそなたは詩人のくせに、恍惚といふことをしらぬ無骨者ぢや、つまらない意地張りは却つてそなたの品格をおとしはしまいか」

「何しろ人は器物同様！、出さうと引き込めようと、造らうと壞さうと。だがその御器用な御手のうちには感心致します。中宗皇帝にしてからがさうで御座いませう。貴女様が一寸御自分の衣裳を御片附けあそばす位の手間暇で、均洲とやらへしまひ込んで御しまひなされたことを、誰が喜ぶことが出來ませう。皇太子の廢立だつて二度や三度では御座いませぬ。のみならずあの年若い侍郎との噂なども、御側に飼はれて可愛がられてゐる小犬同様、ずゐ分まだ他にも斯うした仕合せ者もたんとあらうとお察し上げまする。そして此度は御躬ら帝位に上つて、いよ〳〵善政をお布きにならうとの思召。その時、無智な人民共が隨喜の涙をこぼすのを默つて拜見いたさねばならぬやうでは、とても我慢がなりませぬ。」

「まあ、何とでも云ふがよい。初めはわたしもそなたの粗骨さが癪にも障つた。だがそれも次第になれきつて今ではあの毒々しい議論や、この身をさも悟さげな皮肉にも馴れてしまふた。そなたのその狂氣ぢみた振舞さへ蠱惑に滿ちた心

とも見られるのぢや」

「へえ、女ながらも唐の皇帝となる方は、唯の人とは聊か違ひあるべき筈、その人並はづれた御振舞は、詩人の筆に上せた文の彩にも似てまた面白い趣きのあるもの、丁度貴女樣は人の知らない奥山に生れた一羽の鳳凰にも例へませうか。紫の雲に乘つて、その美しい鳥は見事に天かけりました。そしてその羽搏たきに諸々の小鳥共はおそれ戰慄きました。然しこのおそろしい勇ましい姿を見まするよりも、私共は谷間にほう〳〵と啼いてゐる小さい雛をどれ程心ゆかしく思ふでせう。多くの人民は高邁な威力に服從するよりも寧ろ心からの慈悲に親しむことを望んでゐるので御座います。」

あくまで皮肉なこの人の言葉を、武后はもとより大して氣にとめようともしなかつた。

「そなたの禍の言葉にすら、國の母たる此の身には、なんぼうよいことを數へてくれたやら。そなたが惡い〳〵心持ちしてわたしにものをいふ時でも、わたしの心は勇氣に波打つて却つて、希望やら萬民への愛の思ひやりに滿たされるのぢやもの」

「併しまあどうでも理屈はつきませう。とかく世間にはまだ〳〵馬鹿者がたんと居りまする。たとへたゞ〳〵榮望を得んための善政でも、誰が不平を申しませう。おかげ樣で天下は飽くまでも太平で御座います。此の上はいや榮に盛りゆく御威稜をば、私は御祝ひ申す外は御座いませぬ。私は玆に大唐第一の傑い女性の御知遇を得ました御返禮として、何ぞ御氣に召しさうな尊い御名號を奉り度いと存じまする。御嘉納下さりますれば拙者の光榮之に過ぎるものは御座いませぬ」

とおじきをするのさへ本氣か皮肉か解らぬやうなこの駱賓王の諷刺に富んだ言葉の數々を武后はたゞ肯きながら聞いて居られた。そして彼の言葉が終るのを待つて、

「よろこんで受納するであらう。云ふまでもなくそなたは當代第一の詩人ぢや。若しわたしがこの大唐に存分の善政を布き、それが幸にも後世の鑑ともなることが出來たならば、わたしの名が子孫に輝くやうに、そなたの名も永く記憶に殘るであらう。さらば何といふ名號を獻ずるのぢやな」

「直ちに御承引は忝じけない。されば謹んでこゝに天冊金輪皇帝といふ尊號を捧げまする」

武后は駱賓王が獻じた天冊金輪皇帝の尊號を自ら一度口ずさみ、次いで如何にも快心の笑をその麗はしい唇のかげから漏しながら

「おゝ、駱賓王よ、何と良い名號であらう。そちの詩想と、そちの尊敬と、讃美とをもつて獻じてくれたこの帝號をわたしは直ちに國中に發布するであらう。そうぢや！　天はこゝにわたしを冊立して金色の日輪のごとく輝かしい帝位に即かしめたのぢや。國民はこれが爲めに恵みと生命とを享けることが出來る。そしてこゝに太唐の聖代が初めてかたち造られたのぢや。駱賓王よ！　わたしはそなたを榮爵に封じやうと思ふてゐる」

武后の言葉はいつになく喜びと感激とにあふれてゐた。武后は直ちに近侍に命じて美酒と黄金の大杯とをとりよせ、それを駱賓王に薦められた。彼は薦められるまゝに、大杯に注がれた美酒に心地よい微醺を貪つてゐたが、いつしかこの武后に對して何となしに親しみを覺えるのであつた。多感の詩人は杯を置いて靜かに武后の顏を仰ぎ見ながら、

「この野人の爲めに榮爵を賜ふとの御意は私にとつて望外の幸でなければなりませぬ。併し私はやはり市井の無頼でありたいので御座います。折角の仰せながら賜らんとする榮爵も野人にとりましては荷負ひきれない重荷なので御座りまする」

「それがそなたの望みとあらば致し方はあるまい。わたしも強いてとは申すまい」

「私はたゞ極めて勇敢に、最も見事に天下を掌中に收められた一人の傑れた女性を讃へるために、この麗はしく莊重な

尊號を獻げたに過ぎません。古から名利は恰も浮雲の如く、人生の起伏は遂に信じ難う御座います。やがて無智な多くの人民達が、長夜の眠りから醒めましたとき、この麗はしい帝號も、あの莊麗を極めた阿房宮のやうに、敢果ない廢墟として殘されるやうなことは御座いますまいか。皇后様！ いや、近く即位の大典を行はせられまする天冊金輪皇帝陛下に申上げます。其時はまた後代の詩人をして數聯の哀曲を歌はしめませう。おゝ、もう夜も更け渡りました。寢殿には金鈴がそのすゞしい音を散らして、陛下の御寢をまちうけて居りまする」

武后は微笑をたゝへて

「そなたは何をいふのぢや。人の世の常ぢやもの亡びるものは亡びもしよう。然し駱賓王よ、詩聖の歌が永劫の生命に榮ゆるやうに、わたしの仕事は萬代の末までも輝くであらう。あの蜀山のやうに高く、長江の水のやうに盡きることなく、わたしはわたしの仕事と共に生るのぢや。これ、不吉な言葉は謹んで貰はねばならぬ」

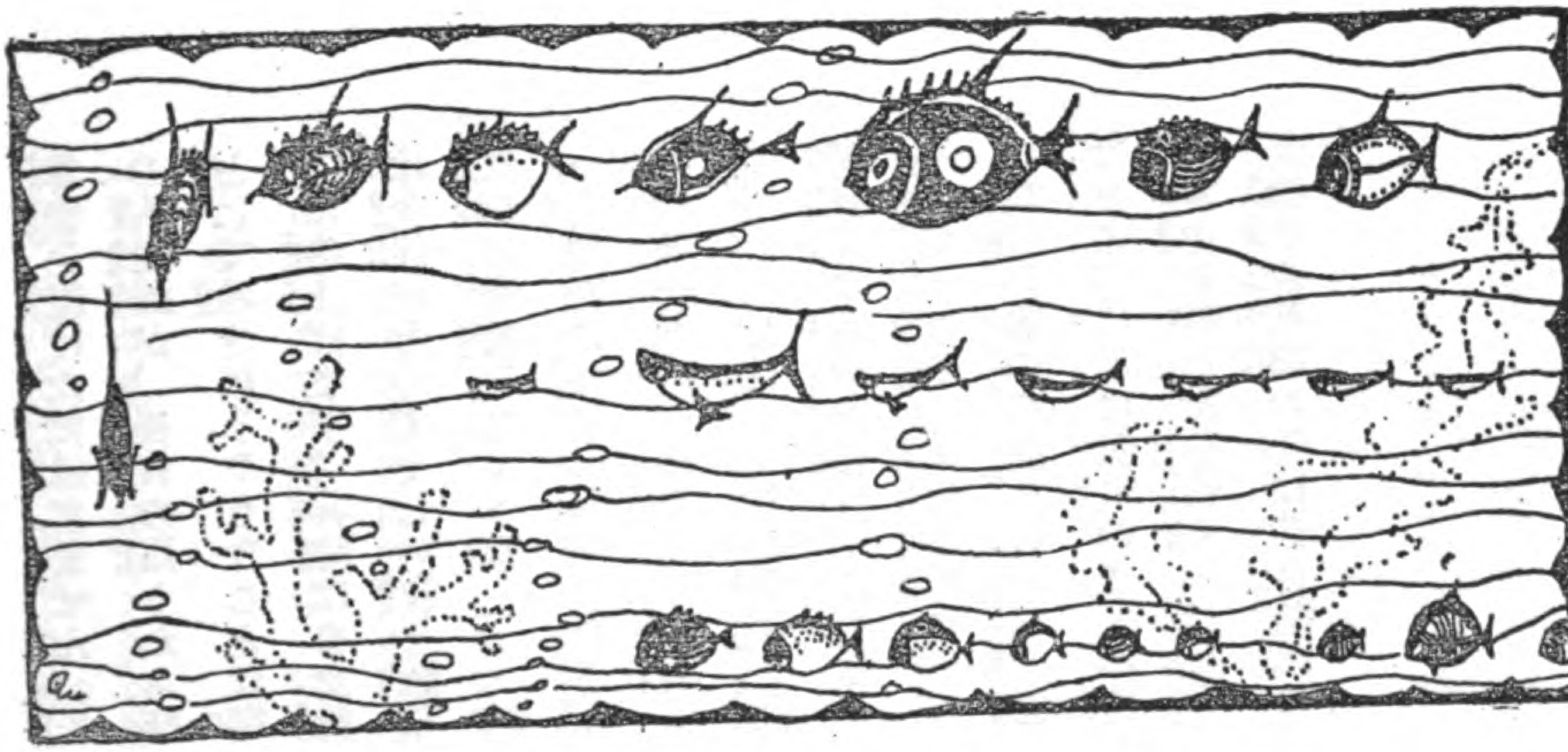
駱賓王は武后が優しくはあるが、どこやらにある犯しがたい强さを含んだ言葉の前にかしこまりながら、

「左様、永劫の天地の中にあつて、爲すものは爲し、滅びるものは滅び、謳ふものは謳ふので御座いませう」

再度御寢の相圖を報ずる金鈴の音が、長い廻廊をめぐつて遠く響いて來た。駱賓王が御前を下らうとして敬禮を捧げたとき、武后は無言のまゝの禮を與へて彼を目送されたのである。

宮中を辭した駱賓王は、永久に都を去つてしまつたといふ。そして太唐億兆の人民は天下の太平をよろこび、天冊金輪皇帝萬歳の聲は四百餘洲の隅々までもなり渡つた。

（終り）



雨上りの道

小川未明

町も、森も、家も、至るところ、じめ〳〵と降る、黒い雨で、腐れてしまふやうな氣がします。私は、室にぢつとしてゐることができなかつたので、外へ出かけました。

梅雨の時分の自然は、變態で、蒸しあついかと思ふと寒かつたり、木々の間が夜のやうに暗いかと思ふと、また、かつとして太陽が、氣味悪いほど明るく、道の上を照します。すべてのものゝ色が、淡く、若々しく、静かな感じを與へるのに、稀に、毒毒しい、強烈な色合をした花などが咲いて、露店のカンテラの火に浮き出て、人足を止めてゐるのもあります。

やさしい感情と、殘忍な神經が、交錯するやうに、色彩的な街の中を、自動車や、電車がしつきりなしに走つてゐる。そして、地に深い傷痕を殘して、田のやうな、ぬかるみを作つてゐました。

私の下駄のつま皮は、泥だらけになつて、いつまでも、止みさうもなく降る雨のた

めに體は、しつとりと濡れてしまひました。

顔なじみの本屋へはいつて、しばらく腰かけて話をしました。

ふと、傍を見ると、一疋の白と黒の犬が、すくんでゐました。私は、最初、たゞそこに犬がゐるなといふ位にしか思ひませんでした。全身が泥に塗れてゐるので、ぬかるみの中を歩いてきたこと、どの犬も、こんな雨の日には、體がからも汚れるものか、成程、自分は、足駄を穿き、傘をさしてゐてすら、から足が汚れ、着物がぬれるのだから、犬がこんなに汚れるのは、あたりまへである。それにしても、こんなに汚れた犬の體が、ひとりでに綺麗になるものだらうか？　どの犬も、人間が洗つてやるとは限らない。それとも、犬が舌で、なめて綺麗にするのだらうか？　私は、この泥を、たとへ犬の舌だからといつて、なめ盡し、それで、健康を害さない筈はないと思ひました。しかし、天氣になれば、どの犬も綺麗になつてゐるのを思つて、不思議なことに感じたのであります。

私は、本屋の主人と話をしながら、また、見るともなく、眼を犬の方へ移しますと、その汚れた犬は、ガタガタと顫へてゐました。さう、寒い日とも思はれなかつたが、ぬれてゐる犬には、やはり、寒く感ずるのだらうと思ひました。

私が、犬の方を向くと、期せずして、犬の遠慮深さうな眼と眼とが出遇つたのです。私は、心のうちで、おとなしい犬にちがひないと思つたのでした。

私が、たび〱犬の方を向くので、主人も氣付いたといふ風で、

「どこの犬ですか、先刻、外から従いてきまして、どうしても、出て行かないのです。追つても、追つても、こゝから動かない、妙なことがあつたもんです」

主人は、笑つて言つたが、困つてゐるといふことが、どこか言葉の調子によつて感じられました。

私は、成程、家なき犬であるかと、知つたのでした。おとなしさうに、遠慮深さうに私の顔を見たのも、決して、温

良な性質からでなかつたと悟りました。困りぬいたものや、苦しみつゝある者が、のんびりと、また、嚴粛に、相手の顏を見得ない如く、犬としての猛けしいところを失つてゐるのだと知りました。これは、私に、不憫を感じさせたよりは、厭な氣持をそゝつたのでした。そして、寒さのために、顫へてゐると笑つたのは、飢ゑのためにふるへてゐることをも知りました。

「家が分らない譯はあるまいな」私は、言ひました。

「こんなに、大きくなつて、家の分らない譯もありませんが、捨てられたのですかね」と、主人は、答へました。

外を大きな聲で、話して行く人があると、犬は、びく／＼しました。頭を地面に低く摺り付けるやうにして、隅のところへ、體をもつと小さくすくめようとするやうな姿をしたのでした。

これを見ると、全く、意氣地なくなつた、卑屈な人間のやうにも感じられました。私がその方を向くと、訴へるような、媚びるような、よく、乞食が、前を通る人に、この人は金をくれさうだとか、この人は、到底そんなことをする人でないとか、いふことなど見分ける氣力すらない如く、たゞ、頭を地に摺り付けて、こちらを見てくれと、言はぬばかりに、哀れつぽい聲を絞るやうに、犬は、何か、きつかけを付けたいとしてゐるやうな樣子でした。

このことは、人間によらず、たとへ犬であつても、私の心に、憤りに近い、不快を感じさせたのです。

「それで、自分は、哀れな者に對して、同情心があるといへるか？」と。私の胸の裡で、良心は語りました。

これに對して、私は、何とも返答ができませんが、たゞ、病的な程、不快で、また腹立しかつたのは事實でした。

やがて、私は、本屋を出ました。雨は、いくらか小降りになつたけれど、やはり降つてゐました。下駄の鼻緒がゆるんだので、それを氣にしながら、足許を見ると、いつの間にか、その白と黑の犬がついて來たのに氣付きました。

私は、これを見ると、ぞつとしたのです。あの家よりは、私の方が、まだ賴みになるとでも思つたのかと、考へられた

からでした。私が、たゞちつと犬の顔を見たばかりに、「この人は、決して、惡意を持つてゐない。ついて行つたら、或は、可愛がつてくれるかも知れない」と、思つたのであらうと考へると、不憫よりは、憎しみがましたのでした。

私は、雨の降る時は、すべての犬が、こんなに汚くなるものだらうかと、最初笑つたのは間違ひでした。方々で、この犬は、いぢめられてきたのです。さもなければ、卑屈から、どこにでも腹這ひになつて、敵の襲撃におのゝいたです。そのため、ぬかるみに浸つて、全身の毛がこんなに汚れたものだと思はれました。

私に、ついてくる犬を、どの人々も振り返つて見ないものがなかつた程、犬は、みぢめにも汚れてゐたのです。

「シッ！」と、私は、犬を睨み返しました。けれど、犬は、それ位のことでは私から離れませんでした。

この時、あちらから、逞ましいブルドックがやつて來ました。汚れた犬は、尾を巻いて道の側の小間物店の腰かけの下に、くゞり込みました。そして、恐怖にふるへる瞳で、ぢつと許しを乞ふやうに、往來を見てゐました。ブルドックは、傲然として、其方は、見向きもせずに過ぎてしまひました。すると、汚れた犬は、小さくなつて、腰かけの下から出て私の姿を探したのです。

私は、もう、我慢のできない程、この卑屈な動物に對して、憎しみを感じました。

「もう、俺について來ては、駄目だ。來たら擲るから……」と、私は、言ひました。

雨は、全く、小降りになつてゐたので、私は、傘をつぼめて、擲る用意をして見せました。

卑怯で、智慧のある犬は、「何も、自分は、あなたといつしよに行くのではない。」と、いはぬばかりに、あちらの店頭を覗いたり、こちらの家の門口を嗅いだりしてゐたのです。その様子は、狡猾な人間のすることゝ少しも變つてゐませんでした。

或は、私は、もうついて來ないものかとも思ひました。振り返へりながら歩るいて、ある高い三階造りの、建物の角を

曲ると、この時まで、知らぬ顔をしてゐた犬は、一生懸命に、私の影を見失はないやうに駈けて追つてきたのです。

これが、私だけになされた、犬の行爲であつたら、たとへこの犬が汚なく、弱くなつても、私は、どうして捨ることができませう。けれど、本屋の主人に對しても、さうであつたといへば、誰にでも、かうして縋らうとしたことを否定できません。

「そんなに、大きくなつてゐたら、どこへなりといつて、立派な野犬で、威張つて生きられるだらう。それを、なんだ、卑屈な奴だ」と私は、いま／＼しげに言ひました。

本來から言へば、たとへ野犬となつても、氣心の分らない人間などに、容易に妥協をしないのが、この動物のいゝところであると考へると、私は、この犬に對して、少しも憐憫の情を持つことができなかつたのです。

雨の後の空は、雲切れがして、すが／＼しかつたのです。町はやうやく、晴々しい顔をして笑つて見えました。道の上は、ぬかるみのところが光つてゐます。そして、長く一直線につゞいてゐるのを、自動車や、自轉車が織るやうに走つてゐるのでした。

氣付かれないやうに、犬は、飽迄、疫病神の如く、私の後からついてきました。こんどこそ、傘で擲つてやらうと、私は立止つて振向きますと、犬は、あちらの店さきへ行つたり、こちらの店さきへはいつたり、そして決して私の顔を見ずに、たゞ、偶然、同じ道を同じ方向に歩るいてゐるにすぎないといふことを樣子で示して、私を僞らうとするのでありました。

家の前に立ち、子供を抱いて、久しぶりで、外の樣子などを子供に見せてゐる女房が、私と犬と見くらべて、何か仔細あらうと、私の顔を見るのもありました。そのたびに、私は、腹立しさを感じたのでした。

街の切れ目、切れ目から、左右の奥へ通ずる道の行方を見ますと、青々とした木々が、こんもりと繁つてゐました。そ

とは、屋敷町になつてゐました。野犬となつて、食を獵るのに、まことにいゝところなのです。しかし、犬は、その方を見向きもしませんでした。やはり、私の後をついて來ました。この人をはづしては、他に、きつかけをつけるやうな人の見付からないと、いはぬばかりに、私を見失はないとしてゐるのでした。

この時、私が、雜踏する、自動車や、車や、人間の往來のはげしい場處をことさらに歩からうとした氣持になつたのを、必ずしも、無理だと思ふものをもありますまい。

疾走して來る自動車は、私と犬との間を遮りました。その間に、私は、人混みのする裡へ身を隱さうとしました。犬は、私を見失つてはならないといふ樣子で、自動車の過るのを待つて、こちらに突進して來ました。そして、歩いてゐる人達の足で、危ふく踏れたり、もしくは蹴られやうとしたのです。

なかには、狂犬とでも思つたのか、傘で犬が不意に、近づいたのを擲らうとした婦人もありました。犬は、いま四面みな敵のやうに、一瞬間走つては、小さく地面にすくみ、また隙間を見て、走るやうな有樣でした。

人間が、精神的に、また物質的に、非常な打撃を受けた時は、氣が拔けて、ぼんやりとするものですが、いま、この犬に、性來の敏捷さや、慧智といふものが、全く失せてしまつて、たゞ、その眼は、四方の襲撃を怖れるやうに、落付きがなく、硝子珠のやうに光つてゐました。

雲間を洩れた、夕日の光線を反射して、群集の頭の上に、街の一角で怪しく輝いたものがあります。近づくと、葬儀の列で、柩の乘つてゐる自動車の金具に、入日が映つたのでした。この行々しい、一列は、人々を左右に開きました。

私は、故意に、その列の前を横切つて、犬から、姿を隱すために、犬の來ない間に、路次にあつた、カフエーにはいつてしまひました。——私は、自由を選んだ、このあたりまへのことに——、殘忍性はなかつたか？と、後からさびしい氣がして、一人考へられたのです。



戲曲「女」

秋田雨雀

女…………
母…………
父…………
醫師…………
署長…………
警官…………

舞臺は田舍の貧しい農家の一室。右手に厩があり、左手に入口がある。全部カーテン裝置で、强いて寫實的な表現を求めない。從つて俳優の演技も外部的には寫實的であることを要しない。然し内部的には徹底的な寫實を要求する。幕の上つた瞬間舞臺は全く暗い、たゞ舞臺の中央頃に闇の中に赤い小さな光が點されてゐる。

醫師。燈火を、燈火を！

母。娘、何うしたといふのだへ

醫師。燈火を、燈火を！

父。何うしたのです？　一體、私達は何をしたといふのです？

署長。先生、何處ですか？　何處ですか？

醫師。こゝです。燈火を早く。

（署長と警官が燈火を持つて室の中に入る。室の中は汚く、色々な物が散ばつてゐる。母と父は一つの夜具の上に、娘はやゝ奥の方の夜具の上に坐つてぶる／＼震えてゐる。）

署長。なるほど犯人もゐますね。先生、何うしてこの娘の犯罪だといふことが氣がつきました？

母。旦那様、一體これは何うしたといふ譯でございます。私達にはさつぱり譯が解らないんでございます。

署長。驚くべき事件です。赴任以來の出來事です。この地方では珍しい事柄です。

父。旦那様。何か私達が無調法でもしたのでございませうか、娘や、お前は何か旦那様に無調法なことでも申したかへ？

もし然うだつたら、早く旦那様にお詫びをしろよ。

母。泣いてばかりゐないで早く何どかお詫びをしろ。

署長。君、この娘は何をしてゐますか？

警官。砂利搬びをしてゐるやうでございます。尤も去年までは籠細工の工場に雇はれてゐたやうですが。

署長。年齢は？

警官。十八歳です。平素比較的善良な性質の女のやうです。

署長。無論未婚者でせうね。

一　女　一

醫師。未婚者です

警官。出血は確かに出産に伴つたものに相違ありませんな？

醫師。確かに然うです。

署長。然しあの出血は何うしてこの娘の出血であるといふ事がお氣附きになりました？

醫師。あの厩の裏で發見した血液と同じ性質のものと認定しましたから。

署長。厩？　だが、その厩の裏で發見したものが、この娘の出血であるといふことは何うして認定が出來ますか？

醫師。（憚るものゝあるやうに、）それは本人の容態……いや、その方面の事は後刻ゆつくり申上げませう。兎に角色々な點を綜合して見ますとこの女のに相違ありません。

署長。娘！

（女は顔を臥床に伏せて泣いてゐる。署長は燈火を女の顔のところへ持つて行く。）

顔を上げろ。お前は昨日の午後、何か川へ投げたものがあるだらう？　襤褸のやうなものに包んであの大河へ投げたものがあるだらう？　證據がちやんと上つてゐるのだから嘘僞を云ふと利益にならんぞ……

（父と母は非常な恐怖心から震えながら娘を見る。警官は娘の身體を荒々しく起す。）

警官。こら、しつかりしないか。署長殿がお前に訊問しておいでになるのだぞ。はつきり答へろ！

母。娘や、お前に暗いところがないのだから、何も怖ることはない。さあ、旦那樣にちやん／＼と申開きをしろよ……ご覽の通り娘は何も知らないもので、それに氣の弱い子供でございまして……先生、お前樣も知らない人ぢやなし何とか娘の代りに一言……

署長。默つておいで……私は娘に訊問してゐるのだ　お前達には用はないのだ、彼方へ行つておいで！

母。それはご尤もでございます……ですが、この娘は私達のたつた一人の娘でございますから……

父。旦那樣、あれの言ふ通りでございます……先生、お前樣には藥代の殘りもありますが、別に惡氣でお拂ひしない譯でもありません……何うかお前樣からもお頼みして面倒のないやうにしていたゞけませんか？

醫師。私は何も藥代の話はしてゐないよ。お前さんも知つてる通り、私は警察から頼まれたことをするだけなのだから。第一傍から色々な事を言ふとこの娘のためにもならないから默つておいでなさい。

署長。お前は何時頃姙娠したのだへ？

女。…………

署長。解らないか？　何時頃からお腹が大きくなつたかと訊いてゐるのだよ。

女。…………

母。旦那樣、飛んでもないことです、娘に限つて然んな……先生も知つておいでゞす……先生、何うか私達の生命にかゝはることです……

警官。喧しい、默つておいで！

署長。お前の姙娠してゐるのをお母さんやお父さんが知つてたのだらう？　お前はお腹の子供のことをお母さんに相談したらう。子供を産み落して育てた方がいゝとか、例へば自分で育てないまでも、何處かへ呉れてやらうとか、でなければ生れる前に子供の始末をしてしまつた方がいゝとか、そんな話をしたらう。然うに違ひないね？

女。…………

母。飛んでもないことを

署長。そして結極、お前はお前の子供をお腹の中にゐる内に始末してしまはうと決心したんだらう。然うに違ひないね。

女。…………

母。旦那様、それはあんまりです。私達は何も知らないのです。娘は姙娠した覺えはありません。娘の姙娠してゐるのを知らない母親もありますまい。旦那様、私が嘘を言ふ女か、言はない女か大抵ご存じの筈です。この娘は子供の頃から正直な娘で何んなことでも私に隔しだてなぞしたことはございません。全く身に覺えのないことでございます。

署長。お前に訊いてるのではない。（厳格に）娘、お前はお腹の子供の始末をする方法を誰かに敎はつたか？　まさかお母さんぢやあるまいね。

女。…………

署長。方法に就いて鑑定はお付きになりますまいな。

醫師。あれだけの材料では判然しませんが、この邊に通有な方法ぢやないかと思ひますが。

署長。通有な方法と言ひますと。

醫師。○○○○○○○○○○。この邊の犯罪事實を調べて見ますと、大抵一致してゐるやうです。

署長。道德觀念が薄弱なのですな。昔は私の郷里にもこのやうな犯罪事實が澤山あつたさうですが、近來は全く跡を絶つたやうです。何しろ悲しむべき事實です。

醫師。お恥かしい事です。

署長。娘は自白しませんから、娘を連れて行く前に一應家内を捜索することにしませう。室はこれだけかね？

警官。然うです。

署長。（娘に、）署へ同行するから、寒くないやうにして仕度をして置くがいゝ。

（娘と父母は同時に聲をたてゝ泣く。）

母。娘をつれて行くのでしたら、何うか私を代りにつれて行つてください、……旦那さま何うか私をつれて行つてください。

父。（どもりながら）旦那樣……わたしを……わたしを……

署長。君は娘を監視して呉れ賜へ。廐は何處ですか？ 馬はゐないやうですな。

醫師。餘程前から馬を持つてゐないやうです。主人は性來の怠惰者で、近來は病氣をしてゐるやうです。

署長。（廐の中を檢査してゐる。）此邊の農家は不潔ですな。妙な臭がしますね。

醫師。何しろまるつきり日の光が當らないのですから。氣をおつけなさい。藁打石がありますから。

署長。主人が病氣でゐて何うして生活をしてゐるのでせう？ 娘一人だけで一家を支へて行くことは困難でせう。一體何んな生活をして行つてるのでせうね？

醫師。生活なんてほどのものぢやないんですね。まあ生きてゐるといふだけのものなんでせう。この邊の百姓なんてものは皆な然んなものですよ。

署長。（突然）その俵を取つて見て下さい……占めた！ これは娘の着物に相違ない……ひどく血痕が附いてゐる……これさへあれば大丈夫だ……俵はそのまゝにして置いてください……

（娘は非常な恐怖を感じてゐる。）

君、いゝ物が見つかつた……今夜の唯一の收穫物だ……

警官。（提灯をその方へ向けてすかし見る。）然うですか？ 大變大きなものですね。

署長。（醫師と共に室に入る。）娘、これはお前の着物に相違ないな？ （父母は蒼白な顏をしてその方を見る。娘は見もせずに泣臥

してゐる。)

母。何とか申上げた方がいゝよ。お前はほんとうにお産をしたのかへ? お前はまさかお母さんに隠して子供の始末をしたのぢやあるまいな? さあ、きつぱりとお答へ申上げろ。旦那様方もお情けのある方達だ、決して悪いやうにはなさらないだらうからな。

署長。お前の着物に相違ないな?

(この時女は決心したやうに面を挙げて、血痕の附着した着物を見てゐたが、夢遊病者のやうに立上つて署長の前に進み、それを拾ひ取つて子供を抱きかゝへるやうにして母親の前に泣臥す。)

女。これは私の着物です!

署長。その着物に血が着いてるな。それはお前の身體から下りた血だらう?

女。(署長を正視する。)然うです。

署長。お前はお腹が大きかつたのだらう?

女。然うです。

署長。いつからお腹が大きくなつた?

女。二月末だと思ひます。

署長。それをお前はお母さんに言はなかつたのか?

女。然うです。

署長。何故言はなかつた?

女。お母さんが可愛いさうだからです。

（母泣く）

署長。お前は子供の親が誰だか知つてるだらうな？

女。え。

署長。子供の親にお前のお腹の大きくなつたことを打明けたのか？

女。え。

署長。そしたら子供の親は何と言つた？

女。（半ば泣きながら、）何も言はないで私をひどく打ちました。お腹の子供が死んでしまひやしないかと思ふほど私を打ちました……

（父も泣く）

署長。ひどく打つた。それで、お前は何うした？

女。私は一層死んでしまひたいと思ひました……大河へ身を投げて何遍死なうと思つたか知れません……でも、私はお父さんや、お母さんのことを思へば……

署長。その後、お前は子供の親に逢つてゐたのか？

女。私は逢ひたいと思つても、あの人は私に逢ふのをいやがつて一度も逢つてくれません……

（母泣く）

署長。それで、お前はお腹の子供を何うしやうと思つた。お前は誰かに子供の相談をしたことがあるのか？

女。いえ、誰にも相談したことはありません。

署長。それぢやお前は自分一人で子供の始末をしやうと思つたのか？

女。 然うです。私はお腹の子供を滿足に育てゝ行きたかつたのです。子供はだん〳〵大きくなつて、お腹の中で動いてゐるのが判つて來ると、私は大事な物を抱いてゐるやうで、毎日〳〵はら〳〵して暮しました……私はこの子供さへあれば何も要らないと思ひました……でも私は働かなければなりません……お父さんが病氣をしてゐるから私は何うしても何うしても……

（父母泣く。）

それに私はお母さんに打明けやう打明けやうと思つても、心配をかけるのがいやさにとう〳〵打明けられなかつたのです……その内に子供はだん〳〵大きくなつて行きます……私は明い内はなるたけお母さんに身體を見せないやうにしました……私はなるたけ、お母さんから離れて寢るやうにしてゐました……でも、お終ひにはやれきれなくなりました……それでとう〳〵……

署長。（注意深く。）それでとう〳〵子供の始末をつけやうと思つたのか？

女。 え。

（母の前に泣臥す。）

署長。いつ、その事を考へついたのか？

女。 二月ばかり前に……

署長。お前はそんなことをするのが惡い事だと思はなかつたか？

女。 でも仕方がなかつたのです……

署長。仕方がない？ 仕方がなければお前は盜賊でも何でもしていゝと思ふのか？

女。 私そんなこと考へて見たこともありません……

署長。お前のやうなことをするのが惡いことだといふことを知つてゐたのだらう？

女。 子供の頃からそんな事を聞いて知つてはゐましたけれども、自分の事になるまでは何とも思ひませんでした……

署長。お前は現在悪いことをしたとは思つてゐないのか？

女。でも、やつぱり仕方がなかつたのです……誰も私の心持が解つて呉れないのです……

署長。（醫師に）無智な女にはかなひませんね。

醫師。この邊の女は大抵こんな者です。

署長。お前の心持が解る解らないの問題ではないのだ。お前のしたことが善いか悪いかといふことなのだ。私の言ふ意味が解るかへ？

女。私は子供が可愛相だと思ひます……私はびく／＼動いてゐたお腹の子が可愛相だと思ひます……

署長。だからお前は法律を犯してゐるのだ。つまり法律を犯したものが悪いことをしたことなのだ。解つたかへ？

女。私は何んにも知りません……私はあの子にすまないと思ひます……然し何うにもしやうがなかつたのです……お母さんもお父さんも泣かないでください……あの子と一緒に死んだものと諦めてください……私は何處へでも行きます……

母。お前は私達を置いて何うするつもりだへ……旦那様、この娘がゐなくなれば私達は明日から路頭に迷はなければなりません……何うかお情けで……

父。何うかその娘の代りに私達を……

署長。この女をつれて行つて呉れ賜へ。（醫師に）先生、ご苦勞さまでしたお疲れでしたらう。

醫師。いえ。あなたこそ。

署長。さあ。

（娘は警官にひかれて行く。父母はその後を追ふ。舞臺は再び元の闇黒に歸る。赤い小さな燈火を中心に次第に明くなつた時に、室の中央に聖母の扮裝をした娘の姿が立つてゐる美しい赤兒を接吻して、その子を空高く擧げる。娘と赤兒は高く何處までも高く擧つて行く。）

――幕――

La 4an de Julio, 1924

校正室にて

□七月號から本誌の内容を全然一變する意氣込みを以つて努力して見ました。しかし短日月の間ではしかく總ての抱負を實現することは出來ませんでしたが、しかし可なり良い雜誌が出來たことについて同人は或る喜びを持つことが出來ます。

□殊に學術的に深く這入ることが出來ましたことは聊か滿足とする所です。若き女性の哲學に志す傾向は全く近頃特異の現象です。我が紀平博士が本社の懇請を容れて此欄の執筆を擔任して下さつたことと永井博士、森田氏が講座を擔任して下さつた厚意とは感謝に堪へませぬ。

□それから「世界婦人欄」を本月から設けました。本世紀が婦人に對してどんな重大な意義を持つか、此點に就て内外を深く省察したいと思ひます。本欄の如きも哲學、生理學講座と共に婦人雜誌界の偉彩でなければなりませぬ。今後は此欄を倍々擴張して歐米列國の婦人運動、社會運動その他思想、藝術、流行百般の新現象を紹介したいと思ひます。

□又、近時思想雜誌及婦人雜誌の時評欄もたゞ一時の社會現象をのみ捉へることに腐心してをる傾向が見えます。これは或は新聞の領域であり天分であるかも知れませぬ。本誌は本欄を文明的に意義づけ、そしてこゝに特異の光りを持つことに意を致します。本誌の文明批評は必ず今後本誌の呼物となり、若き人々の渇仰の泉となり得ることゝ信じます。

□創作欄には今後深刻な泰西の名作を紹介したいと思ひます。其作は勿論藝術的の代表作であることを要し、人生に深い意義を持つものであることを要す。本月號のハッチンスンの「春の心から」は現代世界の人々、特に女性に最も廣く、否、最も深く讀まるゝ名篇です。木村氏の飜譯はよく作者の藝術的意圖を紙上に躍如たらしめ得ることゝ思ひます。

□此欄と云はず、總ての紙上の今後に漲る革質の流れが我が婦人界に齎らす影響は少々なものでないことを信じます、そうあることに向つて本誌がどれ丈け今後に努力しますかは刮目して待つていて戴きたい。

□それから毎月婦人社會に特種の地位を有する婦人の月旦をしたいと思ひます。その人物より社會相の一面を窺ひたいためです。從つてその月旦が素破抜きでなく、單なる人物紹介でないことは勿論です代表人物のその時と世に影響する力が淺く小さくはないと思ふからです。

□その他の改革は必ず八月號に發表したいと思ひます。本誌の改革を斷乎として發表しましてから讃嘆の聲が彼處からも今處からも起つて參りました、かゝる共鳴者に守られながら私どもは私どもの大使命を遂げたいと思ひます。諸姉の御健康を祈つておきます。

女性改造 定價表

冊數	定價	郵稅
壹冊	五十錢	壹錢五厘
六冊	參圓	郵稅共
十二冊	六圓	郵稅共

註文の注意

◇特大號其他定價變更に依る前金拂込み不足は不足金の拂込みを待つて發送す

◇註文は凡て前金とす

◇前金切れの際は發送を停止す

◇外國發送の註文は每部郵稅實費を申受く（但し支那を除く）

◇見本は發送せず

◇郵便切手代用は一割増のこと

◇拂込みは振替によらるるが最も便利なり

本誌廣告料一頁 一等百圓 二等七拾圓

◎本社廣告取次所 日本電報通信社 博報堂 弘盛舍

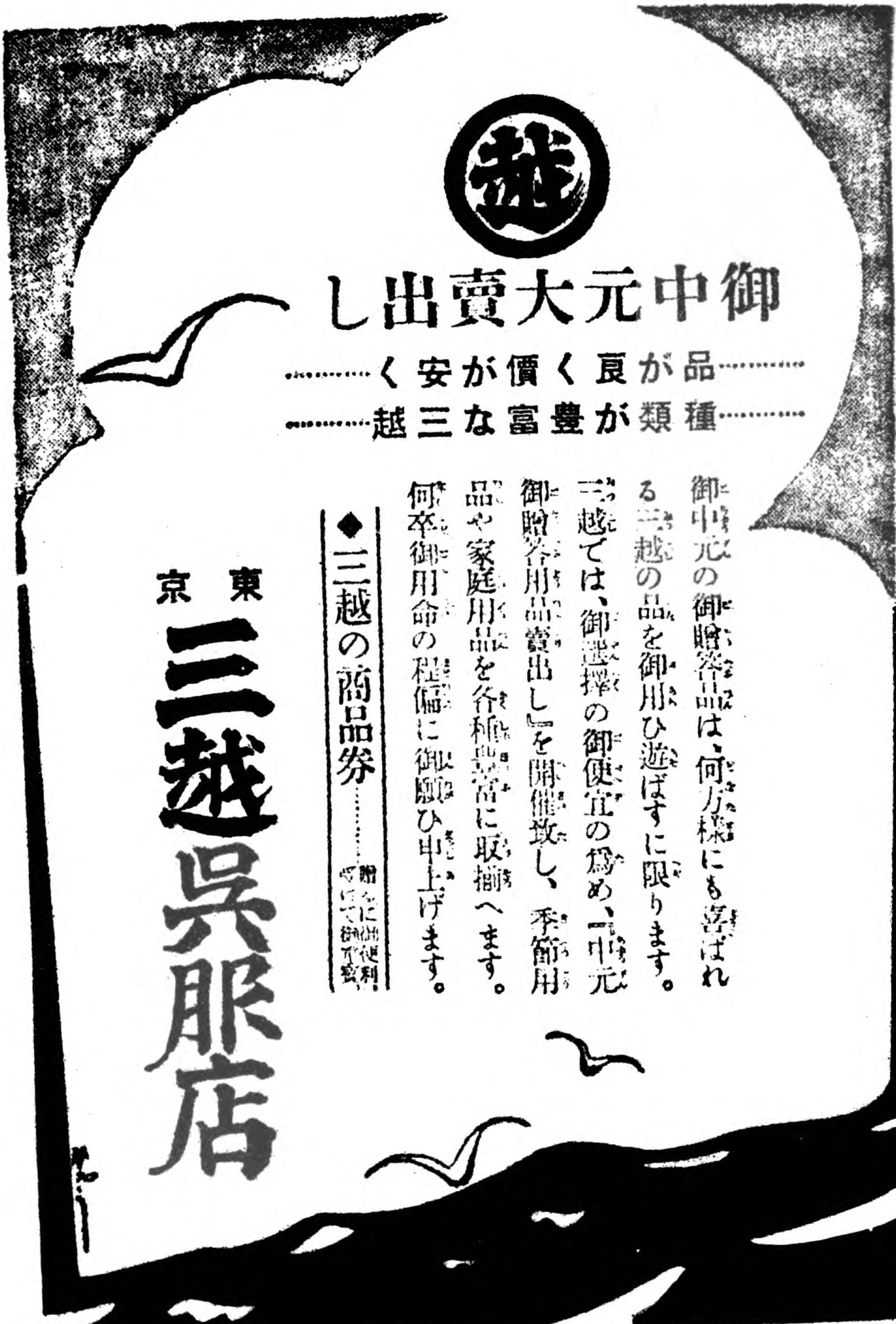
大正十三年六月十三日印刷納本
大正十三年七月一日發行

（七月號價七十錢）

編輯兼發行印刷者 平田貫一郎 東京市芝區愛宕下町一ノ一

印刷所 株式會社 秀英舍 東京市牛込區加賀町一ノ一二

發行所 改造社 東京市芝區愛宕下町一ノ一 電話高輪四九九三 振替東京八四〇二


御中元大賣出し
品が良く價が安く
種類が豐富な三越
御中元の御贈答品は、何方樣にも喜ばれる三越の品を御用ひ遊ばすに限ります。
三越では、御選擇の御便宜の爲め、『中元御贈答用品賣出し』を開催致し、季節用品や家庭用品を各種豐富に取揃へます。
何卒御用命の程偏に御願ひ申上げます。
◆三越の商品券……贈るに御便利 受けて御重寶
東京
三越呉服店

復刻版 女性改造（じょせいかいぞう）〔戦前編〕 第4回配本（第10巻〜第12巻）

2008年12月10日　発行

揃定価（本体60,000円十税）

発行者　船橋　治

発行所　不二出版
東京都文京区向丘1-2-12
☎03(3812)4433

印刷所　三　進　社

製本所　青木製本

乱丁・落丁はお取り替えいたします。

ISBN978-4-8350-6081-1（全3冊 分売不可 セットコード ISBN978-4-8350-6080-4）